仙台市文化財調査報告書第 505 集

郡山遺跡 ほか

発掘調査報告書

今泉遺跡第 17 次、大野田遺跡第５次、大野田官衙遺跡第 22 次
郡山遺跡第 320 次、北目城跡第 21 次、富沢遺跡第 153・155 次
富沢館跡第 22 ～ 24 次

2023 年３月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第 505 集

郡山遺跡 ほか

発掘調査報告書

今泉遺跡第 17 次、大野田遺跡第５次、大野田官衙遺跡第 22 次
郡山遺跡第 320 次、北目城跡第 21 次、富沢遺跡第 153・155 次
富沢館跡第 22 ～ 24 次

2023 年３月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序　　文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市内には旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が遺っております。これらの一つ一つは、先人たちが残した貴重な文化遺産です。

平成23年３月11日の東日本大震災より12年が経ち、復興･創生期間７年目を迎えておりますが、個人住宅等の建築に伴う発掘届や発掘調査の件数は、平成23年度以降、震災前を上回る状況が続いております。仙台市教育委員会といたしましては、復旧・復興事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護と啓発に日々努めているところです。

本報告書には、各種事業に伴って令和３年度から令和４年度にかけて発掘調査を実施した、今泉遺跡第17次、大野田遺跡第５次、大野田官衙遺跡第22次、郡山遺跡第320次、北目城跡21次、富沢遺跡153・155次、富沢館跡22～24次調査の調査結果を収録しています。

文化財は、地域の歴史を伝えるために将来へ守るべき大切な財産です。先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ、次の世代へと継承していくことは、現代に生きる私たちの使命であると思います。地域が育んだ文化を語る上で歴史や文化資源がその根底をなしているからです。つきましては、本報告書が学術研究のみならず学校教育や生涯学習などの文化活動に寄与し、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただいた多くの方々に心より深く感謝申し上げます。

令和５年３月

仙台市教育委員会
教育長　福田　洋之

例　　言

１．本書は、令和３年度から令和４年度にかけて実施された各種開発事業に伴う発掘調査報告書であり、今泉遺跡第 17 次、大野田遺跡第 5 次、大野田官衙遺跡 22 次、郡山遺跡第 320 次、北目城跡 21 次、富沢遺跡 153･155 次、富沢館跡 22 ～ 24 次の各発掘調査報告を合本にしたものである。

２．本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は須貝慎吾が行った。

第１章－須貝慎吾　　第２章－及川謙作　　第３章－柳澤楓　　第 4 章－吉田大

第５章－妹尾一樹　　第６・８章－須貝慎吾　　第 7 章－早川太陽

遺物の基礎整理～実測図作成－須貝慎吾、早川太陽、吉田大、荒井格、向田文化財整理室作業員

遺物図・遺構図デジタルトレース－向田文化財整理室作業員

遺物観察表作成－須貝慎吾、早川太陽、吉田大、荒井格　　遺構註記表作成－各担当職員

遺物写真撮影・図版作成－向田文化財整理室作業員　　遺構写真図版作成－各担当職員

３．本書の内容は、すでに公開されている遺跡見学会資料や、各種の発表会資料に優先する。

４．出土陶磁器の鑑定は、佐藤洋氏に依頼した。

５．発掘調査および報告書作成にあたり、下記の方々および事業者から多くのご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。（敬称略順不同）

株式会社サンワ、伸和興業株式会社、大和ハウス工業株式会社、 積水ハウス株式会社、タマホーム株式会社
早川昌幸、タカラ工業株式会社、株式会社フィオレンテ、千葉榮設計事務所

６．本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．本文中の「遺跡と周辺の遺跡」は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図を、「調査区位置図」などは仙台市発行の２千５百分の１都市基本図を、それぞれ修正して使用した。

2．図中の座標値は世界測地系を使用している。

3．遺構の略称は以下の通りで、遺構番号は各調査別の通し番号である。

SI：竪穴住居跡　SB：掘立柱建物跡　SD：堀跡・溝跡　SE：井戸跡　SK：土坑　SR：自然流路跡
SX：性格不明遺構　P：ピット

4．遺物の略称は以下の通りである。

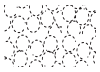
A：縄文土器　B：弥生土器　C：土師器（非ロクロ調整）　D：土師器（ロクロ調整）・赤焼土器
E：須恵器　F：丸瓦　G：平瓦　H：その他の瓦　Ia：土師質土器　Ib：瓦質土器　Ic：陶器
J：磁器　K：石器・石製品　L：木製品　N：金属製品　O：自然遺物　P：土製品

5．土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原 1999）を使用した。

6．遺構図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。また、各図に必要に応じて凡例を付した。

：柱痕跡　　：水田耕作土

7．遺物実測図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。

：黒色処理　  ：敲打痕

8．遺物観察表の（　）がついた数値は図上復元した推定値ないし残存値である。

9．遺物写真の縮尺は、遺物図版に掲載した同一個体のそれに準ずる。また、異なる場合は各写真図版の右下に表記している。写真掲載のみの遺物は、特別な記載がない限り３分の１で掲載している。

10．本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田 1980）はこれまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部の研究から、「十和田ａ火山灰（To－a)」と考えられている。その降下年代は西暦 915 年と推定されている。

庄子貞夫・山田一郎　1980 「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡－昭和 54 年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所

仙台市教育委員会　2000 『沼向遺跡　第１～３次発掘調査』 仙台市文化財調査報告書第 241 集

小口雅史　2003 「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題―十和田ａと白頭山（長白山）を中心に」『日本律令制の展開』吉川弘文館

目　　次

第１章　調査計画と実績 …… 1
　第１節　調査体制 …… 1
　第２節　調査計画 …… 1
　第３節　調査実績 …… 1
第２章　今泉遺跡の調査 …… 3
　第１節　遺跡の概要 …… 3
　第２節　第 17 次調査 …… 3
　　１．調査要項　　２．調査に至る経過と調査方法
　　３．基本層序　　４．発見遺構と出土遺物　　５．まとめ
第３章　大野田遺跡の調査 …… 11
　第１節　遺跡の概要 …… 11
　第２節　第５次調査 …… 11
　　１．調査要項　　２．調査に至る経過と調査方法
　　３．基本層序　　４．発見遺構と出土遺物　　５．まとめ
第４章　大野田官衙遺跡の調査 …… 37
　第１節　遺跡の概要 …… 37
　第２節　第 22 次調査 …… 37
　　１．調査要項　　２．調査に至る経過と調査方法
　　３．基本層序　　４．発見遺構と出土遺物　　５．まとめ
第５章　郡山遺跡の調査 …… 43
　第１節　遺跡の概要 …… 43
　第２節　第 320 次調査 …… 43
　　１．調査要項　　２．調査に至る経過と調査方法
　　３．基本層序　　４．発見遺構と出土遺物　　５．まとめ
第６章　北目城跡の調査 …… 69
　第１節　遺跡の概要 …… 69
　第２節　第 21 次調査 …… 69
　　１．調査要項　　２．調査に至る経過と調査方法
　　３．基本層序　　４．発見遺構と出土遺物　　５．まとめ
第７章　富沢遺跡の調査 …… 79
　第１節　遺跡の概要 …… 79
　第２節　第 153 次調査 …… 81
　　１．調査要項　　２．調査に至る経過と調査方法
　　３．基本層序　　４．発見遺構と出土遺物　　５．まとめ
　第３節　第 155 次調査 …… 87
　　１．調査要項　　２．調査に至る経過と調査方法
　　３．基本層序　　４．発見遺構と出土遺物　　５．まとめ

第８章　富沢館跡の調査 …… 93
第１節　遺跡の概要 …… 93
第２節　第 22 次調査 …… 94
１．調査要項　２．調査に至る経過と調査方法
３．基本層序　４．発見遺構と出土遺物　５．まとめ
第３節　第 23 次調査 …… 98
１．調査要項　２．調査に至る経過と調査方法
３．基本層序　４．発見遺構と出土遺物　５．まとめ
第４節　第 24 次調査 …… 102
１．調査要項　２．調査に至る経過と調査方法
３．基本層序　４．発見遺構と出土遺物　５．まとめ
第９章　総括 …… 109

挿図目次

第１図　令和３～４年度調査地点位置図（国土地理院地図を一部改変）…… 2
第２図　今泉遺跡と周辺の遺跡 …… 3
第３図　第 17 次調査区位置図 …… 4
第４図　第 17 次調査区配置図 …… 4
第５図　第 17 次調査遺構配置図 …… 5
第６図　第 17 次調査区断面図 …… 6
第７図　第 17 次調査出土遺物 …… 8
第８図　今泉遺跡　検出堀跡位置図 …… 9
第９図　大野田遺跡と周辺の遺跡 …… 11
第 10 図　第５次調査区位置図 …… 12
第 11 図　第５次調査区配置図 …… 12
第 12 図　第５次調査区平面図 …… 13
第 13 図　第５次調査区断面図 …… 14
第 14 図　SB1 掘立柱建物跡平面・断面図 …… 15
第 15 図　第５次下層調査区平面・断面図 …… 17
第 16 図　SK1 土坑出土遺物 …… 18
第 17 図　遺物包含層出土遺物（１）…… 19
第 18 図　遺物包含層出土遺物（２）…… 20
第 19 図　遺物包含層出土遺物（３）…… 21
第 20 図　遺物包含層出土遺物（４）…… 22
第 21 図　遺物包含層出土遺物（５）…… 23
第 22 図　遺物包含層出土遺物（６）…… 24
第 23 図　遺物包含層出土遺物（７）…… 25
第 24 図　大野田官衙遺跡と周辺の遺跡 …… 37
第 25 図　第 22 次調査区位置図 …… 38
第 26 図　第 22 次調査区配置図 …… 38
第 27 図　第 22 次調査区平面・断面図 …… 40
第 28 図　郡山遺跡と周辺の遺跡 …… 43
第 29 図　第 320 次調査区位置図 …… 44
第 30 図　第 320 次調査区配置図 …… 44
第 31 図　第 320 次１区調査区平面図 …… 45
第 32 図　第 320 次 1 区調査区断面図 …… 46
第 33 図　SI2621 竪穴住居跡平面・断面図 …… 47
第 34 図　SI2621 竪穴住居跡出土遺物 …… 48
第 35 図　SA2622 柱列跡平面・断面図 …… 49
第 36 図　SB2623・2624・2625 掘立柱建物跡平面・断面図 …… 50
第 37 図　SB2626・2627 掘立柱建物跡平面・断面図 …… 51
第 38 図　SD2628・2629 溝跡平面・断面図 …… 52
第 39 図　第 320 次 2 区調査区平面・断面図 …… 53
第 40 図　SI2 竪穴住居跡平面・断面図 …… 54
第 41 図　SI2 竪穴住居跡出土遺物 …… 55
第 42 図　SI3 竪穴住居跡平面・断面図 …… 56
第 43 図　SI3 竪穴住居跡出土遺物 …… 57
第 44 図　SB6 掘立柱建物跡平面・断面図 …… 58
第 45 図　SB6 掘立柱建物跡出土遺物 …… 59
第 46 図　その他の出土遺物 …… 60
第 47 図　周辺の調査区 …… 62
第 48 図　北目城跡と周辺の遺跡 …… 69
第 49 図　第 21 次調査区位置図 …… 70

第 50 図　第 21 次調査区配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
第 51 図　1T 調査区平面・断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
第 52 図　2T 調査区平面・断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
第 53 図　3T 調査区平面・断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
第 54 図　第 21 次調査出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73
第 55 図　北目城跡検出堀跡位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 75
第 56 図　富沢遺跡と周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79
第 57 図　第 153 次調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80
第 58 図　第 155 次調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80
第 59 図　第 153 次調査区配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
第 60 図　第 153 次調査区平面図・断面図 ・・・・・・・・ 83
第 61 図　第 155 次調査区配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
第 62 図　第 155 次調査区平面・断面図 ・・・・・・・・・・ 89
第 63 図　富沢遺跡における条里型土地区画復元図・・ 90
第 64 図　富沢館跡と周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
第 65 図　第 22 次・23 次・24 次調査区位置図 ・・・・ 94
第 66 図　第 22 次調査区配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94
第 67 図　第 22 次調査区平面・断面図 ・・・・・・・・・・・ 95
第 68 図　第 22 次調査出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
第 69 図　第 23 次調査区配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
第 70 図　第 23 次調査区平面・断面図 ・・・・・・・・・・・ 99
第 71 図　第 23 次調査出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・ 100
第 72 図　第 24 次調査区配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 102
第 73 図　第 24 次調査平面・断面図 ・・・・・・・・・・・・ 103
第 74 図　第 24 次調査出土遺物（１）・・・・・・・・・・・ 104
第 75 図　第 24 次調査出土遺物（２）・・・・・・・・・・・ 105
第 76 図　富沢館跡　検出堀跡位置図 ・・・・・・・・・・・ 108

挿表目次

表１　令和３年度　公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
表２　令和４年度　公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
表３　SB1・2・3 掘立柱建物跡土層注記 ・・・ 51

写真図版目次

写真図版１　今泉遺跡第 17 次調査（１）・・・・・・・・・・ 9
写真図版２　今泉遺跡第 17 次調査（２）・・・・・・・・・・ 10
写真図版３　今泉遺跡第 17 次調査出土遺物 ・・・・・・・ 10
写真図版４　大野田遺跡第５次調査（１）・・・・・・・・・・ 27
写真図版５　大野田遺跡第５次調査（２）・・・・・・・・・・ 28
写真図版６　大野田遺跡第５次調査（３）・・・・・・・・・・ 29
写真図版７　大野田遺跡第５次調査（４）・・・・・・・・・・ 30
写真図版８　大野田遺跡第５次調査（５）・・・・・・・・・・ 31
写真図版９　大野田遺跡第５次調査出土遺物（１）・・ 32
写真図版 10　大野田遺跡第５次調査出土遺物（２）・・ 33
写真図版 11　大野田遺跡第５次調査出土遺物（３）・・ 34
写真図版 12　大野田遺跡第５次調査出土遺物（４）・・ 35
写真図版 13　大野田遺跡第５次調査出土遺物（５）・・ 36
写真図版 14　大野田官衙遺跡第 22 次調査（１）・・・・ 41
写真図版 15　大野田官衙遺跡第 22 次調査（２）出土遺物・・ 42
写真図版 16　郡山遺跡第 320 次調査（１）・・・・・・・・・ 63
写真図版 17　郡山遺跡第 320 次調査（２）・・・・・・・・・ 64
写真図版 18　郡山遺跡第 320 次調査（３）・・・・・・・・・ 65
写真図版 19　郡山遺跡第 320 次調査出土遺物（１）・・ 66
写真図版 20　郡山遺跡第 320 次調査出土遺物（２）・・ 67
写真図版 21　郡山遺跡第 320 次調査出土遺物（３）・・ 68
写真図版 22　北目城跡第 21 次調査（１）・・・・・・・・・・ 76
写真図版 23　北目城跡第 21 次調査出土遺物（１）・・・ 77
写真図版 24　北目城跡第 21 次調査出土遺物（２）・・・ 78
写真図版 25　富沢遺跡第 153 次調査（１）・・・・・・・・・ 84
写真図版 26　富沢遺跡第 153 次調査（２）・・・・・・・・・ 85
写真図版 27　富沢遺跡第 153 次調査（３）・・・・・・・・・ 86
写真図版 28　富沢遺跡第 155 次調査（１）出土遺物・・ 91
写真図版 29　富沢遺跡第 155 次調査（２）・・・・・・・・・ 92
写真図版 30　富沢館跡第 22 次調査・出土遺物 ・・・・・ 97
写真図版 31　富沢館跡第 23 次調査・出土遺物 ・・・・ 101
写真図版 32　富沢館跡第 24 次調査・・・・・・・・・・・・・・ 106
写真図版 33　富沢館跡第 24 次調査出土遺物 ・・・・・・ 107

第１章　調査計画と実績

第１節　調査体制

調査主体　　仙台市教育委員会

調査担当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課

令和３年度

【文化財課】　課　長　　都丸晃彦　　主　査（調整担当）　長島栄一

【調査調整係】　係　長　　平間亮輔

主　査　　及川謙作　　近藤勇亮　　菅原翔太　　主　任　　堀江洋介

主　事　　庄子裕美　　澤目雄大　　相川ひとみ　　柳澤　楓　　木村　恒　　早川太陽

専門員　　斎野裕彦　　会計年度任用職員　篠原信彦

【整備活用係】　係　長　　工藤慶次郎　　主　査　　元山祐一　　小浦真彦

主　任　　堀越　研　　勝又　康　　主　事　　五十嵐　愛　　妹尾一樹

令和４年度

【文化財課】　課　長　　都丸晃彦　　主　査（調整担当）　長島栄一

【調査調整係】　係　長　　及川謙作

主　査　　近藤勇亮　　主　任　　堀江洋介

主　事　　澤目雄大　　相川ひとみ　　須貝慎吾　　早川太陽　　吉田　大　　山口沙織

専門員　　荒井　格　　会計年度任用職員　鈴木利枝

【整備活用係】　係　長　　工藤慶次郎　　主　査　　小浦真彦　　菅原翔太

主　任　　堀越　研　　勝又　康　　主　事　　庄子裕美　　五十嵐　愛　　妹尾一樹

会計年度任用職員　主濱光朗

第２節　調査計画

国、宮城県、仙台市が実施する各種の整備事業（公共事業）および民間の開発に伴う発掘調査を想定し、計画した。

第３節　調査実績

令和３年度～令和４年度（令和４年１月～令和４年12月）にかけて実施された調査は表１、２の通りで、公共事業が６件、民間開発が30件、合計36件である。本書に収録したのはこのうちの８件と、それ以前に実施した２件の合計10件である。

表１　令和３年度　公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧

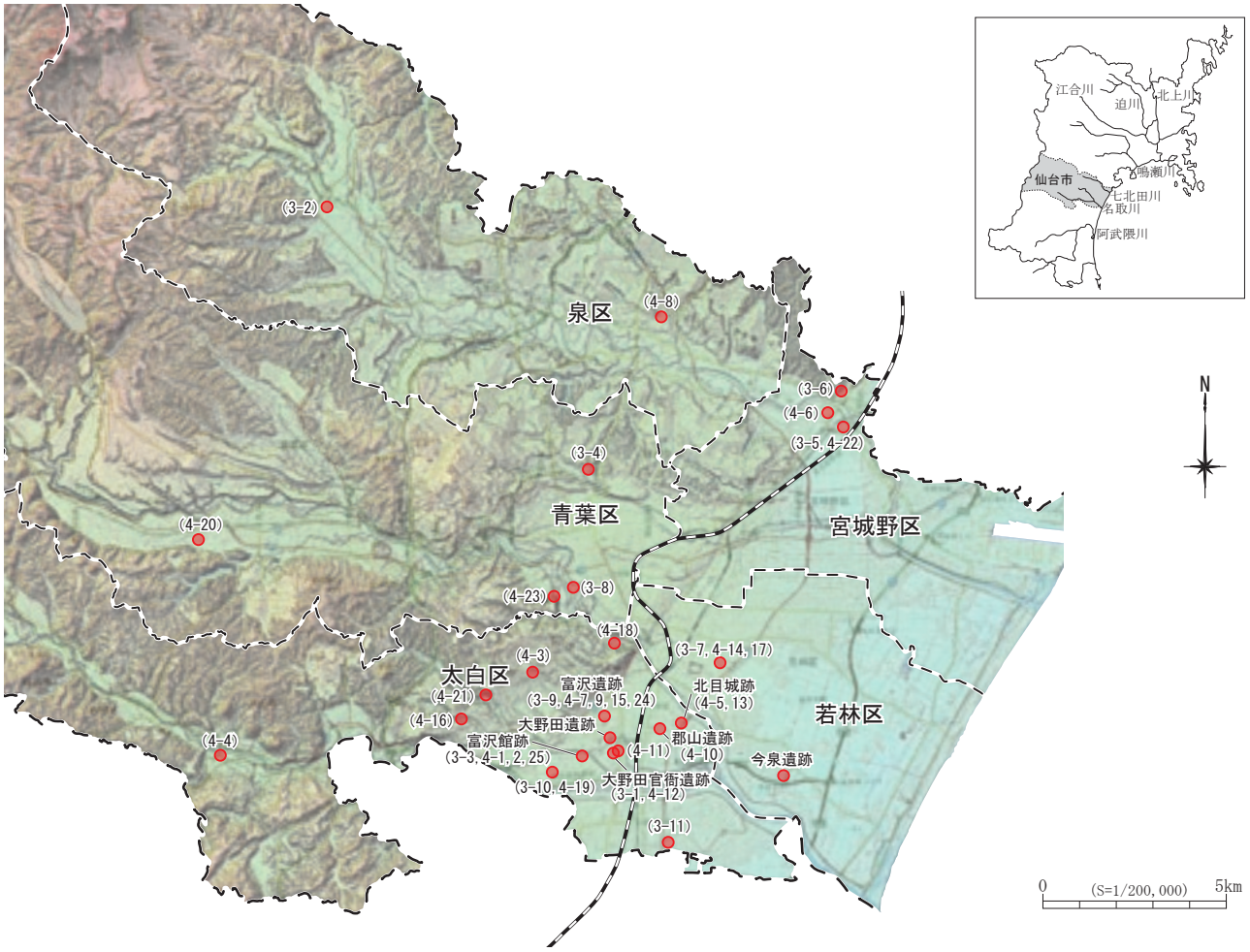
図No.	調査No.	公共・民間	遺跡名	所在地	調査原因	対象面積（㎡）	調査面積（㎡）	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書
3-1	R3-46	民間	大野田官衙遺跡・袋前遺跡	仙台市太白区大野田５丁目	共同住宅	149.8	38.5	1月17～19日	溝跡９条，土師器	R3 109-98	－
3-2	R3-48	公共	堰添A遺跡	仙台市泉区福岡字堰添	水路改修	35	35.0	1月12日	遺構、遺物なし	－	－
3-3	R3-51	民間	富沢館跡第22次	太白区富沢西１丁目	共同住宅	118.3	32.0	1月31～2月1日	堀跡１条、陶磁器・瓦	R3 109－121	第22次
3-4	R3-52	民間	穴田東窯跡	青葉区堤町２丁目	宅地造成	16.7	－	1月21日	遺構、遺物なし	R3 109－109	－
3-5	R3-57	公共	鴻ノ巣遺跡隣接地	宮城野区岩切字高江	道路拡幅	約2800	180.6	2月14～3月18日	溝跡・ピット、土師器・須恵器	H30 109－63	－
3-6	R3-58	民間	化粧坂城跡	宮城野区岩切字羽黒前	建売住宅	97.5	6.0	2月14～15日	遺構・遺物なし	R3 109－124	－
3-7	R3-59	民間	南小泉遺跡	若林区遠見塚２丁目	老人ホーム	554.57	36.0	2月16～18日	小溝１条・井戸跡１基、土師器	R3 109－120	－
3-8	R3-60	公共	桜ケ岡公園遺跡	青葉区桜ケ岡公園３丁目	公園整備	27.7	7.5	3月3日	土坑１基、陶磁器・瓦	H22 117－1	－
3-9	R3-62	民間	富沢遺跡153次	太白区泉崎１丁目	共同住宅	203.08	32.0	3月14～3月24日	水田耕作土	R3 109－100	第153次
3-10	R3-63	民間	京ノ中遺跡	太白区富沢西３丁目	宅地造成	767.53	120.0	3月22～24日	溝跡１条、土師器	R3 109－132	－
3-11	R3-64	民間	後河原遺跡	太白区中田町字後河原	宅地造成	376.16	65.0	3月24～25日	土師器・陶器	R3 109－130	－

（令和４年１月17日～３月31日）

表２　令和４年度　公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧

図No.	調査No.	公共・民間	遺跡名	所在地	調査原因	対象面積（㎡）	調査面積（㎡）	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書
4-1	R4-4	民間	富沢館跡第 23 次	太白区富沢西１丁目	共同住宅	237.1	36.0	4 月 25 ～ 28 日	堀跡、瓦	R2 102-129	第 23 次
4-2	R4-5	民間	富沢館跡第 24 次	太白区富沢西１丁目	共同住宅	228.3	18.0	4 月 25 ～ 28 日	堀跡、須恵器	R3 109-163	第 24 次
4-3	R4-6	民間	芦ノ口遺跡	太白区西の平１丁目	宅地造成	893.2	18.0	5 月 9 日	遺構、遺物なし	R4 104-23	－
4-4	R4-7	公共	内城Ⅰ遺跡	太白区坪沼字山田	バイパス建設	2550.0	153.0	5 月 11 ～ 6 月 21 日	陶磁器	R3 103-58	－
4-5	R4-11	民間	北目城跡第 21 次	太白区郡山字北目宅地	宅地造成	83.5	9.0	5 月 23 ～ 24 日	堀跡、陶磁器	R3 109-147	第 21 次
4-6	R4-12	民間	今市東遺跡	宮城野区岩切字今市東の一部	区画整理	1574.0	1107.7	5 月 23 ～ 8 月 8 日	遺物包含層、弥生土器	H31 102-60	次年度以降
4-7	R4-13	民間	富沢遺跡第 155 次	太白区鹿野３丁目	事務所建築	79.1	18.0	6 月 1 ～ 9 日	水田耕作土、陶磁器	R3 109-145	第 155 次
4-8	R4-14	民間	新道遺跡	泉区市名坂鳥井原	共同住宅	463.7	9.0	6 月 6 日	遺構、遺物なし	R4 104-55	－
4-9	R4-16	民間	富沢遺跡第 156 次	太白区長町南４丁目	建売住宅	62.6	18.0	6 月 13 ～ 15 日	畦畔２条（古代）・水田跡、陶磁器	R4 104-61	次年度以降
4-10	R4-17	民間	郡山遺跡第 320 次	太白区郡山３丁目	共同住宅	313.4	230.0	6 月 23 ～ 9 月 30 日	掘立柱建物跡・竪穴住居跡・溝跡、土師器・須恵器・瓦・円面硯など	R3 109-161	第 320 次
4-11	R4-18	民間	元袋遺跡	太白区大野田５丁目	共同住宅	333.2	30.0	6 月 18 日	遺構､遺物なし（河川堆積層）	R4 105-11	－
4-12	R4-30	民間	大野田官衙遺跡第 22 次	太白区大野田５丁目	共同住宅	140.7	57.0	8 月 23 ～ 26 日	掘立柱建物跡、土師器	R4 105-18	第 22 次
4-13	R4-31	民間	北目城跡第 21 次	太白区郡山字北目宅地	建売住宅	85.4	24.0	8 月 22 ～ 25 日	堀跡、陶器・磁器	R4 104-173・175・176	第 21 次
4-14	R4-33	民間	南小泉遺跡	若林区遠見塚２丁目	共同住宅	147.7	30.5	8 月 29 ～ 31 日	遺構、遺物なし	R4 104-73	－
4-15	R4-34	民間	富沢遺跡第 156 次	太白区長町南４丁目	共同住宅	455.6	115.0	8 月 22 ～ 10 月 7 日	水田跡・畦畔２・足跡遺構、土師器・須恵器・瓦	R3 109-148	次年度以降
4-16	R4-35	民間	羽黒堂前Ｂ遺跡	太白区山田北前町	建売住宅	55.5	12.0	9 月 6 日	遺構、遺物なし	R4 104-152	－
4-17	R4-39	民間	南小泉遺跡	若林区南小泉４丁目	宅地造成	2481.0	28.0	9 月 21 ～ 22 日	遺構なし、土師器片	R4 105-51	－
4-18	R4-40	民間	愛宕山横穴墓群	太白区向山４丁目	共同住宅	160.1	12.0	10 月 3 ～ 4 日	谷地形、遺物なし	R4 105-20	－
4-19	R4-43	民間	京ノ中遺跡	太白区富沢西３丁目	建売住宅	146.3	36.0	10 月 20 ～ 21 日	ピット１基、須恵器	R4 104-250・251	－
4-20	R4-45	民間	平治遺跡	青葉区上愛子字橋本	宅地造成	54.0	3.0	11 月 7 日	遺構、遺物なし	R4 105-47	－
4-21	R4-46	民間	御堂平遺跡隣接地	太白区御堂平他	区画整理	119000.0	2.0	11 月 14 日	遺構、遺物なし	R4 109-119	－
4-22	R4-47	公共	鴻ノ巣遺跡隣接地	宮城野区岩切字高江	道路拡幅	400.0		11 月 16 ～ 24 日	畦畔	R4 建道北第 793 号	－
4-23	R4-49	公共	仙台城跡	青葉区川内追廻	緑化フェア	61.7	225.0	11 月 29 ～ 30 日	石組遺構、鉄製品・陶磁器	R4 106-22	次年度以降
4-24	R4-50	民間	富沢遺跡 156 次	太白区長町南４丁目	建売住宅	70.53	18.0	12 月 1 ～ 6 日	畑跡、畦畔、水口、杭跡	R4 104-320	次年度以降
4-25	R4-55	民間	富沢館跡	太白区富沢西１丁目	水路建設	184.7	12.0	12 月 19 日	堀跡	R4 104-352	次年度以降

（令和４年４月１日～ 12 月 31 日）



第１図　令和３～４年度調査地点位置図（国土地理院地図を一部改変）

第２章　今泉遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

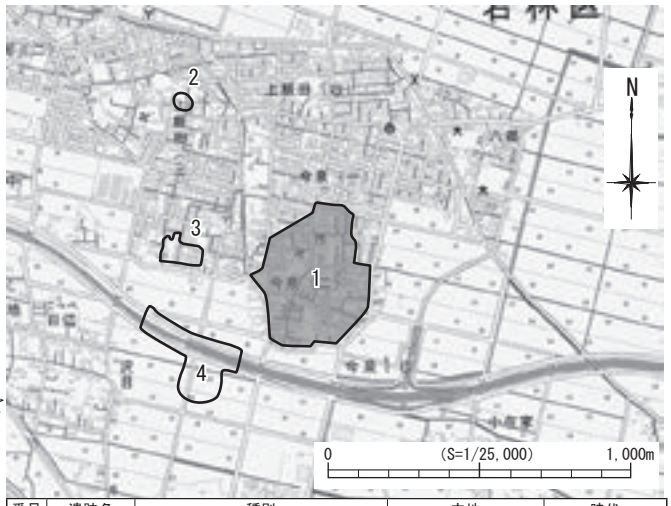
今泉遺跡はJR仙台駅の南東約6.5㎞、仙台南部道路今泉インターの北西約500mに位置し、標高約２～３ｍの自然堤防上に立地している。本遺跡は、文献などにより須田玄播（すだげんぱ）が居住した中世の城館「今泉城」として古くから知られていた（『仙台領古城書立之覚書』）が、これまでの調査で、縄文時代後期から近世にかけての複合遺跡であることが明らかにされている。

遺跡の主体は、中世の城館である今泉城に関わる遺構群である。城館の構造は不明確であるが、外堀の範囲が想定されており、想定範囲付近から複数の溝跡が発見されている。その内側には、掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡などの遺構が数多く発見されており、12世紀代に屋敷が造られ、その後、南北朝時代に城館として改変・整備され、17世紀前半頃まで使われていた変遷が推定されている。

第２節　第17次調査

1. 調査要項

遺　跡　名	今泉遺跡 （宮城県遺跡登録番号01235）
調 査 地 点	仙台市若林区今泉二丁目62 外７筆
調 査 期 間	令和３年12月20日～22日
調査対象面積	282.01㎡
調 査 面 積	97.12㎡
調 査 原 因	道路、給排水、側溝および盛土を伴う宅地造成
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課 調査調整係
担 当 職 員	主査　及川　謙作 主事　早川　太陽



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	今泉遺跡	集落跡、城館跡、包含地	自然堤防	縄文～近世
2	上屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代
3	高田Ａ遺跡	散布地	自然堤防	古代
4	高田Ｂ遺跡	集落跡、建物跡、河川跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～近世

第２図　今泉遺跡と周辺の遺跡

２．調査に至る経過と調査方法

本件は令和３年10月８日付で申請者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和３年10月14日付R3教生文第109-91号で回答）に基づき実施した。

調査は宅地造成工事予定地のうち、道路建設予定地内の給排水管設置に伴う掘削が遺構面に及ぶ範囲を中心に調査区（1～4トレンチ）を設定した。重機により各調査区の盛土および基本層Ⅰ～Ⅱ層除去後、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層上面（GL-0.5～1.0ｍ程度）で遺構検出作業を行った。その結果、堀跡２条、溝跡１条、井戸跡１基、水田耕作層が検出された。遺物は各トレンチの基本層および遺構の堆積土中から陶器、磁器、瓦（近世以降）、種子などの自然遺物が出土した。調査は給排水管設置に伴う掘削が及ぶ深度までに留めているため、各遺構の調査は一部を除き検出までにとどめている。

第３図　第 17 次調査区位置図

遺構の記録は、調査区平面図および断面図（S=1/20）を作製し、記録写真はデジタルカメラを用いて行った。

３．基本層序

今回の調査では、基本層を５層、細別で 12 層確認した。遺構検出作業を行ったⅢ層上面までの深度は、1 トレンチ付近で GL-0.5m、4 トレンチで GL-0.9 ｍである。

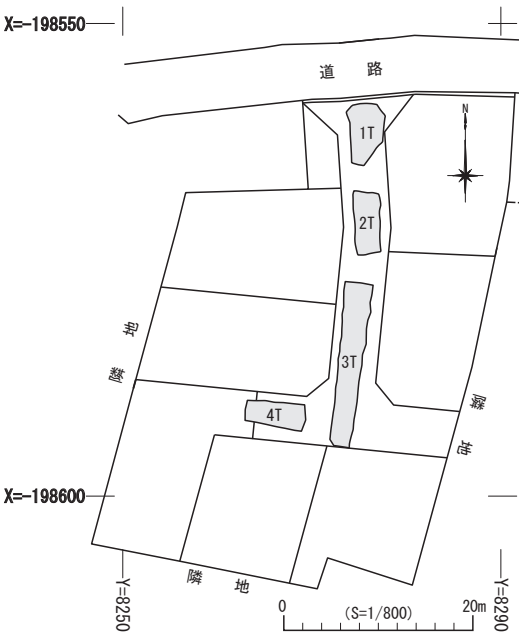
Ⅰａ層　5Y2/2 オリーブ黒色シルト質粘土。灰オリーブ色粘土ブロックを斑状に含み、層厚は約 10 ㎝である。2T で確認された。

Ⅰｂ層　5Y2/2 オリーブ黒色砂質シルト。ほぼ均質な層で、層厚は約 14 ㎝である。2T で確認された。畑の耕作層か。

Ⅰｃ層　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土。酸化鉄粒を斑状に含み、層厚は約 8 ～ 35 ㎝である。

Ⅰｄ層　10YR3/3 暗褐色シルト質粘土。酸化鉄粒を斑状に、場所によっては炭化粒も少量含む。層厚は約 0 ～ 49 ㎝である。1T 以外で確認された。

Ⅰｅ層　10YR4/4 褐色シルト。炭化粒を少量含む。層厚は約 0 ～ 20 ㎝である。4T で確認された。

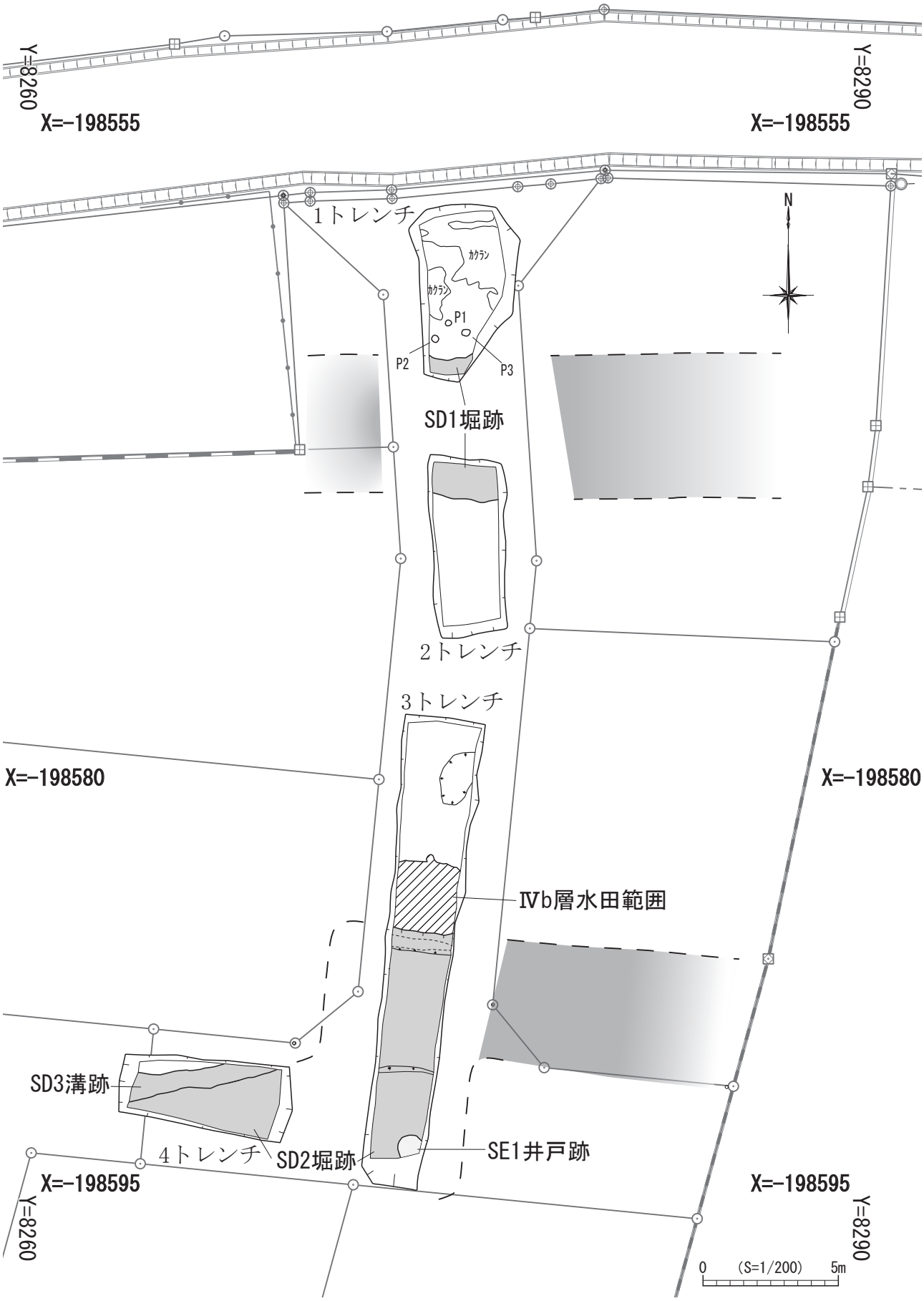


第４図　第 17 次調査区配置図

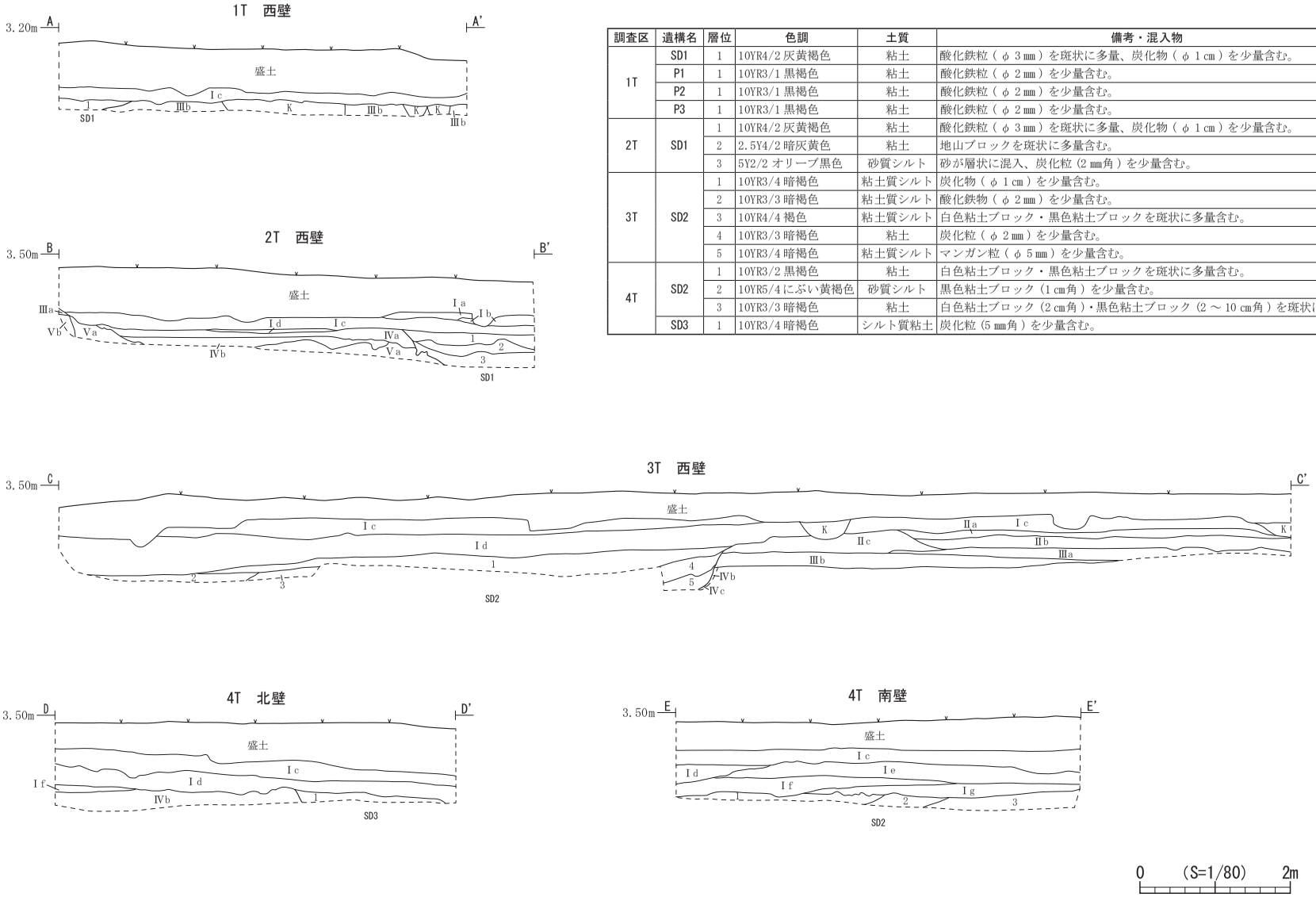
Ⅰｆ層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。黒色粘土ブロックを少量含む。層厚は約 0 ～ 26 ㎝である。4T で確認された。

Ⅰｇ層　10YR4/4 褐色シルト。黒色粘土ブロックを少量含む。層厚は約 0 ～ 19 ㎝である。4T で確認された。

Ⅱａ層　10YR4/4 褐色粘土質シルト。黒色粘土ブロック、白色粘土ブロックを斑状に含む。層厚は約 0 ～ 8 ㎝である。2T で確認された。土塁崩落後の耕作土か。



第５図　第 17 次調査遺構配置図



調査区	遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
1T	SD1	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄粒（φ３㎜）を斑状に多量、炭化物（φ１cm）を少量含む。
	P1	1	10YR3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄粒（φ２㎜）を少量含む。
	P2	1	10YR3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄粒（φ２㎜）を少量含む。
	P3	1	10YR3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄粒（φ２㎜）を少量含む。
2T	SD1	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄粒（φ３㎜）を斑状に多量、炭化物（φ１cm）を少量含む。
		2	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土	地山ブロックを斑状に多量含む。
		3	5Y2/2 オリーブ黒色	砂質シルト	砂が層状に混入、炭化粒（２㎜角）を少量含む。
3T	SD2	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物（φ１cm）を少量含む。
		2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄物（φ２㎜）を少量含む。
		3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	白色粘土ブロック・黒色粘土ブロックを斑状に多量含む。
		4	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化粒（φ２㎜）を少量含む。
		5	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒（φ５㎜）を少量含む。
4T	SD2	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	白色粘土ブロック・黒色粘土ブロックを斑状に多量含む。
		2	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	黒色粘土ブロック（１cm角）を少量含む。
		3	10YR3/3 暗褐色	粘土	白色粘土ブロック（２cm角）・黒色粘土ブロック（２～10 cm角）を斑状に含む。
	SD3	1	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	炭化粒（５㎜角）を少量含む。

第６図　第 17 次調査区断面図

Ⅱｂ層　10YR4/4 褐色粘土質シルト。白色粘土ブロックを少量含む。層厚は約 0 ～ 22 ㎝である。3T で確認された。

Ⅱｃ層　10YR4/4 褐色粘土質シルト。ほぼ均質である。層厚は約 0 ～ 31 ㎝である。3T で確認された。土塁構築土の可能性がある。

Ⅲａ層　10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ほぼ均質である。層厚は約 0 ～ 15 ㎝である。3T で確認された。

Ⅲｂ層　10YR3/4 暗褐色シルト質粘土。場所によってはグライ化している。ほぼ均質である。層厚は約 0 ～ 20 ㎝である。

Ⅳａ層　2.5YR4/2 暗灰黄色シルト質粘土。全体的にグライ化しラミナ状堆積である。1T で確認された。層厚は約 0 ～ 25 ㎝である。

Ⅳｂ層　10YR3/4 暗褐色粘土。部分的に炭化粒を含み、一部グライ化している。層厚は約 0 ～ 25 ㎝である。2 ～ 4T で確認された。水田耕作層である。

Ⅳｃ層　10YR2/2 黒褐色粘土。酸化鉄を多く含む。層厚は不明である。3T で確認された。水田耕作層である。

Ⅴａ層　2.5Y3/1 黒褐色粘土。全体的にグライ化している。ほぼ均質。層厚は約 25 ㎝以上である。2T で確認された。隣接するⅣｂ層の畦畔（けいはん）の可能性がある。

Ⅴｂ層　10YR4/3 にぶい黄褐色粘土。酸化鉄が上層との境に堆積。層厚は約 20 ㎝である。2T で確認された。

４．発見遺構と出土遺物

遺構は堀跡が２条、溝跡が１条、ピットが３基、井戸跡が 1 基検出された。遺物は各遺構および基本層中から土師器、陶器、磁器、種子などが出土した。

SD1 堀跡

1 トレンチの南側から 2 トレンチの北側にかけて検出された。東西方向の堀跡で、本調査区外へ延びる。Ⅱ層上面から掘り込まれている。検出長は約 2.6m、幅は約 5.1m、深さは約 0.5m 以上である。堆積土は 3 層確認された。いずれも自然堆積と推測される。断面形状は不明だが南側の肩は傾斜角度約 40 度で掘り込まれている。遺物は桃やクルミ等の種子が出土した。

SD2 堀跡

3 トレンチから 4 トレンチにかけて検出された東西方向の堀跡で、本調査区外へ延びる。また検出された位置関係から 3 トレンチ付近で北側に屈曲しているものと推測される。SE1 井戸跡と SD3 溝跡と重複し、SE1 井戸跡と SD3 溝跡よりも古い。検出長は約 12.0m、幅約 8.6m 以上、深さは約 55 ㎝以上である。断面形状は不明だが、3 トレンチで検出されたの北側の肩は傾斜角約 52 度で掘り込まれている。堆積土は 3 トレンチでは 5 層、4 トレンチでは３層確認された。3 トレンチで確認された堆積層はいずれも自然堆積であると推測されるのに対し、4 トレンチで確認された堆積層はいずれもⅢ層以下の基本層を主体的に含んでいることから、人為的に埋め戻された層と判断される。層序の方向から西側から埋め戻されており、埋め戻しの際には堀に付随していた土塁の積み土を利用した可能性がある。

遺物は 3 トレンチから磁器などが出土した。磁器は肥前、波佐見および大堀相馬産で、いずれも 18 世紀代に比定される。

SD3 溝跡

4 トレンチの北側で検出された。東西方向の溝跡で、方位は E-14° -N で本調査区外へ延びる。SD2 堀跡と重複

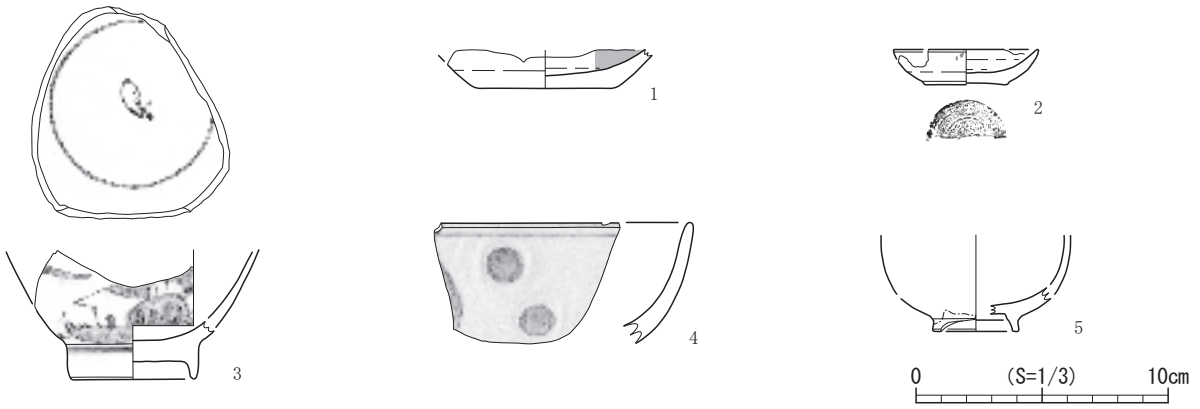
しこれよりも新しい。検出長は約 5.7m、幅約 1.0m、深さは約 0.5m 以上である。堆積土は 1 層確認された。遺物は出土していない。

SE1 井戸跡

3 トレンチの南側で検出された。SD2 堀跡と重複しこれよりも新しい。平面形状は円形を呈するものと推定される。検出規模 75 × 84 ㎝だが、約 1.0m の規模になるものと推定される。遺物は出土していない。

その他の出土遺物

3 トレンチを中心に土師器や土師質土器などが出土した。基本層中から出土しているものの油煙の付着している土師質土器（Ia-1）は、SD2 堀跡に付随していた可能性がある。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	D-1	3T		土師器	坏	－	(5.6)	(1.5)	ロクロナデ	黒色処理 ロクロナデ		3-1
2	Ia-1	3T	Ⅰa	土師質土器	小皿	(5.7)	3.2	1.4	ロクロナデ 口：スス付着 底：回転糸切り			3-2
3	J-1	SD2(3T)		磁器	碗	－	4.9	5.1	染付 山水文（遠山・家）	染付 見込みに文様	肥前 18c 後半	3-4
4	J-2	SD2(3T)		磁器	碗	－	－	(4.8)	染付 丸文	染付	波佐見 18c くらわんか茶碗	3-3
5	J-3	SD2(3T)		磁器	碗	－	(3.4)	(3.8)	白濁釉	白濁釉	大堀相馬 18c 後半	3-5
－	O-1	SD1	－	植物遺体	種子	－	－	－	－	－	桃 写真掲載のみ	3-6
－	O-2	SD1	－	植物遺体	種子	－	－	－	－	－	クルミ 写真掲載のみ	3-7

第７図　第 17 次調査出土遺物

５．まとめ

調査地点は今泉遺跡の中央部のやや北側に位置する。これまでの調査で、今回の調査区北側の道路の両脇に沿うような形で城を区画する堀跡や区画溝等が確認されており、今回の調査地点も同様の堀が検出される可能性が考えられた。

今回の調査では、調査区内から堀跡２条、溝跡１条、ピット３基、井戸跡１基が検出された。このうち SD1 堀跡は第 8・11・16 次調査で検出された堀跡の延長線上に位置しており、同一の堀跡であると推測される。SD1 堀跡の推定範囲上に現在も地境が存在するが、これは過去の堀跡の区画を踏襲したものと推測される。SD2 堀跡は SD1 堀跡の内側を区画した堀跡であると推測され、第 11 次と第 16 次で検出された堀跡も一連の遺構の可能性がある。堀の検出状況から 3 トレンチは SD2 堀跡の屈曲部分にあたるものと推測される。幅などの規模は不明だが、調査区北側の道路を挟んだ位置に八坂神社が現存することから、何らかの関連性が窺える。堀の堆積土は 3 トレンチではいずれも自然堆積で、出土遺物から 18 世紀代には埋没していったものと推測される。4 トレンチで確認された土層はいずれも埋戻土であり、土層の状況から周囲には土塁が存在し、その土を用いて埋戻しを行ったものと推測される。また SD1 堀跡と SD2 堀跡に隣接する形で、より古い時代の水田耕作層が確認された。SD1・2 堀跡の間の遺構検出面は堀跡のレベルよりも約 20 ～ 40 ㎝高くなっており、比較的低い部分を選んで古い時期には水田が営まれ、その後堀が掘り込まれたものと推測される。

第８図　今泉遺跡　検出堀跡位置図

参考文献

仙台市教育委員会　2011『法領塚古墳他』仙台市文化財調査報告書第 393 集（８次）

仙台市教育委員会　2016『荒井南遺跡他』仙台市文化財調査報告書第 446 集（11 次）

仙台市教育委員会　2011『法領塚古墳他』仙台市文化財調査報告書第 393 集（12 次）

仙台市教育委員会　2021『仙台平野の遺跡群 31』仙台市文化財調査報告書第 491 集（16 次）

１.1T 遺構検出状況（南から）

２.1T 調査区西壁土層断面（南東から）

３.2T 遺構検出状況（南東から）

４.2T 調査区西壁土層断面（東から）

写真図版１　今泉遺跡第 17 次調査（１）

１.SD1 堀跡範囲（東から）

２.2T 遺構検出状況（南から）

３.3T 調査区西壁土層断面（SD2 堀跡周辺・東から）

４.4T 遺構検出状況（東から）

５.4T 調査区北壁土層断面（南東から）

６.4T 調査区南壁土層断面（北西から）

写真図版２　今泉遺跡第 17 次調査（２）

写真図版３　今泉遺跡第 17 次調査出土遺物

第３章　大野田遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

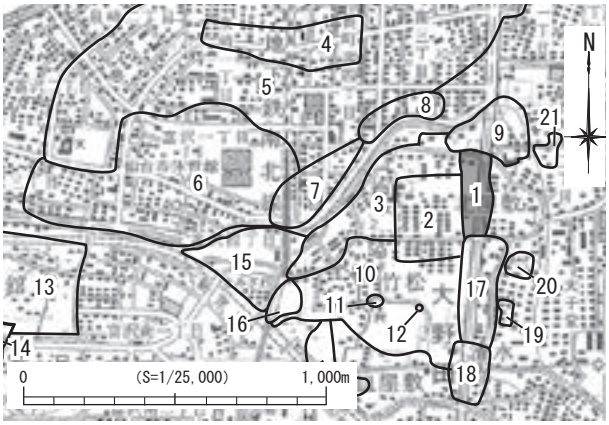
大野田遺跡は仙台市太白区大野田に所在しており、JR 太子堂駅の西約 500m、地下鉄南北線富沢駅の北東約 700m の地点に位置する。名取川の支流の笊川が名取川に合流する前に大きく蛇行する右岸の自然堤防上に立地し、標高は９～ 10m で、東西約 100m、南北 250m で、面積は約 24000 ㎡である。南側には王ノ壇遺跡、西側には袋前遺跡、六反田遺跡などが所在しており、遺跡の周囲は仙台市内でも数多くの遺跡が所在する地域である。この他にも縄文時代から奈良時代の集落である下ノ内遺跡、多数の円墳が検出された大野田古墳群、奈良時代の官衙跡とされる大野田官衙遺跡（当遺跡と一部範囲重複）と隣接している。この他にも周辺の遺跡からは縄文時代から近世の遺構や遺物が多数確認されている。

本遺跡の発掘調査次数はこれまでに４回を数え、縄文時代の祭祀遺構、古代の集落跡、畑跡が確認されている。特に都市計画道路建設に伴い 1993 ～ 1995 年に実施された第１次調査では、縄文時代後期前葉の環状集石や配石遺構などが検出され、多量に出土した遺物の中でも土偶は 300 点を超えており、大野田遺跡が居住域から外れた祭祀に関わる地域であったことが考えられ重要である。

第２節　第５次調査

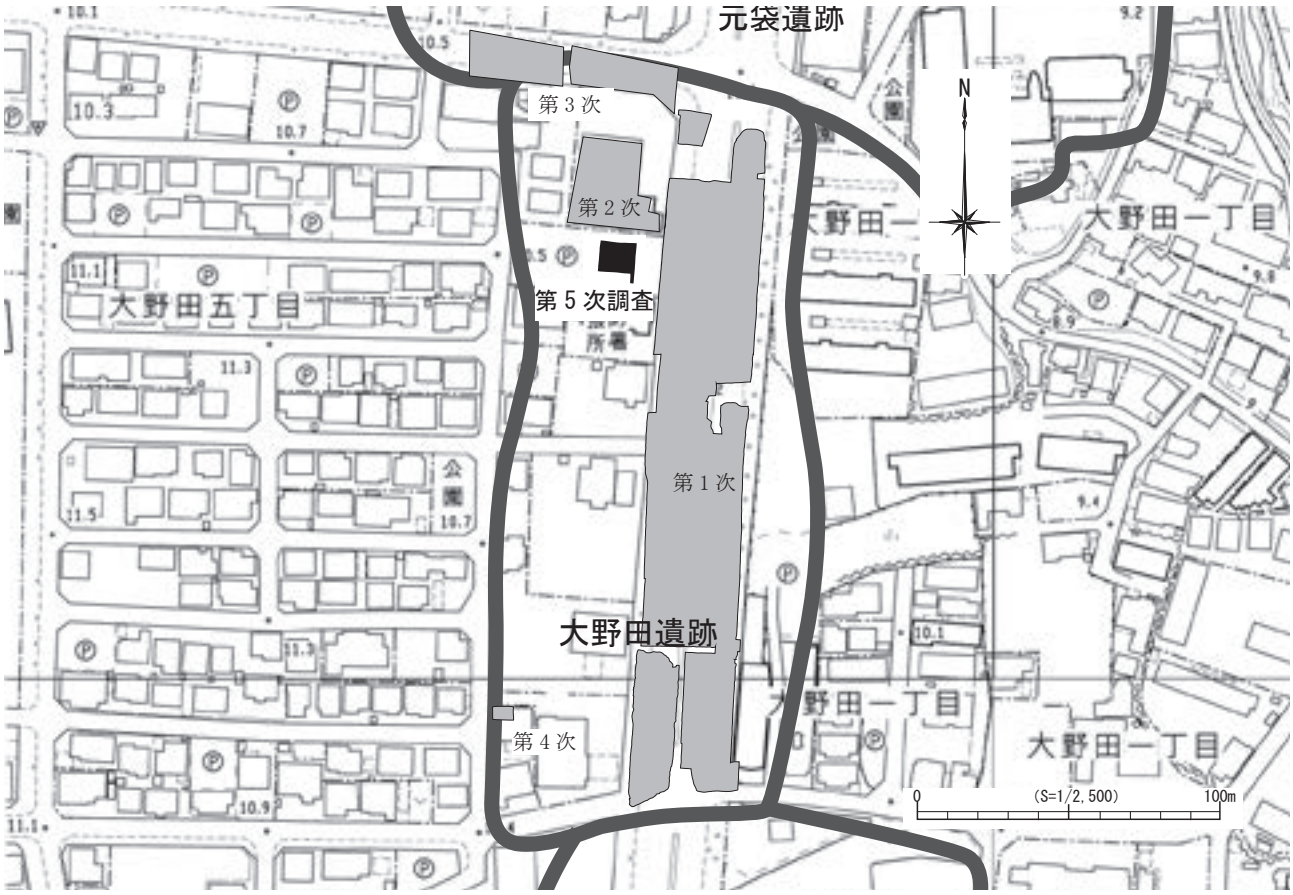
1. 調査要項

遺　跡　名	大野田遺跡
	（宮城県遺跡登録番号 01094）
調 査 地 点	仙台市太白区大野田五丁目５－２
調 査 期 間	令和３年 10 月 25 日
	～ 12 月 24 日
調査対象面積	316.94 ㎡
調 査 面 積	約 120 ㎡
調 査 原 因	事務所新築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部
	文化財課調査調整係
担 当 職 員	主査　及川謙作
	主任　堀江洋介
	主事　柳沢　楓
	早川太陽



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	大野田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文（後）・弥生（中）・古墳～平安
2	大野田官衙遺跡	自然堤防	官衙跡	古墳～奈良
3	六反田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文（中～晩）～近世
4	泉崎浦遺跡	自然堤防 後背湿地	水田跡・墓地	縄文（後）・弥生～古墳・平安
5	富沢遺跡	後背湿地	集落跡・水田跡・散布地	旧石器～近世
6	山口遺跡	自然堤防 後背湿地	集落跡・水田跡	縄文～平安
7	下ノ内浦遺跡	自然堤防	集落跡・墓跡・水田跡	縄文（早・前・後）～中世
8	袋東遺跡	自然堤防	包含地	古墳・平安
9	元袋遺跡	自然堤防	集落跡	奈良～平安
10	大野田古墳群	自然堤防	古墳・集落跡	縄文～中世
11	春日社古墳	自然堤防	古墳	古墳
12	鳥居塚古墳	自然堤防	古墳	古墳
13	富沢館跡	自然堤防 後背湿地	城館跡	戦国
14	鍛冶屋敷前遺跡	自然堤防	集落跡	縄文・奈良～中世
15	下ノ内遺跡	自然堤防	集落跡・墓跡	縄文（中～晩）～中世
16	伊古田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文～平安
17	王ノ壇遺跡	自然堤防	集落跡・屋敷跡	縄文（後）～中世
18	皿屋敷遺跡	集落跡・生産遺跡・屋敷跡・包含地	自然堤防	奈良～平安・中世
19	長町清水遺跡	古墳か	自然堤防	古墳か
20	北屋敷遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
21	新田遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安

第９図　大野田遺跡と周辺の遺跡

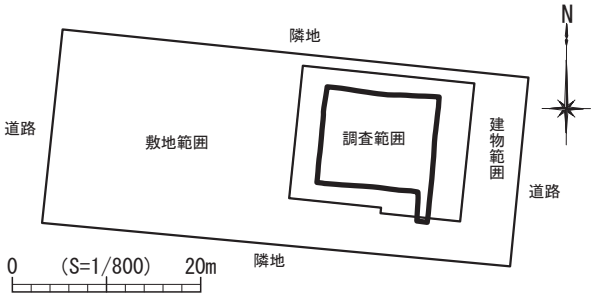


第 10 図　第５次調査区位置図

２．調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者から令和３年７月 21 日付で提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和３年７月 28 日付 R3 教生文第 109-55 号で回答）に基づき実施した。

調査では対象地内に東西約 12.0ｍ×南北約 10.0ｍの調査区を設定し、重機により盛土および基本層Ⅰ層除去後、Ⅱｂ層上面（GL-1.3 ～ 1.4m）で遺構検出作業を行った。結果、溝跡３条、土坑２基、ピット 22 基が検出された。Ⅱｂ層上面の調査終了後、調査区を狭めて下層調査のために掘り下げを行ったところ、基本層Ⅲ～Ⅳ層中からは縄文土器や石器などが多く出土した。基本層Ⅴ層上面で遺構検出作業を行ったが、遺物は出土しなかった。

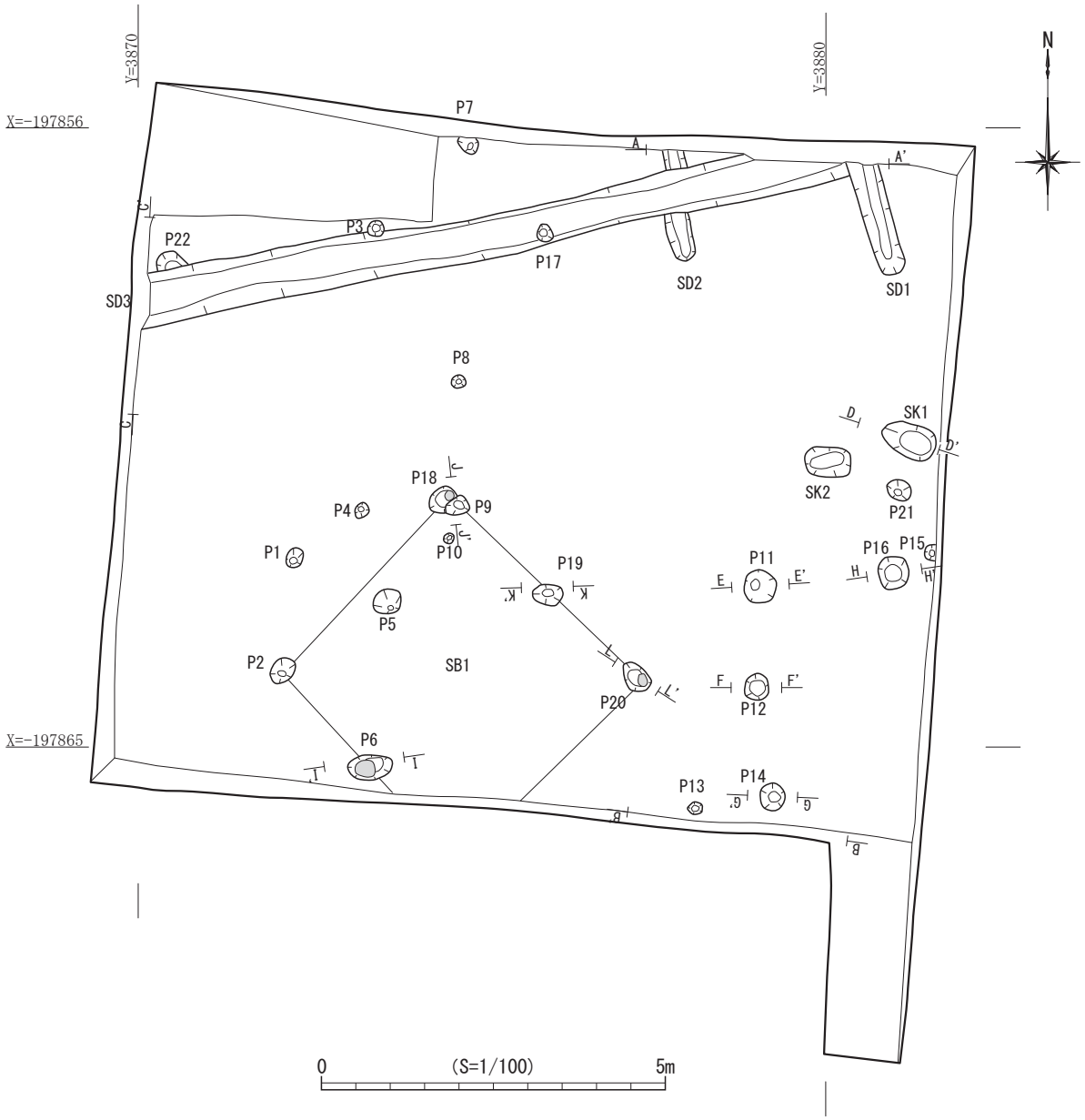


第 11 図　第５次調査区配置図

調査では必要に応じて、調査区平面図（S=1/20）および調査区断面図（S=1/20）を作成し，デジタルカメラにより記録写真の撮影を行った。

３．基本層序

今回の調査では、基本層が大別５層、細別８層確認された。遺構検出作業を行ったⅡｂ層上面までの深さは約 1.3ｍである。



第 12 図　第５次調査区平面図

Ⅰ　層：10YR6/1 粘土。グライ化している。層中に現代のゴミ等を含む。盛土以前の水田耕作土である。

Ⅱａ層：10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。Ⅰ層との境に酸化鉄が集積する。マンガンを多く含む。部分的に検出された。Ⅱｂ層上面で上層の水田耕作土の影響を大きく受けた部分であると考えられる。

Ⅱｂ層：10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。Ⅰ層との境に酸化鉄が集積する。マンガンを含む。古代の遺構検出面であり、縄文時代の遺物包含層である。第１次調査で確認された基本層Ⅲ層に対応する。

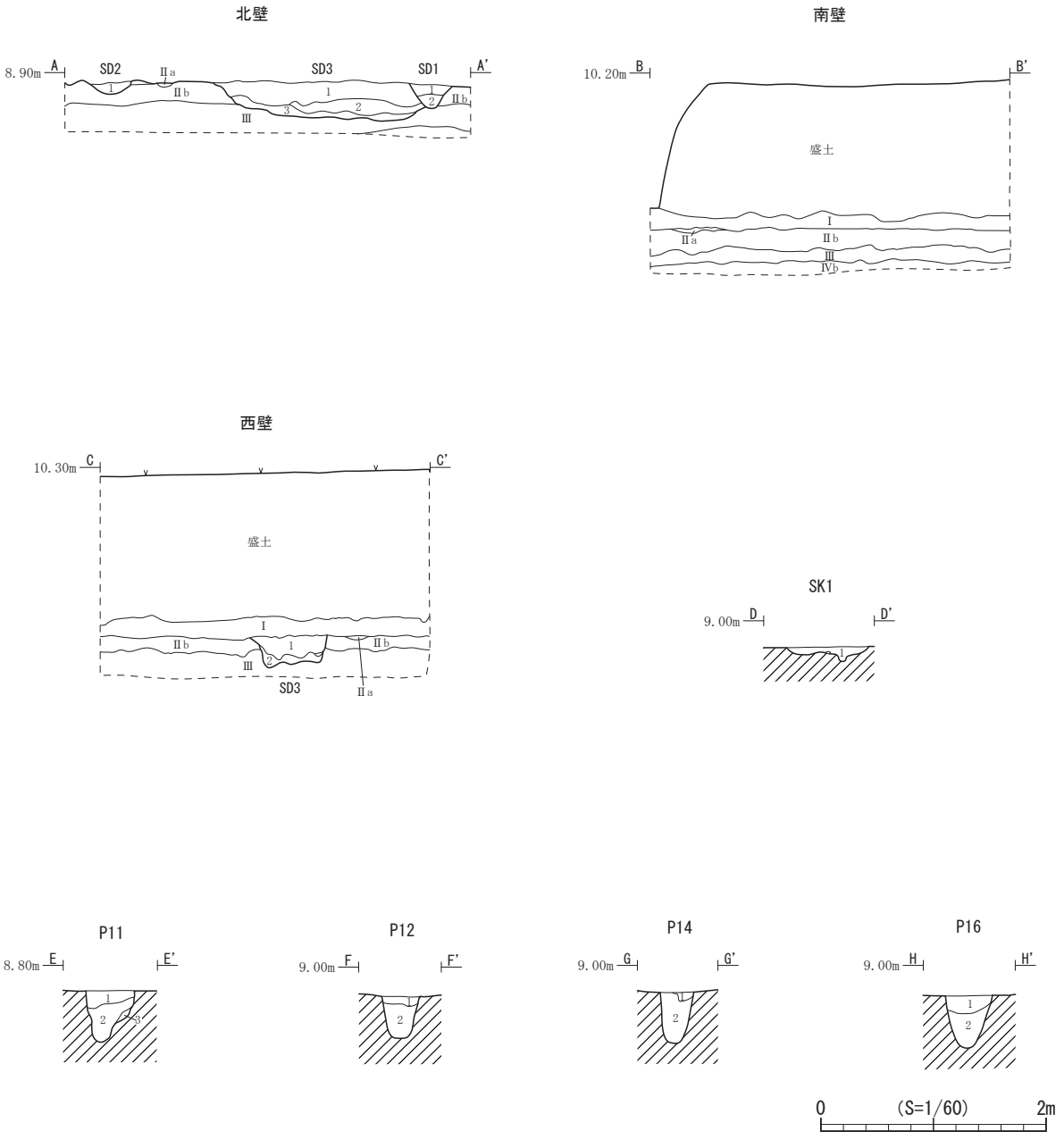
Ⅲ　層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。マンガン粒を含む。縄文時代の遺物包含層である。河川の流れ込みによる堆積層と推定される。

Ⅳａ層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。部分的に確認された。10YR4/2 灰黄褐色粘土を含む。縄文時代の遺物包含層である。河川の流れ込みによる堆積層と推定される。

Ⅳｂ層：10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。Ⅳａ層に比べ色調が暗い。河川の流れ込みによる堆積層と推定される。

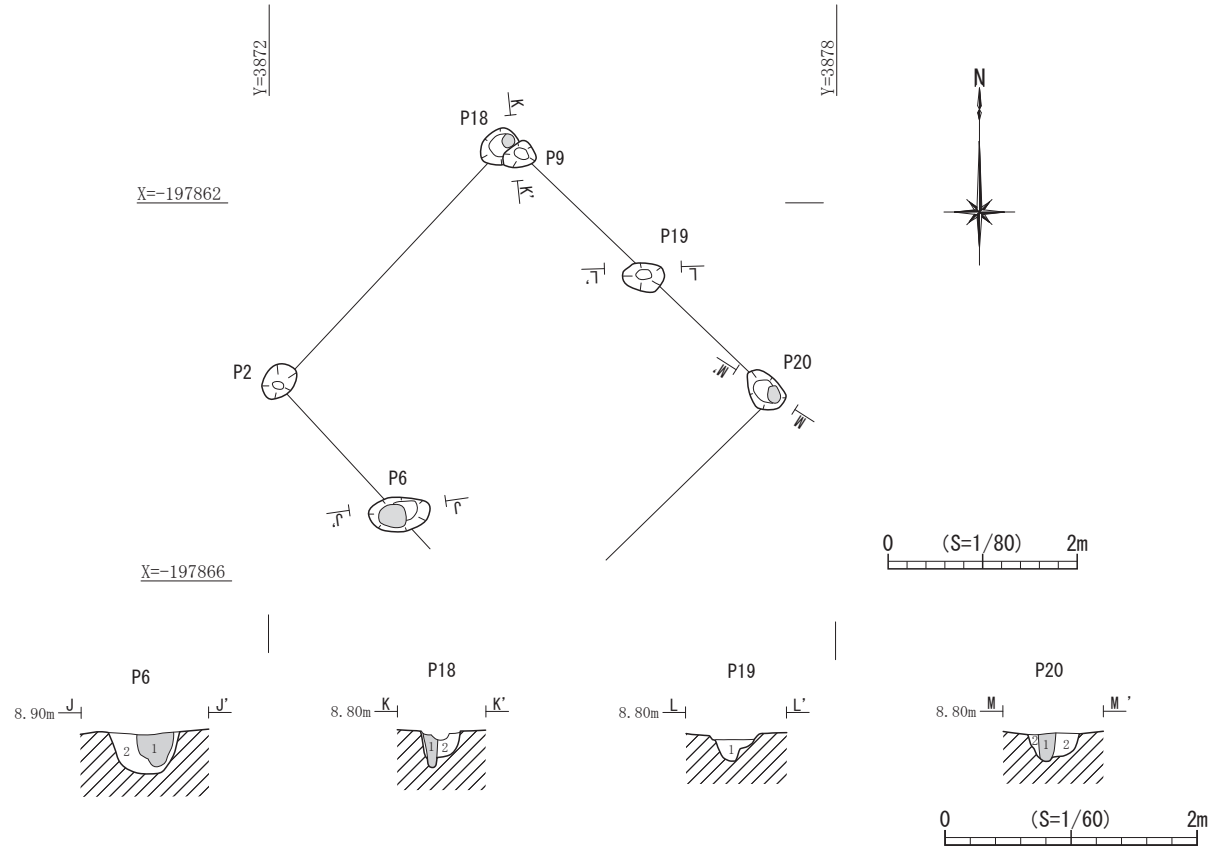
Ⅴａ層：10YR4/6 褐色シルト質砂。粗砂、礫（φ３㎜）を含む。河川の流れ込みによる堆積層と推定される。

Ⅴｂ層：10YR4/6 褐色砂。礫（φ５㎜～ 10 ㎝）、粗砂を多く含む。河川の流れ込みによる堆積層と推定される。



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SK1	1	7.5YR3/2　黒褐色	砂質シルト	基本層Ⅱ層含む
SD1	1	7.5YR3/2　黒褐色	砂質シルト	基本層Ⅱ層含む
	2	10YR4/4 褐色	砂質シルト	基本層Ⅱ層多く含む。
SD2	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	基本層Ⅱ層含む
SD3	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層を少量含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層を含む。
	3	10YR4/4 褐色	砂質シルト	基本層Ⅱ層主体。暗褐色粘土ブロックを少量含む。マンガンを少量含む。
P11	1	7.5YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層を含む。
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層含む。
P12	1	7.5YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層含む。
P14	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	基本層Ⅱ層含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層含む。
P16	1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層含む。
	2	7.5YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層含む。

第 13 図　第５次調査区断面図



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
P6	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	柱痕跡。　基本層Ⅱ層含む。
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層主体。暗褐色粘土ブロック含む。掘方埋土
P18	1	7.5YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	柱痕跡。
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層主体。暗褐色粘土ブロック含む。掘方埋土
P19	1	7.5YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層含む。
P20	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物含む。柱痕跡。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層含む。炭化物含む。掘方埋土

第 14 図　SB1 掘立柱建物跡平面・断面図

４．発見遺構と出土遺物

今回の調査では、Ⅱｂ層上面から掘立柱建物跡１棟、溝跡３条、土坑２基、ピット 17 基が検出された。遺物は、各遺構およびⅡｂ層～Ⅴａ層中で縄文土器、石器、土製品等が多数出土した。

Ⅴａ層上面からピット４基、性格不明遺構１基が検出された。いずれも堆積土がⅣ層に色調・土質が似ているため、遺構ではなくⅣ層の土がくぼみに堆積したものである可能性もあるが、断面形がＵ字や皿形を呈していたため、遺構として調査を行った。

【Ⅱｂ層上面検出遺構】

（１）掘立柱建物跡

SB1 掘立柱建物跡（第 12・14 図）

調査区の南側で検出された。P2･6･18･19･21 から構成される。検出された建物の規模は東西３間（北側長 4.0m、南側長不明）、南北２間（西側長 3.6m、東側長不明）である。南東隅の柱跡は調査区外南側にあると想定されるため、建物跡が調査区の南側へ広がる可能性がある。建物を構成するピットの平面形状は円形または楕円形を呈し、直径は約 40 ～ 60 ㎝である。P6･18･21 で柱痕跡が確認された。規模は直径約 16 ～ 24 ㎝である。遺物は出土していない。

（２）溝跡

SD1 溝跡（第 12・13 図）

調査区の北東側で検出された、南北方向に延びる溝跡である。SD3 より新しい。検出長は 1.6m で調査区外北側へ延びる。幅は 0.4m で、深さは 20 ㎝である。断面形状はＵ字形を呈し、堆積土は２層である。遺物は出土していない。規模や方向から、第２次調査で確認された小溝１と一連の溝跡と考えられる。

SD2 溝跡（第 12・13 図）

調査区の北側で検出された、南北方向に延びる溝跡である。SD3 より古い。検出長は 1.6m で調査区外北側へ延びる。幅は 0.4m で、深さは 10 ㎝である。断面形状は皿形を呈し、堆積土は単層である。遺物は土師器片がわずかに出土した。規模や方向から、第２次調査で確認された小溝２と一連の溝跡と考えられる。

SD3 溝跡（第 12・13 図）

調査区の北側で検出された、東西方向に延びる溝跡である。SD1、P3・17 よりも古く、SD2、P22 よりも新しい。検出長は 10.4m で調査区外北東方向に延びる。幅は約 0.7m で、深さは 30 ㎝である。断面形状は逆台形を呈し、堆積土は２層である。遺物は出土していない。

（３）土坑

SK1 土坑（第 12・13 図）

調査区の東側で検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸 0.8m、短軸 0.5m 程度である。断面形状は皿形を呈し、深さは約 10 ㎝である。堆積土は１層確認された。遺物は玉髄（ぎょくずい）製の両面加工のある石器が１点出土した。石鏃の未成品の可能性がある。基本層Ⅱｂ層中に含まれていた遺物が混入したものであると考えられる。

SK2 土坑（第 12 図）

調査区の東側で検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸 0.7m、短軸 0.4m である。断面形状は皿形を呈し、深さは約 10 ㎝である。堆積土は１層確認された。遺物は出土していない。

（４）ピット

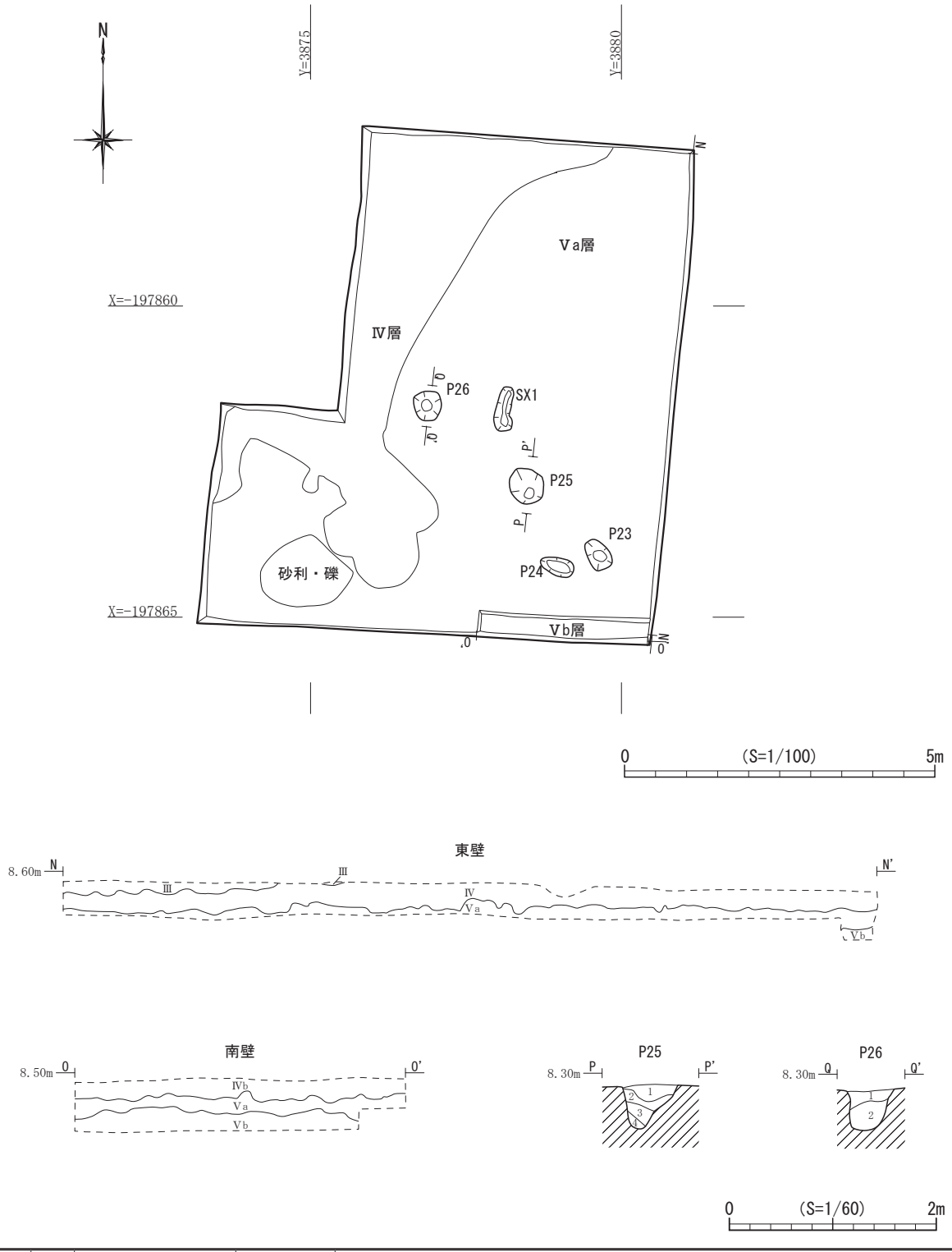
合計 22 基検出された。上述したように P2・6・18・19・21 は、掘立柱建物跡を構成する。P11・12・14・16 は、柱痕跡は確認されなかったが、それぞれの位置関係から、掘立柱建物跡を構成する可能性がある。平面形状は円形および楕円形を呈し、直径 20 ㎝～ 60 ㎝程度である。深さは 15 ㎝～ 43 ㎝で、遺物は一部のピットから土師器片が出土した。

【基本層Ｖａ層上面検出遺構】

（１）性格不明遺構

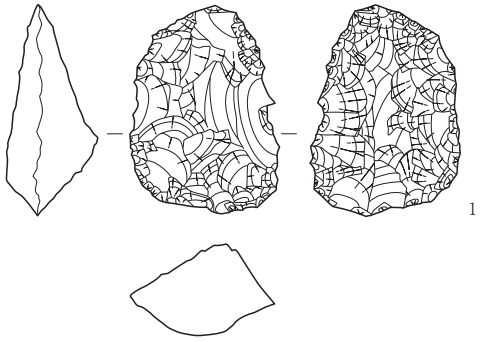
SX1 性格不明遺構（第 15 図）

平面形状は長円形を呈し、長軸 70 ㎝、短軸 20 ㎝である。Ｖａ層上面で検出されたピットとは形が大きく異なるため、区別するため性格不明遺構とした。堆積土は１層で、粘土質シルトを主体としており、基本層Ⅳ層に似る。遺物は出土していない。



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
P23	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	砂粒を含む、小礫（φ５cm）含む。炭化粒わずかに含む
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	砂粒多く含む、灰褐色砂を多く含む。
P24	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	褐灰色砂を含む。白色砂含む
P25	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	基本層Ⅴ層少量、褐灰色粘土少量
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	基本層Ⅴ層少量、褐灰色粘土多く含む
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	基本層Ⅴ層少量、２層よりも粘性あり。
	4	10YR4/2 灰黄褐色	砂	φ５mm程度の砂粒が主体
P26	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	褐灰色粘土を少量含む。
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	褐灰色粘土を多く含む。
SX1	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	基本層Ⅴ層少量含む、炭化物僅かに含む
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	褐灰色粘土を多く含む。

第 15 図　第５次下層調査区平面・断面図



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			重量（g）	備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ			
1	K-4	SK1	1	打製石器	剥片	2.8	2.0	1.1	5.1	玉髄 両面加工のある剥片 石鏃の未成品？	9-1

第 16 図　SK1 土坑出土遺物

（2）ピット

P23 ～ 26（第 15 図）

ピットは４基検出された。平面形状は P25・26 が円形を呈し、直径約 40 ㎝～ 50 ㎝、P23・24 は、楕円形を呈し、長軸約 50 ㎝、短軸約 30 ㎝である。いずれのピットからも柱痕跡は確認されていない。堆積土は、粘土質シルトを主体としており、基本層Ⅳ層に似る。遺物は出土していない。

【遺物包含層からの出土遺物】

（1）縄文土器

第 17 ～ 19 図は縄文土器である。出土したうちの 38 点を掲載した。内訳はⅡｂ層から６点、Ⅱｂ～Ⅲ層から６点、Ⅲ層から 20 点、Ⅳａ層から６点である。

第 18 図 2・3、第 19 図 1 は深鉢である。第 18 図 2・3 は体部が口縁部にかけてやや内湾しており、第 18 図 2 は RL 縄文、第 18 図 3 は LR 縄文が施文されている。第 17 図 8、第 19 図 1 は体部～口縁部が欠損ししているが口縁部に向かって体部が外傾する器形と考えられ、底部に木葉痕が施文されている。

第 17 図 11 は鉢である。体部が口縁部に向かって緩やかに外反する。摩滅が激しいが部分的に外面に RL 縄文が確認される。第 17 図 4 は浅鉢である。底部は欠損しているが、残存状況から丸底と考えられる。外面・内面ともに入念に磨きが施されており、光沢が見られる。内面には２条の沈線が施文されている。第 20 図 2 は壺である。体部がやや縦長で膨らみを持ち、口頸部は外傾する。体部には多条沈線が施文されている。第 20 図 3 は注口土器である。大部分が欠損しており、器形は不明である。注口部周囲には多条沈線が施文されている。

文様は地文のほか、沈線文が多く見られる。沈線文の種類としては、多条沈線文（第 19 図 5・10・14）、櫛歯沈線文（第 19 図 12）、格子状沈線文（第 19 図 17）が確認される。器種は深鉢が最も多く、次いで鉢、浅鉢、壺、注口、ミニチュア土器である。

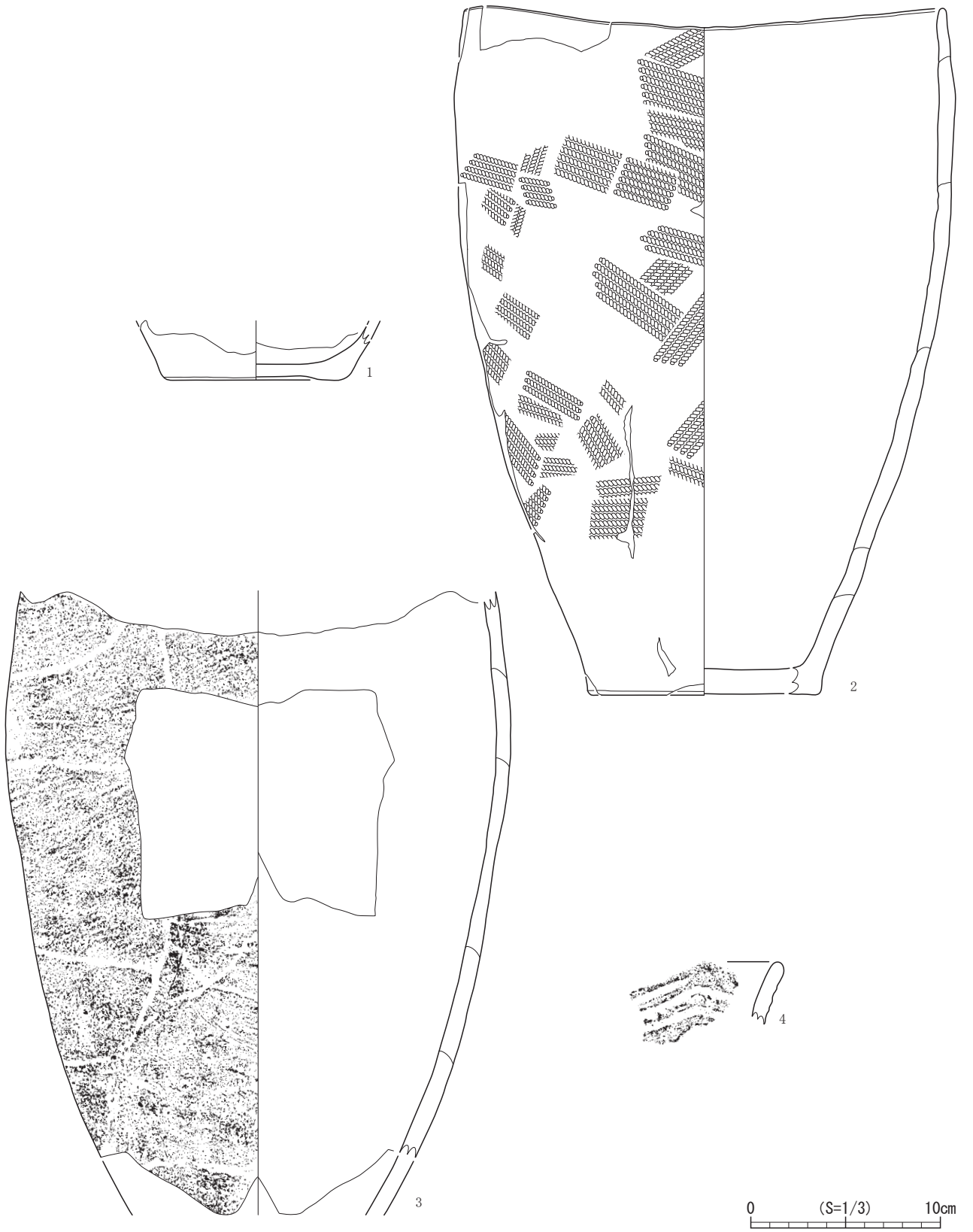
（2）土製円盤

第 22 図 5 ～ 14、第 23 図は土製円盤である。全体で 34 点出土した。内訳は、Ⅱｂ層から３点、Ⅱｂ～Ⅲ層から８点、Ⅲ層から 20 点、Ⅳａ層から２点、Ⅴａ層から１点出土している。

今回出土したもので有孔のものは確認されなかった。平面形態の種類は、円形、楕円形、方形、不定形に分類される。

図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	A-21	Ⅱb	縄文土器	浅鉢	−	−	(4.3)	口：沈線文	体：沈線文		9-2
2	A-19	Ⅱb～Ⅲ	縄文土器	浅鉢	−	−	(2.8)	口：補修孔	口：沈線文		9-3
3	A-35	Ⅲ	縄文土器	浅鉢	−	−	(3.4)	口～体：ナデ	口～体：沈線文		9-4
4	A-6	Ⅲ	縄文土器	浅鉢	(15.8)	−	(7.2)	体：ミガキ	口：沈線文 体：ミガキ		9-5
5	A-15	Ⅱb～Ⅲ	縄文土器	鉢	−	−	(5.9)	口～体：沈線文			9-6
6	A-18	Ⅱb～Ⅲ	縄文土器	鉢	−	−	(4.6)	口：刻み目			9-7
7	A-34	Ⅱb～Ⅲ	縄文土器	鉢	−	−	(2.0)	口:LR 縄文 沈線文	口:LR 縄文 沈線文	口：貫通穴２ヶ所	9-8
8	A-4	Ⅲ	縄文土器	鉢	−	(12.4)	(5.0)	底：木葉痕			9-9
9	A-11	Ⅲ	縄文土器	鉢	−	−	(7.3)	口：貫通孔 刺突文 体：隆沈線文 LR 縄文			9-10
10	A-17	Ⅲ	縄文土器	鉢	−	−	(4.7)	体：沈線文 RL 縄文 磨消	ナデ		9-11
11	A-5	Ⅳ	縄文土器	鉢	(10.3)	6.5	10.7	体:RL 縄文？			9-12
12	A-31	Ⅳ	縄文土器	鉢	−	−	(4.3)	体：沈線文	体：ナデ		9-13

第 17 図　遺物包含層出土遺物（１）



図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	A-7	Ⅱb	縄文土器	深鉢	－	9.5	(2.8)			胎土に石英か？ 被熱により変色	9-14
2	A-1	Ⅱb	縄文土器	深鉢	(25.2)	(12.0)	36.3	RL 縄文			9-15
3	A-3	Ⅱb	縄文土器	深鉢	－	－	(32.9)				10-1
4	A-20	Ⅱb	縄文土器	深鉢	－	－	(3.3)	口：沈線文			10-2

第 18 図　遺物包含層出土遺物（２）

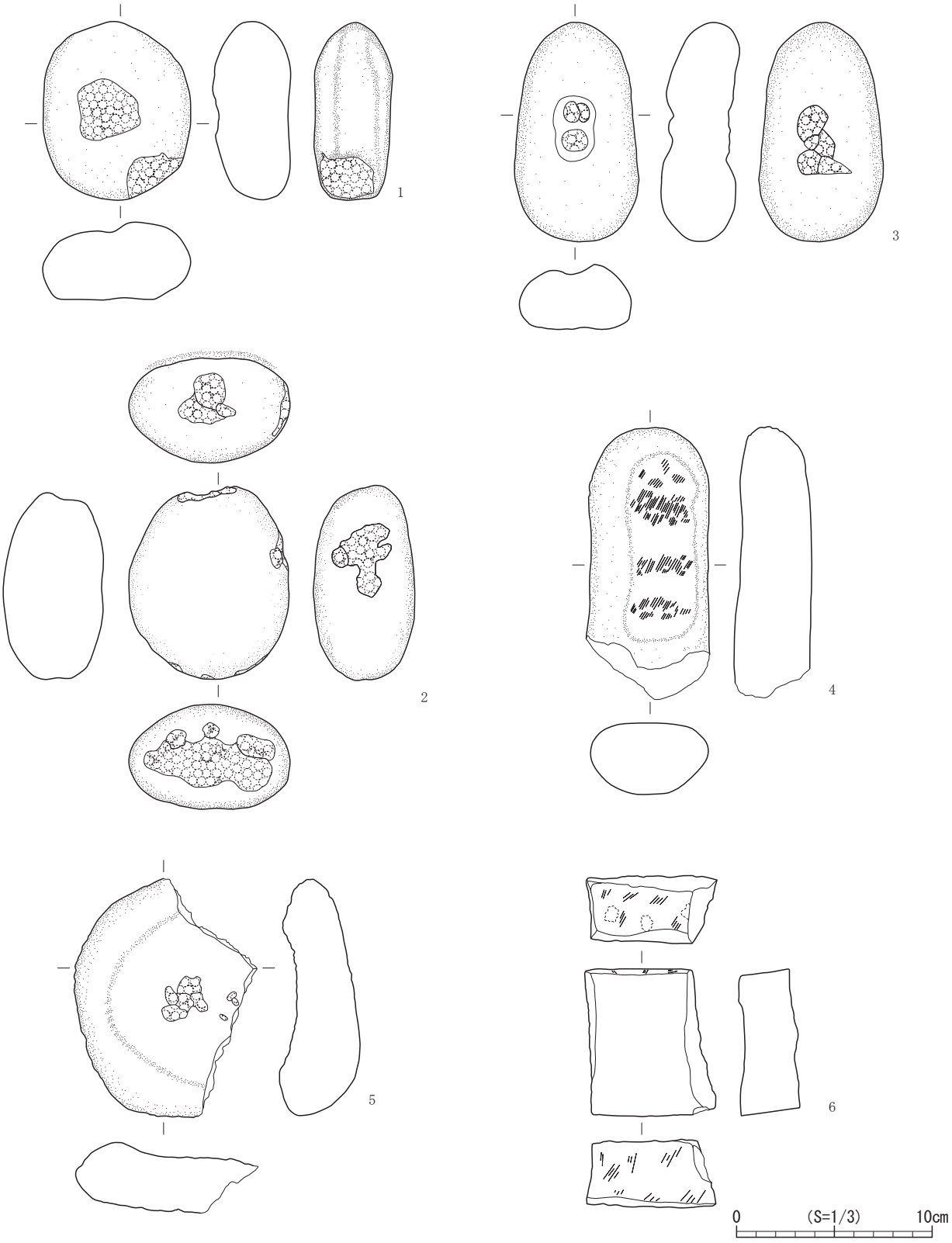
図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	A-23	Ⅱb～Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	11.4	(1.3)	底：木葉痕			10-3
2	A-32	Ⅱb～Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	－	(5.9)	頸：刻み目 口：ナデ	口：ナデ		10-4
3	A-9	Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	(11.6)	(2.6)				10-5
4	A-24	Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	－	(3.5)	体：沈線文 刺突文			10-6
5	A-12	Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	－	(8.3)	体：多条沈線文	ナデ		10-7
6	A-13	Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	－	(5.8)	体：LR 縄文 沈線文 磨消			10-8
7	A-14	Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	－	(4.6)	口～体：沈線文 ナデ	ナデ		10-9
8	A-25	Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	－	－		口～体：沈線文		10-10
9	A-22	Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	－	(5.9)	体：RL 縄文			10-11
10	A-30	Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	－	(7.1)	体：多条沈線文	体：ナデ		10-12
11	A-33	Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	－	(3.1)	体：沈線文			10-13
12	A-36	Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	－	(3.3)	体：櫛歯状沈線文	体：ナデ		10-14
13	A-37	Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	－	(5.7)	口～体：LR 縄文 沈線文 磨り消し	口～体：ナデ		10-15
14	A-38	Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	－	(3.5)	体：：LR 縄文 沈線文 刺突文			10-16
15	A-39	Ⅳ	縄文土器	深鉢	－	－	(6.0)	体：LR 縄文			11-1
16	A-8	Ⅳ	縄文土器	深鉢	－	8.8	(2.3)			底部被熱	11-2
17	A-28	Ⅳ	縄文土器	深鉢	－	－	(4.1)	口～体：沈線文	口～体：格子状沈線文		11-3
18	A-43	Ⅳ	縄文土器	深鉢	－	－	(5.9)	口：沈線文			11-4
－	A-40	Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	－	－			口：貫通孔 写真掲載のみ	11-5

第 19 図　遺物包含層出土遺物（３）

図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	A-41	Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	－	(4.1)		口縁部 突起		11-6
2	A-2	Ⅱb	縄文土器	壺	(10.4)	－	(22.0)	体：多条沈線文			11-7
3	A-29	Ⅲ	縄文土器	注口土器	－	－	(4.9)	注口：沈線文 ミガキ			11-8
－	A-42	Ⅲ	縄文土器	壺？	－	－	－			把手 写真掲載のみ	11-9

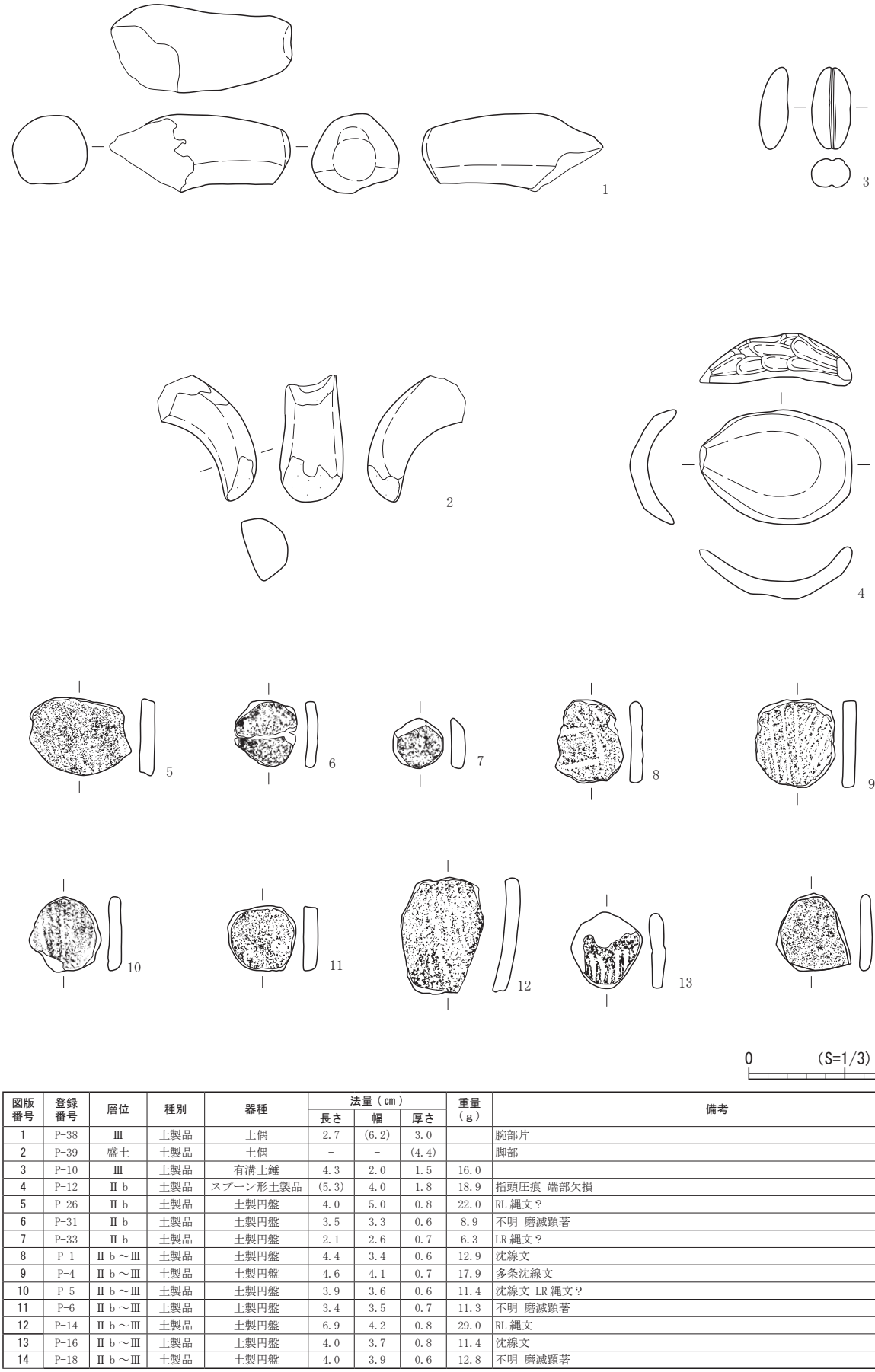
図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量（cm）			重量（g）	備考	写真図版
					長さ	幅	厚さ			
4	K-1	Ⅲ	打製石器	石鏃	2.4	1.8	0.8	3.0	玉髄	11-10
5	K-5	Ⅲ	打製石器	石鏃	1.5	1.2	0.3	0.4	鉄石英	11-11
6	K-6	Ⅲ	打製石器	スクレイパー	4.5	3.4	0.7	11.2	珪質頁岩	11-12
7	K-3	Ⅲ	打製石器	スクレイパー	3.1	3.2	0.7	6.6	頁岩	11-13
－	K-7	Ⅲ	打製石器	剝片	3.5	3.3	1.1	11.9	頁岩 火ハネ痕あり 写真掲載のみ	11-15
8	K-2	Ⅲ	磨製石器	磨製石斧	(3.7)	(3.0)	1.1	23.7	閃緑岩	11-14

第 20 図　遺物包含層出土遺物（４）



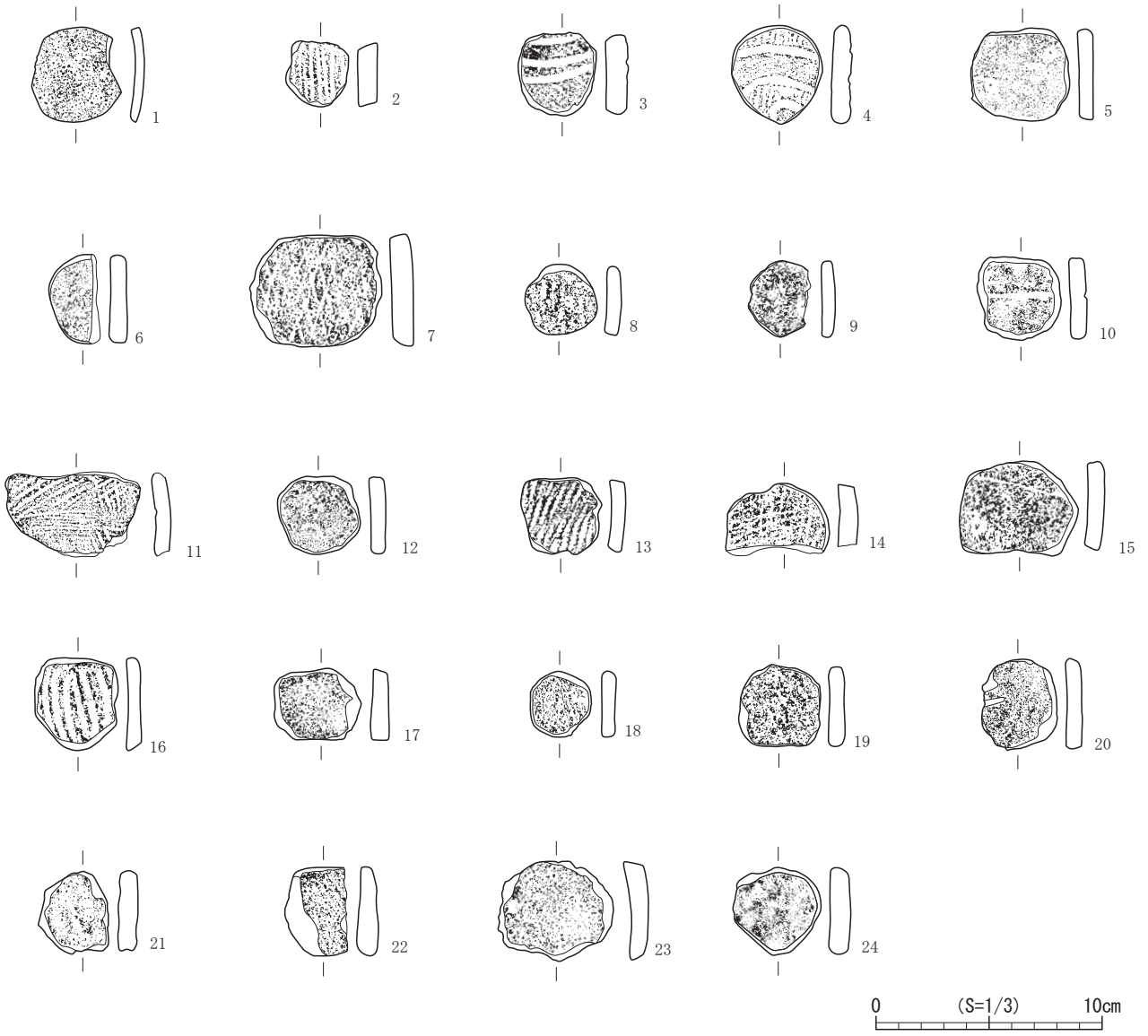
図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量（cm）			重量（g）	備考	写真図版
					長さ	幅	厚さ			
1	K-11	Ⅱb～Ⅲ	礫石器	磨石	9.1	7.5	4.0	302	砂岩 敲打痕２面 凹２面 磨１面	12-1
2	K-12	Ⅳ	礫石器	敲石	9.7	8.2	5.2	490	砂岩 敲打痕３面	12-2
3	K-10	Ⅲ	礫石器	凹石	11.2	7.3	3.8	357	砂岩 凹２面	12-3
4	K-8	Ⅲ	礫石器	磨石	(14.0)	6.3	3.9	480	安山岩 磨１面	12-4
5	K-9	Ⅱb～Ⅲ	石製品	石皿	12.2	(9.2)	3.9	420	安山岩	12-5
6	K-13	Ⅱb～Ⅲ	石製品	砥石	7.5	6.4	3.0	252	砂岩	12-6

第 21 図　遺物包含層出土遺物（５）



図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量（cm）			重量（g）	備考	写真図版
					長さ	幅	厚さ			
1	P-38	Ⅲ	土製品	土偶	2.7	(6.2)	3.0		腕部片	12-7
2	P-39	盛土	土製品	土偶	－	－	(4.4)		脚部	12-8
3	P-10	Ⅲ	土製品	有溝土錘	4.3	2.0	1.5	16.0		12-9
4	P-12	Ⅱb	土製品	スプーン形土製品	(5.3)	4.0	1.8	18.9	指頭圧痕 端部欠損	12-10
5	P-26	Ⅱb	土製品	土製円盤	4.0	5.0	0.8	22.0	RL 縄文？	12-11
6	P-31	Ⅱb	土製品	土製円盤	3.5	3.3	0.6	8.9	不明 磨滅顕著	12-12
7	P-33	Ⅱb	土製品	土製円盤	2.1	2.6	0.7	6.3	LR 縄文？	12-13
8	P-1	Ⅱb～Ⅲ	土製品	土製円盤	4.4	3.4	0.6	12.9	沈線文	12-14
9	P-4	Ⅱb～Ⅲ	土製品	土製円盤	4.6	4.1	0.7	17.9	多条沈線文	12-15
10	P-5	Ⅱb～Ⅲ	土製品	土製円盤	3.9	3.6	0.6	11.4	沈線文 LR 縄文？	12-16
11	P-6	Ⅱb～Ⅲ	土製品	土製円盤	3.4	3.5	0.7	11.3	不明 磨滅顕著	12-17
12	P-14	Ⅱb～Ⅲ	土製品	土製円盤	6.9	4.2	0.8	29.0	RL 縄文	12-18
13	P-16	Ⅱb～Ⅲ	土製品	土製円盤	4.0	3.7	0.8	11.4	沈線文	12-19
14	P-18	Ⅱb～Ⅲ	土製品	土製円盤	4.0	3.9	0.6	12.8	不明 磨滅顕著	12-20

第 22 図　遺物包含層出土遺物（６）



図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量（cm）			重量（g）	備考	写真図版
					長さ	幅	厚さ			
1	P-19	Ⅱb～Ⅲ	土製品	土製円盤	4.1	4.0	0.4	8.8		13-1
2	P-2	Ⅲ	土製品	土製円盤	2.9	2.7	0.9	9.3	L 撚糸文？	13-2
3	P-3	Ⅲ	土製品	土製円盤	3.4	3.6	0.8	14.3	沈線文	13-3
4	P-7	Ⅲ	土製品	土製円盤	4.4	4.0	0.9	16.8	沈線文	13-4
5	P-8	Ⅲ	土製品	土製円盤	4.1	4.3	0.7	16.3		13-5
6	P-9	Ⅲ	土製品	土製円盤	3.9	(2.1)	0.8	7.7		13-6
7	P-13	Ⅲ	土製品	土製円盤	5.0	5.8	1.0	37.2	撚糸 L	13-7
8	P-15	Ⅲ	土製品	土製円盤	3.1	3.3	0.7	7.9	RL 縄文？	13-8
9	P-17	Ⅲ	土製品	土製円盤	3.5	(2.7)	0.6	6.0	不明 摩滅顕著	13-9
10	P-20	Ⅲ	土製品	土製円盤	3.7	3.7	0.7	15.4	沈線文	13-10
11	P-21	Ⅲ	土製品	土製円盤	(3.8)	6.0	0.8	23.6	RL 縄文	13-11
12	P-24	Ⅲ	土製品	土製円盤	3.4	4.7	0.7	11.3	不明 摩滅顕著	13-12
13	P-25	Ⅲ	土製品	土製円盤	3.5	3.7	0.6	11.2	LR 縄文	13-13
14	P-27	Ⅲ	土製品	土製円盤	(2.8)	4.6	0.8	13.2	不明 磨滅顕著	13-14
15	P-28	Ⅲ	土製品	土製円盤	4.0	5.3	0.8	23.6	沈線文	13-15
16	P-29	Ⅲ	土製品	土製円盤	4.2	3.8	0.6	12.1	沈線文	13-16
17	P-30	Ⅲ	土製品	土製円盤	3.2	3.9	0.8	12.2	不明 磨滅顕著	13-17
18	P-32	Ⅲ	土製品	土製円盤	2.9	2.7	0.6	6.1	撚糸文	13-18
19	P-34	Ⅲ	土製品	土製円盤	3.7	3.7	0.7	13.7	不明 摩滅顕著	13-19
20	P-35	Ⅲ	土製品	土製円盤	4.0	3.3	0.7	11.6		13-20
21	P-37	Ⅲ	土製品	土製円盤	3.6	3.2	0.8	11.0	沈線文	13-21
22	P-22	Ⅳa	土製品	土製円盤	3.9	(2.8)	1.0	10.4	RL 縄文？ 磨滅顕著	13-22
23	P-23	Ⅳa	土製品	土製円盤	4.4	5.1	0.9	21.9	不明 磨滅顕著	13-23
24	P-36	Ⅴ	土製品	土製円盤	3.9	3.8	0.9	15.8		13-24

第 23 図　遺物包含層出土遺物（７）

(3) その他土製品

土製円盤の他に土製品は、Ⅲ層、盛土から土偶が２点（第 22 図 1・2)、Ⅲ層から有溝土錘 1 点（第 22 図 3)、Ⅱｂ層からスプーン型土製品が１点（第 22 図 4）出土した。

土偶について、残存部分から、第 22 図 1 は左腕、第 22 図 2 は左脚と考えられる

(4) 打製石器

Ⅲ層から石鏃が２点（第 20 図 4・5)、スクレイパーが２点（第 20 図 6・7）出土している。

(5) 礫(れき)石器

Ⅱ～Ⅲ層、Ⅲ層から凹石がそれぞれ１点（第 21 図 1・3)、Ⅳａ層から敲石が１点（第 21 図 2)、Ⅲ層から磨石が１点（第 21 図 4)、Ⅱ～Ⅲ層から砥石が１点（第 21 図 6）出土している。

(6) 磨製石器・石製品

Ⅱ～Ⅲ層から石皿が１点（第 21 図 5)、Ⅲ層から磨製石斧(せきふ)が１点（第 20 図 8）出土している。

５．まとめ

今回の調査地点は、大野田遺跡の北側に位置する。第１次調査地点の西側、第２次調査地点の南側に隣接する。調査では、Ⅱｂ層上面で溝跡３条、土坑２基、ピット 22 基を確認した。近隣の調査からも同様の遺構が確認されており、周辺一帯は居住域であったと考えられる。

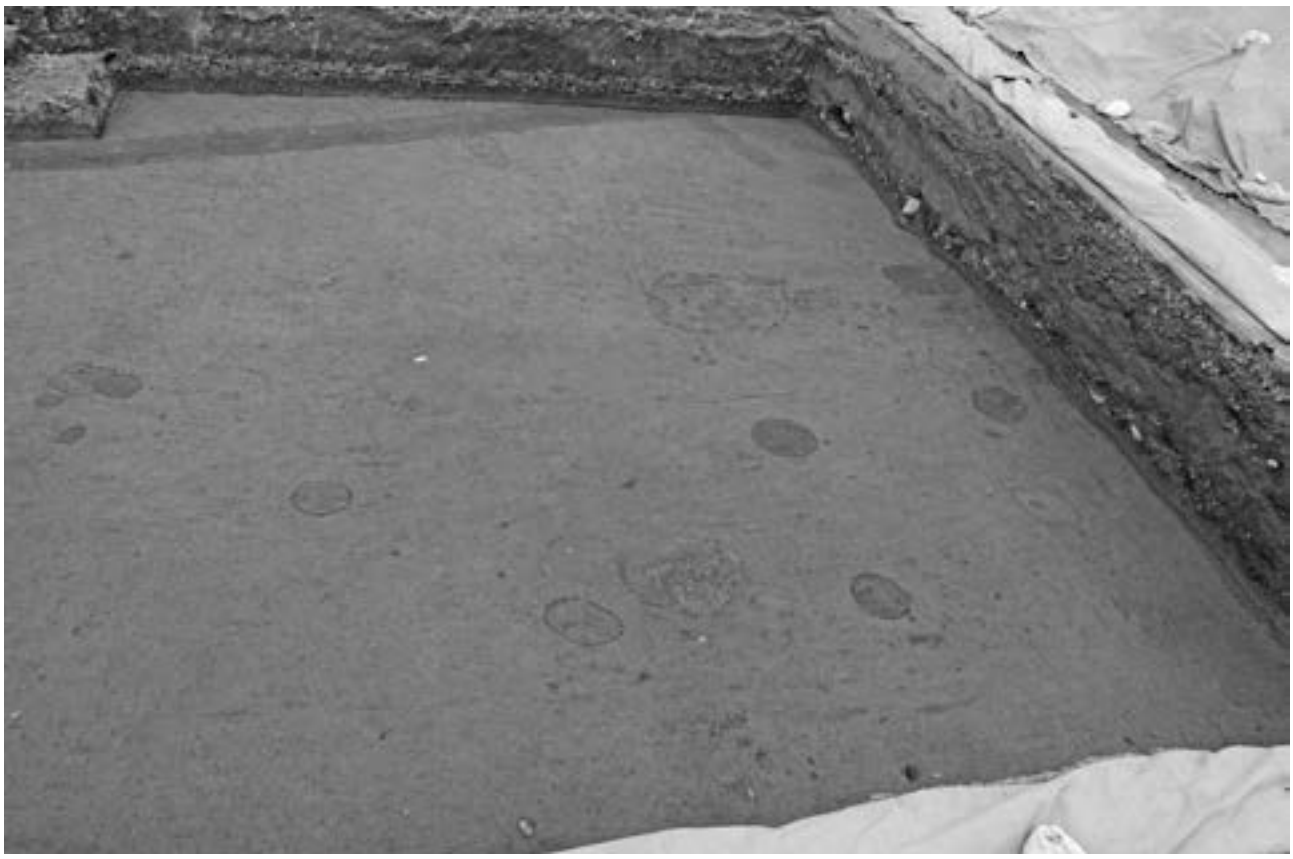
また、Ⅱｂ層上面の遺構調査終了後、下層の遺構の有無を確認するため、人力で掘り下げを行った。各層の上面で遺構確認作業を行ったが、明確な遺構は確認されなかった。基本層Ⅴ層上面で遺構状のプランを確認したため、調査を行ったが遺物は出土していない。平面形は不正形なものが多かったため、自然にできたくぼみに土が堆積し、遺構状のプランが形成された可能性がある。

遺物は、Ⅱｂ層～Ⅴａ層中で縄文時代の土器、石製品、土製品が出土した。これらは遺構に伴うものではなく、層中に含まれていた遺物である。今回の調査で出土した遺物の出土状況を近隣で行われた第１次・第２次調査と比較するとほぼ同様であり、流れ込みによるものと判断される。

出土した縄文土器は沈線が施文されたものが多く、横位もしくは斜位の RL 縄文が施される場合が多い。これらの土器群は第１次調査出土土器群と類似していることから、後期初頭の南境式の範疇にあると推測される。土製品に関しては、土製円盤が 34 点出土している。そのほか出土量はわずかではあるが祭祀関連遺物と考えられている土偶、スプーン形土製品が確認されている。このような出土傾向はこれまでの調査と概ね同様であり、大野田遺跡が縄文時代後期に機能した祭祀の場であった可能性が高いことが再確認された。

参考文献

仙台市教育委員会　2001 『大野田遺跡　第 2 次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第 252 集
仙台市教育委員会　2013 『大野田遺跡・元袋遺跡・伊古田遺跡ほか」 仙台市文化財調査報告書第 414 集
仙台市教育委員会　2014 『大野田遺跡　第 1 次発掘調査』 仙台市文化財調査報告書第 424 集
仙台市教育委員会　2014 『仙台平野の遺跡群 24』 仙台市文化財調査報告書第 428 集
仙台市史編さん委員会　1999 『仙台市史　通史編 1　原始』



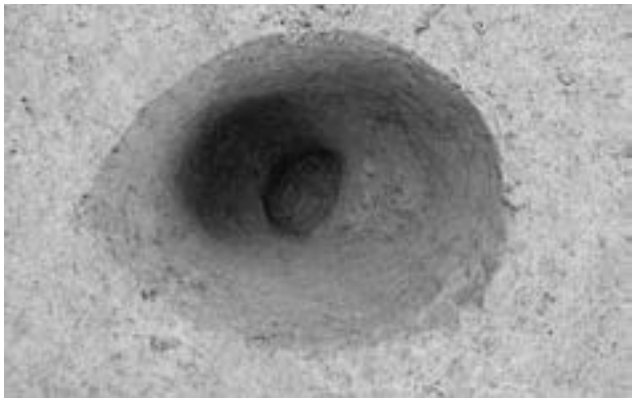
１．Ⅱ層上面遺構検出状況（１）（南から）

２．Ⅱ層上面遺構検出状況（２）（南から）

写真図版４　大野田遺跡第５次調査（１）

１.SD3 溝跡完掘状況（東から）

２.SK1 土坑断面（南から）

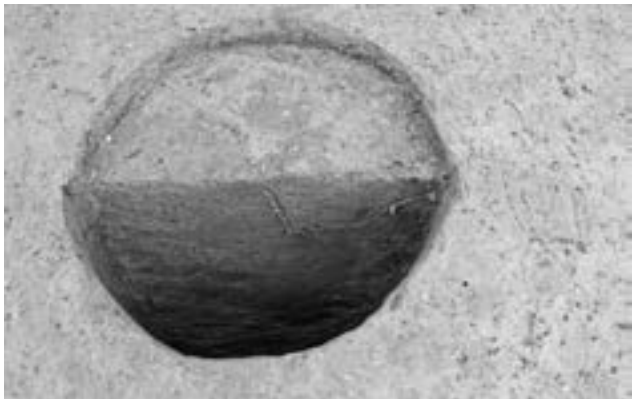


３.P2 完掘状況（南から）

４.P6 完掘状況（北から）

５.P11 土層断面（南から）

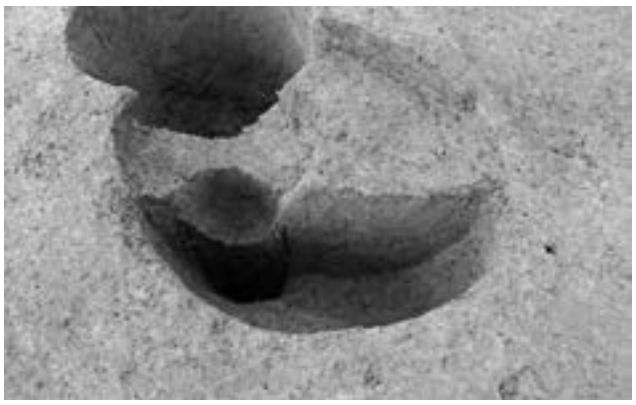
６.P12 土層断面（南から）



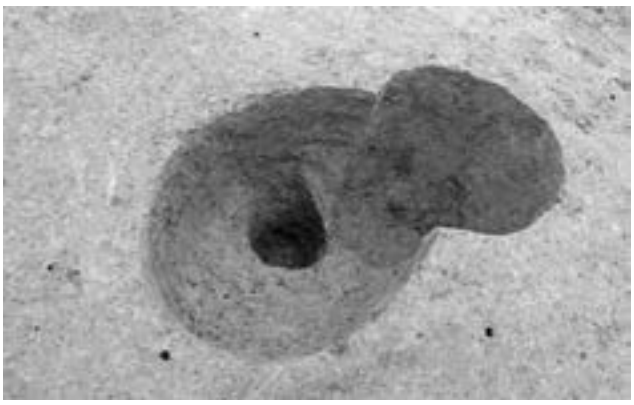
７.P14 土層断面（北から）

８.P16 土層断面（南から）

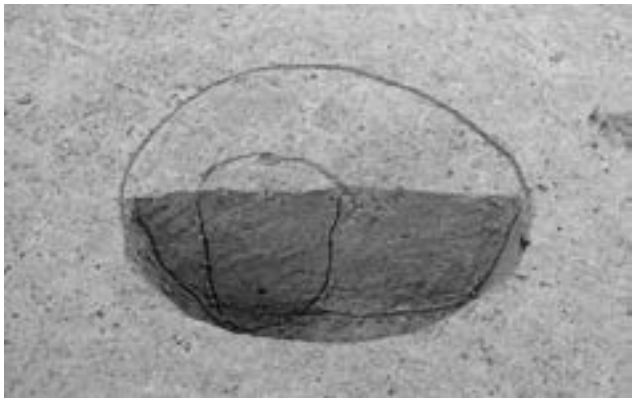
写真図版５　大野田遺跡第５次調査（２）



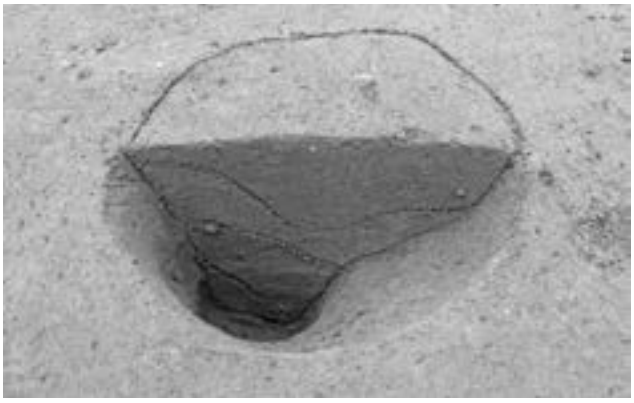
１.P18 柱痕跡確認状況（西から）



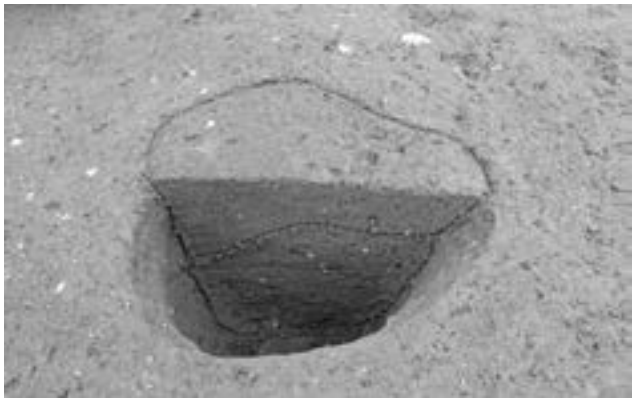
２.P18 完掘状況（南から）



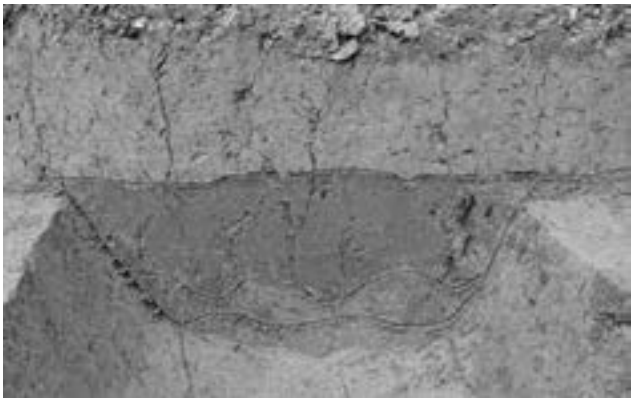
３.P20 柱痕跡確認状況（北東から）



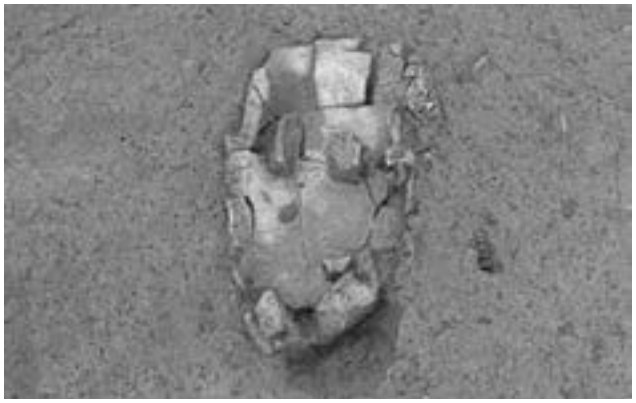
４.P25 土層断面（東から）



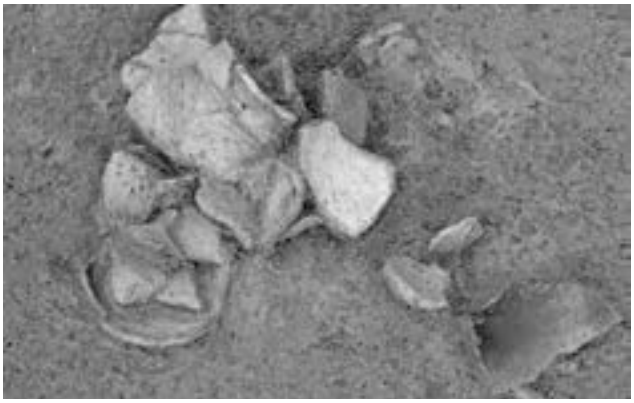
５.P26 土層断面（西から）



６.SD3 西壁断面



７．Ⅱｂ層中遺物出土状況（南から）



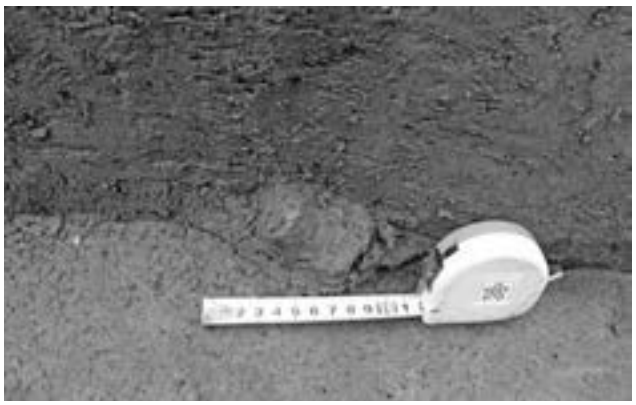
８．Ⅱｂ層中遺物出土状況（南から）

写真図版６　大野田遺跡第５次調査（３）

１．掘立柱建物跡調査状況（南東から）

２．Ⅲ層上面確認状況（南西から）

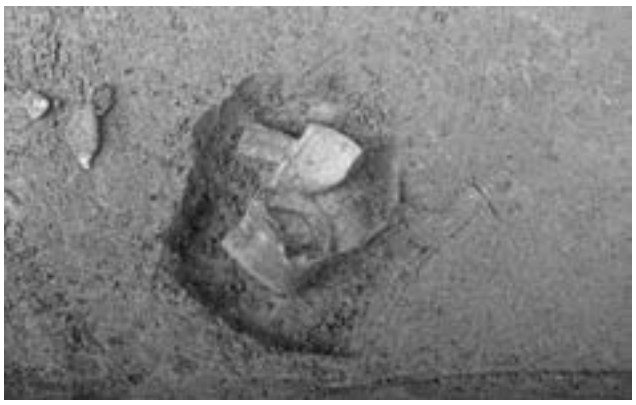
３．調査区南東部 Ⅲ層上面遺物出土状況（北から）



４．Ⅲ層中遺物出土状況（西から）

５．Ⅲ層中遺物出土状況（西から）

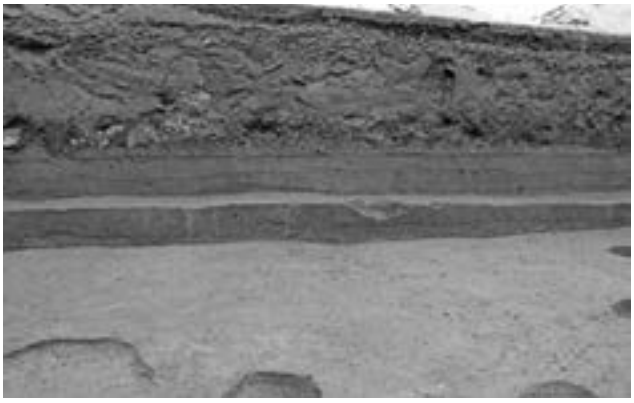
写真図版７　大野田遺跡第５次調査（４）



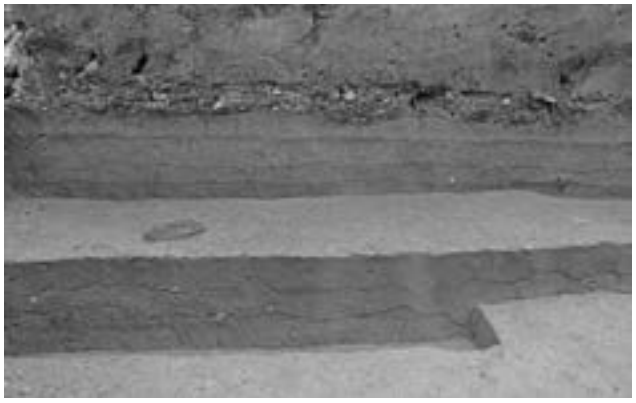
１．Ⅳ層中遺物出土状況（西から）

２．Ⅳ層中遺物出土状況（東から）

３．Ⅴ（Ⅵ層）層上面確認状況（北から）



４．調査区東壁断面



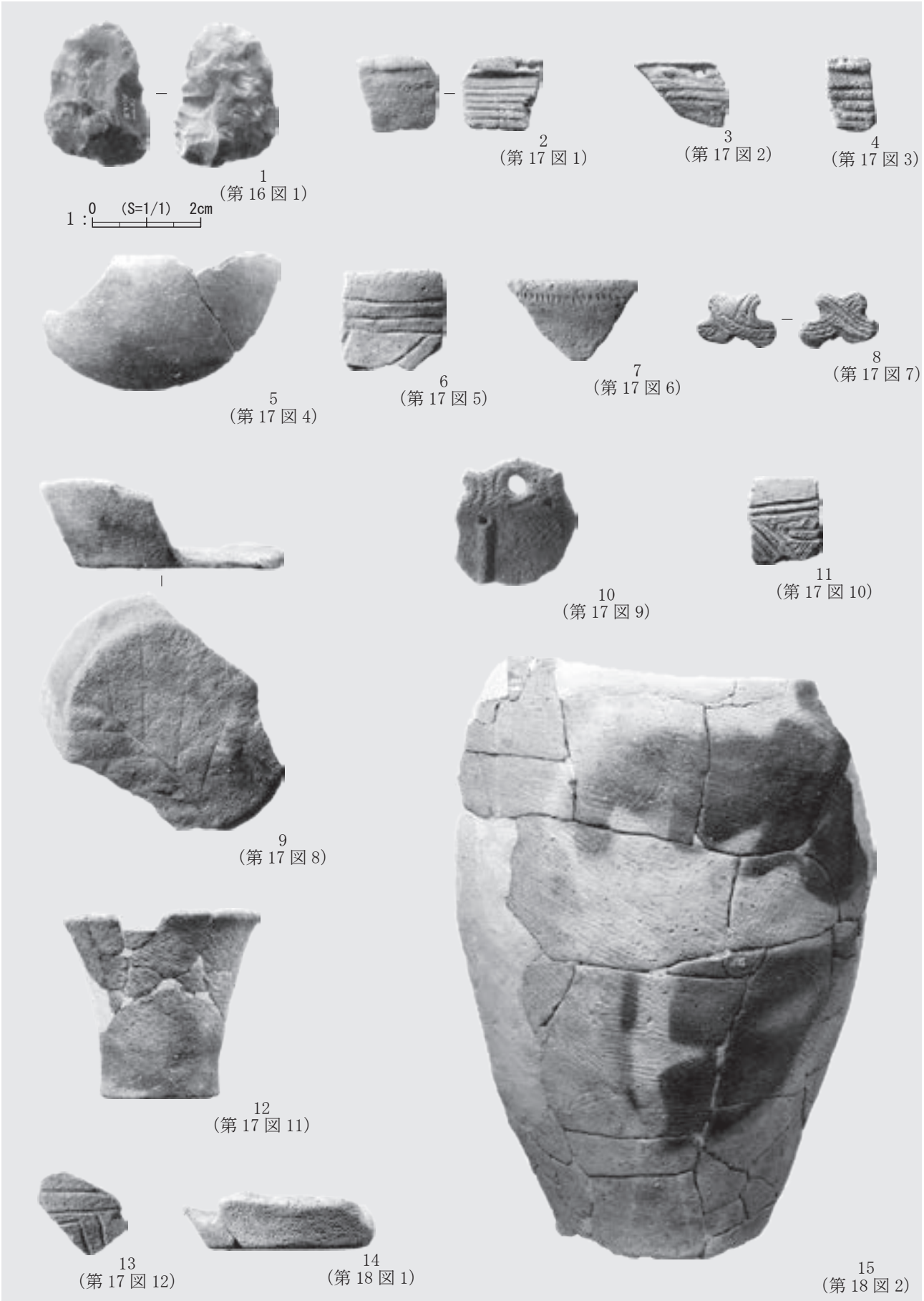
５．調査区南壁断面

６．調査区北壁断面

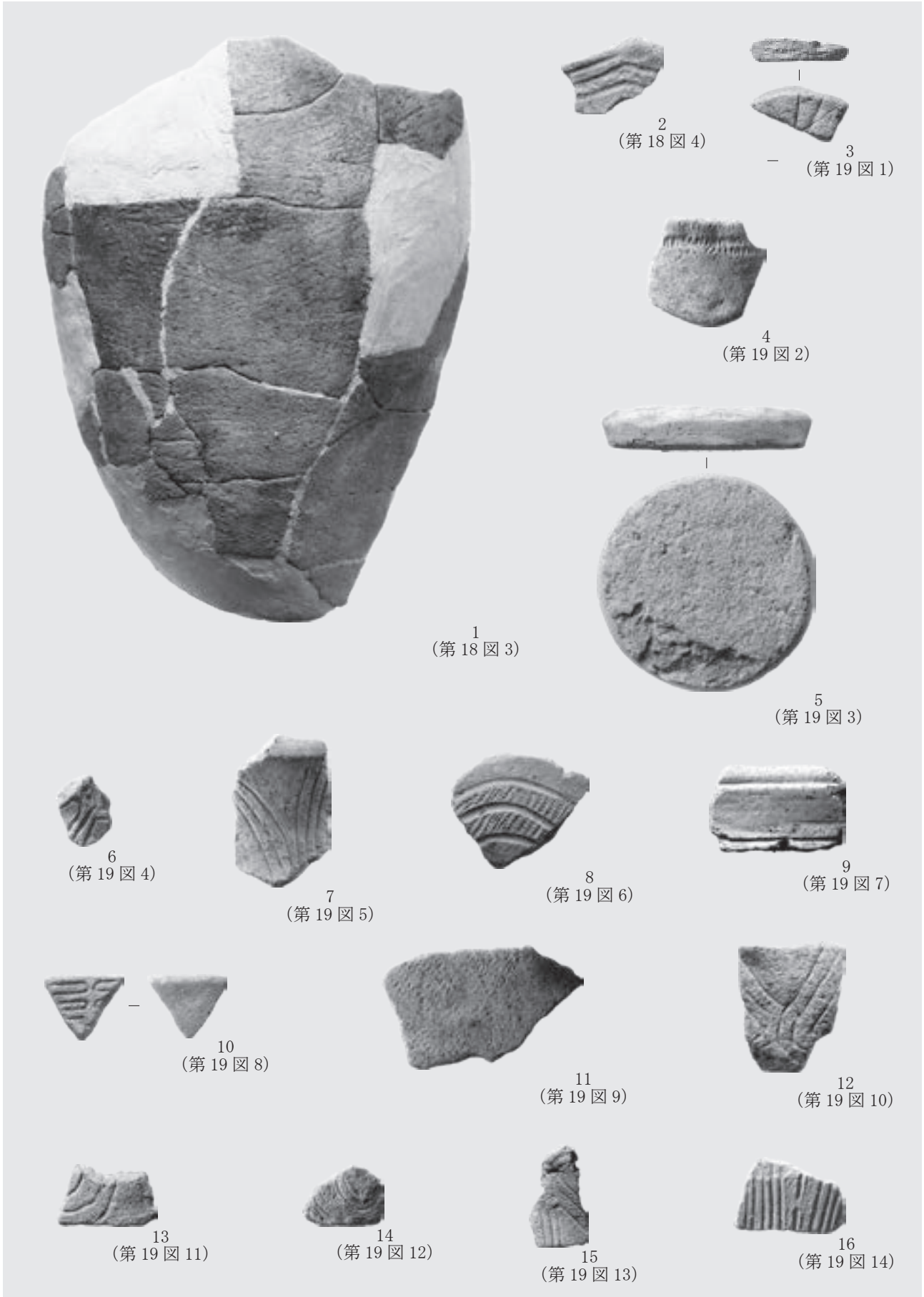
７．作業風景

８．下層調査風景（南から）

写真図版８　大野田遺跡第５次調査（５）



写真図版９　大野田遺跡第５次調査出土遺物（１）



写真図版 10　大野田遺跡第５次調査出土遺物（２）

1
（第 19 図 15）

2
（第 19 図 16）

3
（第 19 図 17）

4
（第 19 図 18）

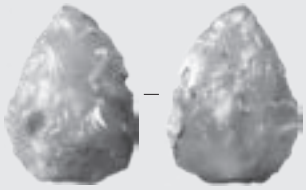
5
（第 19 図）

6
（第 20 図 1）

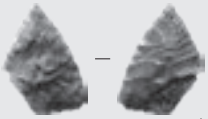
7
（第 20 図 2）

8
（第 20 図 3）

9
（第 20 図）

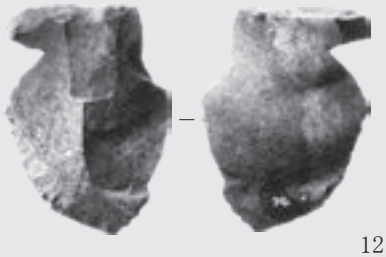


10
（第 20 図 4）



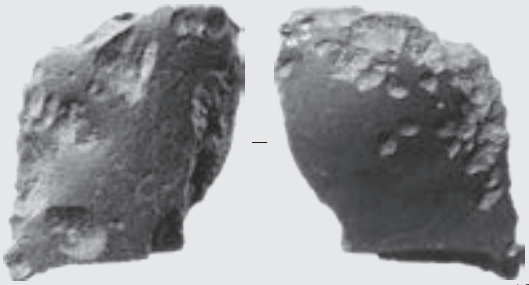
11
（第 20 図 5）

13
（第 20 図 7）



12
（第 20 図 6）

14
（第 20 図 8）



15
（第 20 図）

写真図版 11　大野田遺跡第５次調査出土遺物（３）

写真図版 12　大野田遺跡第５次調査出土遺物（４）

1
（第 23 図 1）

2
（第 23 図 2）

3
（第 23 図 3）

4
（第 23 図 4）

5
（第 23 図 5）

6
（第 23 図 6）

7
（第 23 図 7）

8
（第 23 図 8）

9
（第 23 図 9）

10
（第 23 図 10）

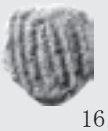
11
（第 23 図 11）

12
（第 23 図 12）

13
（第 23 図 13）

14
（第 23 図 14）

15
（第 23 図 15）


16
（第 23 図 16）

17
（第 23 図 17）

18
（第 23 図 18）

19
（第 23 図 19）

20
（第 23 図 20）

21
（第 23 図 21）

22
（第 23 図 22）

23
（第 23 図 23）

24
（第 23 図 24）

写真図版 13　大野田遺跡第５次調査出土遺物（５）

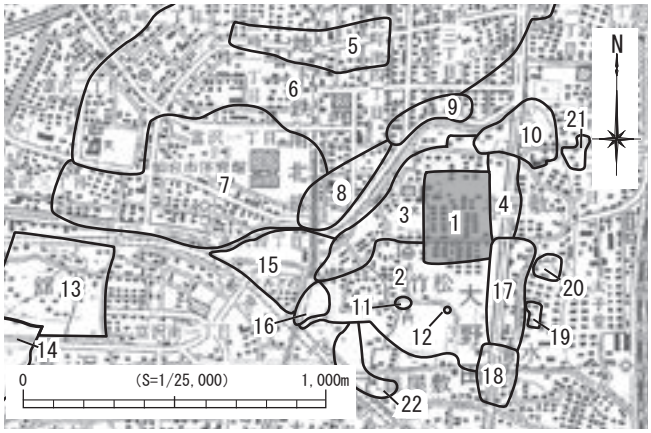
第４章　大野田官衙遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

大野田官衙遺跡は、宮城県仙台市太白区大野田に所在する。JR 仙台駅の南約 5.2 ㎞の名取川と笊川に挟まれた標高 10 ～ 12m の自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は、東西約 190m、南北約 260m である。

当遺跡は、平成 25 年度まで行われた富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査の中で発見された官衙遺跡であり、陸奥国府に関係した古代の役所である。これまでの調査で、６棟の掘立柱建物跡とそれを方形に囲む溝跡が確認されている。発見された掘立柱建物跡は、概ね真北を基準とする南北棟で２間×４間の総柱の掘立柱建物跡と、２間× 10 間の大型の掘立柱建物跡が東西に向かい合って配置されている。またその最も北側の建物の間の東西軸上に、東西２間の建物が配置されていることが確認されている。このように、遺跡の位置関係や建物の基準が真北で共通し、年代も７世紀末～８世紀初頭と推定されることから、遺跡の北東約 1.5 ㎞に所在する陸奥国府と推定される郡山Ⅱ期官衙との関係性が指摘されている。平成 21 年度にこれら官衙関連遺構が確認されている範囲が「大野田官衙遺跡」として登録された。

大野田官衙遺跡の周辺には元袋遺跡、袋前遺跡、大野田遺跡、大野田古墳群、王ノ壇遺跡、下ノ内遺跡、伊古田遺跡などが隣接して分布している。これまでの調査で縄文時代、古墳時代、古代の集落跡が確認され、さらに古墳時代の石棺墓や木棺墓、古墳、平安時代の水田跡、近世の屋敷跡も確認されている。



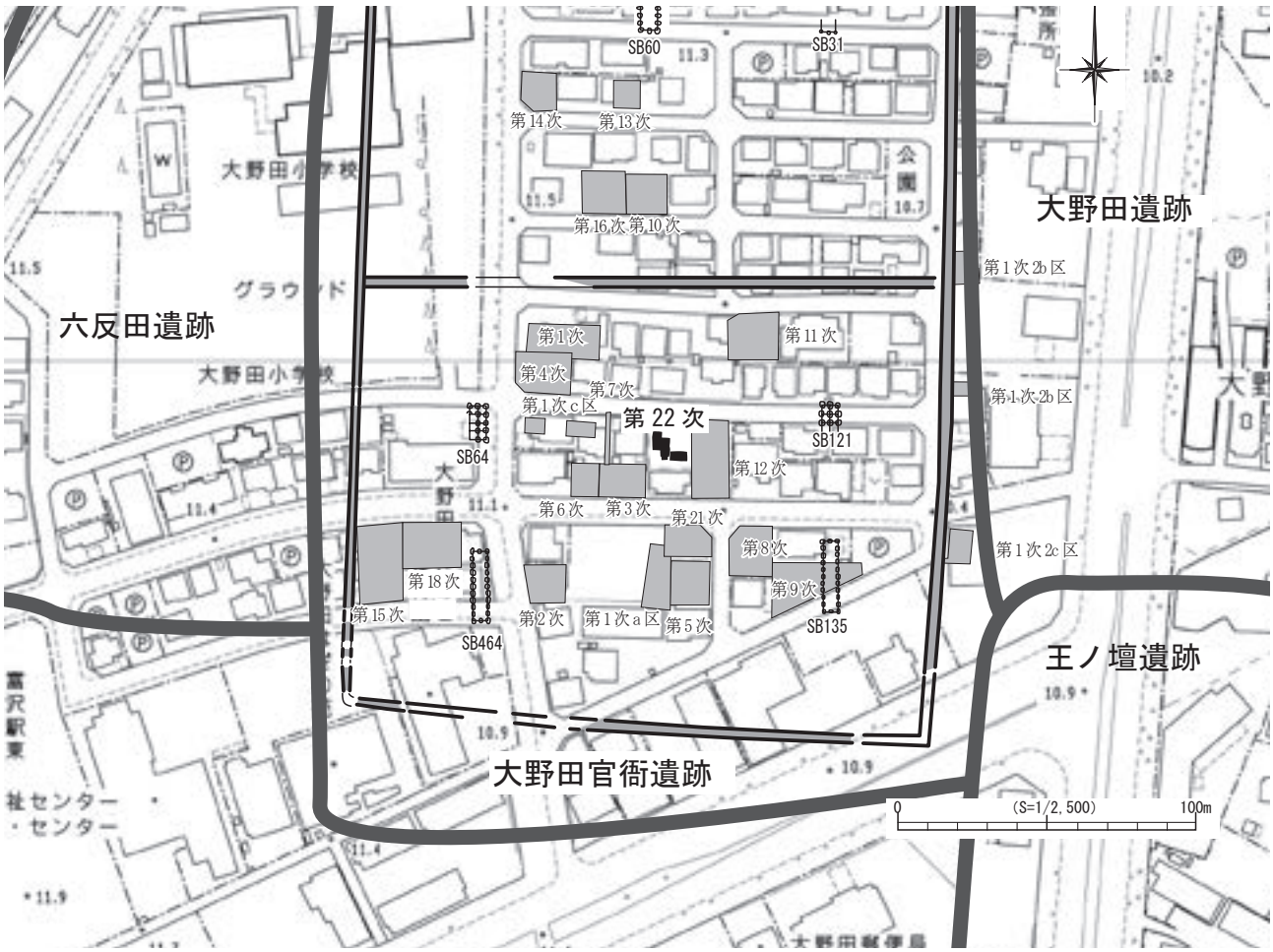
番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	大野田官衙遺跡	自然堤防	官衙跡	古墳～奈良
2	大野田古墳群	自然堤防	古墳・集落跡	縄文～中世
3	六反田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文（中～晩）～近世
4	大野田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文（後）・弥生（中）・古墳～平安
5	泉崎浦遺跡	自然堤防 後背湿地	水田跡・墓地	縄文（後）・弥生～古墳・平安
6	富沢遺跡	後背湿地	集落跡・水田跡・散布地	旧石器～近世
7	山口遺跡	自然堤防 後背湿地	集落跡・水田跡	縄文～平安
8	下ノ内浦遺跡	自然堤防	集落跡・墓跡・水田跡	縄文（早・前・後）～中世
9	袋東遺跡	自然堤防	包含地	古墳・平安
10	元袋遺跡	自然堤防	集落跡	奈良～平安
11	春日社古墳	自然堤防	古墳	古墳
12	鳥居塚古墳	自然堤防	古墳	古墳
13	富沢館跡	自然堤防 後背湿地	城館跡	戦国
14	鍛冶屋敷前遺跡	自然堤防	集落跡	縄文・奈良～中世
15	下ノ内遺跡	自然堤防	集落跡・墓跡	縄文（中～晩）～中世
16	伊古田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文～平安
17	王ノ壇遺跡	自然堤防	集落跡・屋敷跡	縄文（後）～中世
18	皿屋敷遺跡	集落跡・生産遺跡・屋敷跡・包含地	自然堤防	奈良～平安・中世
19	長町清水遺跡	古墳か	自然堤防	古墳か
20	北屋敷遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
21	新田遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
22	伊古田Ｂ遺跡	畑跡	自然堤防	古墳～平安

第 24 図　大野田官衙遺跡と周辺の遺跡

第２節　第 22 次調査

１．調査要項

遺　跡　名　　大野田官衙遺跡（01566））
調 査 地 点　　仙台市太白区大野田五丁目 16-15,16
調 査 期 間　　令和４年８月 23 日～ 26 日
調査対象面積　　140.70 ㎡
調 査 面 積　　約 57.0 ㎡
調 査 原 因　　共同住宅の新築工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員　　主任　堀江洋介
　　主事　須貝慎吾　　吉田　大

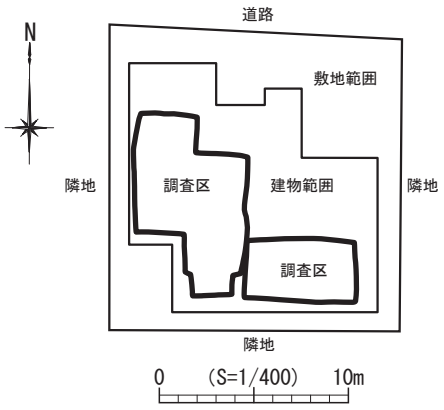


第 25 図　第 22 次調査区位置図

２．調査に至る経過と調査方法

今回の調査は令和４年４月 28 日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の取り扱いについて（協議）」（令和４年５月 10 日付 R4 教生文第 105-18 号で通知）に基づき実施した。

調査では建築範囲内の南東側に 1T として東西 6.0m ×南北 3.0m、北西側に 2T として東西 3.0m ×南北 6.0m の調査区を設定し、令和４年８月 23 日から調査に着手した。まず 1T を重機により盛土および Ⅰ 層を除去し、Ⅱ層（富沢駅周辺土地区画整理事業調査基本層Ⅴ層に相当）上面で遺構検出作業を行ったところ、ピット１基が検出された。次に 2T を 1T と同様に重機により盛土および Ⅰ 層を除去し、Ⅱ層上面で遺構検出作業を行ったところ、ピット１基と柱痕跡を伴う柱穴１基が検出された。この周囲に同規模の柱穴で構成された掘立柱建物の存在が想定されたため、東側に東西 3.0m ×南北 4.0m の規模で調査区の拡張をし、Ⅱ層上面で遺構検出作業を行ったところ、柱痕跡を伴う柱穴１基が検出された。掘立柱建物の柱の並びを確認するため、調査区の拡張部から南側に東西 3.0m ×南北 4.0m 程度さらに拡張し、基本層Ⅱ層上面で遺構確認作業を行ったところ、柱痕跡が確認される柱穴１基が検出された。令和４年８月 26 日までに調査区内の遺構の完掘および計測等を行い、野外調査を終了した。遺構の記録は、トータルステーションを用いて調査区の平面図（S=1/20）を、また必要に応じて各断面図（S=1/20）を作製し、一眼レフデジタルカメラにより記録写真の撮影を行った。



第 26 図　第 22 次調査区配置図

３．基本層序

今回の調査では、1T・2T ともに、盛土（層厚約 0.8 ～ 0.9m）の下に基本層を２層確認した。今回の遺構検出面であるⅡ層上面までの深さは約 1.1 ～ 1.2m である。

Ⅰ　層：10YR5/3 にぶい黄褐色粘土。炭化物、酸化鉄を斑状に含む。層厚は約４～８㎝である。盛土以前の水田の耕作土と考えられる。

Ⅱ　層：10YR4/4 褐色シルト。炭化物、酸化鉄を斑状に、土器片を少量含む。Ⅰ層の影響を受け、上面にマンガン粒・酸化鉄を多く含む。層厚は約 45 ㎝以上である。今回の調査の遺構検出面である。富沢駅周辺土地区画整理事業調査で確認された古代の遺構検出面であるⅤ層に対応する。

４．発見遺構と出土遺物

今回の調査では、1T のⅡ層上面でピット１基、2T で掘立柱建物跡１棟とピット１基が検出された。遺物は掘立柱建物跡から土師器片が 1 点出土した。

（１）掘立柱建物跡

SB1（第 27 図）

2T 南部に位置する。Ⅱ層上面で検出された。今回確認された柱穴は３基のみのため、桁行、梁行規模は不明であるが、建物の北東部にあたると推測される。柱間寸法は、SB1-P1 と SB1-P2 の間が 2.45m、SB1-P2 と SB1-P3 の間が 4.35m とばらつきがある。方位は南北軸で N-1.5° -W、東西軸で E-0° -S でほぼ真北方向を基調とする。柱穴の掘方の平面形状は隅丸長方形を基本とする。規模は長軸 104 ～ 115 ㎝、短軸 58 ～ 62 ㎝で、深さは 50 ～ 66 ㎝、柱痕跡は円形を呈し、直径 20 ～ 25 ㎝である。いずれの柱穴の掘方の埋土もⅡ層を埋め戻した土を主体としている。遺物は、SB1-P2 の掘方埋土から土師器片が１点出土した。

SB1-P1　（第 27 図）

2T 南部で検出された。平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸約 104 ㎝、短軸約 58 ㎝である。断面形状は逆台形を呈し、深さは約 50 ㎝である。直径約 25 ㎝の柱痕跡を伴う。柱痕跡は 10YR3/2 黒褐色粘土、掘方の埋土は 10YR4/4 褐色シルトである。

SB1-P2　（第 27 図）

2T 拡張部西部で検出された。平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸約 105 ㎝、短軸約 61 ㎝である。断面形状は逆台形を呈し、深さは約 65 ㎝である。直径約 24 ㎝の柱痕跡を伴う。柱痕跡は 10YR3/3 黒褐色粘土質シルト、掘方の埋土は 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトである。遺物は掘方の埋土から土師器片が１点出土した。

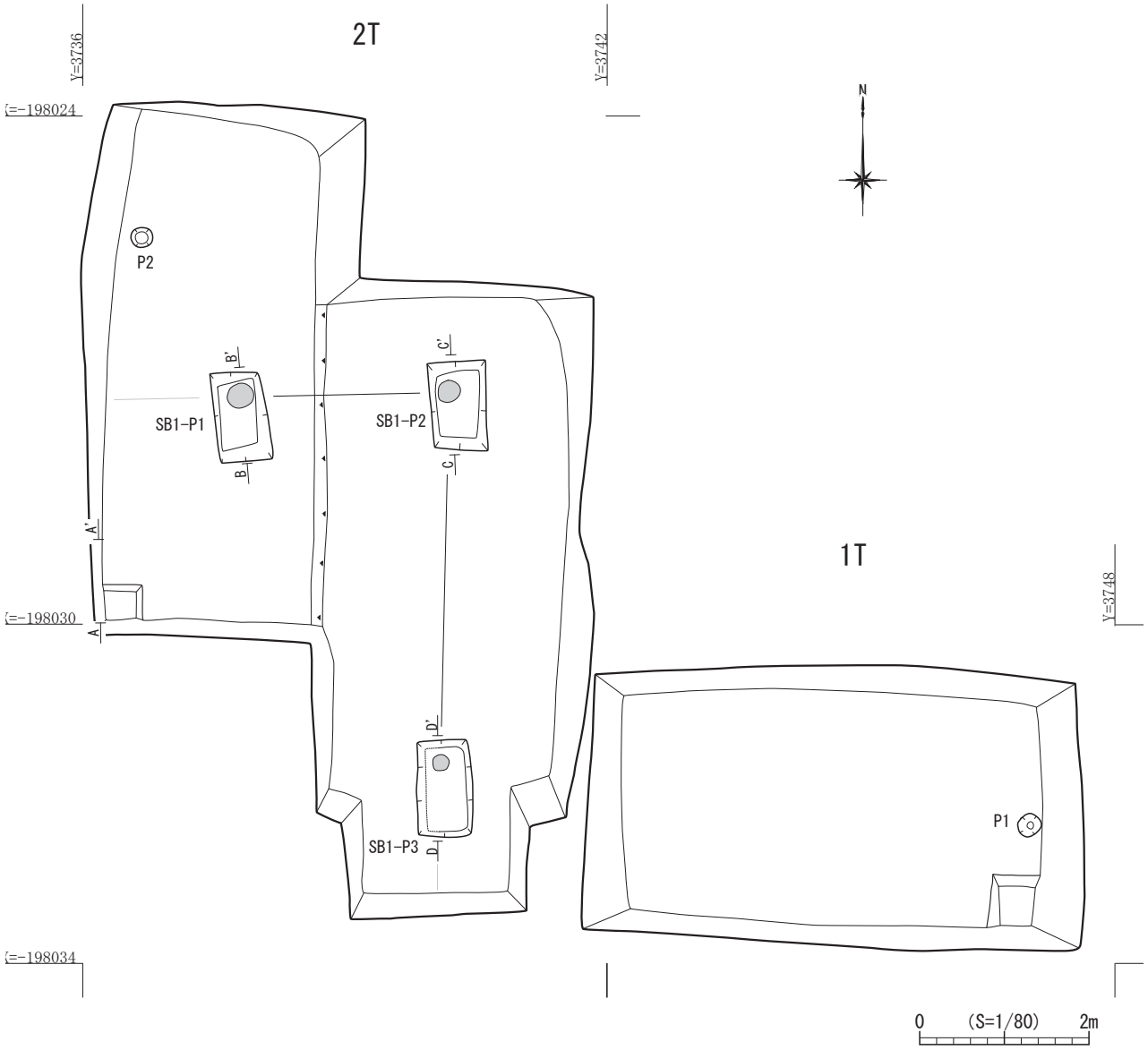
SB1-P3　（第 27 図）

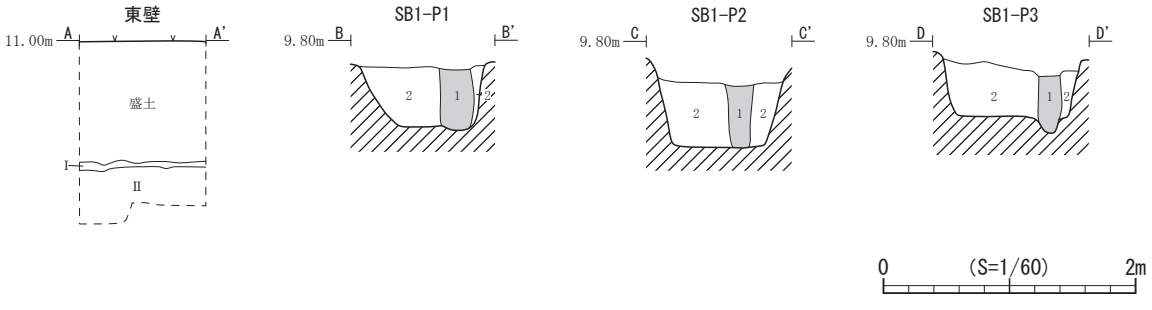
2T 拡張部南部で検出された。平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸約 115 ㎝、短軸約 62 ㎝である。断面形状は逆台形を呈し、深さは約 66 ㎝である。直径約 20 ㎝の柱痕跡を伴う。柱痕跡は 10YR3/2 黒褐色粘土、掘方の埋土は 10YR4/4 褐色シルトである。

（２）ピット

P1（第 27 図）

1T 東部で検出された。平面形状は円形を呈し、直径約 28 ㎝である。断面形状は U 字形を呈し、深さは約 27 ㎝





遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SB-P1	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	φ 0.5cm の礫を少量含む。
	2	10YR4/4 褐色	シルト	φ 1.5cm の礫、炭化物を少量含む。
SB-P2	1	10YR3/3 暗褐色	粘性シルト	φ 1cm の礫・炭化物を少量。
	2	2.5Y4/3 オリーブ褐色	シルト	φ 3cm の礫、炭化物を少量。土師器片を含む。
SB-P3	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	φ 3cm の礫・炭化物少量含む。
	2	10YR4/4 褐色	シルト	φ 0.5 ～ 6cm の礫、炭化物少量含む。

第 27 図　第 22 次調査区平面・断面図

である。堆積土は単層で、10YR4/2 灰黄褐色粘性シルトである。遺物は出土していない。

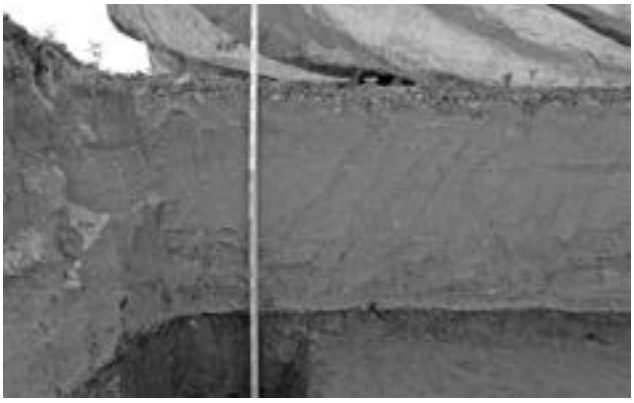
P2（第 27 図）

2T 北部で検出された。平面形状は円形を呈し、直径約 25 ㎝である。断面形状はＵ字形を呈し、深さは約 10 ㎝である。堆積土は単層で、10YR4/2 灰黄褐色粘性シルトである。遺物は出土していない。

５．まとめ

今回の調査地点は、大野田官衙遺跡の南側に位置する。周辺では平成 13 ～ 21 年度に本発掘調査が行われており、掘立柱建物跡６棟、区画溝が確認されている。今回の調査では、遺構検出面であるⅡ層から、掘立柱建物跡１棟、ピット２基が検出された。SB1 掘立柱建物跡は、既に確認されている周辺の６棟の掘立柱建物跡の建物と同様に真北を基調としていることから、同時期の掘立柱建物の可能性があるが、SB1-P2 と SB1-P3 の柱間が 4.35m と他よりも空くことから、一連の建物であると判断するにはさらに検討が必要である。

１．１トレンチ遺構検出状況（西から）



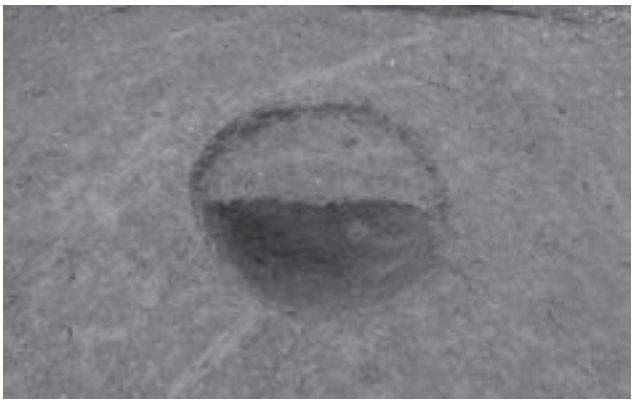
２．１トレンチ南壁断面（北から）

３．P1 土層断面（北から）

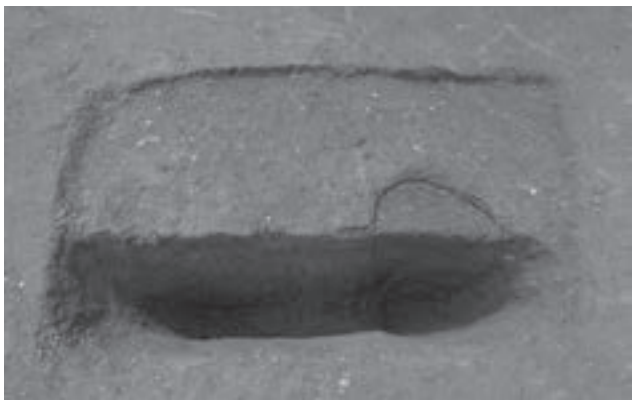
４．２トレンチ拡張前遺構検出状況（北から）

写真図版 14　大野田官衙遺跡第 22 次調査（１）

１．２トレンチ西壁断面（東側から）

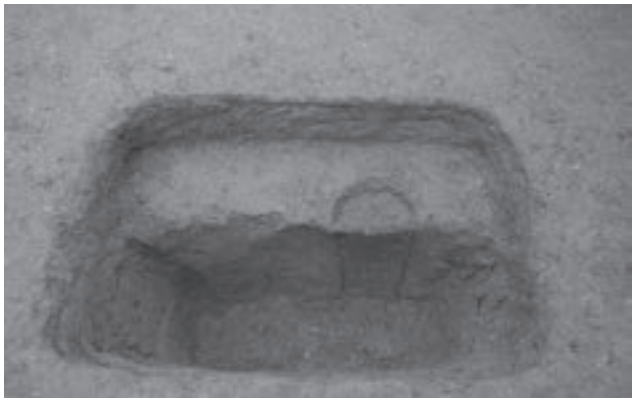


２．P2 土層断面（東から）



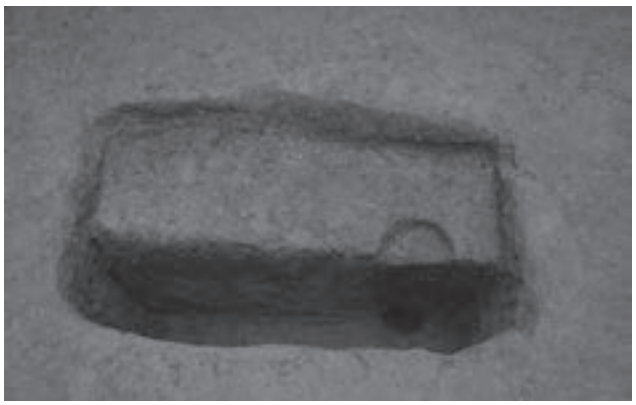
３．SB1-P1 土層断面（東から）

４．SB1-P1 土層断面（東から）



５．SB1-P2 土層断面（東から）

６．２トレンチ南側拡張部遺構検出状況（北東から）



７．SB1-P3 土層断面（東から）

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）		
						口径	底径	器高
－	C-1	SB1-P2	2	土師器	鉢？	－	－	－

外面	内面	備考	写真図版
－	－		15-8

８．大野田官衙遺跡第 22 次調査出土遺物

写真図版 15　大野田官衙遺跡第 22 次調査（２）・出土遺物

第５章　郡山遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

郡山遺跡は仙台市太白区郡山二～六丁目に所在する。北は広瀬川、南は名取川に挟まれ、河川の合流点から北に約２km に位置する。遺跡の範囲は東西 800m、南北 900m で面積は約 60ha に及んでおり、その一部は平成 18 年に「仙台郡山官衙遺跡群 郡山官衙遺跡 郡山廃寺跡」として国史跡に指定されている。

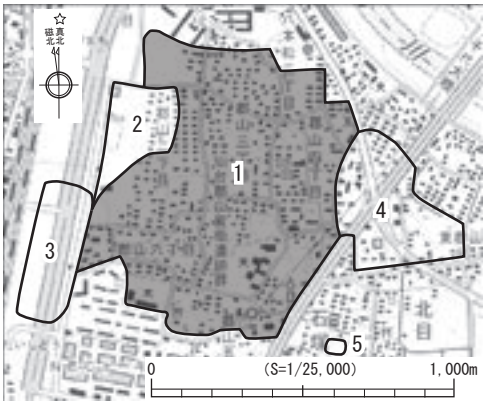
遺跡は、昭和 54(1979) 年に初めて発掘調査が行われて以来、継続的な調査が行われ、大きくⅠ期官衙とⅡ期官衙の２時期の変遷が確認される。Ⅰ期官衙は７世紀中頃から後半にかけて機能した陸奥国の拠点となる城柵跡と考えられる。その後Ⅰ期官衙を取り壊し、Ⅱ期官衙が造営される。Ⅱ期官衙は周囲を材木列と二重の溝によって囲われた方四町Ⅱ期官衙や、その南方には長大な建物が建ち並ぶ南方官衙地区や郡山廃寺等が造営される。Ⅱ期官衙は７世紀末から８世紀初頭にかけて造営された、多賀城創建以前の陸奥国府と考えられている。

遺跡西側は長町駅東遺跡と西台畑遺跡と接している。両遺跡では７世紀から８世紀前葉にかけての竪穴住居跡が 500 軒以上発見されており、郡山遺跡と関係する集落跡と考えられる。また、南西約 1.5km には方形に区画された溝跡内に大型の掘立柱建物跡が規則的に配置される大野田官衙遺跡があり、遺構の時期や規模から、郡山遺跡Ⅱ期官衙との関係性が考えられている。

第２節　第 320 次調査

１．調査要項

遺　跡　名	郡山遺跡（宮城県遺跡登録番号　01003）
調 査 地 点	仙台市太白区郡山三丁目地内
調 査 期 間	令和４年６月 20 日～９月 30 日
調査対象面積	313.4 ㎡（敷地面積：626.6 ㎡）
調 査 面 積	230 ㎡（１区：140 ㎡、２区：90 ㎡）
調 査 原 因	共同住宅建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課
担 当 職 員	主査　菅原翔太　　主任　堀江洋介
	主事　妹尾一樹　　吉田　大



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
2	西台畑遺跡	集落跡、甕棺墓	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
3	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生、古墳、古代
4	北目城跡	城館跡、集落跡、水田跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、近世
5	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代

第 28 図　郡山遺跡と周辺の遺跡

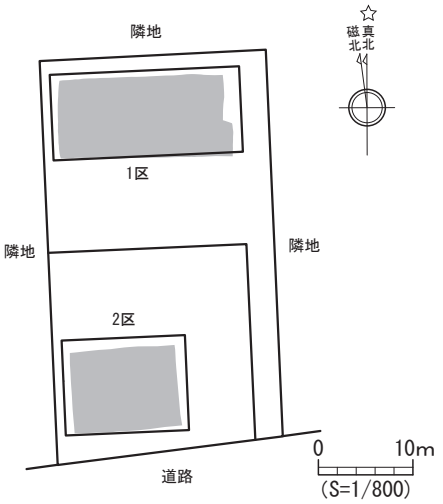
２．調査に至る経過と調査方法

調査は共同住宅建築工事に伴い、令和４年３月 22 日付で申請者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和４年３月 25 日付 R3 教生文第 109-161 号で通知）に基づき発掘調査を実施した。

調査は令和４年６月 20 日に１区から着手し、建築予定範囲内に南北 8m、東西 17m の規模で調査区を設定した。重機により盛土およびⅠ～Ⅲｂ層を除去し、Ⅳ層上面（GL-0.８～１m）で遺構検出作業を行ったところ、竪穴住居跡、掘立柱建物跡等が検出された。８月 17 日に竪穴住居跡（SI2621）の規模確認のため、調査区南東部を一部拡張し、SI2621 竪穴住居跡の部分を除き１区の埋め戻しを行った。続いて８月 22 日に２区の調査に着手した。２区では建築予定範囲内に南北 8m、東西 11m の規模で調査区を設定し、重機により盛土およびⅠ～Ⅲｂ層を除去し、Ⅳ層上面（GL-0.8m）で遺構検出作業を行ったところ、竪穴住居跡や掘立柱建物跡等が検出された。

第 29 図　第 320 次調査区位置図

調査では必要に応じて平面・断面図（S=1/20）を作製し、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。９月 30 日にすべての作業を終え現場の引き渡しを行い、調査を終了した。



第 30 図　第 320 次調査区配置図

３．基本層序

基本層を大別４層、細別９層確認した。Ⅰ～Ⅱ層は現代の耕作土、Ⅲ層は旧表土と考えられる。Ⅳ層上面で遺構検出を行ったが、Ⅲ層上面が古代の遺構検出面である。Ⅲ層上面までの深さは約 0.7m である。

Ⅰａ層：10YR5/6 黄褐色シルト質粘土。小礫、砂を含む。現表土で樹木根により乱されている。

Ⅰｂ層：10YR4/4 褐色シルト質粘土。小礫とシルトブロックを含み、全体的に乱れている。グライ化している。

Ⅰｃ層：10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。小礫、砂を含む。２区で確認された。

Ⅰｄ層：10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。下層のⅡａ、Ⅱｂ層が撹拌された層であり、２区で確認された。

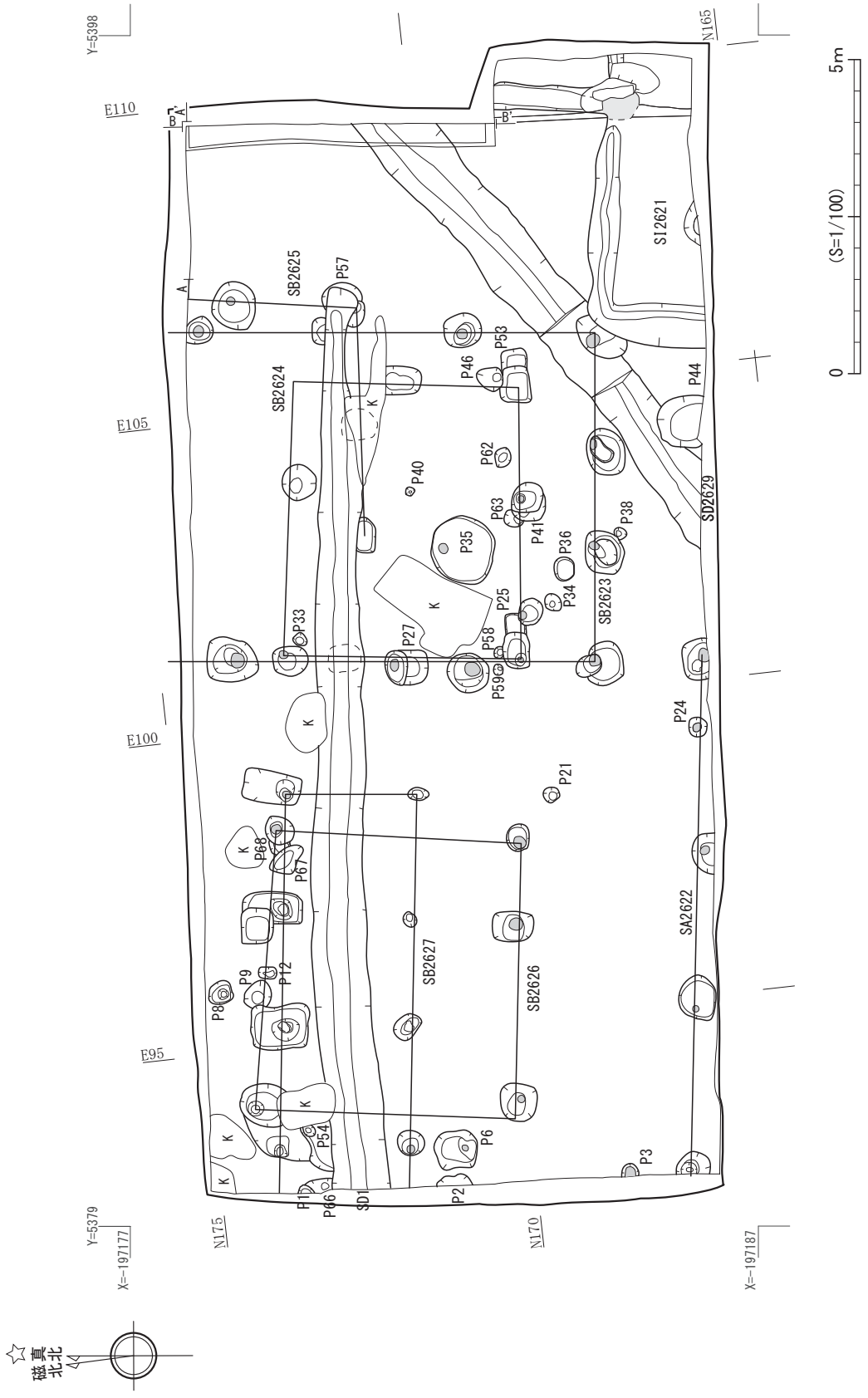
Ⅱａ層：10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。細砂を含み、10YR 粘土粒を含む。旧耕作土と考えられる。

Ⅱｂ層：10YR6/8 明黄褐色粘土質シルト。細砂を含み、10YR4/3 粘土をブロック状に含んでいる。旧耕作土と考えられる。

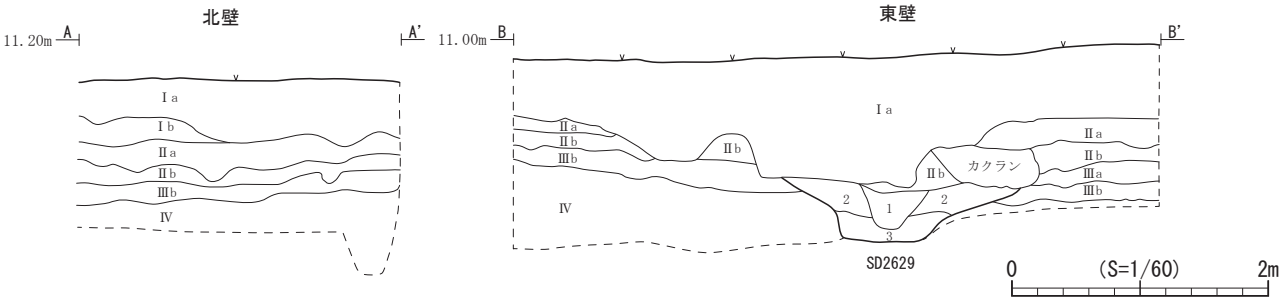
Ⅲａ層：10YR4/2 灰黄褐色粘土。10YR5/6 粘土粒を含んでいる。１区東側でのみ確認された。

Ⅲｂ層：10YR3/2 黒褐色粘土。10YR5/6 粘土粒を含む。１・２区ともに西から東へ向かって傾斜している。旧表土と推定され、本来の遺構検出面と考えられる。

Ⅳ　層：10YR6/6 明黄褐色粘土。植物由来と推定される 10YR4/3 粘土を斑状に含んでいる。２区の西側ではグライ化が顕著である。本調査での遺構確認面である。



第 31 図　第 320 次 1 区調査区平面図



部位	層位	色調	土質	備考・混入物
基本層	Ⅰa	10YR5/6 黄褐色	シルト質粘土	小礫、砂粒含む。現表土。
	Ⅰb	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	小礫、10YR5/6 シルト含む。
	Ⅱa	10YR3 /2 黒褐色	粘土質シルト	10YR 粘土粒含む。細砂含む。
	Ⅱb	10YR6/8 明黄褐色	粘土質シルト	10YR4/3 粘土含む。細砂含む。

部位	層位	色調	土質	備考・混入物
基本層	Ⅲa	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR5/6 粘土粒含む。
	Ⅲb	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR5/6 粘土粒含む。
	Ⅳ	10YR6/6 明黄褐色	粘土	10YR4/3 粘土を斑に含む。

第 32 図　第 320 次 1 区調査区断面図

４．発見遺構と出土遺物

竪穴住居跡３軒、柱列跡１列、掘立柱建物跡６棟、溝跡２条、ピット 51 基が検出された。遺物は土師器片、須恵器片、瓦、石製品、金属製品が出土した。

【１区】

（１）竪穴住居跡

SI2621 竪穴住居跡（第 31・33 図）

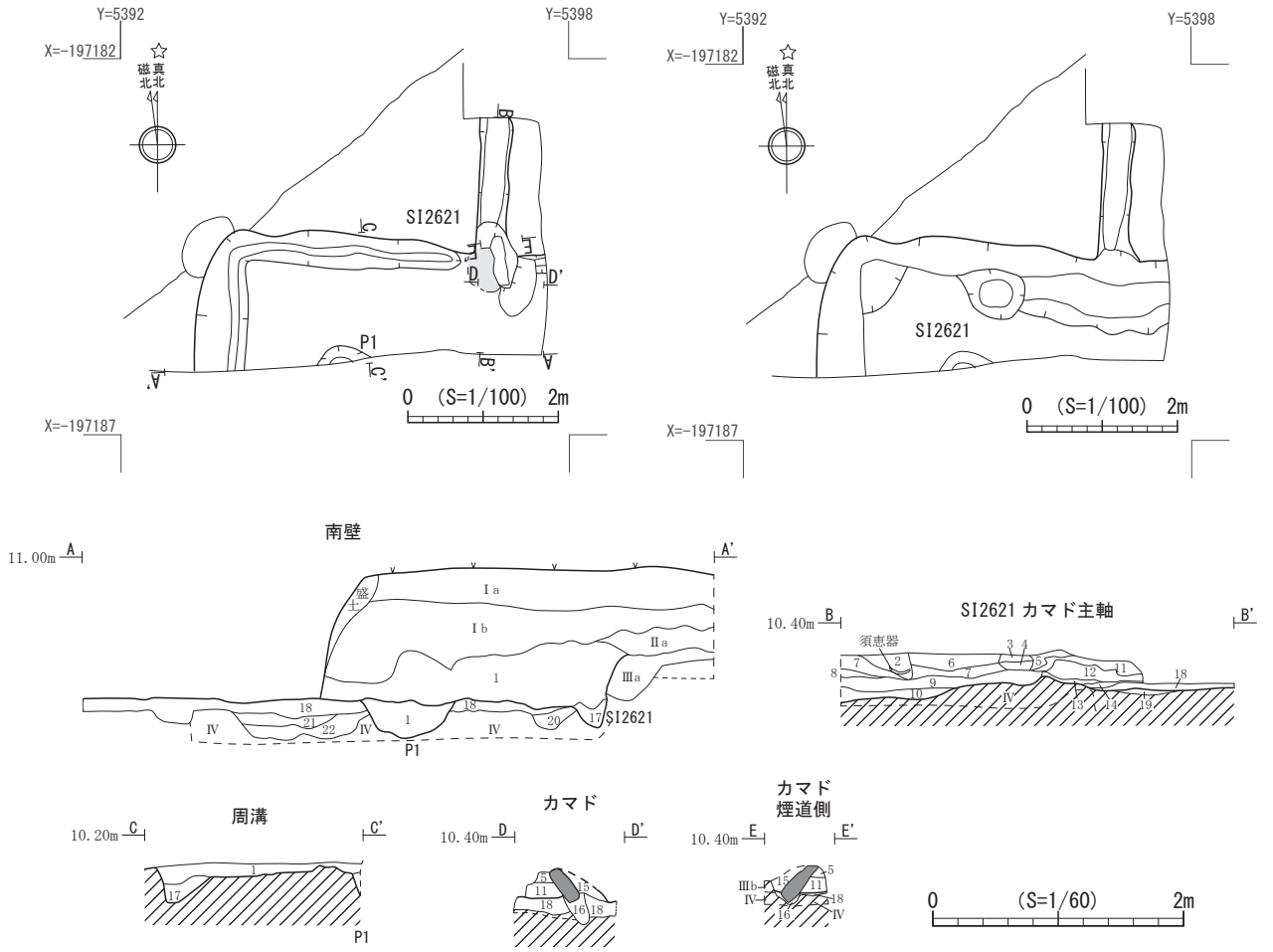
調査区南東部で検出された。北辺長 4.7m 以上、東辺長 2.1m 以上の竪穴住居跡で、調査区南東へ続いている。SB2623 掘立柱建物跡、SD2629 溝跡より新しい。

方向はカマド主軸を基準としてN-5.5° -E でやや東傾している。堆積土は22層に分層され、１層が住居内堆積土、２～ 10 層が煙道、11･12 層がカマド崩落土、13・14 層が燃焼部、15・16 層がカマド構築土、17 層が周溝、18 ～ 22 層が掘方埋土である。壁面は直立気味に立ち上がり、残存する壁高は 36cm を測る。18 層上面が床面で、部分的に貼り床の可能性がある白色粘土がみられるが、西側は削平を受けており、詳細は不明である。また、カマド付近では床面直上で炭化物の分布が認められた。

床面施設としては、主柱穴と考えられる P1 が検出されたが調査区端に位置しているため全容は不明である。直径 80cm 以上、深さ 28cm 以上の規模である。周溝はカマド周辺をのぞき確認された。幅 30cm 前後で、深さ 22cm の規模であり、断面形はＵ字形を呈する。カマドの東部では一部、東袖の下部まで周溝が巡っており、周溝として掘り込んだ後に、部分的に埋め戻してカマドを構築している。カマドは北壁で検出した。壁際から奥壁に向かって張り出しており、東袖のみ確認している。カマド袖部では長辺 54cm、短辺 11cm、厚さ 30cm の切石凝灰岩が掘方を伴い敷設されており、内側は燃焼部と接している。切石凝灰岩はカマド天井に向けて狭まるように傾けて設置されている。また、外側を粘土で充填する形でカマドが構築されており、構築土には一部白色粘土が含まれている。規模は長さ 126cm、幅 58cm、高さ 23cm を測り、確認された燃焼部は幅 22cm 以上、奥行 58cm であり、煙道部の長さは 154cm 以上、幅 38 ～ 42cm、深さ 23 ～ 38cm である。

掘方底面は全体的に不規則な凹凸状に掘り込まれており、一部ピット状の掘り込みが認められる。また、カマド付近では一段低く掘り下げられている。

遺物は土師器片 97 点、須恵器片 13 点、石製品３点、平瓦１点、鉄滓（てっさい）が出土した（第 34 図）。土師器はいずれも非ロクロ調整のもので坏、鉢、甕が出土している。１は外傾する鉢形状の器形で、内側の口縁部周辺は薄く作り出されている。また内面は坏と同様にヘラミガキ、黒色処理が施される。２～４は甕であり、２は胴張り形、３は長胴形の器形と考えられる。体部調整はヘラナデ（２）、ハケメ（３）が認められる。須恵器は坏、甕が出土して



部位	層位	色調	土質	備考・混入物
SI2621	1	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	焼土粒、炭化粒を少量含む。
	2	10YR6/6 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒、焼土粒含む。
	3	10YR6/6 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒、焼土粒、凝灰岩粒含む。
	4	10YR3/4 暗褐色	粘土	10YR6/6 粘土粒、焼土粒含む。
	5	5YR3/6 暗赤褐色	粘土	焼土ブロック多量に含む。
	6	10YR6/8 明黄褐色	粘土	焼土ブロック斑状に含む。
	7	5YR3/2 暗赤褐色	粘土質シルト	焼土ブロック斑状に含む。
	8	10YR2/1 黒色	粘土	炭化粒を多量に含む。
	9	10YR5/6 明赤褐色	粘土	10YR4/4 粘土斑状に含む。
	10	10YR3/1 黒褐色	粘土	炭化物、10YR4/4 粘土斑状に含む。
	11	10YR4/4 褐色	粘土	焼土粒含む。
	12	5YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	焼土ブロック多量に含む。

部位	層位	色調	土質	備考・混入物
SI2621	13	10YR3/4 暗褐色	粘土	炭化物が下層に集積。
	14	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	炭化物を多量に含む。
	15	10YR6/1 褐灰色	粘土	10YR6/8 粘土少量含む。
	16	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒斑状に含む。一部 10YR5/3 に変色する。
	17	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	10YR5/6 粘土粒を斑状に含む。
	18	10YR4/4 褐色	粘土	10YR3 /2 粘土粒を含む。しまりが強い。
	19	10YR4/1 褐灰色	粘土	10YR6/8 粘土少量含む。
	20	10YR4/4 褐色	粘土	10YR3/2 粘土粒を含む。
	21	10YR3 /2 黒褐色	粘土	10YR4/4 粘土斑状に含む。
	22	10YR3 /2 黒褐色	粘土	10YR4/4 粘土粒少量含む。
SI2621 -P1	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土少量含む。主柱穴。

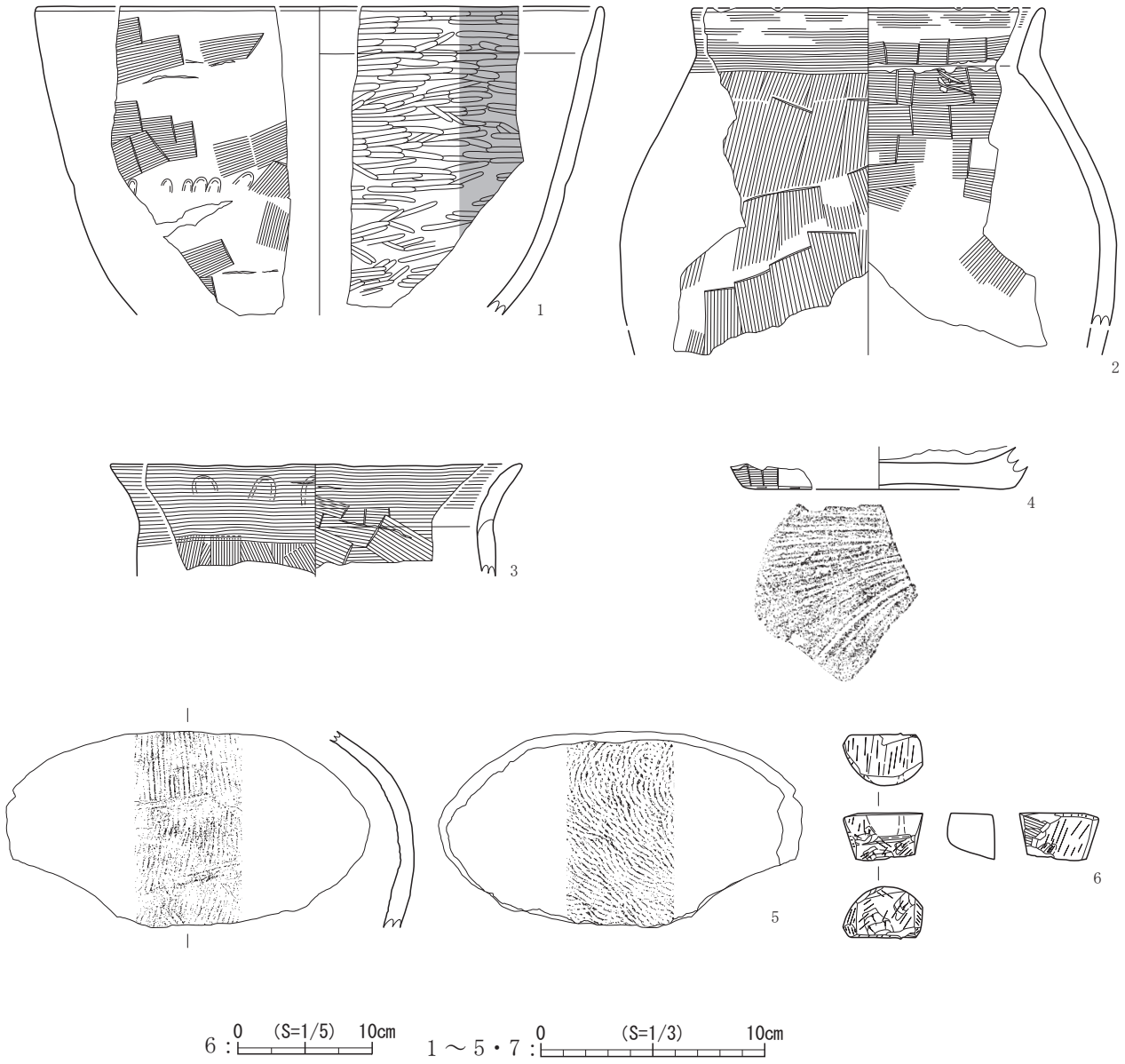
第 33 図　SI2621 竪穴住居跡平面・断面図

いる。６は須恵器の甕の体部である。煙道崩落土から出土しており、色調は橙色を呈している。７は用途不明の石製品である。何らかの未製品と考えられ、半円状に粗成形されており、各面は平滑に整えられ、比較的細かい擦痕が観察される。その他、小玉石が２点（写真図版 19- ８・９）、精錬滓（写真図版 19-10）、スサ抜け痕の認められる用途不明の土製品（写真図版 19-11）が出土している。

（２）柱列跡

SA2622 柱列跡（第 31・35 図）

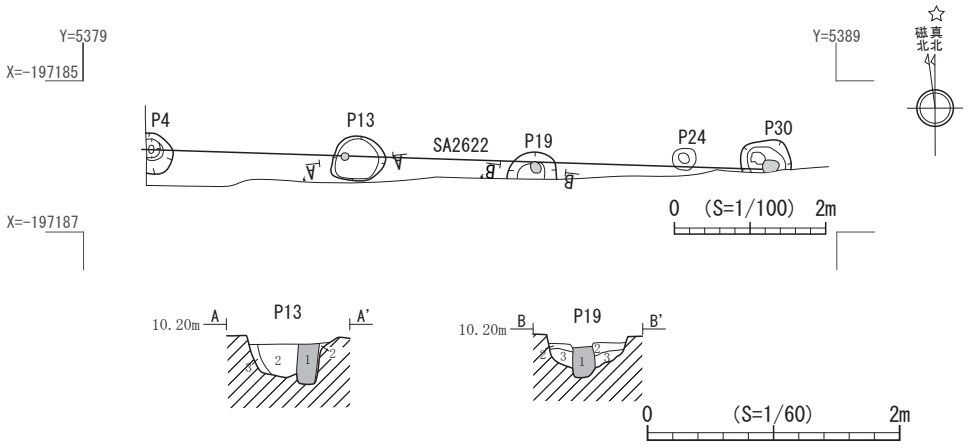
調査区の南西部で検出された。掘方は一辺約 60 ～ 70cm の不整方形を呈し、深さは約 25 ～ 32cm、柱痕跡が直径約 15cm の柱穴で構成される。P4・13・19・30 の４基が確認され、P30 の底面には平坦な礫が据えられていた。方向は E-2.0° -S で、検出長は 9.3m（柱間寸法 254 ～ 310cm）である。調査区外南西に展開する掘立柱建物跡の北側柱列である可能性もある。遺物は土師器 15 点、須恵器３点が出土しているが細片であるため掲載できなかった。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-2	SI2621	床面	非ロクロ土師器	鉢	(25.2)	－	(13.8)	ヘラナデ 指オサエ	ヘラミガキ 黒色処理		19-1
2	C-1	SI2621	－	非ロクロ土師器	甕	(15.6)	－	(6.5)	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ		19-2
3	C-3	SI2621 煙道	－	非ロクロ土師器	甕	(18.4)	－	(5.0)	口：指オサエ→ヨコナデ 体：ハケメ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ		19-3
4	C-4	SI2621	－	非ロクロ土師器	甕	－	(11.2)	(1.9)	体下：ヘラナデ→ヘラケズリ 底：ヘラケズリ	静止糸切り		19-4
5	E-8	SI2621 煙道	－	須恵器	甕	－	－	(14.6)	体：平行タタキ目	体：青海波文		19-5

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
6	K-2	SI2621 煙道	－	石製品	用途不明	2.3	3.6	2.1	安山岩？ スリ面 工具痕あり 未製品？ 重さ 18.8g	19-6
－	K-1	SI2621	掘方埋土	礫石器	磨石	17.8	13.0	4.1	安山岩？ スリ面 1 焼ケハジケ 重さ 1500g	19-7
－	K-9	SI2621	掘方埋土	石製品	小玉石	1.5	1.3	0.5	黒色 重さ 1.5g	19-8
－	K-10	SI2621	掘方埋土	石製品	小玉石	1.4	1.1	0.6	白色 重さ 1.5g	19-9
－	N-1	SI2621	堆積土	鉄製品	精錬滓	－	－	－	重さ 8.9g	19-10
－	P-1	SI2621	堆積土	土製品	不明	－	－	－	スサ抜け 受熱により赤色化 重さ 12.6g	19-11

第 34 図　SI2621 竪穴住居跡出土遺物



部位	層位	色調	土質	備考・混入物
P13	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	ほぼ均質。柱痕跡。
	2	10YR4/4 褐色	粘土	10YR3/1 粘土斑状に含む。
	3	10YR4/4 褐色	粘土	10YR3/1 粘土少量含む。

部位	層位	色調	土質	備考・混入物
P19	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒微量に含む。柱痕跡。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	3	10YR5/6 黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。

第 35 図　SA2622 柱列跡平面・断面図

（３）掘立柱建物跡

SB2623 掘立柱建物跡（第 31・36 図）

調査区の東側で検出された。桁行 4 間以上、総長 7.2m 以上（柱間寸法 208 ～ 235cm）、梁行３間、総長 5.8m（柱間寸法 184 ～ 209cm）の南北棟建物跡で、SD2629 より新しく、SI2621、SD2628 溝跡より古い。西桁行を基準とした方向は N-0° -E である。P26・28・29・31・37・43・48・50・52・53 で構成される。柱穴掘方は一辺 42 ～ 98cm の円形または隅丸方形を呈し、深さは 16 ～ 43cm で、柱痕跡は P50 以外で確認された。直径は約 20cm である。また、P29・37・43 で柱の抜き取り穴が確認された。遺物は土師器４点が出土している。

SB2624 掘立柱建物跡（第 31・36 図）

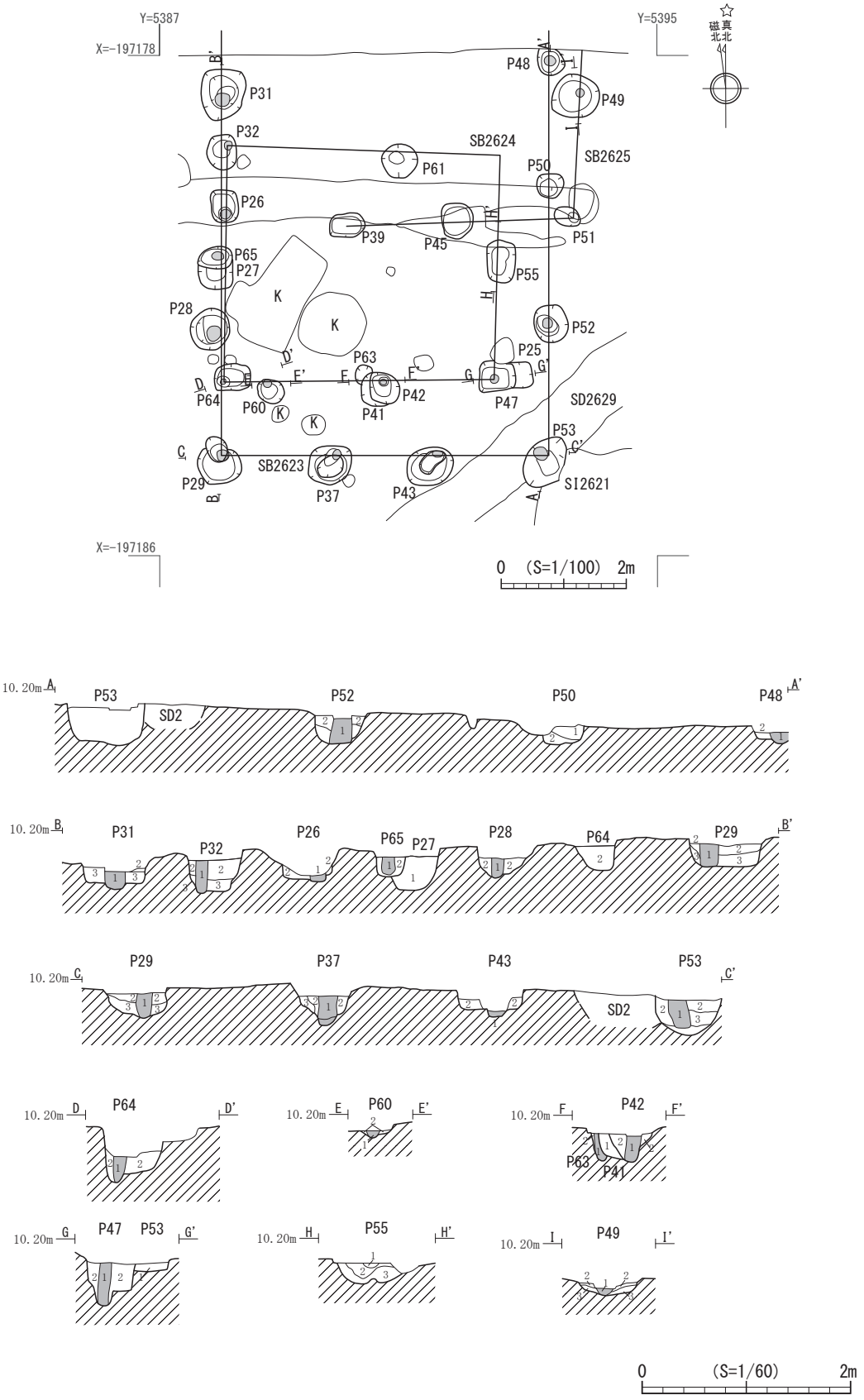
調査区の東側で検出された。桁行２間、総長５m（柱間寸法 288 cm）、梁行２間、総長 4.3m（柱間寸法 200 ～ 225cm）の側柱建物跡で、P27･58･61･63 より新しく、P46 より古い。西桁行を基準とした方向は N-1.0° -E である。P32・42・47・55・61・64・65 で構成され、北東隅は確認されなかった。柱穴掘方は一辺 41 ～ 73cm の円形または不整方形を呈し、深さは 32 ～ 44cm である。柱痕跡は P32・42・64・65 で検出され、直径は 12 ～ 20cm である。遺物は土師器 16 点が出土している。

SB2625 掘立柱建物跡（第 31・36 図）

調査区の北東側で検出された。桁行１間以上、総長 2.2m 以上、梁行２間、総長 4.1m の建物跡で、SD2628 溝跡および P57 より古い。桁行を基準とした方位は N-3.0° -E である。P39･45･49･51 で構成され、L 字状に結ばれる。柱穴掘方は一辺 42 ～ 75cm の円形または不整方形を呈し、深さは約 20cm である。柱痕跡は P49 で検出され、直径は 11cm である。遺物は出土していない。

SB2626 掘立柱建物跡（第 31・37 図）

調査区の西側で検出された。桁行３間、総長 8.1m 以上（柱間寸法 151 cm）、梁行１間、総長 4.3m の建物跡で、SB2627 掘立柱建物跡より新しい。南桁行を基準とした方位は E-0° -S である。P7・14・17・18・22 で構成される。柱穴掘方は一辺 41 ～ 75cm の円形または不整方形を呈し、深さは 24 ～ 64cm である。柱痕跡は直径 15 ～ 18cm である。遺物は土師器７点、須恵器１点が出土している。

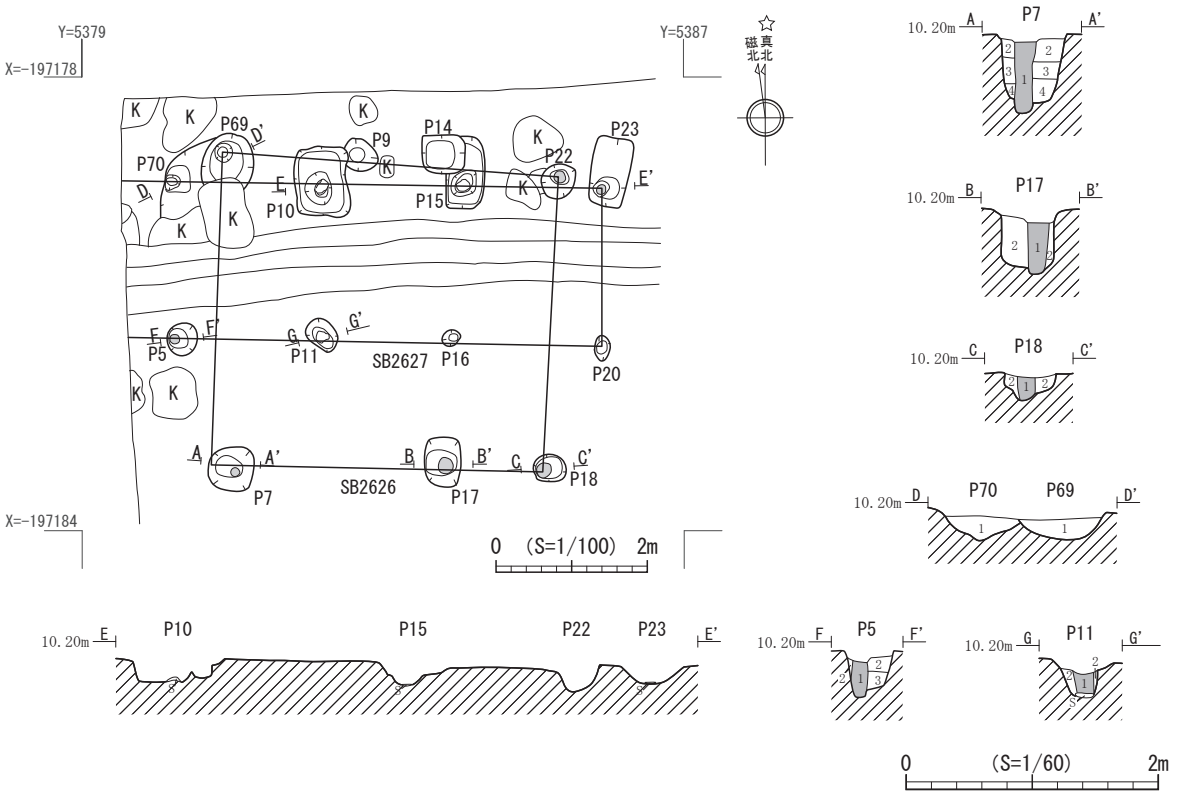


第 36 図　SB2623・2624・2625 掘立柱建物跡平面・断面図

表３　SB2623・2624・2625 掘立柱建物跡土層注記

部位	層位	色調	土質	備考・混入物
P52	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒、炭化物少量含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。炭化物少量含む。
P50	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。
	2	10YR5 /8 黄褐色	粘土	10YR4 /2 粘土ブロック少量含む。
P48	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック、炭化物斑状に含む。
	2	10YR2 /2 黒褐色	粘土	炭化物斑状に含む。
P31	1	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	10YR6 /8 粘土粒微量に含む。柱痕跡。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒斑状に含む。
	3	10YR5/6 黄褐色	粘土	10YR4/3 粘土粒斑状に含む。
P32	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	均質。柱痕跡。
	2	10YR6/6 明黄褐色	粘土	10YR4/2 粘土粒斑状に含む。
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
P26	1	10YR4/4 褐色	粘土	10YR6/6 粘土粒斑状に含む。柱痕跡。
	2	10YR6/6 明黄褐色	粘土	10YR4/2 粘土粒斑状に含む。
P65	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。柱痕跡。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR6/6 粘土粒斑状に含む。
P27	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	10YR6/6 粘土粒斑状に含む。
P28	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土	10YR6/6 粘土粒斑状に含む。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒斑状に含む。
	3	10YR5/6 黄褐色	粘土	10YR4/3 粘土粒斑状に含む。
P29	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6 /8 粘土粒微量に含む。柱痕跡。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR6 /8 粘土ブロック少量含む。

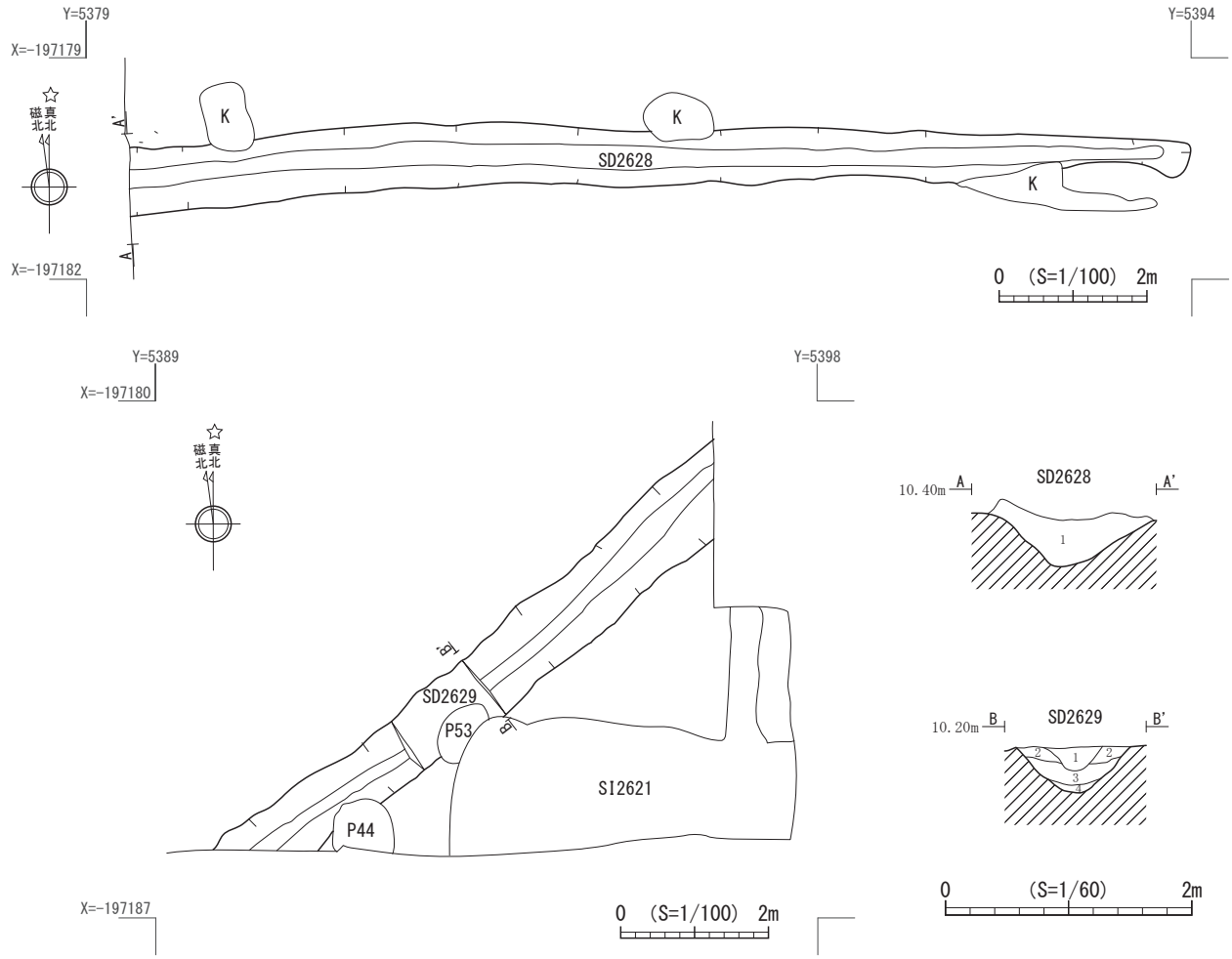
部位	層位	色調	土質	備考・混入物
P37	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6 /8 粘土粒微量に含む。柱痕跡。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR6 /8 粘土ブロック少量含む。
	3	10YR6/6 明黄褐色	粘土	10YR4/3 粘土粒斑状に含む。
P43	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	ほぼ均質。柱痕跡。
	2	10YR6/6 明黄褐色	粘土	10YR4/1 粘土粒斑状に含む。
P53	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6 /8 粘土粒少量含む。柱痕跡。
	2	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR4/2 粘土粒少量含む。
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。
	4	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR4/2 粘土粒微量含む。
P64	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒斑状に含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。
P60	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。
P42	1	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。
P41	1	10YR3/4 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック少量含む。
P63	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。
P47	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	ほぼ均質。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。
P55	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	ほぼ均質。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒、焼土粒、炭化物含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。
P49	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。
	3	10YR6/6 明黄褐色	粘土	10YR4/3 粘土粒少量含む。



部位	層位	色調	土質	備考・混入物
P7	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	3	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	10YR4 /1 粘土粒含む。
	4	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒斑状に含む。
P17	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	ほぼ均質。柱痕跡。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。
P18	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒含む。柱痕跡。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。

部位	層位	色調	土質	備考・混入物
P70	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
P69	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。
P5	1	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	砂粒含む。柱痕跡。
	2	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR4/2 粘土粒含む。
	3	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR4/2 粘土粒少量含む。
P11	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。

第 37 図　SB2626・2627 掘立柱建物跡平面・断面図



部位	層位	色調	土質	備考・混入物
SD2628	1	10YR4 /1 褐灰色	粘土	下部に 10YR6 /6 粘土粒が集積。

部位	層位	色調	土質	備考・混入物
SD2629	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物含む。下部は 10YR6 /6 粘土とラミナ状に堆積。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR6 /6 粘土粒少量含む。
	3	10YR3 /3 暗褐色	粘土	10YR 粘土ブロック斑状に含む。
	4	10YR2 /3 黒褐色	粘土	10YR 粘土ブロック斑状に含む。砂粒含む。

第 38 図　SD2628・2629 溝跡平面・断面図

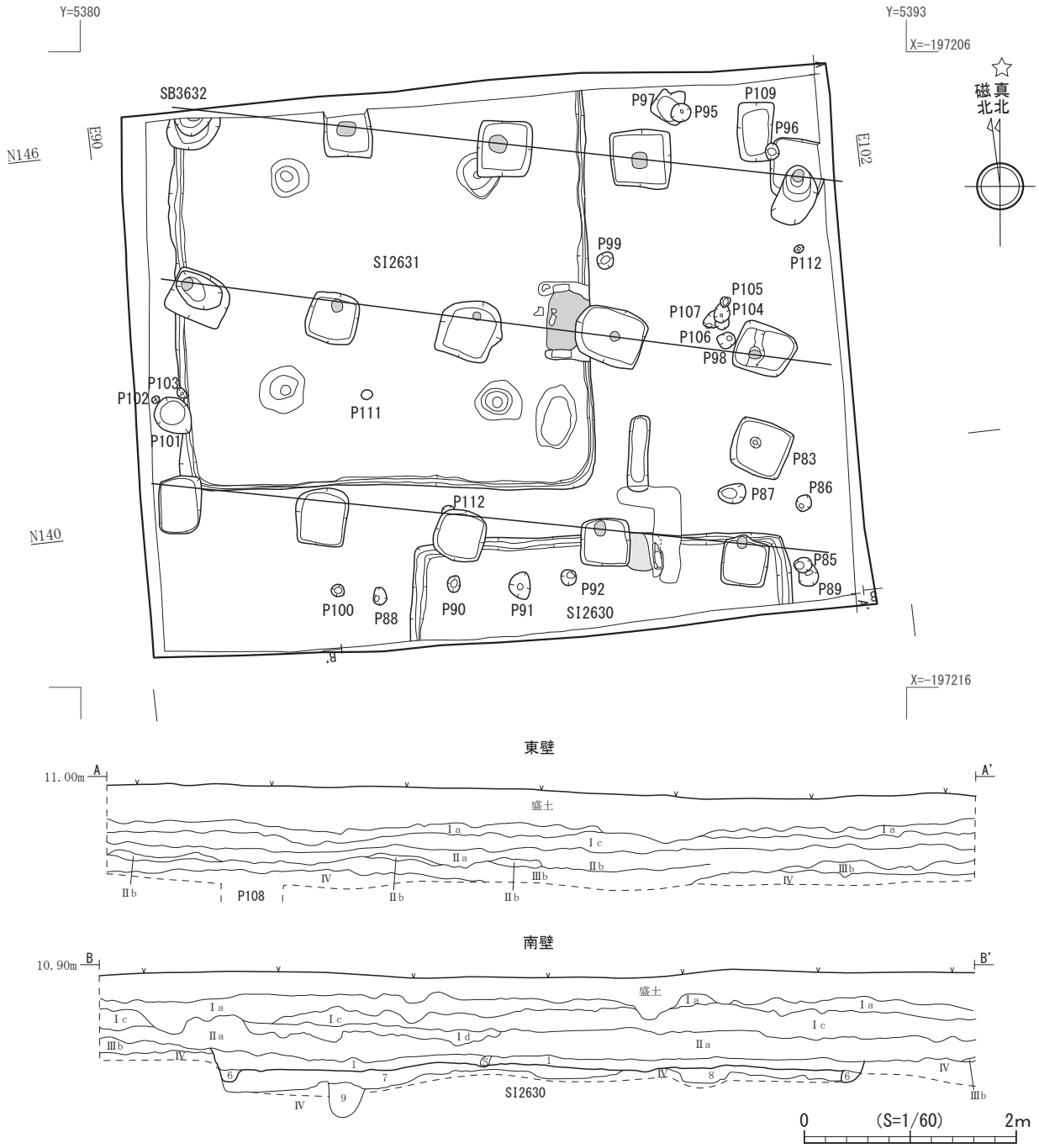
SB2627 掘立柱建物跡（第 31・37 図）

調査区の西側で検出された。桁行３間以上、総長 6.4m 以上（柱間寸法 209 ～ 213 ㎝）、梁行１間、総長 2.3m（柱間寸法 228cm）の建物跡で、SB2626 掘立柱建物跡より古い。西桁行を基準とした方位は E-1.0° -S である。P5・10・11・15・16・20・23 で構成される。北側柱列の掘方が長軸 1m 近い隅丸方形であるのに対し、南側柱列の掘方は 23 ～ 51cm の円形と規模・形状が異なっているが、位置関係と底面に礫があるという特徴から、一連の建物であると判断した。柱穴掘方は一辺 23 ～ 100cm の円形または隅丸方形を呈し、深さは 15 ～ 22cm である。柱痕跡は直径 13cm で P5・23 で確認された。柱痕跡の確認されない P10・15・23・11 の底面では礎板として使用されたと考えられる平坦な礫が確認される。遺物は土師器７点が出土しているが細片であるため掲載できなかった。

（４）溝跡

SD2628 溝跡（第 31・38 図）

調査区を横断する東西方向の溝跡で、西端は調査区外へと延びる。SB2623・2625 掘立柱建物跡より新しい。方位は E-1.0° -N であり、検出長 14.5m で東側は撹乱により一部削平されている。上幅 55 ～ 142cm、下幅 25 ～ 38cm、深さ 48cm の規模で断面形状は台形を呈する。堆積土は単層である。遺物は非ロクロ土師器 19 点、須恵器２点、



部位	層位	色調	土質	備考・混入物
基本層	Ⅰa	10YR5/6 黄褐色	シルト質粘土	小礫、砂粒含む。現表土。
	Ⅰb	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	小礫、10YR5/6 シルト含む。
	Ⅰc	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR 粘土粒含む。細砂含む。
	Ⅰd	10YR6/8 明黄褐色	粘土質シルト	10YR4/3 粘土含む。細砂含む。

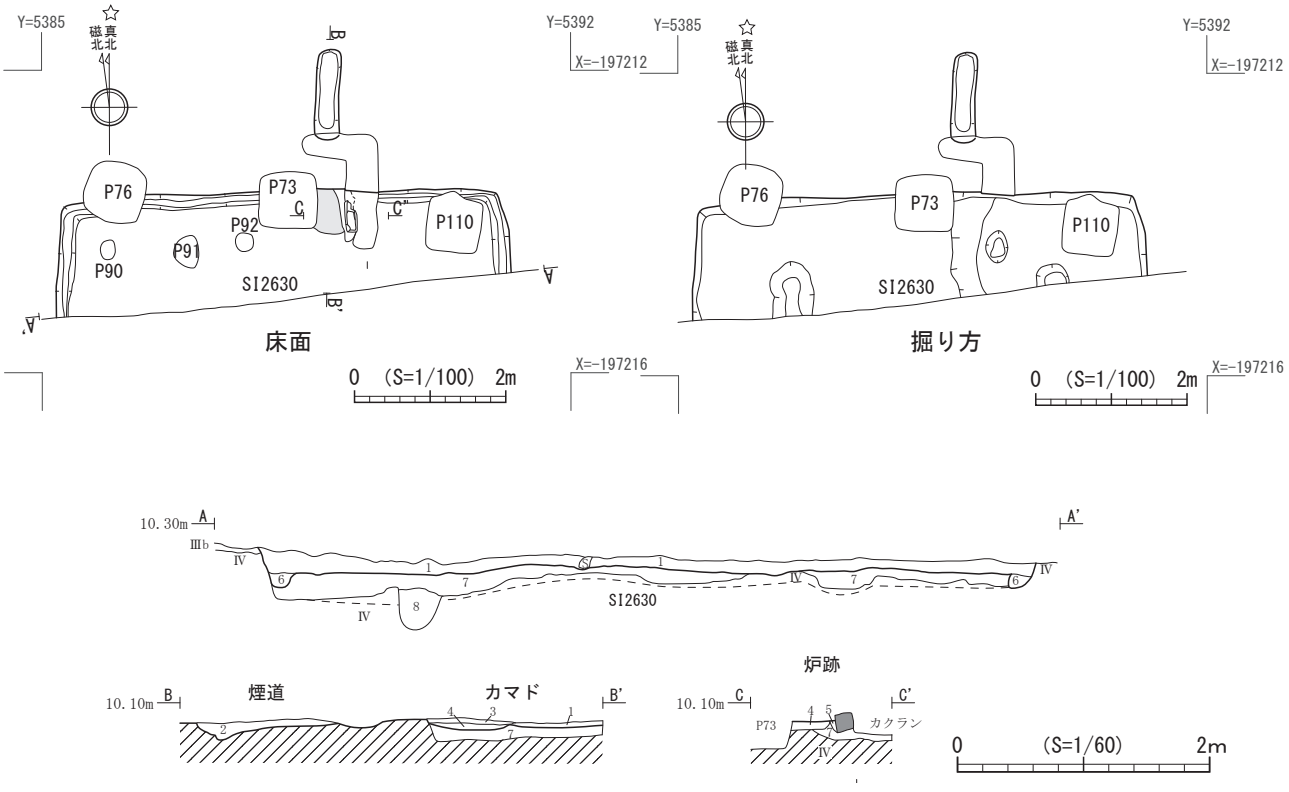
部位	層位	色調	土質	備考・混入物
基本層	Ⅱa	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR 粘土粒含む。細砂含む。
	Ⅱb	10YR6/8 明黄褐色	粘土質シルト	10YR4/3 粘土含む。細砂含む。
	Ⅲb	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR5/6 粘土粒含む。
	Ⅳ	10YR6/6 明黄褐色	粘土	10YR4/3 粘土を斑に含む。

第 39 図　第 320 次 2 区調査区平面・断面図

陶器２点が出土した。

SD2629 溝跡（第 31・38 図）

調査区東側で検出された北東－南西方向の溝跡でその両端は調査区外へと延びる。SB2623 掘立柱建物跡、SI2621 竪穴住居跡、P44 よりも古い。方位は N-35 ～ 41° -E である。検出長 8.1m で、上幅 78 ～ 99cm、下幅 15 ～ 25cm、深さ 45cm で、断面形は U 字形を呈する。堆積土は 4 層に分層され、一度埋没後に掘り直されている可能



部位	層位	色調	土質	備考・混入物
SI2630	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物を少量含み、10YR6/8 粘土を斑に含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物を斑状に含み、10YR6/8 粘土を粒を少量含む。
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土	炭化物、焼土粒を斑に含み、凝灰岩を含む。
	4	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	焼土ブロック、炭化物を含む。

部位	層位	色調	土質	備考・混入物
SI2630	5	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土を斑状に含む。
	6	10YR3/ 2 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土を少量含む。
	7	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土を斑に含む。
	8	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土を少量含む。

第 40 図　SI2630 竪穴住居跡平面・断面図

性がある（1 層）。遺物は出土していない。

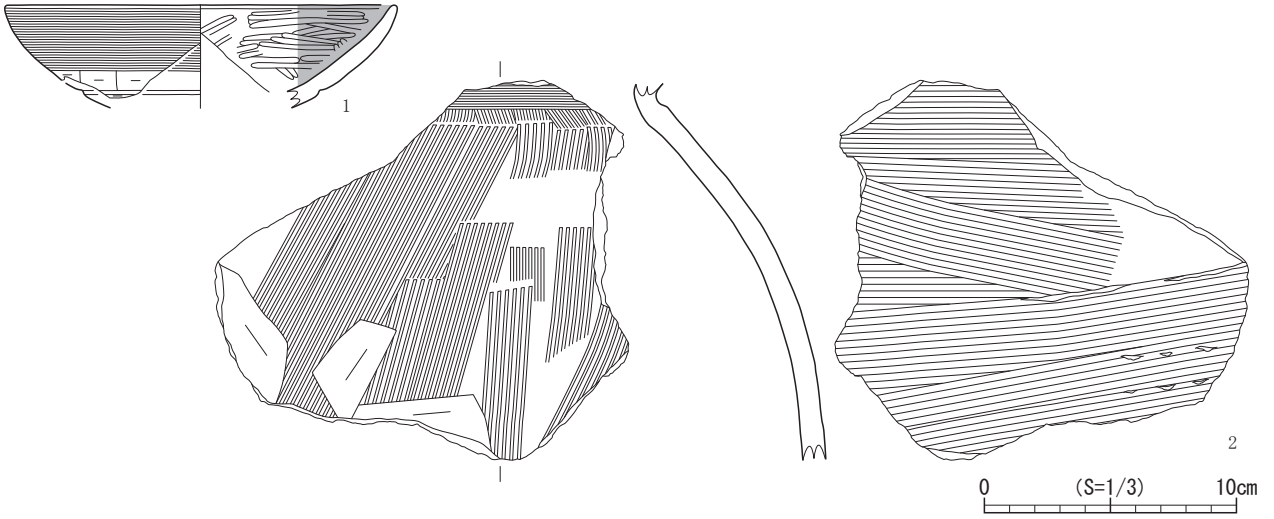
【２区】

（１）竪穴住居跡

SI2630 竪穴住居跡（第 39・40・41 図）

調査区南部で検出された。北辺長 5.9m、東辺長 1.6m 以上の竪穴住居跡で、調査区外南へと続いている。SB2632 掘立柱建物跡より古い。方向は北壁を基準として E-2.0° -N とやや西傾している。堆積土は８層に分層され、１層が住居内堆積土、２層が煙道、３・４層が燃焼部、５層カマド構築土、６層が周溝、７～８層が掘方埋土である。床面は部分的に削平を受けていると考えられ、壁面の立ち上がりは不明瞭である。残存する壁高は東壁で 20cm を測る。

床面施設としては、主柱穴と考えられる遺構は確認されなかった。周溝はカマド周辺を除き確認された。周溝はカマド周辺は撹乱などにより削平されており、詳細は不明である。幅 16 ～ 21cm、深さ 10cm の規模であり、断面形は U 字形を呈する。カマドは北壁で検出され、袖は東側のみ検出された。東袖は一部撹乱により壊されており、検出規模は長さ 78cm、幅 20cm、高さ 8cm を測る。またカマドの芯材として利用されたと考えられる切石凝灰岩が長辺 23cm、短辺 13cm、厚さ 14cm の規模で掘方を伴って敷設されている。なお、西袖部および燃焼部の一部は SB2632 掘立柱建物跡の柱穴（P73）により壊されている。燃焼部は奥行 59cm、幅 30cm 以上で、煙道部の長さは 111cm、幅 33cm、深さ 6 ～ 14cm である。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-6	SI2630 カマド	－	非ロクロ土師器	坏	(15.4)	－	(4.1)	ヨコナデ ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理		20-1
2	C-7	SI2630 カマド	－	非ロクロ土師器	甕	－	－	(15.3)	ヨコナデ　ハケメ　ヘラケズリ	ヘラナデ	輪積痕	20-2
－	E-1	SI2630	－	須恵器	壺	－	－	(2.9)	ロクロナデ	ロクロナデ→ヘラナデ	砂粒含む	20-3

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
－	K-3	SI2630 カマド	－	礫石器	－	(3.1)	(3.6)	(3.4)	カマド支脚の頭 重さ 40g	20-4
－	K-6	SI2630	掘方埋土	石製品	小玉石	1.5	1.2	0.4	黒色 重さ 1.0g	20-5

第 41 図　SI2630 竪穴住居跡出土遺物

掘方底面は全体的に不規則な凹凸が認められ、ピット状の落ち込みが３カ所で確認された。また北東部はさらに一段低く掘り込まれている。

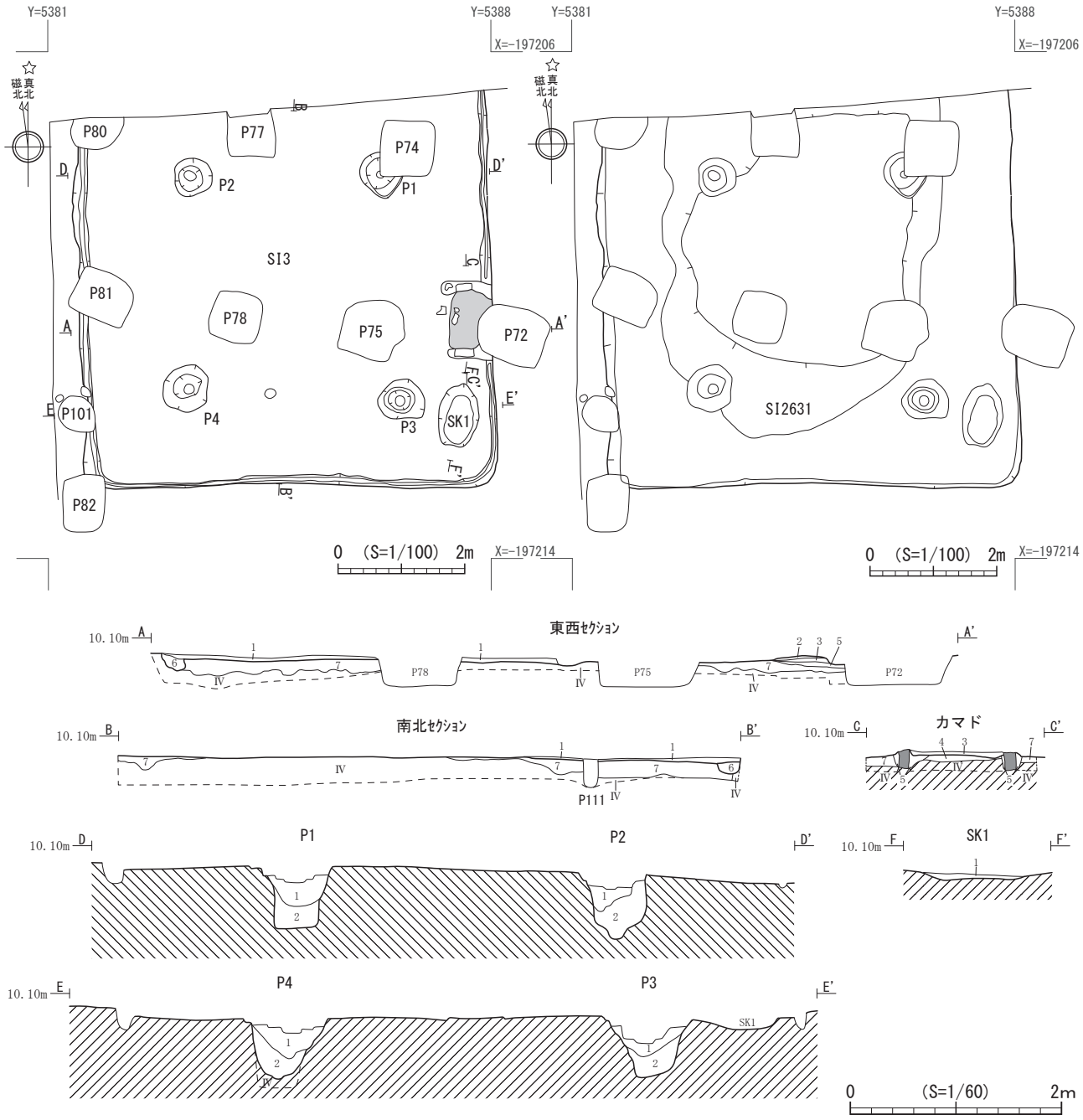
遺物は土師器 51 点、須恵器１点、石製品１点が出土した（第 41 図）。土師器はいずれも非ロクロ調整のもので坏と甕が出土している。１は坏であり、外面の口縁部と体部の境に稜や段を有さない器形である。２は甕であり、頸部との境に段を有し、外面はハケメ調整が施される。須恵器は頸部接合部付近の壺の体部が出土している（写真掲載 20 - 3）。また、円錐状に加工されたの石製品がカマド付近より出土している（写真掲載 20-4）。色調から被熱していると考えられ、カマド支脚の可能性がある。またそれ以外には小玉石（写真図版 20-5）が出土した。

SI2631 竪穴住居跡（第 38・42・43 図）

調査区中央で検出された。東辺長 6.3m 以上、南辺長 6.5m の竪穴住居跡で、調査区北側へ続いている。SB2632 掘立柱建物跡より古い。方向は南壁を基準として E-0.6°　-N でほぼ真北方向を基準とする。堆積土は７層に分層され、１層が建物内堆積土、２層がカマド構築土、３・４層が燃焼部、５層がカマド構築土、６層が周溝、７層が掘方埋土である。SI2630 竪穴住居跡と同様に床面は部分的に削平を受けていると考えられ、壁面の立ち上がりは不明瞭である。残存する壁高は南壁で 4cm を測る。

床面施設は主柱穴と考えられる４基のピットが検出された（P1 ～ 4）。規模は直径 53 ～ 72cm の円形を呈し、深さ 52 ～ 55cm である。いずれも柱痕跡は確認されておらず、掘方の上部が広がる断面形状からも、最終的に柱は抜き取られたと考えられる。周溝はカマドの下部まで巡っており、周溝として掘り込んだ後に、部分的に埋め戻してカマドを構築している。幅 7 ～ 21cm、深さ 10cm の規模であり、断面形は U 字形を呈する。

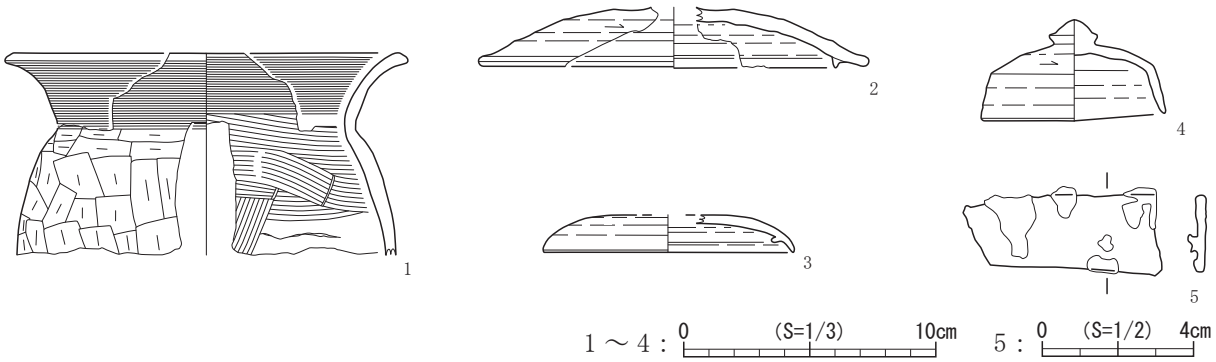
カマドは東壁で検出した。一部 SB2632 掘立柱建物跡の柱穴（P72）により壊されている。カマド袖部では南袖で長辺 31cm、短辺 10cm、厚さ 16cm、北袖で長辺 26cm、短辺 9cm、厚さ 17cm の切石凝灰岩が掘方を伴い敷設され



部位	層位	土色	土質	備考
SI2631	1	１０YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土を少量含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	凝灰岩粒、焼土ブロック、炭化物を含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	焼土ブロック、炭化物多量に含む。
	4	10YR4/4 褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒を少量含む。
	5	2.5YR6/6 橙色	粘土	Ⅳ層の被熱範囲。
	6	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土を少量含む。
	7	10YR ６/ ６明黄褐色	粘土	10YR ４/ ４粘土を斑状に含む。

部位	層位	土色	土性	備考
P1	1	10YR3/ ２暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒を斑状に含む。
	2	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒を微量に含む。
P2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒を斑状に含む。
	2	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒を少量含む。
P3	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土を斑状に含む。
	2	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土を斑状に含む。
P4	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土を斑状に含む。炭化物含む。
	2	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土を少量含む。
SK1	1	10YR4/4 褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒、炭化物を含む。

第 42 図　SI2631 竪穴住居跡平面・断面図



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-8	SI2631 -P3	－	非ロクロ土師器	甕	(15.2)	－	(8.0)	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ		20-6
2	E-3	SI2631	－	須恵器	蓋	15.0	－	(2.4)	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ		20-7
3	E-4	SI2631	－	須恵器	蓋	(10.0)	－	(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ		20-8
4	E-2	SI2631	－	須恵器	蓋	7.2	1.9	4.0	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	白豆石あり	20-9

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
－	K-7	SI2631	堆積土	石製品	小玉石	1.3	1.1	0.6	白色 重さ1.2g	20-10
－	K-8	SI2631	床面	石製品	小玉石	1.1	0.8	0.6	E-2と共伴 白色 重さ0.8	20-11
5	N-3	SI2631	掘方埋土	鉄製品	刀子？	5.1	2.0	0.4	刀子柄部か？ 重さ8.0g	20-12
－	N-2	SI2631	掘方埋土	鉄製品	精錬滓？	－	－	－	重さ99.3g	20-13

第43図　SI2631竪穴住居跡出土遺物

ており、内側は燃焼部と接する。外側に粘土を充填する形でカマドが構築されており規模は長さ76cm、幅15cm、高さ5cmを測る。燃焼部は幅60cm、奥行90cmで下面には被熱痕跡が認められる（４層）。また、煙道は確認されなかった。そのほか、カマドの南側で土坑を検出した。長軸102cm、短軸63cmの楕円形を呈し、深さ6cmと浅い。堆積土は単層で建物内堆積土と近似しているが、わずかに炭化物を含んでいる。掘方底面は外周に沿う形で溝状に掘り込まれている。

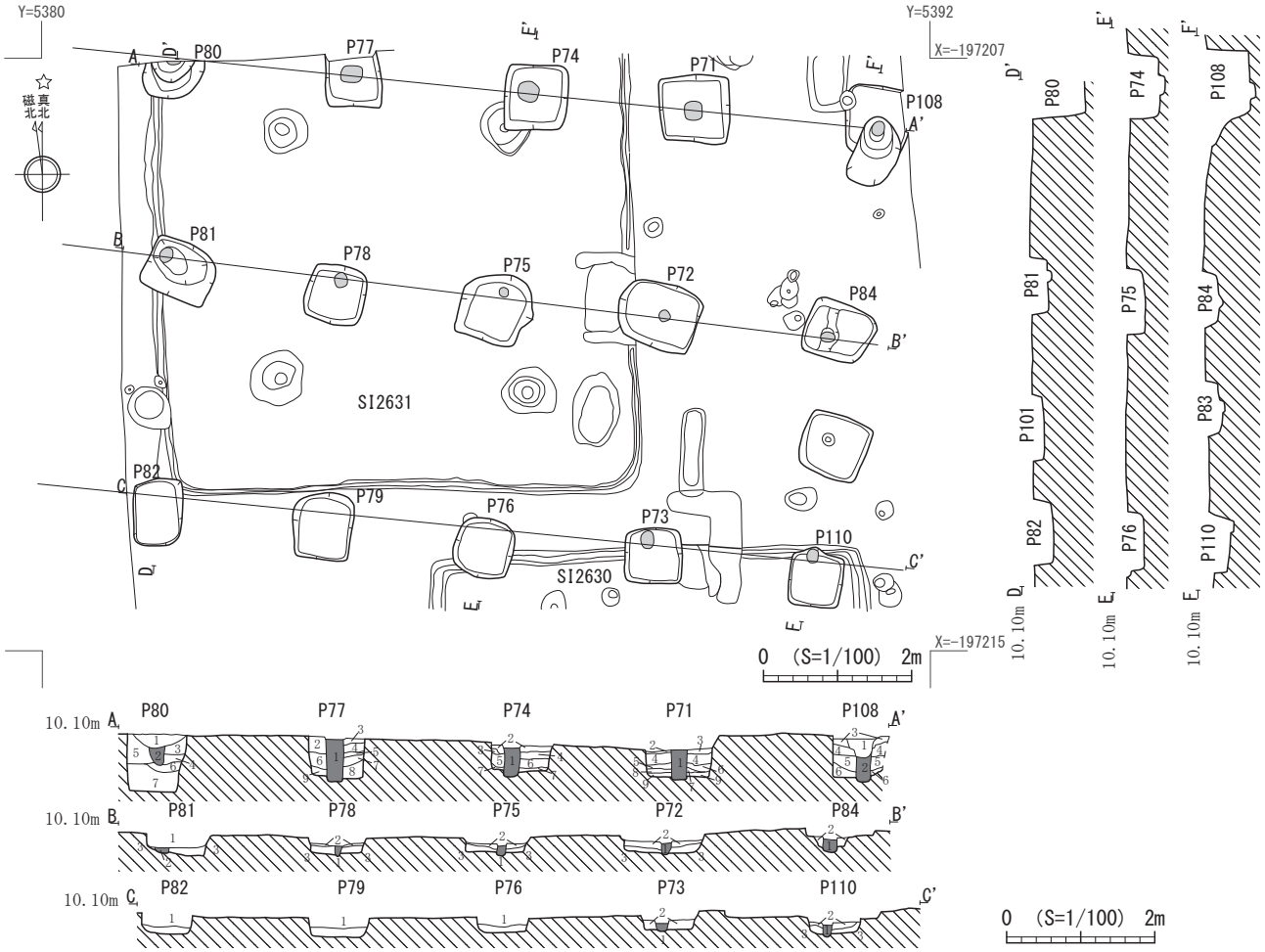
遺物は土師器が56点、須恵器が９点、石製品が２点、鉄滓、精錬滓が出土した（第43図）。土師器はいずれも非ロクロ調整のものであり、坏、甕が確認される。１は胴張形の甕であり体部外面はヘラケズリが施される。須恵器は蓋、甕、壺が出土している。２～４は蓋であり、２、３はカエリがつき、３は復元端部径が10cmと比較的小型である。４は床面近く、天地逆の状態で出土しており、小玉石（写真図版20-11）とともに出土した。カエリのない、端部径7.2cmの小型の蓋であり、宝珠型のつまみを有する。５は厚さ0.4mmの板状の鉄製品である。平面形が端部に向かって緩やかに狭まっており、刀子の可能性がある。そのほか、小玉石（写真図版20-10）、鉄滓（写真図版20-13）が出土した。

（１）掘立柱建物跡

SB2632 掘立柱建物跡（第44・45図）

東西方向に延びる３列の柱列が確認された。P71～82、84、93、110で構成される。北側の柱列に対し、ほかの２列の柱列の掘方底面が浅いため、北柱列が側柱で、ほかの２列が束柱列となる床束建物であると推定される。SI2630・2631竪穴住居跡より新しい。

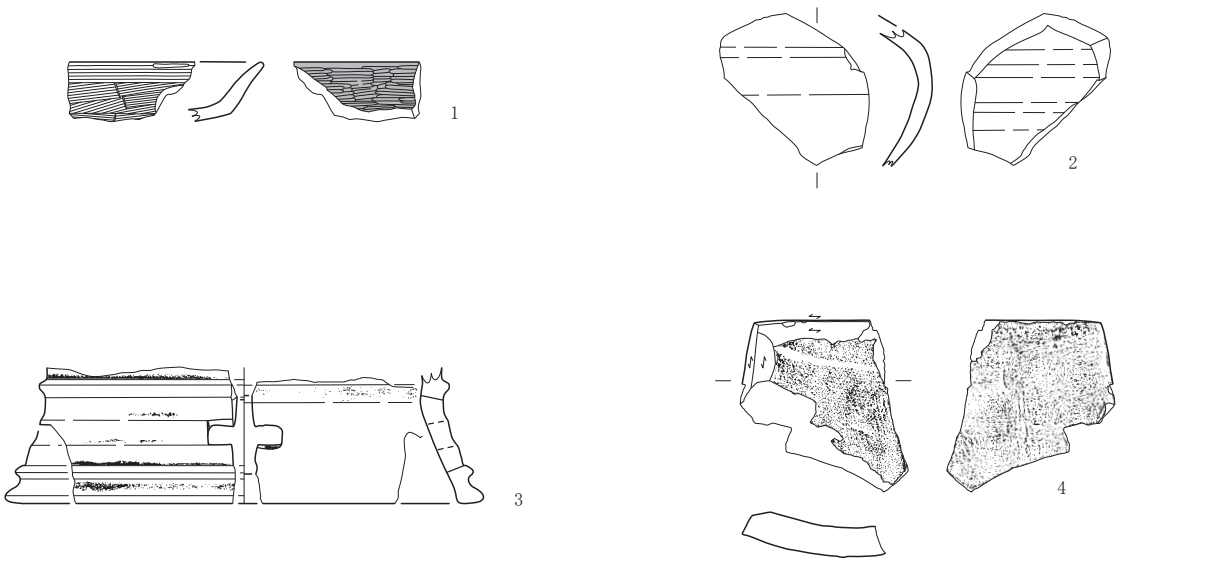
建物規模は桁行４間以上（総長9.5m以上、柱間間隔225～249cm）、梁行２間以上（総長6m以上）で、調査区外へと続く。北桁行の建物方向はE-6.0°-Sでやや東傾している。掘方はいずれも隅丸方形を呈し、規模は側柱列で一辺79～95cm、深さ45～60cm、柱痕跡は直径20～24cmで、掘方埋土は地山ブロックを含む厚さ10～20cmの単位で層状に埋められている。束柱列は一辺75～110cmの方形を呈し、北側柱列とほぼ同規模であるが、深さ20～26cm、柱痕跡は直径12～18cmと北側柱列より規模が小さい。また、P76・79・82では柱痕跡は検出さ



部位	層位	色調	土質	備考・混入物
P80	1	10YR3/4 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒斑状に含む。
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック含む。
	3	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR4/6 粘土ブロック斑状に含む。
	4	10YR4/6 褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック含む。
	5	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土、10YR4/6 粘土ブロック含む。
	6	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土、10YR4/6 粘土ブロック少量含む。
	7	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土、10YR4/6 粘土ブロック斑状に含む。
P77	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒斑状に含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック含む。
	4	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒微量に含む。
	5	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック含む。
	6	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒微量に含む。
	7	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒微量に含む。
	8	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	9	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒斑状に含む。
P74	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック少量含む。
	3	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土少量含む。
	4	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土ブロック斑状に含む。
	5	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック少量含む。
	6	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。
	7	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒少量含む。
P71	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR6/6 明黄褐色	粘土	10YR3/2 粘土粒微量に含む。
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。
	4	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒斑状に含む。
	5	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック斑状に含む。
	6	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/2 粘土粒微量に含む。
	7	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒少量含む。
	8	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒微量に含む。
	9	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒斑状に含む。

部位	層位	色調	土質	備考・混入物
P108	1	10YR3/4 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒斑状に含む。
	3	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒微量に含む。
	4	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土帯状に堆積。
	5	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土帯状に堆積。
P81	1	10YR4/4 褐色	粘土	10YR5/8 粘土粒含む。礫含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	ほぼ均質。
	3	10YR4/4 褐色	粘土	10YR5/8 粘土ブロック斑状に含む。
P78	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR5/8 粘土粒含む。柱痕跡。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR5/8 粘土ブロック斑状に含む。
	3	10YR5/8 黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒少量含む。
P75	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR5/8 粘土粒含む。柱痕跡。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR5/8 粘土ブロック斑状に含む。
	3	10YR5/8 黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒少量含む。
P72	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR5/8 粘土粒含む。柱痕跡。
	2a	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR5/8 粘土ブロック斑状に含む。
	2b	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR5/8 粘土ブロック斑状に含む。焼土粒含む。
	3	10YR5/8 黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒少量含む。
P84	1a	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR5/8 粘土粒含む。柱痕跡。
	1b	10YR5/6 黄褐色	粘土	10YR5/8 粘土粒含む。柱痕跡。1a 層の白色化。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR5/8 粘土ブロック斑状に含む。
P82	1	10Y7/2 灰白色	粘土	10YR3/3 粘土粒少量含む。砂粒含む。
P79	1	10Y7/2 灰白色	粘土	10YR3/3 粘土粒少量含む。砂粒含む。
P76	1	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒斑状に含む。
P73	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒斑状に含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒斑状に含む。
P110	1	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	10YR6/8 粘土粒含む。上部グライ化。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒含む。
	3	10YR5/6 黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒含む。

第 44 図　SB2632 掘立柱建物跡平面・断面図



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-13	SB2632-P80	－	非ロクロ土師器	坏	－	－	(2.4)	口：ヨコナデ 体～底：ヘラナデ	ヘラミガキ 黒色処理		20-14
2	E-6	SB2632-P74	－	須恵器	平瓶	－	－	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ		20-15
3	E-5	SB2632-P74	－	須恵器	円面硯	－	(19.0)	(5.4)	ロクロナデ 赤色顔料？	ロクロナデ 赤色顔料？		20-16 21-14

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
4	G-1	SB2632-P77	1	瓦	平瓦	(11.4)	(9.9)	2.0	凹面：布目痕　凸面：縄叩き→ナデ	20-17
－	K-4	SB2632-P77	掘方埋土	石製品	小玉石	1.4	1.1	0.6	黒色 重さ 1.1g	20-18
－	K-5	SB2632-P74	掘方埋土	石製品	小玉石	1.4	1.1	0.6	白色 重さ 1.4g	20-19
－	N-7	SB2632-P71	掘方埋土	鉄製品	鉄滓	－	－	－	重さ 3.0g	20-20

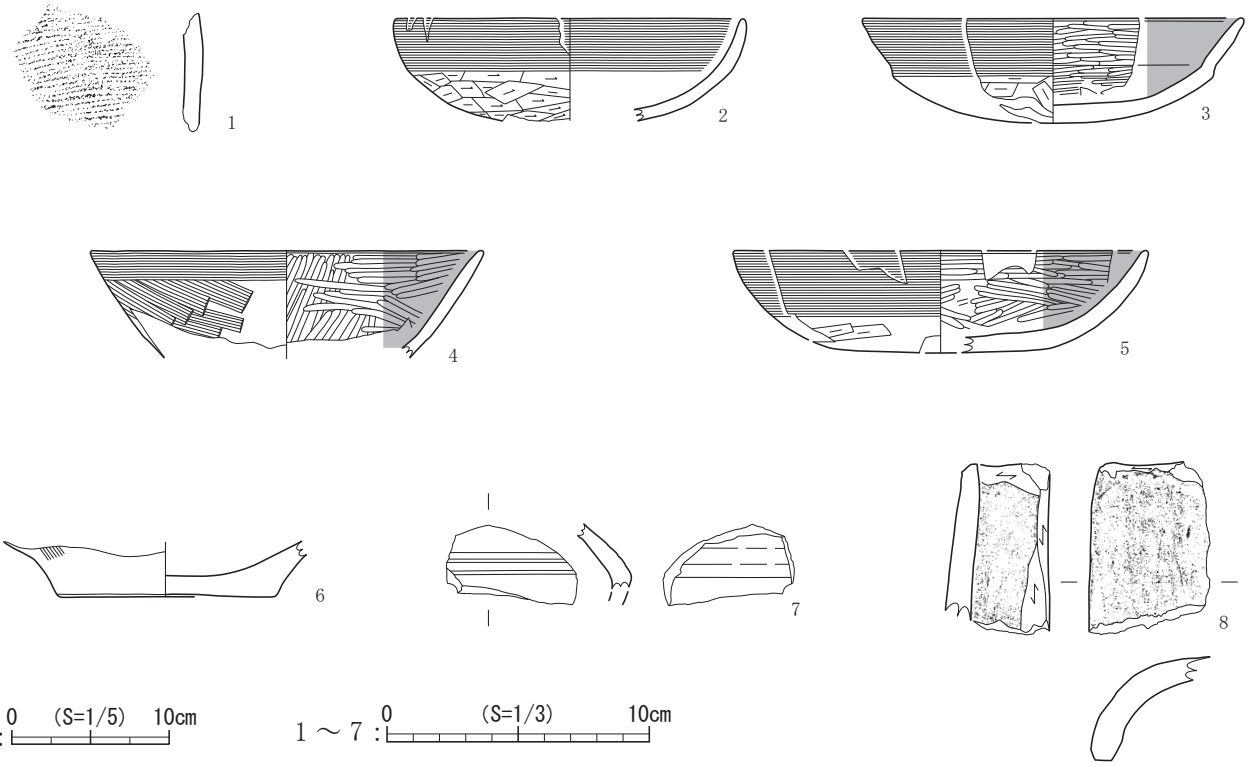
第 45 図　SB2632 掘立柱建物跡出土遺物

れなかった。P80・81・93 では抜き取り穴が確認されている。

遺物は土師器が 93 点、須恵器が 14 点、瓦が１点、石製品が３点、鉄滓が出土している。（第 45 図）。土師器はいずれも非ロクロ調整のもので坏、甕が確認される。１は坏で口縁部と体部境界に稜をもち、口縁部は直線的に外傾する器形である。須恵器は坏、壺、甕、硯が出土している。２は壺の肩部であり、平瓶の可能性がある。３は円面硯で、硯部については残っていないため詳細は分からないが、脚部はハ字形に広がる器形で、脚部の上位と下位にそれぞれ凸帯を巡らす。透かしは十字文が施されており、四方に配置されると考えられる。透かしの幅は縦方向の幅については割れているため、不明であるが横方向の幅と同じになるように図上で復元している。胎土が非常に緻密であり、在地のものと比べると明らかに異なるため、搬入品の可能性がある。また、凸帯の周囲は帯状ににぶい赤色の顔料が付着している。内面にもわずかながら顔料が残る。瓦は平瓦が出土した。４は凹面に布目痕を残し、凸面は縄叩きの後全体的にナデ消されている。そのほか小玉石（写真図版 20 - 18・19）、鉄滓（写真図版 20 - 20）が出土している。

（３）ピット（第 31・39・46 図）

１区、２区で柱列、掘立柱建物跡を構成する以外に 51 基のピットを検出した。柱痕跡は P3・6・35 で検出され、直径 10 ～ 15cm である。ピットは直径 15 ～ 30cm の小規模な円形のものと、直径 50 ～ 60cm と比較的規模のある隅丸方形または不整方形のものがある。後者については柱痕跡が P6 で確認されており、調査区外へと展開する可能性も考えられる。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	B-1	－	－	弥生土器	甕？	－	－	(4.5)	LR			21-1
2	C-15	－	－	非ロクロ土師器	坏	(13.2)	－	(3.9)	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ	丸底	21-2
3	C-12	－	検出面	非ロクロ土師器	坏	(14.4)	－	4.0	口：ヨコナデ 底：ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理		21-3
4	C-16		カクラン	非ロクロ土師器	坏	(15.1)	－	(4.1)	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	ヘラミガキ 黒色処理		21-4
5	C-10		カクラン	非ロクロ土師器	坏	(15.7)	－	(3.9)	ヨコナデ ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理		21-5
6	C-14	－	検出面	非ロクロ土師器	甕	－	8.1	(2.1)	ヘラナデ			21-6
7	E-7		Ⅰc	須恵器	壺	－	－	(2.9)	ロクロナデ 沈線２条 自然釉付着	ロクロナデ 漆膜付着		21-7

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
8	F-1		カクラン	瓦	丸瓦	(10.8)	(7.6)	1.9	凸面：ナデ 凹面：布目痕 周縁：ヘラケズリ	21-8
－	N-4	P6	掘方埋土	鉄製品	精錬滓？	－	－	－	重さ 16.6g	21-9
－	N-5	－	検出面	鉄製品	精錬滓	－	－	－	重さ 9.0g	21-10
－	N-6	P21	－	鉄製品	精錬滓？	－	－	－	重さ 4.5g	21-11

第 46 図　その他の出土遺物

遺物は各ピットから土師器片、須恵器片が出土しており、P6・21 からは精錬滓の可能性がある鉄滓が出土している（写真図版 21 - 9・11）。

（4）その他の出土遺物（第 46 図）

遺構外の出土遺物として基本層および撹乱から弥生土器１点、土師器 105 点、須恵器 11 点、石製品１点、陶器１点、磁器２点、丸瓦１点、鉄滓が出土している。７は須恵器の壺の肩部で、平瓶の可能性がある。内面に漆膜が付着している。また、精錬滓（せいれんさい）またはその可能性のある鉄滓が出土している（写真図版 21-9 ～ 11）。

５．まとめ

調査地点は方四町Ⅱ期官衙の東部に位置し、石組池（SX1235）より東に約 150m、大溝東辺推定ラインより西に約 40m の地点に位置する。

遺物は土師器、須恵器、瓦、礫石器、石製品、金属製品が出土した。出土した遺物は小片が多数を占め、全体が分かるものは極めて少ない。大半は土師器であるが、いずれも非ロクロ調整のものである。確認される器種は坏、鉢、甕がある。須恵器は坏、蓋、甕、壺、硯の器種が確認された。SB2632 掘立柱建物跡からは円面硯が出土している。その特徴から、時期を絞ることは難しいが、これまで郡山遺跡で出土した円面硯と大きく特徴を異にしないため、７世紀半ばから８世紀前半にかけて、官衙の機能していた時期に収まると考えられる。

遺構は竪穴住居跡３軒、柱列跡１列、掘立柱建物跡６棟、溝跡２条などが検出された。近世以降と考えられる SD2628 溝跡を除き、ほかの遺構は方位や出土遺物から官衙の機能していた時期に収まる可能性が高いと考えられる。

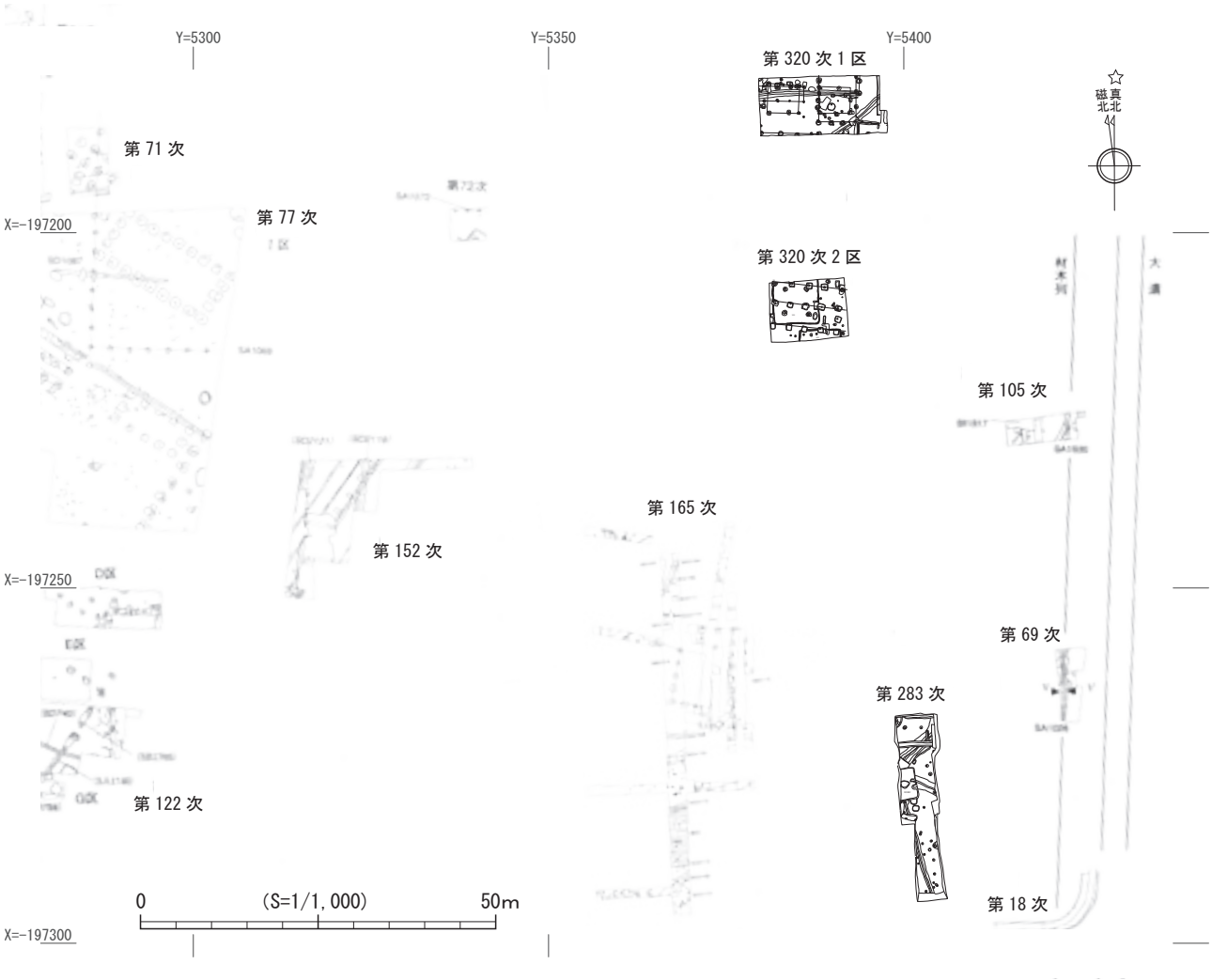
SD2629 溝跡は重複関係や方位からⅠ期官衙の時期に属する可能性がある。SD2629 溝跡は、Ⅰ期官衙の推定東辺ラインから約 70 ～ 80m 離れており（第 152・171 次調査）、官衙外に位置するが、東辺の材木列と平行する。延長上での検出はされていないため、その関連性については不明である。

１区の SA2622 柱列跡、SB2623 ～ 2627 掘立柱建物跡、SI2621 竪穴住居跡、２区の SI2630・2631 竪穴住居跡はⅡ期官衙の時期に属する遺構と考えられる。１区の遺構については、重複関係から SB2627 掘立柱建物跡→ SB2626 掘立柱建物跡、SB2623 掘立柱建物跡→ SI2621 竪穴住居跡への変遷が認められる。また SB2623 掘立柱建物跡と SB2624 掘立柱建物跡も新旧関係は不明だが重複しており、２時期ないし３時期の変遷があったと推定される。

検出された３軒の竪穴住居跡は、規模が SI2630 竪穴住居跡は一辺約 6m、SI2631 竪穴住居跡は一辺約 6.5m で、SI2621 竪穴住居跡もカマドの位置からほぼ同規模の 6m 前後と推定され、単純な比較はできないが、隣接する長町駅東遺跡の同時期の竪穴住居跡と比較すると大型の規模に分類される。また、カマド構造として残存状況が良好とはいえないが、３軒ともカマドの芯材として切石凝灰岩が用いられている。これまでも周辺では長町駅東遺跡で同様の構造を有するカマドは数軒確認されている（第１次調査 SI45 など）。

また遺跡全体における当該期の竪穴住居跡は一定数検出されているが、方四町官衙内での検出例が少なく、通常の住居跡とは異なる性格の可能性を持っていた検出例が目立つ(及川 2019)。SI2621 竪穴住居跡のカマド付近では、床面直上で炭化物の分布が確認されており、時期が異なり、全長や形態は不明であるがⅠ期官衙の工房と構成する遺構群と考えられる SI50（第６次）、SI2323（第 236 次）と床面上の特徴が類似している。また、３軒からはいずれも、鉄滓や精錬滓といった遺物が少量出土しており、SI2621 竪穴住居跡だけでなく、SI2630・2631 竪穴住居跡についても工房跡などといった通常の住居跡と異なる機能を持っていた可能性も考えられる。調査区周辺でも竪穴住居跡は検出されており（昭和 54 年度調査区・第 105・286 次）、今回の調査では明らかにし得なかったが、前述したカマドの構造を含めて、住居構造と出土遺物の整理を行い、その機能および、周辺の機能について検討が必要となる。なお、各住居跡の燃焼部の土については、ふるい掛けを行い、磁石を用いて、鍛造剥片等の微小遺物の確認に努めたが、これらの遺物は確認されなかった。

これらの遺構に後続する遺構として、SB2632 掘立柱建物跡がある。SB2632 掘立柱建物跡は、床束建物と推定され桁行 9.5m 以上と長大な規模を持つ。建物主軸は北桁行で E-6.0 ° -S である。これまで、Ⅱ期官衙の建物方位については真北およびやや東偏する建物（N-0 ～ 5° -E および N-0 ～ 2.1° -W）からなるⅡ－Ａ期と、真北からやや西に偏した建物からなるⅡ - Ｂ期（N-3 ～ 4.6° -W および N-8.3 ～ 10° -W）で大別されてきた（仙台市教育委員会 2005a、平間・齊藤 2008)。SB2632 掘立柱建物跡はⅡａ期の建物と比べやや東傾していることになる。調査区周辺で真北より 5° 以上東に振れる掘立柱建物跡は、第 162 次調査 SB2110（N-10° -E)、第 134 次調査 SB1925（N-8° -E)、SB1930（N-5° -E)、SB1935（N-7° -E）がある。第 134 次調査で検出された３棟の掘立柱建物跡は重複関係を有し、もっとも古い SB1930 掘立柱建物跡の掘方埋土に灰白色火山灰が含まれていることから、これら 3 棟の建物跡は官衙廃絶後にやや時期を経て、10 世紀前半以降に屋敷などの建物が存在していたこと

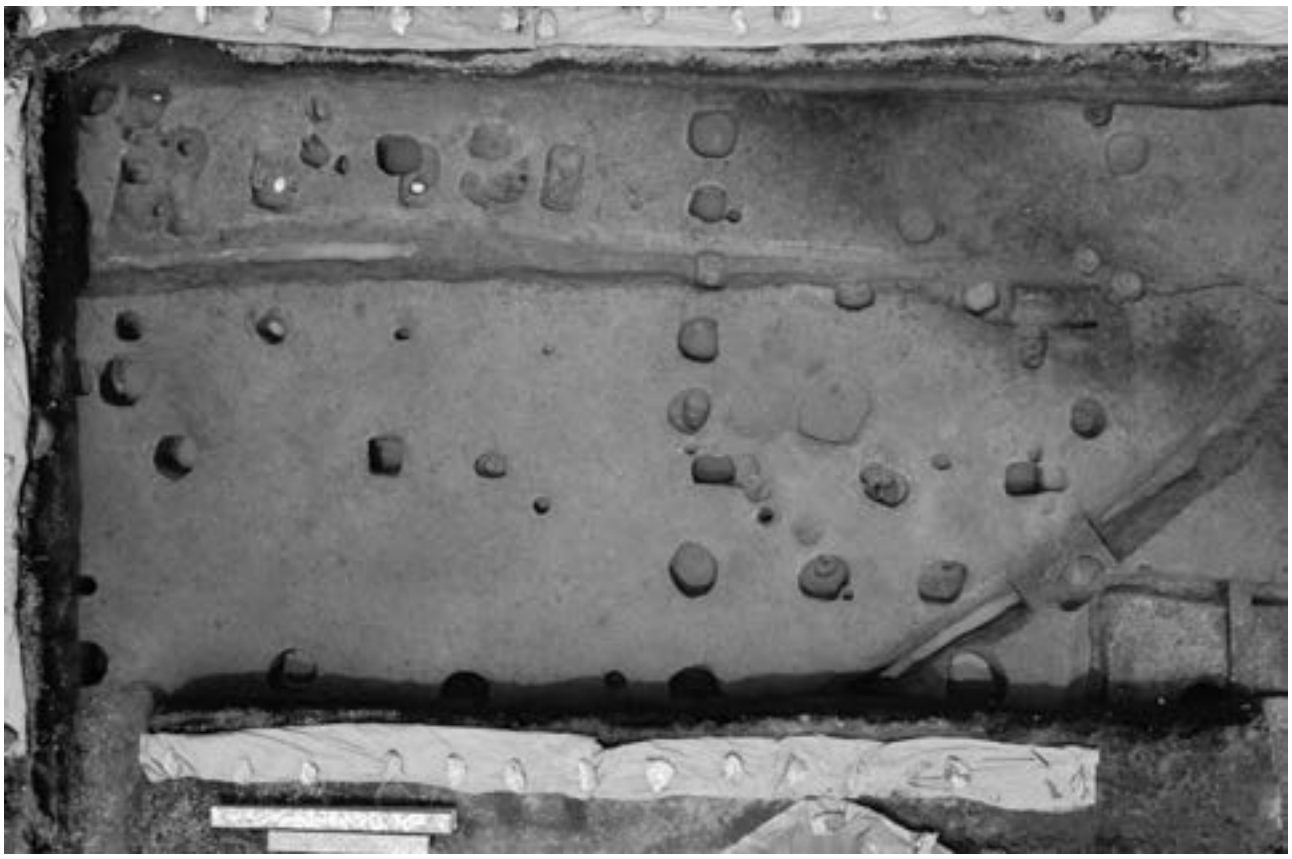


第 47 図　周辺の調査区

が想定されている（仙台市教育委員会 2001）。また、SB2110 掘立柱建物跡については明確な時期について検討資料がないが、官衙と異なる時期の建物跡である可能性をあげている（仙台市教育委員会 2005b）。SB2632 掘立柱建物跡は出土遺物からは官衙の機能していた時期に収まる可能性を棄てきれないため、現段階ではⅡ期官衙に属する可能性がある遺構と捉え、詳細な時期の比定については、周辺での調査の蓄積をまって再検討したい。

参考文献

及川謙作 2019「陸奥国府の造営と社会」『第 45 回城柵官衙遺跡検討会―資料集―』pp. 79-98
仙台市教育委員会 2001『郡山遺跡 21』仙台市文化財調査報告書第 250 集
仙台市教育委員会 2005a『郡山遺跡発掘調査報告書―総括編―』仙台市文化財調査報告書第 283 集
仙台市教育委員会 2005b『郡山遺跡―第 162 次 1 区・第 164 次発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第 288 集
仙台市教育委員会 2008『長町駅東遺跡第 1・2 次調査』仙台市文化財調査報告書第 324 集
奈良文化財研究所 2003『官衙の官衙遺跡　Ⅰ遺構編』
平間亮輔・齋藤義彦 2008「郡山遺跡の遺構変遷」『第 34 回城柵官衙遺跡検討会―資料集―』
村田晃一 2000「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺―移民の時代―」『宮城考古学』第 2 号　pp. 45-80
村田晃一 2018「陸奥中部における陶硯の生産と消費（１）」『宮城考古学』第 20 号　pp. 165-186



１．Ⅰ区調査区完掘状況（直上から）

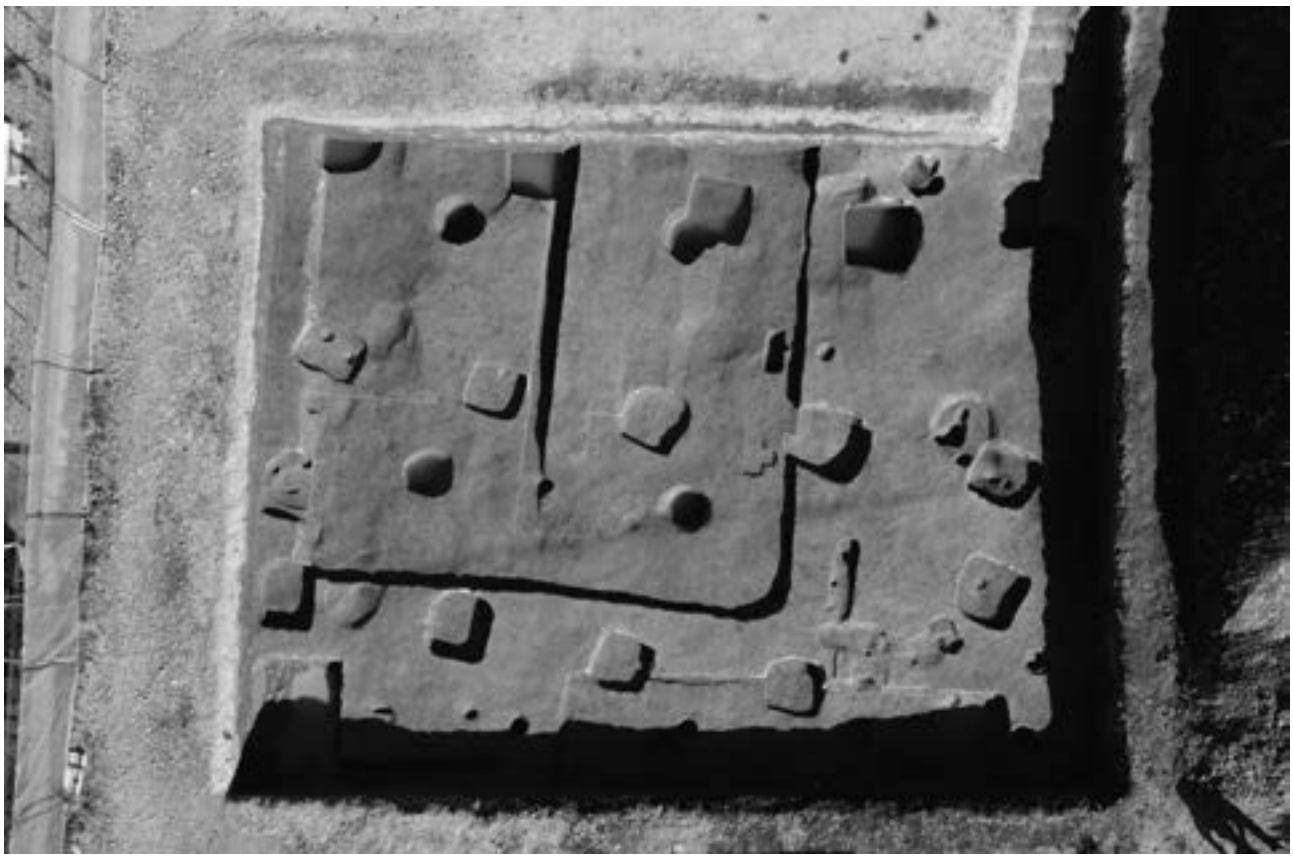
２．Ⅰ区 SB2623 ～ 2625 掘立柱建物跡完掘状況（直上から）

３．Ⅰ区 SB2626･2627 掘立柱建物跡完掘状況（東から）

４．Ⅰ区 SI2621 竪穴住居跡完掘状況（南西から）

５．Ⅰ区 SI2621 カマド土層断面（南から）

写真図版 16　郡山遺跡第 320 次調査（１）



１．Ⅱ区調査区完掘状況（直上から）

２．Ⅱ区 SB2632 掘立柱建物跡完掘状況（東から）

３．Ⅱ区 SB2632-P71 土層断面（南から）

４．Ⅱ区 SB2632-P78 土層断面（南から）

５．Ⅱ区 SB2632-P10 土層断面（南から）

写真図版 17　郡山遺跡第 320 次調査（２）

１．SI2631 竪穴住居跡（西から）

２．SI2631 カマド検出状況（西から）

３．SI2631 カマド燃焼部土層断面（南から）

４．SI2631 カマド土層断面（西から）

５．SI2631-P4 土層断面（南から）

６．SI2631-E2 出土状況（北から）

７．SI2630 竪穴住居跡（北東から）

８．SI2630 カマド検出状況（南西から）

写真図版 18　郡山遺跡第 320 次調査（３）

1
（第 34 図 1）

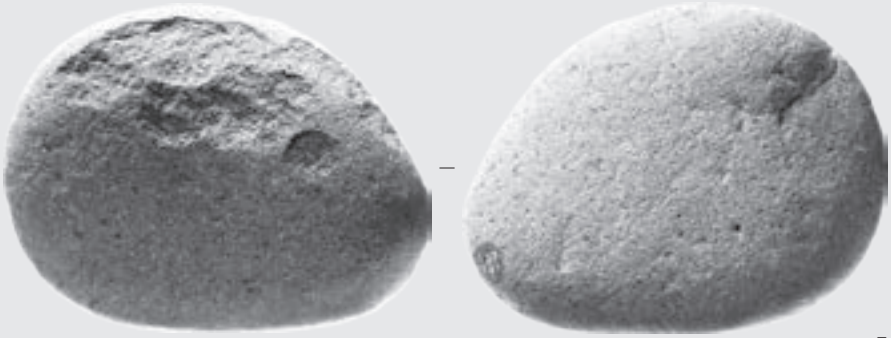
2
（第 34 図 2）

3
（第 34 図 3）

4
（第 34 図 4）

5
（第 34 図 5）

6
（第 34 図 6）



7
（第 34 図）

10
（第 34 図）

8
（第 34 図）

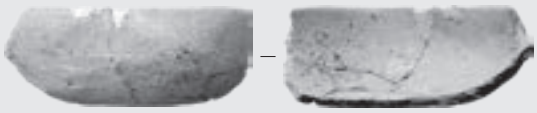
9
（第 34 図）

11
（第 34 図）

写真図版 19　郡山遺跡第 320 次調査出土遺物（１）

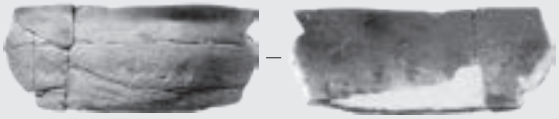
写真図版 20　郡山遺跡第 320 次調査出土遺物（２）

1
（第 46 図 1）



2
（第 46 図 2）

3
（第 46 図 3）



4
（第 46 図 4）

5
（第 46 図 5）

6
（第 46 図 6）

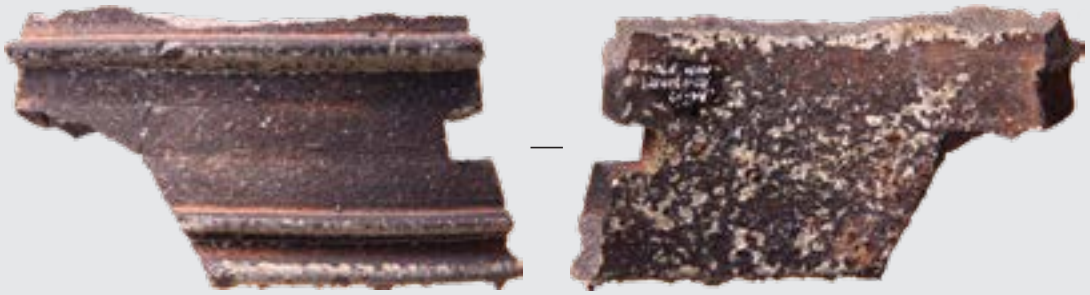
7
（第 46 図 7）

8
（第 46 図 8）

9
（第 46 図）

10
（第 46 図）

11
（第 46 図）



12
（第 45 図 3）

写真図版 21　郡山遺跡第 320 次調査出土遺物（３）

第６章　北目城跡の調査

第１節　遺跡の概要

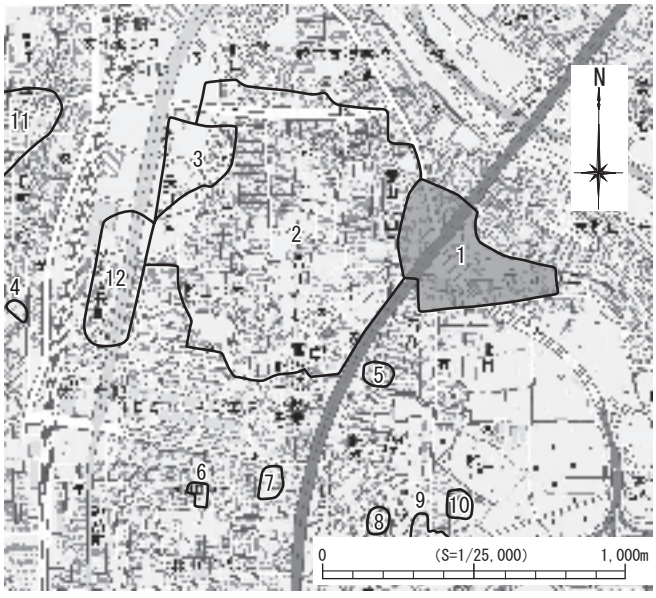
北目城跡は仙台市太白区郡山四丁目から東郡山二丁目にかけて所在する平城跡である。郡山低地の東側、広瀬川右岸の標高約９～ 12 ｍの自然堤防上に立地し、遺跡の範囲は東西約 480m、南北約 450m におよぶ。現在、遺跡の中央部分は国道４号線仙台バイパスと仙台南部道路の長町インターチェンジから通じる都市計画道路の交差点となっている。

北目城は延宝年間（1670 年代）に記された「仙台領古城書上」によると、城主は 16 世紀後半までは粟野氏とされ、粟野氏は永禄年間以降（1570 年～）に伊達氏の家臣化したものと考えられており、「北目給衆」と呼ばれる伊達氏の家臣たちが粟野領に派遣されている。また、城跡は東西四十六間（約 83m）、南北五十六間（約 101m）の規模で四方に幅８間（約 15m）の堀があったと記されているが、これまでの調査成果やかつての地籍図から見るに、城の痕跡はさらに広域に広がっていると推定され、これは主郭部分についてのみ記していたと考えられる。その後、慶長５（1600）年の関ヶ原の戦いの際には、伊達政宗はこの北目城に入り、ここを拠点として会津の上杉景勝方と対峙した。政宗はその翌年には仙台城に居を移し、北目城に関わった家臣たちも仙台城下に移封され、城は廃城となる。仙台城下にも「北目」という地名があるのはそのためである。昭和 40 年代以前までは土塁や堀の痕跡が田畑の区割りなどに残されており、その周囲の字名には「館ノ内」「出丸」「矢来」「矢口」といった城館に関連する地名が残っていた。

第２節　第 21 次調査

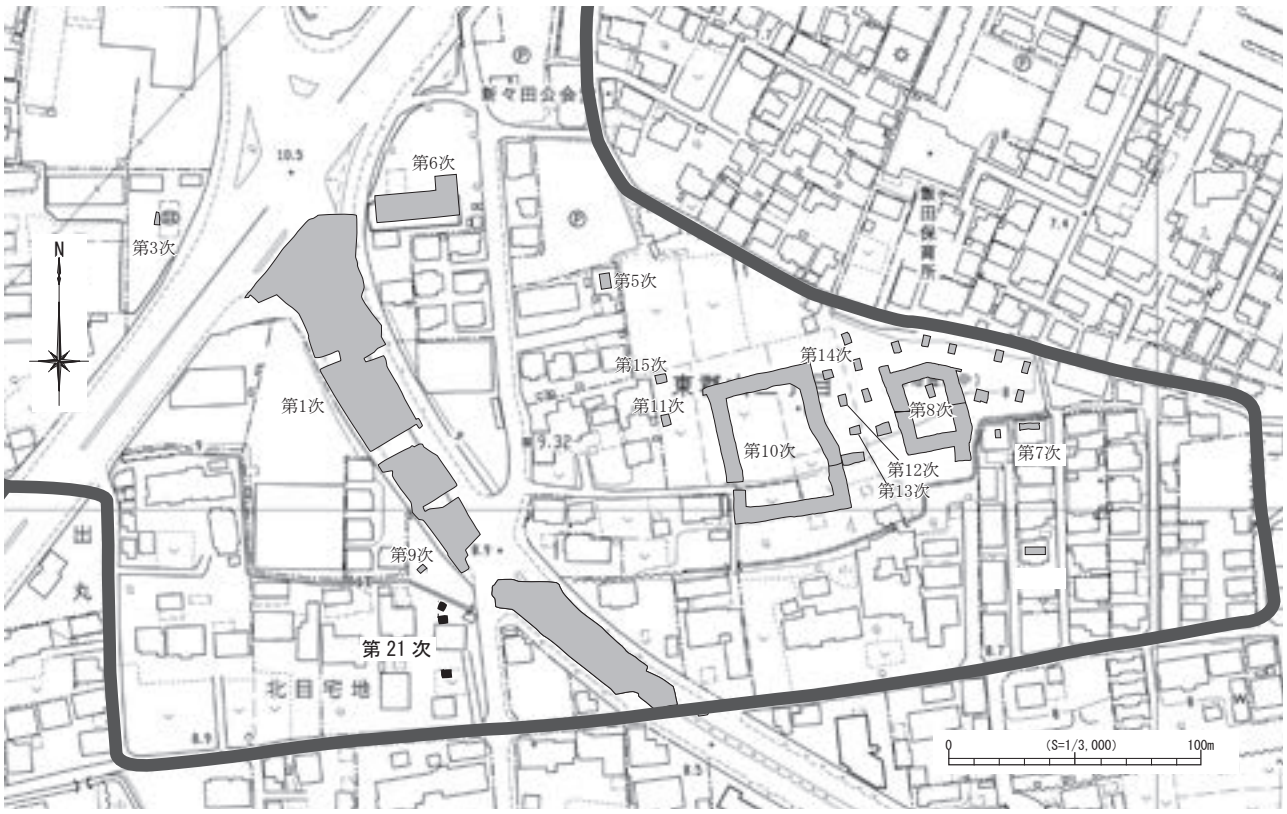
1. 調査要項

遺　跡　名　　北目城跡（01029）
調 査 地 点　　仙台市太白区郡山字北目宅地 34 番６・８・９
調 査 期 間　　１トレンチ：令和４年５月 23 日～５月 24 日
　　２トレンチ：令和４年８月 22 日～８月 25 日
調査対象面積　　168.92 ㎡
調 査 面 積　　33.0 ㎡
調 査 原 因　　L 型 RC 擁壁設置工事および建売住宅（３棟）新築工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員　　調査調整係　　主任　堀江洋介
　　主事　狩野佑介　　須貝慎吾
　　早川太陽　　吉田　大



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	北目城跡	城館跡、集落跡、水田跡	自然堤防	縄文～近世
2	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡	自然堤防	縄文～中世
3	西台畑遺跡	甕棺墓、集落跡	自然堤防	縄文～中世
4	長町六丁目遺跡	集落跡	自然堤防	奈良、平安
5	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
6	的場遺跡	集落跡	自然堤防	奈良、平安
7	籠ノ瀬遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安
8	欠ノ上Ⅰ遺跡	水田跡	後背湿地	古墳～中世
9	欠ノ上Ⅱ遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安
10	欠ノ上Ⅲ遺跡	集落跡、包含地	自然堤防	古墳～平安
11	富沢遺跡	集落跡、水田跡、散布地	後背湿地	旧石器～近世
12	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～奈良

第 48 図　北目城跡と周辺の遺跡

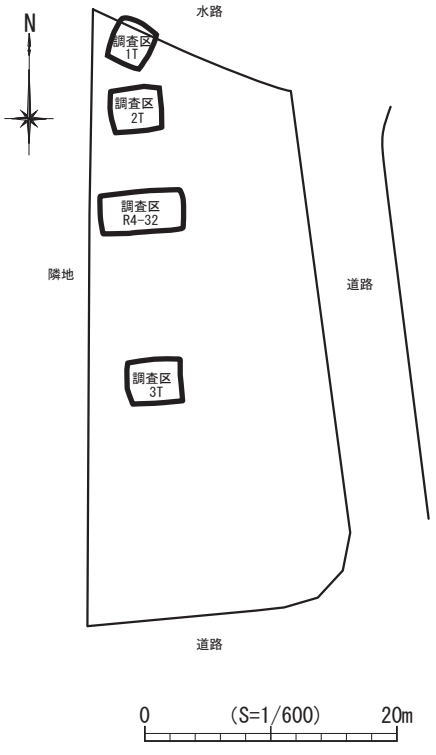


第 49 図　第 21 次調査区位置図

２．調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、L 型 RC 擁壁設置工事に伴い申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和４年３月７日付 R3 教生文第 108-519 号で通知）と、同じ対象地内で建売住宅（３棟）新築工事に伴い申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和４年８月２日付 R4 教生文第 104-173，175，176 号で通知）に基づき実施した。

調査では、先に L 型 RC 擁壁設置工事範囲を対象に 1T を設定し、3.0m × 3.0m の調査区を設定し調査を行った。まず重機により GL-0.8m まで掘り下げ、遺構検出作業を行った。その結果、東西方向の堀跡 SD1 と南北方向の堀跡 SD2 が確認された。その後、堀の肩と堆積土の落ち込みを確認するため、調査区北部と南西部の一部を GL-1.0m まで掘り下げた。



第 50 図　第 21 次調査区配置図

建売住宅（３棟）新築工事の 2T（１号棟）では、東西 4.0m ×南北 3.0m の調査区を設定し、基本層Ⅳ層（GL - 1.3m）で遺構検出作業を行った。南半部が攪乱で不明瞭であり、北壁断面で南北方向の SD2 堀跡の延長を確認した。3T（３号棟）では、東西 4.0m ×南北 3.0m の調査区を設定した。重機によりⅠ・Ⅱ層を除去後、基本層Ⅲ層（GL - 1.1 ～ 1.2m）上面で遺構検出作業を行った。その結果、土坑１基、ピット１基が検出された。また、同時並行で行っていた 2T と 3T との間に位置する調査区 R4-32 では SD2 堀跡が２号棟まで延長しないことが判明したため２号棟部の調査は省略している。

遺構の記録は、トータルステーションを用いて調査区平面図（S=1/20）および調査区断面図（S=1/20）を作製し、一眼レフデジタルカメラにより記録写真の撮影を行った。記録作業終了後、重機で埋め戻しを行い、調査を終了した。

３．基本層序

今回の調査では、既存建物の整地層であるⅠ層をはじめ、基本層は大別で４層、細別で５層確認した。遺構検出面であるⅢ層上面までの深さはGL－1.1mである。

Ⅰ　層：10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト。礫（φ１～２cm）、酸化鉄粒、炭化物粒を含む。層厚は約 29 ～ 52 cmである。調査前に解体された建物に伴う造成盛土である。

Ⅱａ層：10YR3/1 黒褐色粘土。炭化物粒、植物根、礫（φ 0.1 ～ 0.5 cm）を含む。層厚は約９～ 14 cmである。畑の耕作層である。

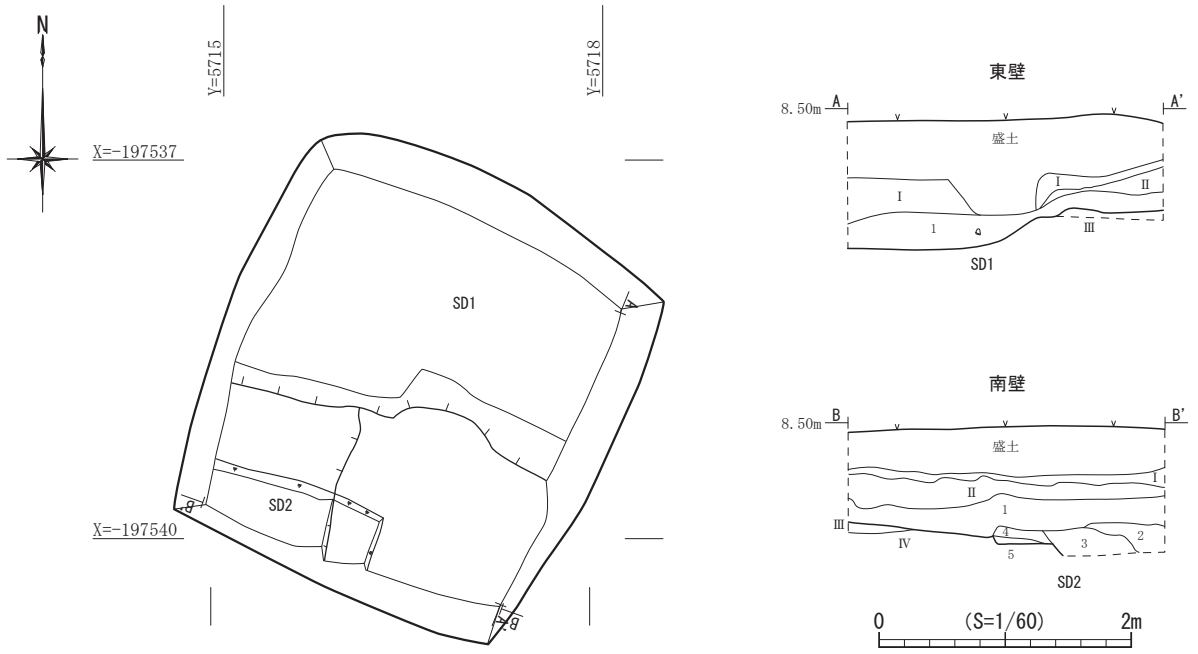
Ⅱｂ層：10YR4/4 褐色粘土質シルト丸礫（φ１～ 10 cm）、炭化物粒を含む。層厚は約 19 ～ 30 cmである。畑の耕作層である。

Ⅲ　層：10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。酸化鉄、炭化物粒を含む。Ⅳ層ブロックを少量含む。層厚は約 15 ～ 30 cmである。今回の調査の遺構検出面である。

Ⅳ　層：10YR7/6 明黄褐色粘土質シルト。酸化鉄多量に含む。層厚は約 10 cm以上である。

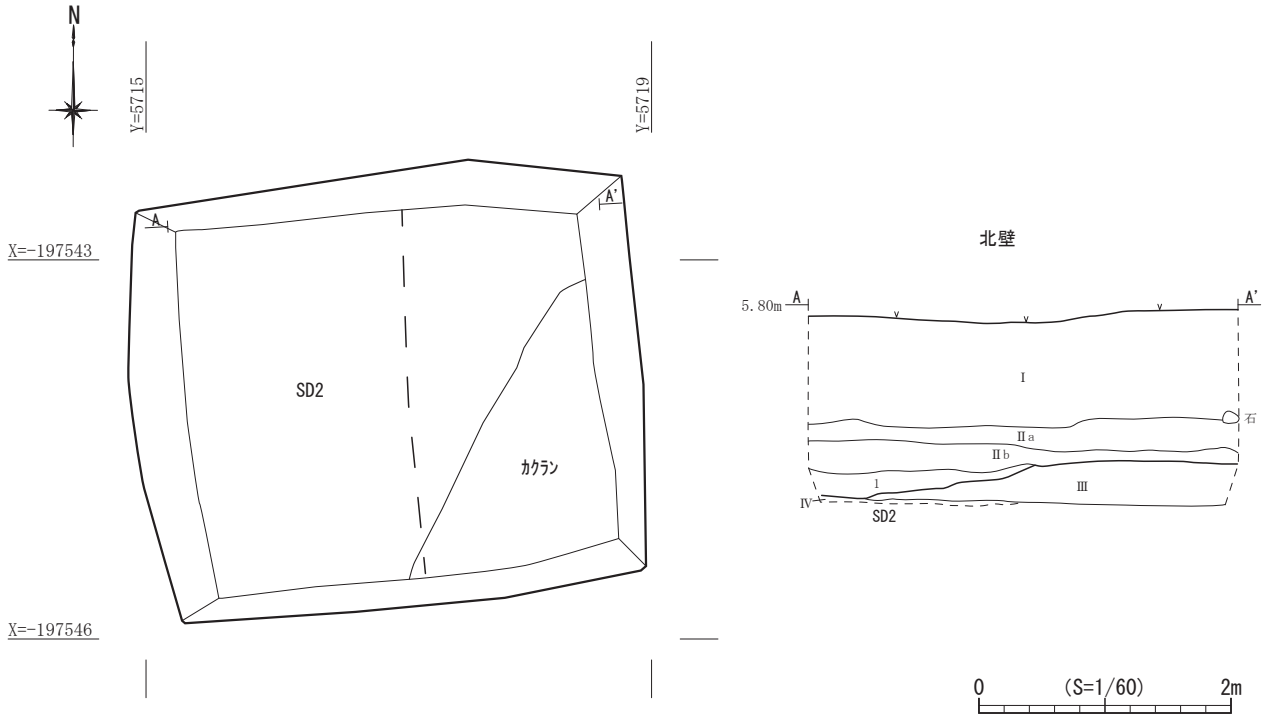
４．発見遺構と出土遺物

今回の調査では、基本層Ⅲ層上面で堀跡２条、土坑１基、ピット１基が検出された。遺物は土師質土器１点、陶磁器片多量、漆器椀１点が出土した。



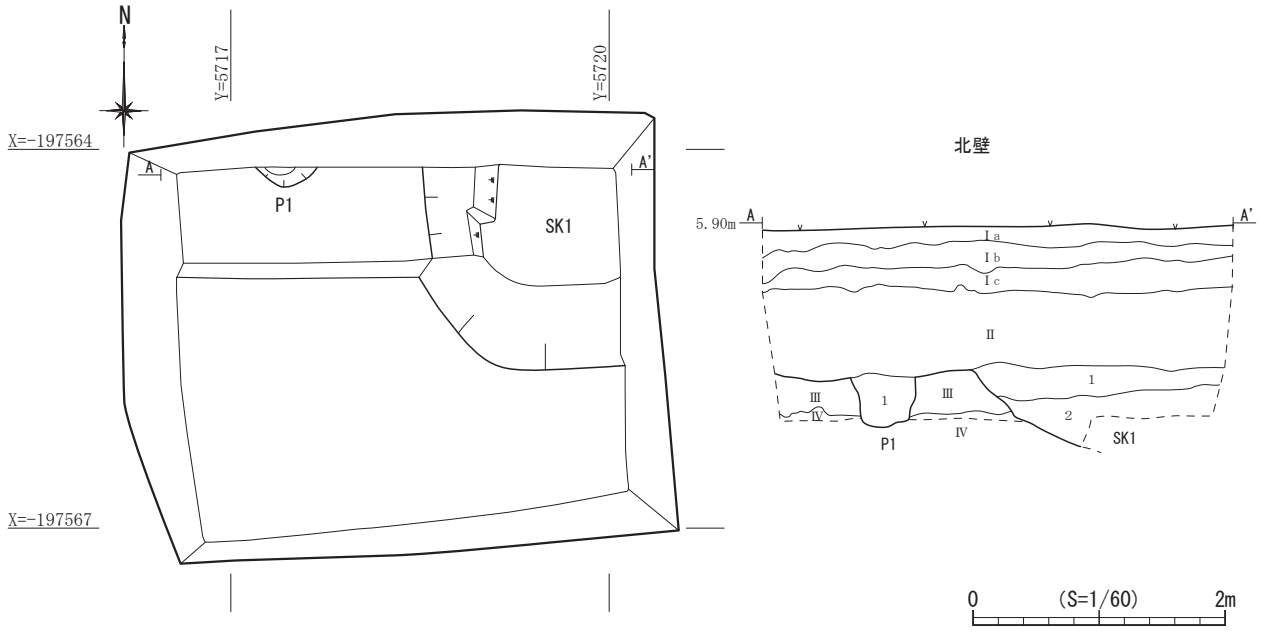
遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1	1	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	炭化物粒、酸化鉄粒を含む。
SD2	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物をまばらに、酸化鉄を含む。部分的にややグライ化。陶器を大量に含む。５～ 10 cmの礫を少量含む。
	2	10YR5/1 褐灰色	粘性シルト	炭化物・酸化鉄・地山ブロックをまばらに含む。
	3	10YR5/2 灰黄褐色	粘性シルト	炭化物・酸化鉄・地山ブロックを少量含む。
	4	10YR4/1 褐灰色	粘土	地山ブロック、炭化物を少量、酸化鉄をまばらに含む。
	5	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄、地山ブロックをまばらに含む。

第 51 図　1T 調査区平面・断面図



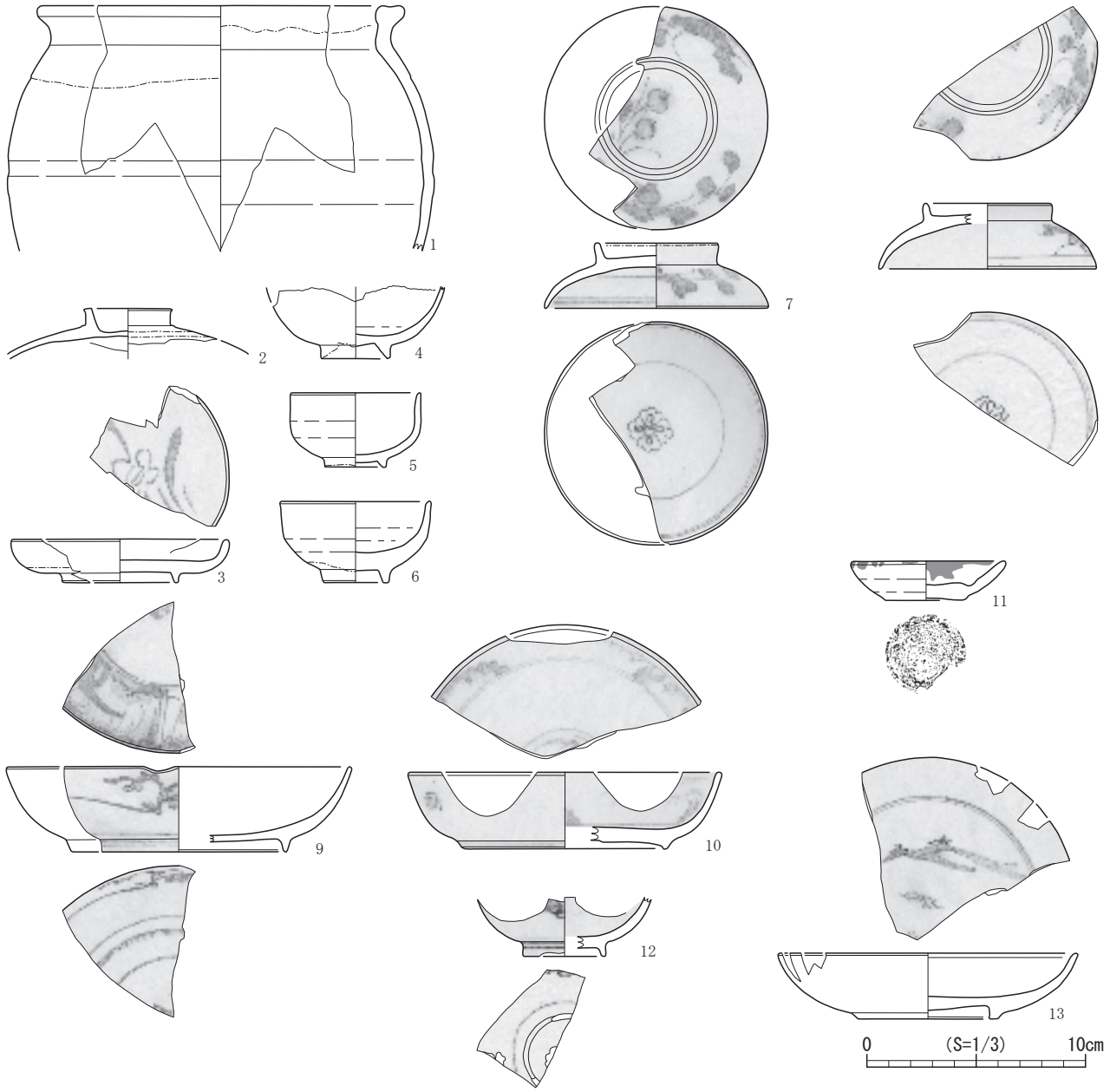
遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD2	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物をまばらに、酸化鉄を含む。部分的にややグライ化。陶器を大量に含む。5 ～ 10 ㎝の礫を少量含む。

第 52 図　2T 調査区平面・断面図



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SK1	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	地山ブロック多量、炭化物、礫（φ 0.1 ～ 0.5 ㎝）を含む
	2	10YR2/2 黒褐色	粘土	地山ブロック・酸化鉄多量含む。
P1	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	地山ブロックを多量含む。

第 53 図　3T 調査区平面・断面図



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	Ic-1	SD1	−	陶器	小型甕	(16.2)	−	(11.2)	鉄釉	鉄釉	大堀相馬？ 19c ？ 口：灰釉	23-1
2	Ic-2	SD1	1	陶器	鍋蓋	−	4.0	(2.3)	飛鉋に鉄釉	白濁釉	大堀相馬 19c 前～中	23-2
3	Ic-3	SD1	1	陶器	小型皿	(9.7)	(5.2)	2.0	灰釉 高台に墨書 緋色 焼焦	灰釉 鉄絵 草花文	19c 前葉	23-3
4	Ic-4	SD1	1	陶器	小坏	−	3.2	(3.3)	白濁釉	白濁釉	大堀相馬 18c 後半以降	23-4
5	Ic-5	SD1	3	陶器	小坏	5.8	2.8	3.4	白濁釉	白濁釉	大堀相馬 18c 後葉以降	23-5
6	Ic-10	SD1	1	陶器	小坏	(6.8)	(2.9)	3.7	灰釉	灰釉	大堀相馬 18c 後半	23-6
7	J-2	SD1	1	磁器	碗の蓋	10.2	5.6	3.0	染付 草文	染付 見込み：花文	肥前 18c 後半	23-7
8	J-3	SD1	1	磁器	碗の蓋	(10.0)	(5.8)	3.0	染付 草文	染付 見込み：花文	肥前 18c 後半	23-8
9	J-4	SD1	1	磁器	輪花皿	(15.6)	(9.8)	3.9	染付 蔓草文 高台：渦福	染付 柳文？ 見込み：五弁花	肥前 18c 前半　口：口錆	23-9
10	J-1	SD1	1	磁器	皿	(14.0)	(9.9)	3.5	染付 源氏香紋 蛇の目高台	染付 見込み：花弁文	瀬戸美濃 19 c 中頃	23-10
−	Ib-1	SD1	3	瓦質土器		−	−	−	穿孔１カ所 周縁部被熱	タール状付着物		24-1
−	Ic-6	SD1	1	陶器	人形（ネコ）	−	−	−	色絵		瀬戸美濃？ 19c 後半以降	24-2
−	Ic-7	SD1	3	陶器	擂鉢	−	−	−	鉄釉	鉄釉	堤 19c	24-3
−	Ic-8	SD1	1	陶器	中型甕	(30.0)	−	(11.8)	海鼠釉	海鼠釉 鉄釉 飴釉	堤 19c 中頃 焼成良好	24-4
−	Ic-9	SD1	−	陶器	擂鉢	−	−	−	鉄釉	鉄釉	堤 19c 植木鉢に転用	24-5
11	Ia-1	SK1	1	土師質土器	灯明皿	6.9	3.7	1.8	ロクロナデ 底：回転糸切	ロクロナデ	スス付着	24-6
−	Ic-13	SK1	1	陶器	擂鉢	−	−	−	鉄釉	鉄釉	堤 19c	24-7
12	J-6		Ⅱ	磁器	小型碗	−	(3.8)	(2.7)	染付 文様不明		肥前 18c? 漆接ぎの痕跡あり	24-8
13	J-5		Ⅱ	磁器	皿	(13.6)	6.4	3.0	染付 高台：兜巾	染付 山水文（遠山）	肥前 17c 中頃 畳付に砂付着	24-9
−	Ic-11	−	−	陶器	碗	−	−	−	鉄釉 ハケ目	鉄釉 ハケ目	肥前 17c 後半？	24-10
−	Ic-12		Ⅱ	陶器	鉢	(10.0)	(6.8)	-N21	鉄釉	鉄釉	産地不明 19c? 桶形 底：回転糸切り	24-11

第 54 図　第 21 次調査出土遺物

（１）堀跡

SD1 堀跡（第 51 図）

１トレンチのⅢ層上面で検出された。調査区の北半部に位置する東西方向の堀跡である。両端は調査区外へ延びる。調査区内での検出長は約 2.6m、上端幅約 1.9m 以上、下端幅約 1.7m 以上、掘り込み面からの深さは約 0.3m、方向は W-17° -N である。確認された堆積土は１層で、にぶい黄褐色シルトである。堆積土１層から近世瓦（平瓦）や近世陶器が多量に出土した。19 世紀前～中期の大堀相馬産、鍋蓋（第 54 図２）など 19 世紀代の陶磁器が出土していることから、遺構の埋没年代は、江戸時代後半以降と推測される。

SD2 堀跡（第 51・52 図）

１トレンチと２トレンチのⅢ層上面で検出された。調査区の南西部に位置する SD1 堀跡に直交する南北方向の堀跡である。SD1 堀跡に北側は切られているため、SD1 堀跡よりも古い。両端は調査区外へ延びる。検出長は約 4.2m、上端幅約 1.2 ～ 1.7m、下端幅約 0.8m 以上、深さは約 20 ㎝、方向は N-13° -S である。確認された堆積土は５層で、堆積土１・２層から近世陶器が多量に出土した。

（２）土坑

SK1 土坑（第 53 図）

３トレンチの東側で検出された。平面形状は円形を呈する。検出規模は南北約 1.6m、東西約 1.7m、深さは約 60 ㎝である。断面形状はやや開いた皿形を呈する。堆積土は２層である。遺物は土坑の壁面直上で土師質土器１点と漆器椀１点が共伴して出土した。土師質土器（第 54 図 11）に漆器椀が覆いかぶさった状態で検出され、漆器椀は内面の漆のみ残存していた。

（３）ピット

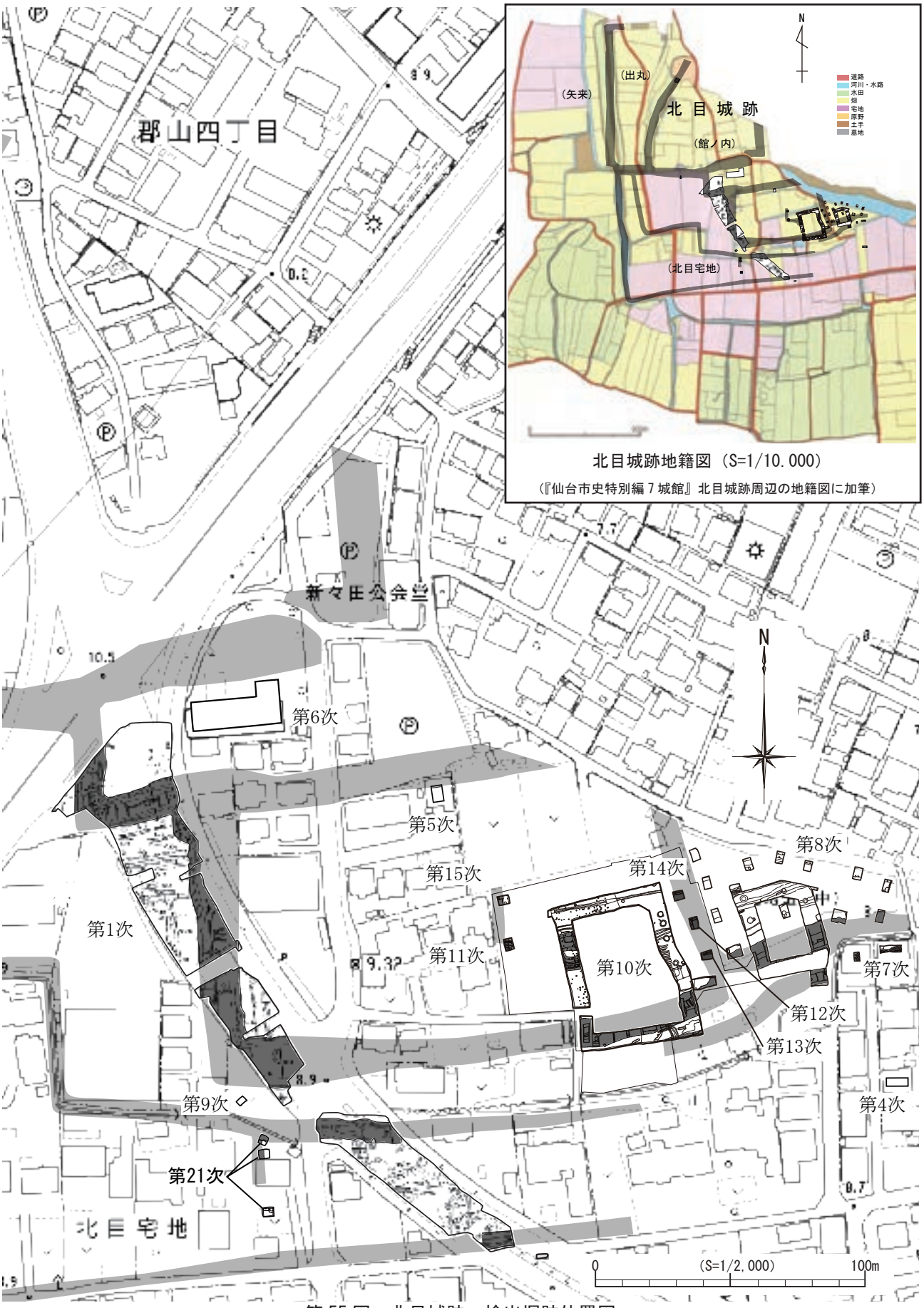
３トレンチの北側で検出された。平面形状は円形を呈し、規模は 42 ～ 50 ㎝、深さは 40 ㎝である。遺物は出土していない。

５．まとめ

今回の調査地点は、北目城跡の南側に位置している。今回の調査では堀跡２条が検出された。そのうち、堆積状況や位置関係から、SD1 堀跡は第１次調査の SD15 堀跡の延長部分と考えられる。SD2 堀跡は１・２トレンチで検出され、SD2 堀跡は SD1 堀跡よりも古く、SD2 堀跡が埋没した後に SD1 堀跡が構築されたと考えられる。さらに南側に延長が想定される３トレンチでは、堀跡の延長は確認できなかったため、堀跡が途切れることが考えられる。南側の３トレンチの調査では、土坑１基、ピット１基を確認した。出土遺物は、土坑堆積層から土師質土器灯明皿と漆器が共伴して出土している。周辺の調査例との繋がりについて、詳細は不明である。

参考文献

仙台市教育委員会 1995『北目城跡』仙台市文化財調査報告書第 197 号
仙台市史編さん委員会 2006『仙台市史　特別編７　城館』

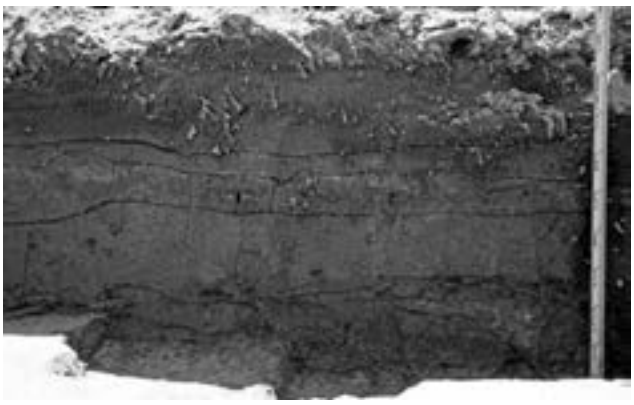


第 55 図　北目城跡　検出堀跡位置図

1.1T 全景遺構検出状況（東から）

２.1T 全景完掘状況（西から）

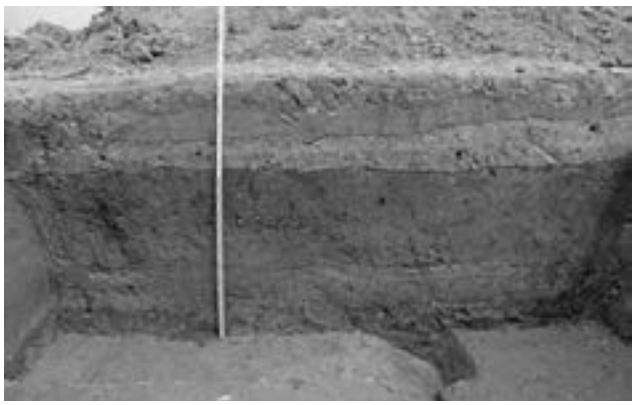
３.1T 東壁（西から）



４.1T 南壁断面（北から）

５.2T 北壁（南から）

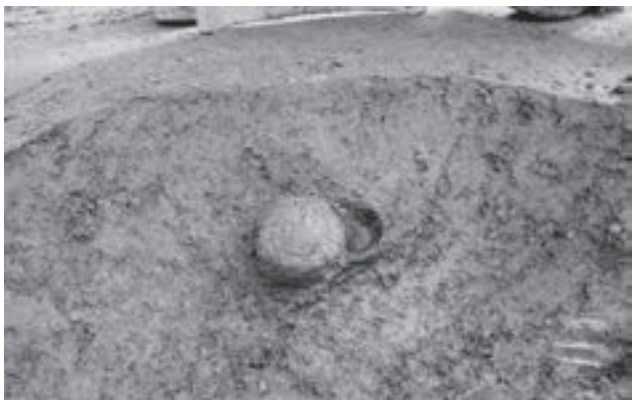
６.2T 全景写真（東から）



７.3T 北壁（南から）

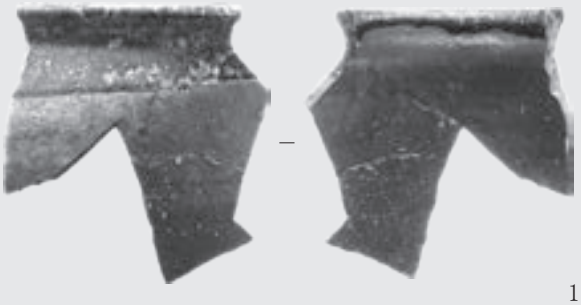
８.3T SK1 検出写真（東から）

写真図版 22　北目城跡第 21 次調査（１）

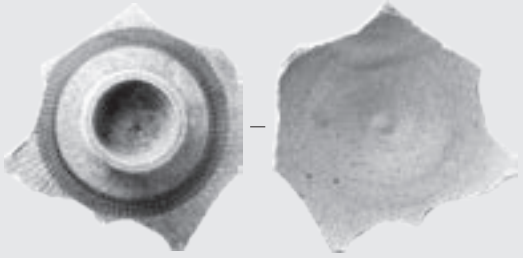


９.3T SK1 遺物出土状況（北東から）

10.3T 全景写真（東から）



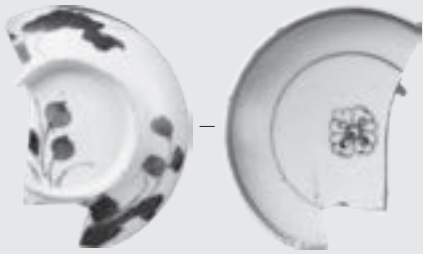
1
（第 54 図 1）



2
（第 54 図 2）

3
（第 54 図 3）

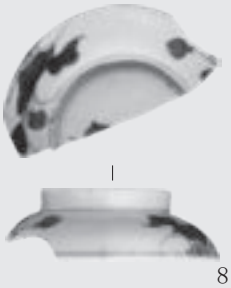
5
（第 54 図 5）



7
（第 54 図 7）

4
（第 54 図 4）

6
（第 54 図 6）



8
（第 54 図 8）

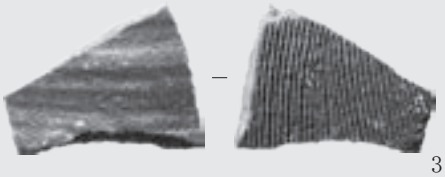
9
（第 54 図 9）

10
（第 54 図 10）

写真図版 23　北目城跡第 21 次調査（２）・出土遺物（１）

1
（第 54 図）

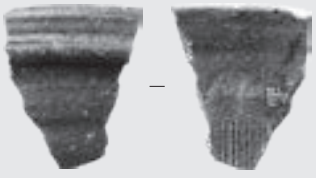
2
（第 54 図）



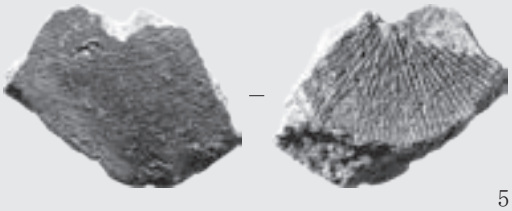
3
（第 54 図）

4
（第 54 図）

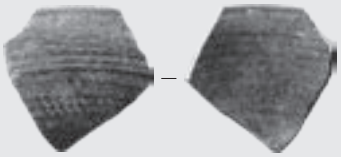
6
（第 54 図 11）



7
（第 54 図）



5
（第 54 図）



10
（第 54 図）

8
（第 54 図 12）

9
（第 54 図 13）

11
（第 54 図）

写真図版 24　北目城跡第 21 次調査出土遺物（２）

第７章　富沢遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

富沢遺跡は、仙台市南東部の太白区富沢、長町南、泉崎、鹿野等に広くまたがる、水田跡を中心とする大規模な複合遺跡である。遺跡北西側には青葉山丘陵、南西には高舘丘陵が東に向かって張り出し低地部と面している。また、青葉山丘陵南東縁には長町・利府構造線と呼ばれる活断層が北へ伸び、それによって低地と丘陵部はより明確に分けられる。青葉山丘陵と高舘丘陵の間から平野部に流れ込む名取川の下流域西半部は沖積平野となっており、左岸は郡山低地、右岸は名取低地と呼ばれる。

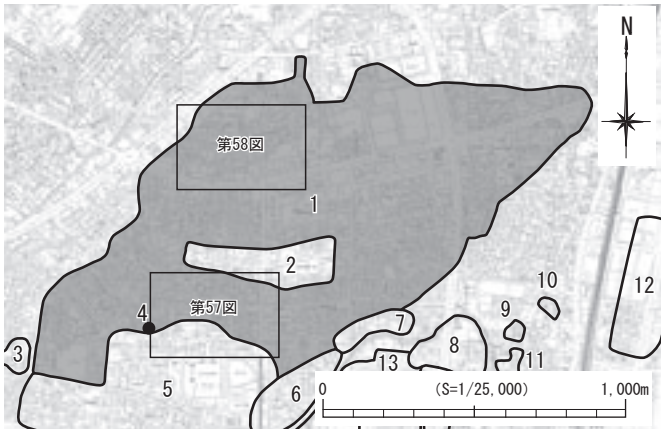
本遺跡は郡山低地の中央西寄りに位置し、仙台平野を南東方向に流れる広瀬川と、名取川の支流である笊川の自然堤防に挟まれた後背湿地上に立地する。地質や富沢遺跡における土地条件の変遷については、富沢遺跡第 15 次調査報告書が詳しいため、そちらを参照していただきたい。

富沢遺跡の発掘調査次数はこれまで 152 回を数え、弥生時代から近世にかけての水田が重層的に検出されている。特に 1987 ～ 1988 年の第 30 次調査では古代の条里型土地区画に関わる大畦畔（だいけいはん）の検出に加え、旧石器時代の遺構や遺物も発見されており重要である。今回の 153 次・155 次調査地点の周辺でも、それぞれ水田とともに多くの畦畔や溝などが検出され学史的に大きな成果を上げている。また、富沢遺跡周辺には数々の遺跡が分布しており通時的に見て生活に適した場所であったと考えられる。以下、主要な近辺の遺跡に触れ富沢の歴史環境を概観したい。

下ノ内浦遺跡：富沢遺跡の南に隣接する縄文時代早期～前期・後期・弥生～古代にかけての集落跡および水田跡である。日計式土器とともに竪穴遺構と７基の土壙が検出されていることから、縄文早期にも近辺では生活の痕跡が確認できる。また、平安時代と考えられる水田跡が検出されている。

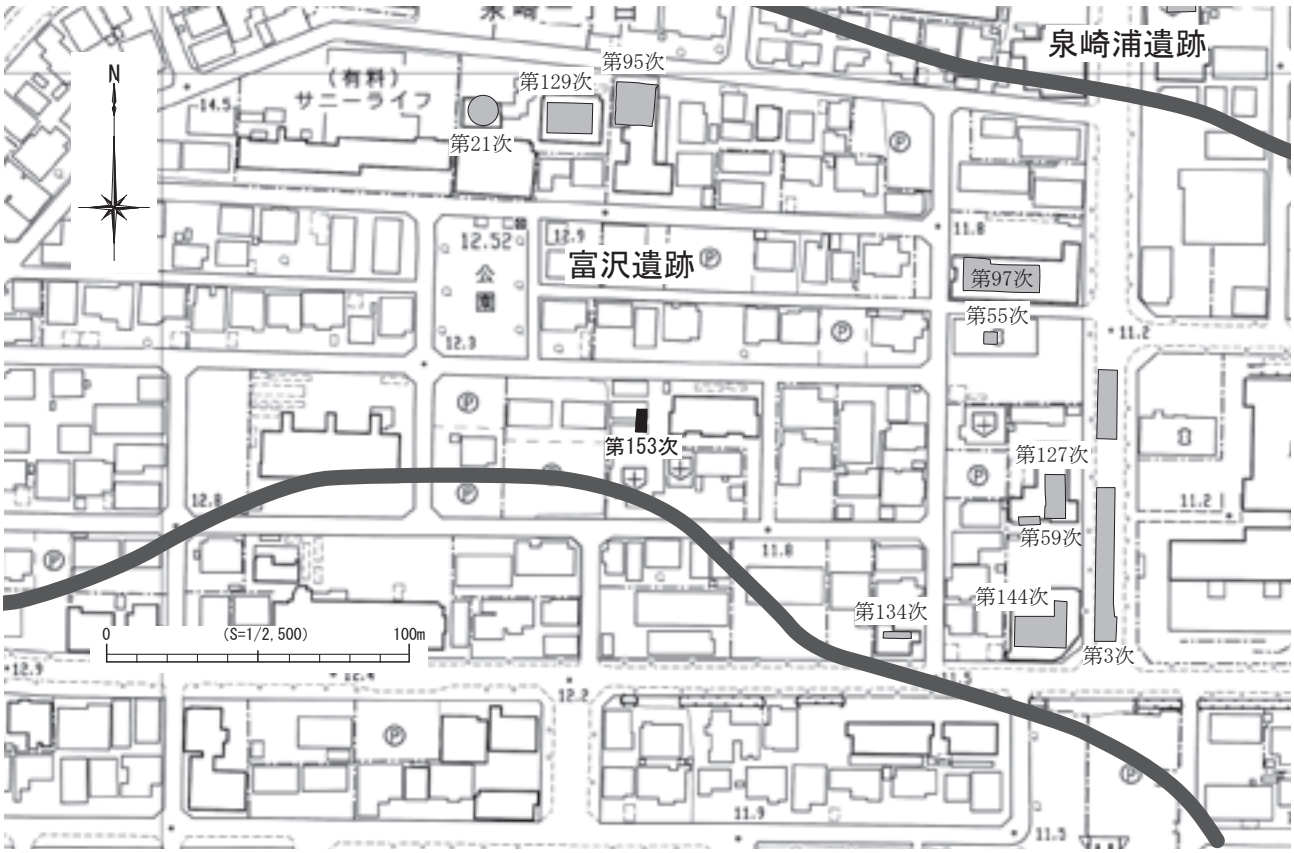
山口遺跡：富沢遺跡に南接、下ノ内浦遺跡に西接する縄文時代早期末～後期・弥生・中世にかけての集落跡および水田跡である。山口遺跡で検出された平安時代の水田跡は 10 世紀前半とされる火山灰層で覆われており、真北方向を基準とする大畦畔と直交する小畦畔によって区画される。この大畦畔は富沢遺跡の各調査でも検出されており、条里型土地割に関わる畦畔であると考えられている（平間　1991）。

泉崎浦遺跡：富沢遺跡のほぼ中心部に位置する、縄文～古墳・平安・近世にかけての集落跡および水田跡である。後背湿地と微高地に位置し、後背湿地側で弥生時代と平安時代の水田跡が検出された。畦畔は東西と南北が意識されているが、弥生時代の水田は水田規模、枚数などは不明である。

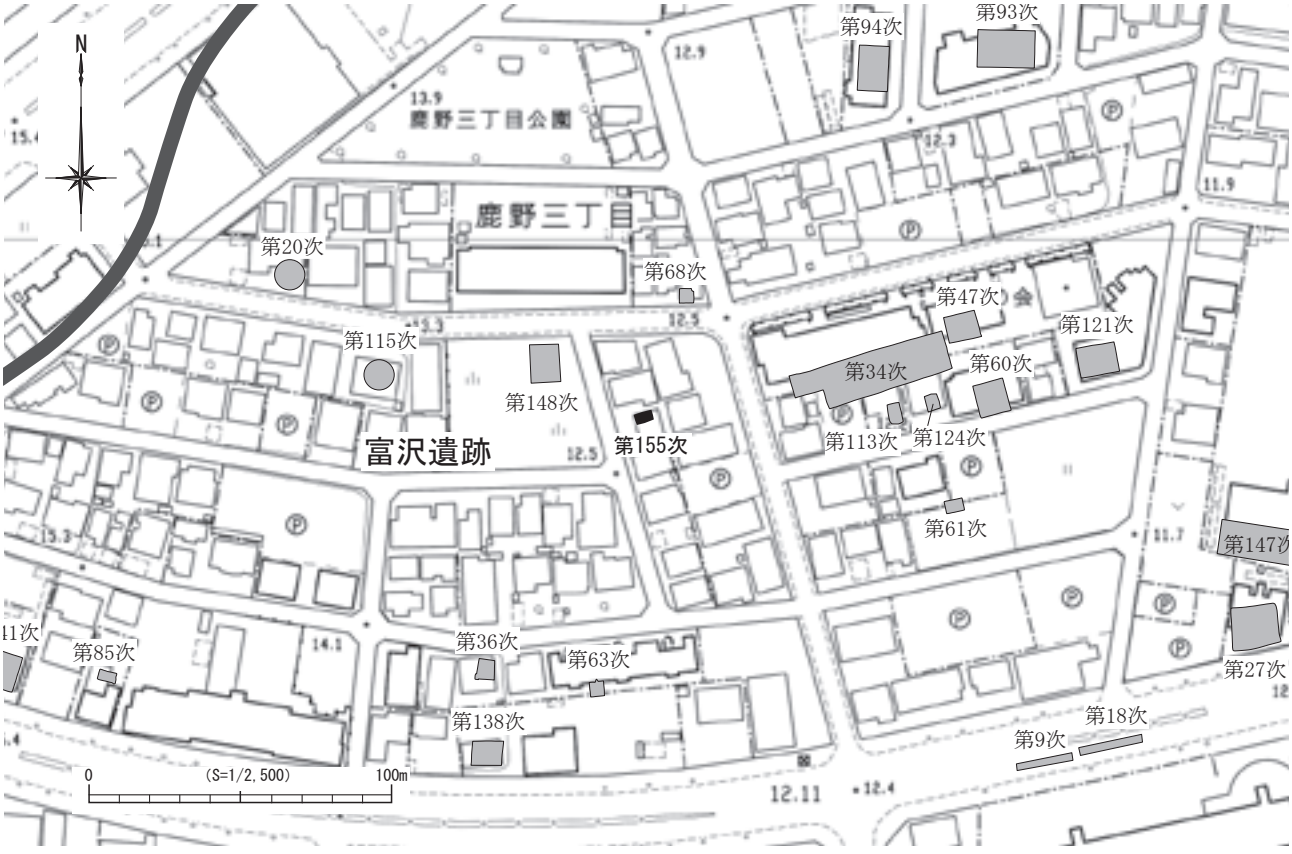


番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢遺跡	包含地、水田跡	後背湿地	後期旧石器～中世
2	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～古墳、平安、近世
3	富沢清水遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
4	教塚古墳	円墳	後背湿地	古墳
5	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～中世
6	下ノ内浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	縄文～中世
7	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代
8	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、古代～近世
9	長町南遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
10	長町六丁目遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
11	新田遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
12	長町駅東遺跡	包含地	自然堤防	弥生、古墳、古代
13	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～古代、近世

第 56 図　富沢遺跡と周辺の遺跡



第 57 図　第 153 次調査区位置図

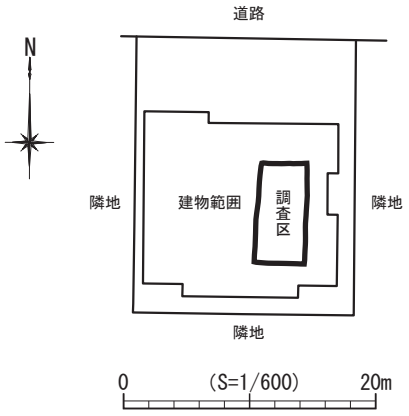


第 58 図　第 155 次調査区位置図

第２節　第 153 次調査

１．調査要項

遺　跡　名　　富沢遺跡（宮城県遺跡登録番号：01369）
調 査 地 点　　仙台市太白区泉崎一丁目 29-10
調 査 期 間　　令和４年３月 14 日～３月 24 日
調査対象面積　　203.08 ㎡
調 査 面 積　　約 32 ㎡
調 査 原 因　　共同住宅建築工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員　　主任　堀江洋介　　主事　早川太陽



第 59 図　第 153 次調査区配置図

２．調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和３年 10 月 26 日付で事業者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和３年 11 月１日付 R3 教生文第 108-475 号で通知）に基づき実施した。

調査では対象地内に東西 4.0m ×南北 8.0m の調査区を設定し、重機により盛土および現代の水田耕作土を除去した後、安全管理のため GL-1.5m を目安に中段をつけた。今回は調査可能面積と期間を考慮すると広範囲な面的調査が難しく断面観察での調査が主体であるため、土層観察用および排水用の側溝を調査区東側と南側、西側の一部に設定して掘削し、水田耕作土の有無を確認した。その後、古代のものと考えられる水田耕作土を掘削し、調査を終了した。

遺構の記録は調査区平面図および東壁、南壁土層断面図（S=1/20）を作製し、記録写真の撮影はデジタルカメラを用いて行った。記録作業終了後、重機により調査区を埋め戻し、調査を終了した。

３．基本層序

今回の調査では、盛土下に基本層を９層確認した。このうち、Ⅰ～Ⅳ層が水田耕作土である。遺構検出作業を行ったⅣ層上面までの深さは 1.6m である。

Ⅰ　層：10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。盛土前の水田耕作土である。下層ブロック（φ 10㎜）を層下面に少量含む。層厚は約８～ 16cm である。

Ⅱ　層：10YR2/1 黒色粘土。近世～近代の水田耕作土と推定される。層下面には凹凸がある。層厚は約０～ 14cm である。

Ⅲ　層：10YR3/2 黒褐色粘土。層下面に下層ブロックを少量含み、下層由来の灰白色火山灰ブロック（φ５～10㎜）を少量含むことから、灰白色火山灰降下以降の古代～中世の水田耕作土と推定される。層下面の凹凸は激しい。層厚は約２～ 16cm である。

Ⅳ　層：7.5YR3/1 黒褐色粘土。古代の水田耕作土である。層上面と層中に灰白色火山灰ブロック（φ 10㎜）を多く含む。層下面の凹凸は激しい。層厚は約６～ 27 ㎝である。

Ⅴ　層：10YR2/1黒色泥炭質粘土。植物遺体を含む。層厚は約0～30㎝以上である。

Ⅵ　層：10YR2/2 黒褐色粘土と 10YR4/6 褐色粘土の互層。部分的に層下面に 7.5YR3/1 黒褐色の細粒砂が帯状に含まれる。層厚は約４～ 20 ㎝以上である。

Ⅶ　層：10YR2/2 黒褐色泥炭質粘土。層中に植物遺体を少量含む。層厚は約 3 ～ 18 ㎝以上である。

Ⅷ　層：10YR6/2 灰黄褐色砂層。東壁両端と南壁の一部で確認された。埋没した自然流路を構成する土層である。層厚は約 30 ㎝以上である。

Ⅸ　層：10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。層中に植物遺体を少量含む。層厚は約 30 ㎝以上である。

４．発見遺構と出土遺物

今回の調査では平安時代の条里型土地区画に伴う大畦畔の検出が想定されていた。調査の結果、現代の水田を除いて水田耕作土が３面確認され、水田に伴う区画やその他の施設などは確認されなかった。遺物が出土していないため、詳細な時期の確定は困難である。想定される各水田耕作土の帰属時期は以下の通りである。

Ⅰ層（現代）―Ⅱ層（近世～近代？）―Ⅲ層（古代～中世？、灰白色火山灰降下以降）―Ⅳ層（古代）

（１）Ⅱ層水田耕作土

１．検出・遺存状況

畦畔などは確認されなかったが、土質と下面の凹凸により水田耕作土と判断された。東壁の一部と南壁で確認された。上層の耕作によって撹拌され壊されているため、遺存状況は極めて悪い。

２．耕作土

耕作土は黒色の粘土である。層厚は約 0 ～ 14 ㎝で一定でない。下面には凹凸がある。

（２）Ⅲ層水田耕作土

１．検出・遺存状況

畦畔などは確認されなかったが、土質と下面の凹凸により水田耕作土と判断された。調査区東壁、南壁ともに確認され、遺存状況はやや良好である。

２．耕作土

耕作土は黒褐色の粘土である。層厚は約 2 ～ 16㎝ で一定でない。下面の凹凸が激しい。下層を攪拌しているため、層中に灰白色火山灰ブロックを含む。

（３）Ⅳ層水田耕作土

１．検出・遺存状況

畦畔などは確認されなかったが、土質と下面の凹凸により水田耕作土と判断した。層上面に灰白色火山灰ブロックが良好に残存し、最大で径 30㎝ 前後の範囲を覆っている。耕作土の遺存状況も良好である。

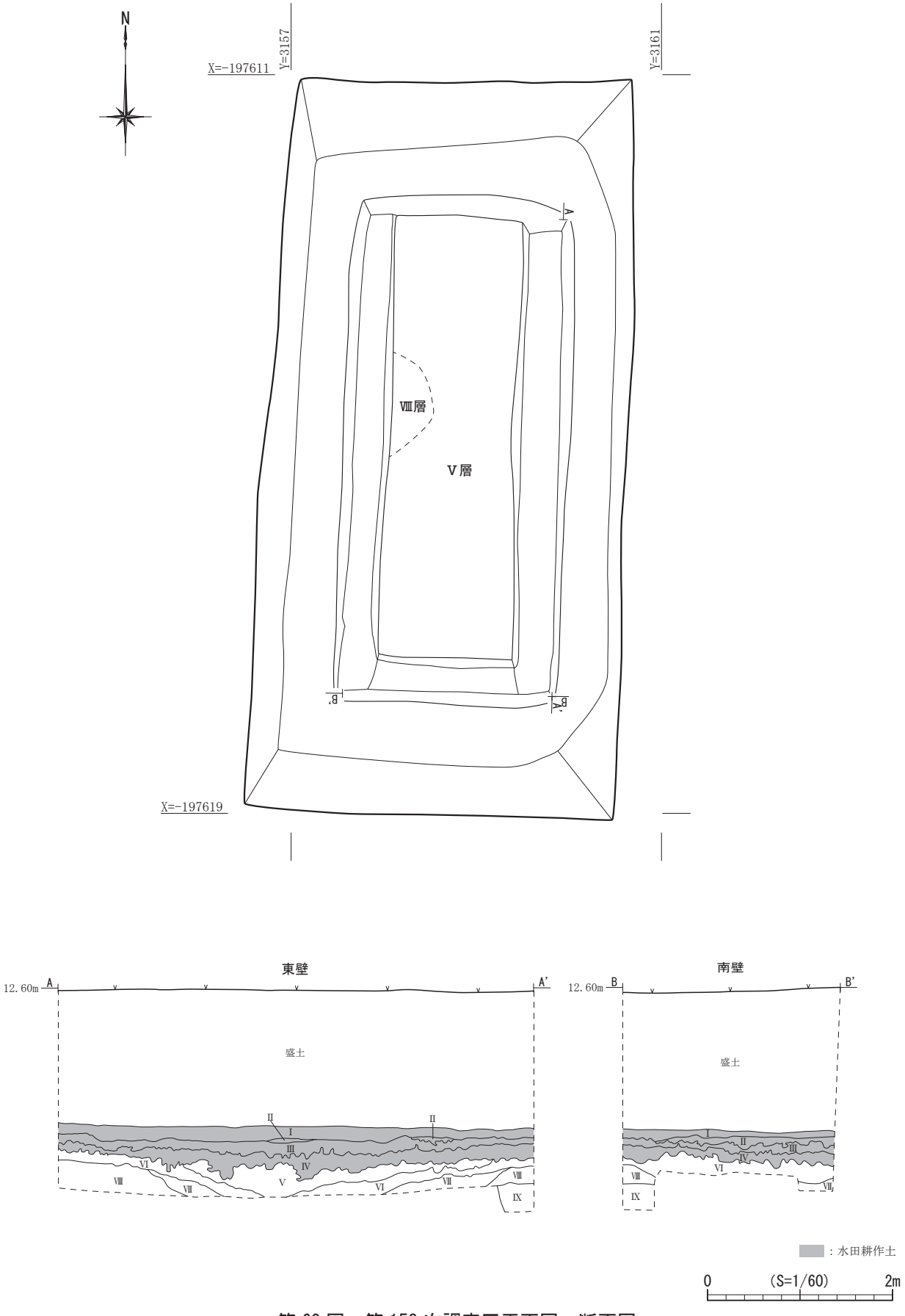
２．耕作土

耕作土は黒褐色の粘土である。層厚は 6 ～ 27㎝ で一定でない。下面の凹凸が激しい。

５．まとめ

今回の調査地点は富沢遺跡の南側に位置する。今回の調査では、盛土下に現代の水田を除いて水田耕作土が３面確認された。このうち、Ⅳ層上面の一部では灰白色火山灰が径 30 ㎝前後のブロック状に検出された。条里型土地区画に関わる大畦畔の検出が想定されていたが、畦畔やそれに伴う施設等は確認されなかったことから推定されている畦畔の区画が東西どちらかに傾いているか途切れていることが予想される。

また、今回の調査における断面観察の結果、粗砂主体の流路跡（Ⅷ層）が粘土（Ⅴ～Ⅶ層）の堆積によって埋没し平坦になった湿地状の環境にⅣ層～Ⅰ層の水田が構築されていることが明らかになった。富沢遺跡の中でも、南



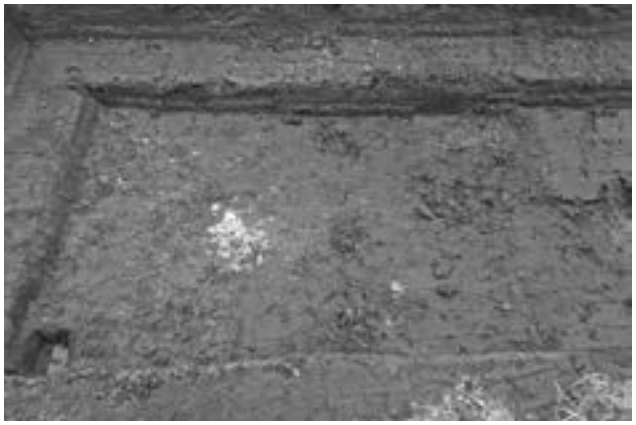
第 60 図　第 153 次調査区平面図・断面図

部の泉崎周辺の土地の形成過程と利用の一端が明らかになった点は、今回の調査の成果である。

【引用・参考文献】

仙台市教育委員会 2022 「第３章　富沢遺跡の調査」『穴田東窯跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 498 集 pp35 － 60

平間亮輔 1991 「（ウ）条里型土地割について」『富沢遺跡―第 30 次調査報告書第Ⅰ分冊―縄文～近世編』仙台市文化財調査報告書第 149 集　第 6 章第 3 節　pp366 ～ 371

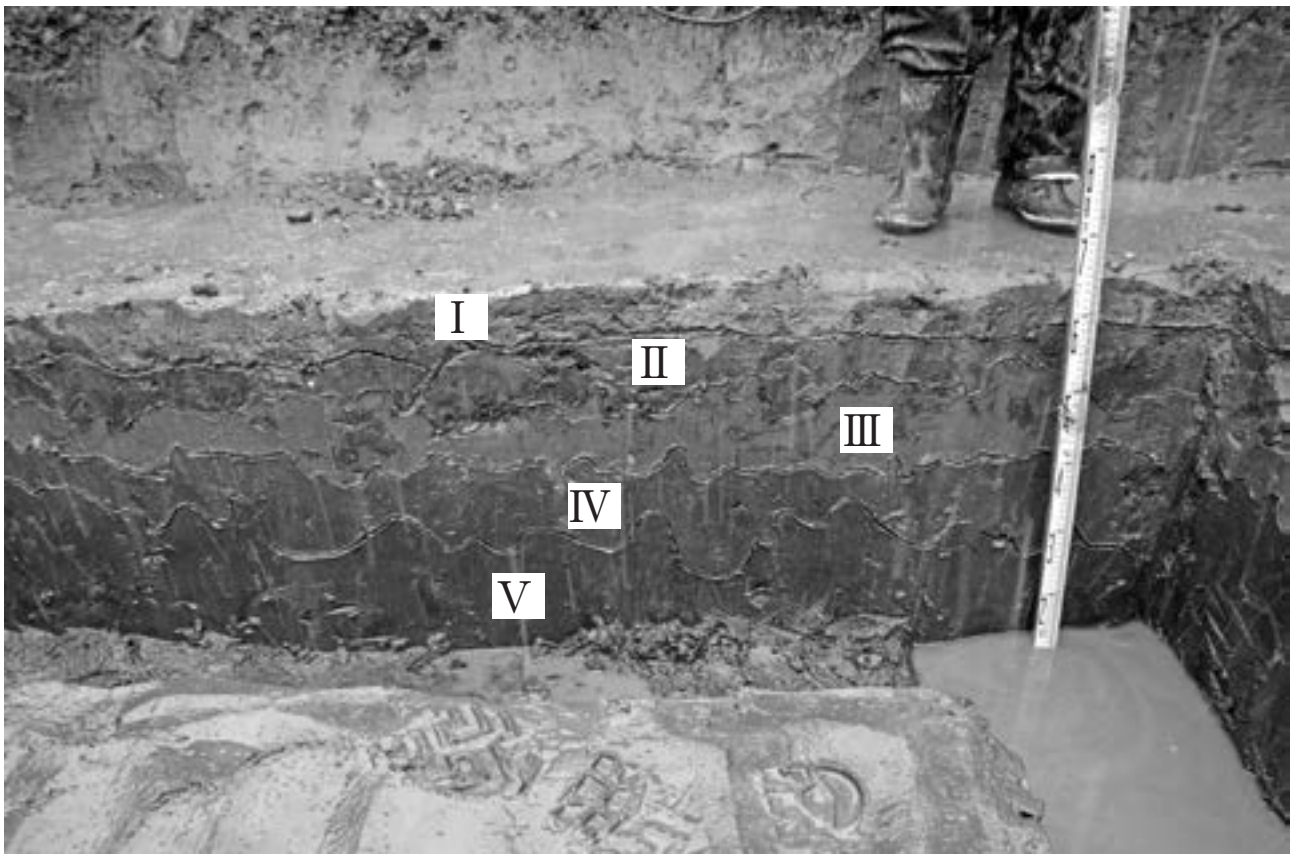


１．Ⅳ層水田耕作土　確認状況（東から）

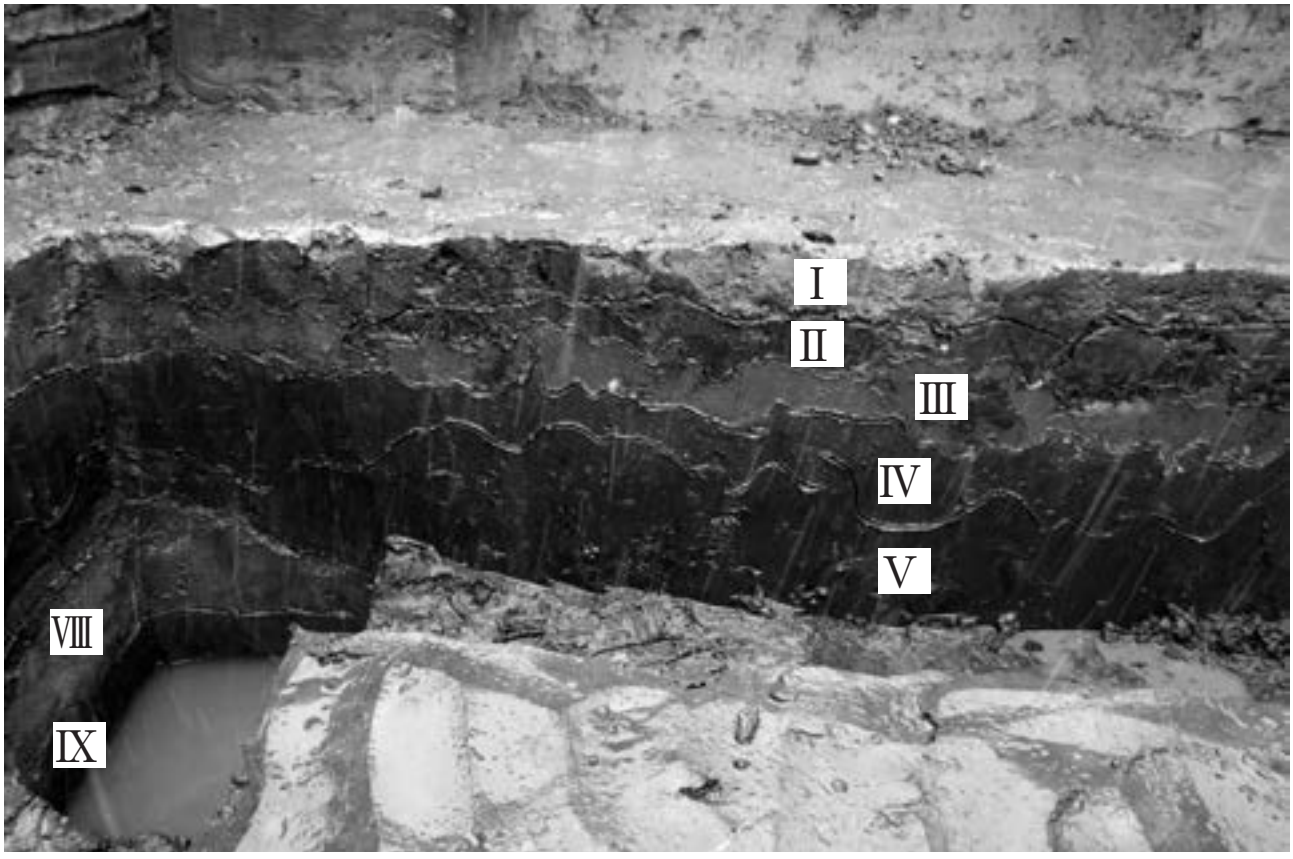
２．Ⅳ層水田耕作土　完掘状況（北から）

３．調査区東壁断面（西から）

写真図版 25　富沢遺跡第 153 次調査（１）

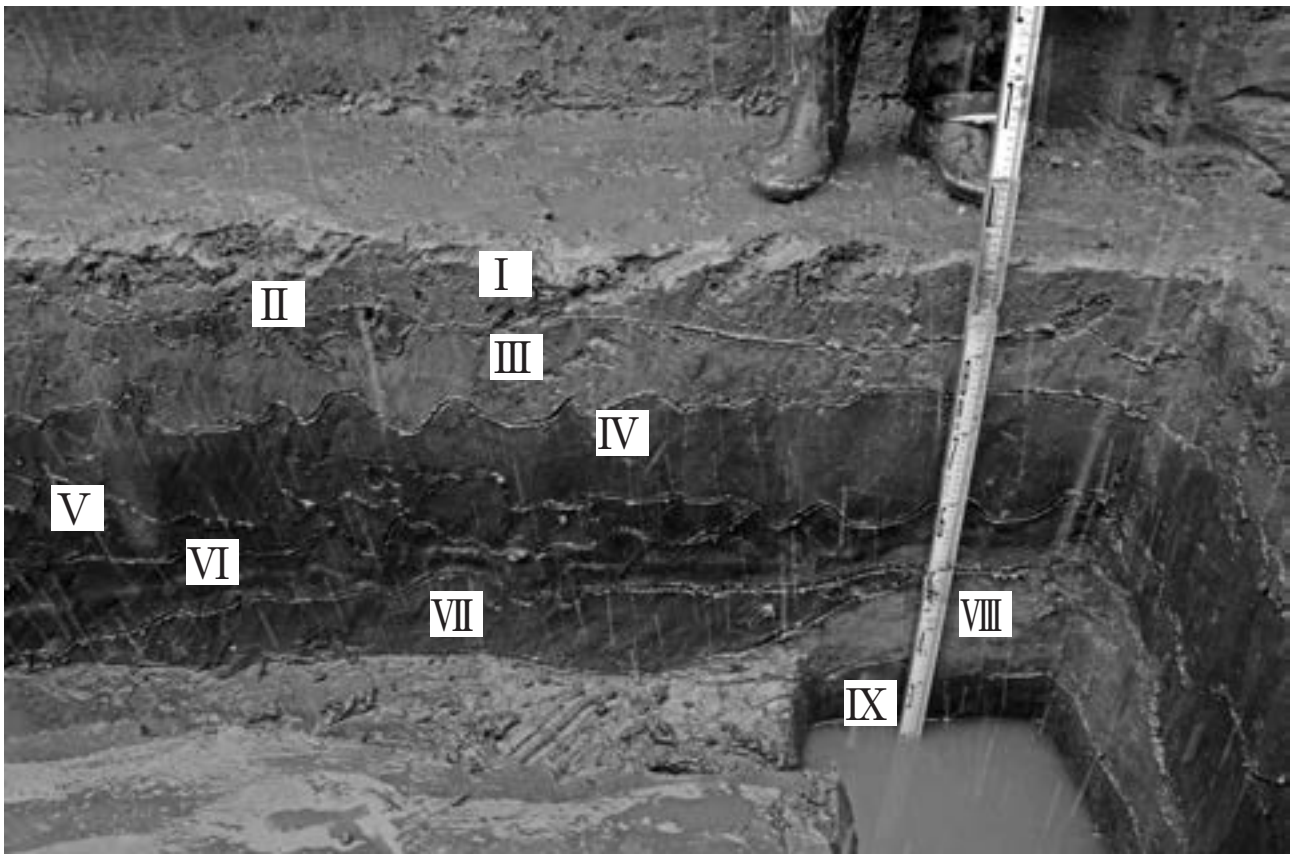


１．調査区南壁断面（１）（北から）

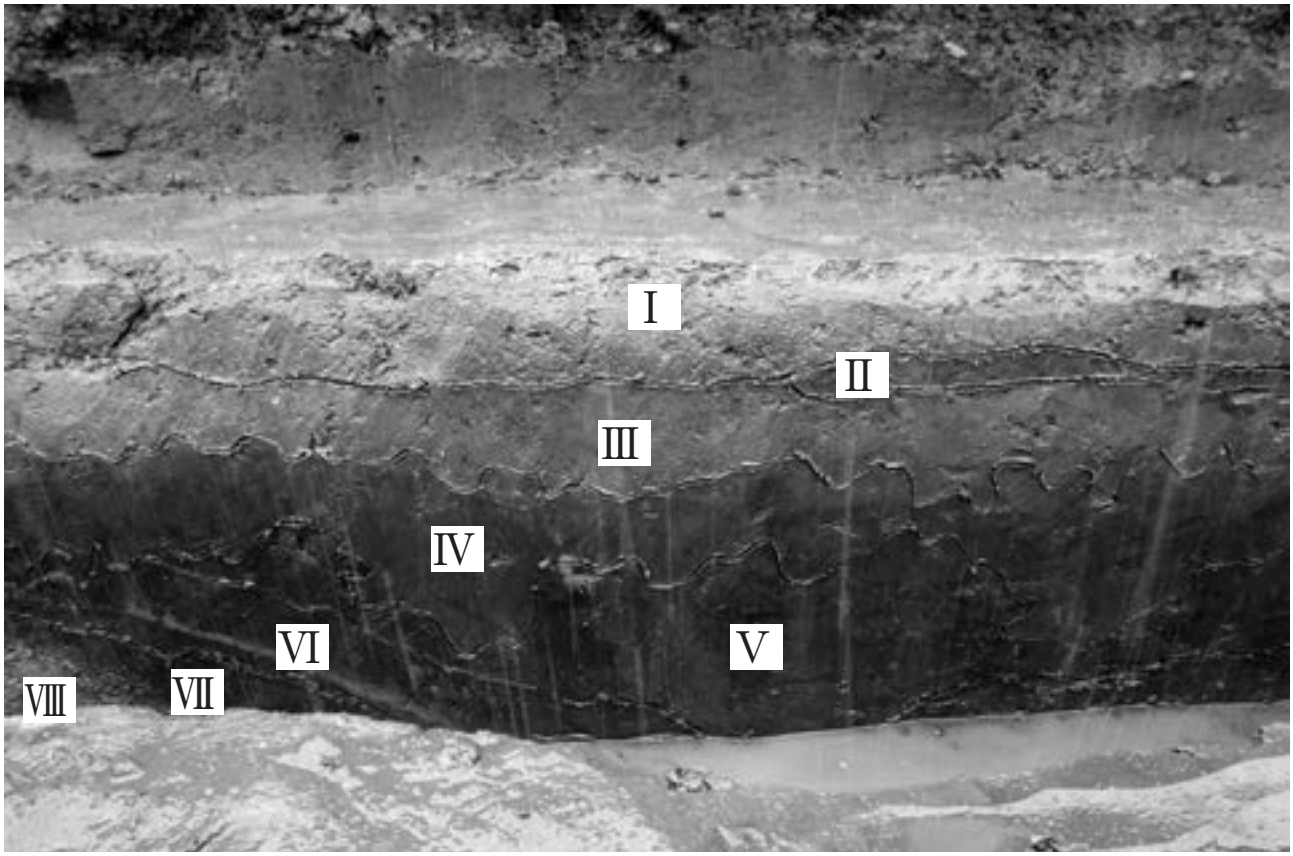


２．調査区南壁断面（２）（北から）

写真図版 26　富沢遺跡第 153 次調査（２）



１．調査区東壁基本層序（１）（西から）



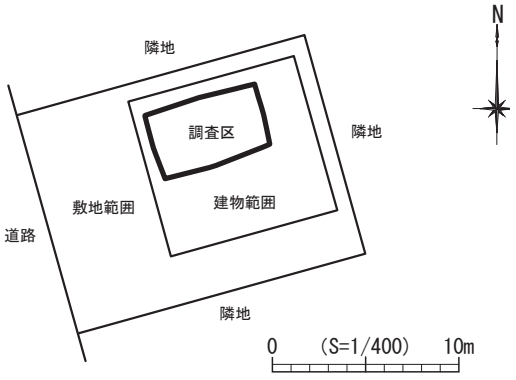
２．調査区東壁基本層序（２）（西から）

写真図版 27　富沢遺跡第 153 次調査（３）

第３節　第 155 次調査

１．調査要項

遺　跡　名　　富沢遺跡（宮城県遺跡登録番号：01369）
調 査 地 点　　仙台市太白区鹿野３丁目 222 番６
調 査 期 間　　令和４年６月１日～６月８日
調査対象面積　　79.12 ㎡
調 査 面 積　　18 ㎡
調 査 原 因　　事務所建築工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員　　主事　早川太陽　　山口沙織



第 61 図　第 155 次調査区配置図

２．調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和４年２月 15 日付で事業者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和４年２月 17 日付 R3 教生文第 109-145 号で通知）に基づき実施した。

調査では対象地内に東西 3.0m ×南北 6.0m の調査区を設定し、重機により盛土および現代の水田耕作土を除去した。今回は調査可能面積と期間を考慮すると広範囲な面的調査が難しく断面観察での調査が主体であるため、土層観察用および排水用の側溝を調査区北側と西側に設定して掘削し水田耕作土の有無を確認した。悪天候により調査区壁面が崩壊の恐れがあり危険と判断されたため、古代の水田耕作土を検出し完掘せず、下層確認のために一部分を深掘りし調査を終了した。

遺構の記録は調査区平面図および北壁断面図（S=1/20）を作製し、記録写真の撮影はデジタルカメラを用いて行った。記録作業終了後、重機により埋め戻し、調査を終了した。

３．基本層序

今回の調査では盛土下に基本層を大別で５層、細別で６層確認した。このうち、Ⅰ～Ⅳ層が水田耕作土である。遺構検出作業を行ったⅣ層上面までの深さは約 1.2m である。

Ⅰ　層：10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。盛土前の水田耕作土である。小円礫（φ 10 ㎜）を少量含む。層下面に酸化鉄が大量に集積する。層厚は約 12 ～ 24cm である。

Ⅱ　層：10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。近代の水田耕作土と推定される。層下面には若干の凹凸がある。層厚は約０～ 19cm である。

Ⅲ　層：10YR2/1 黒色粘土。近世の水田耕作土である。層下面には凹凸がある。層厚は約５～ 17cm である。

Ⅳ　層：2.5Y3/1 黒褐色粘土。古代の水田耕作土である。層下面には凹凸があるが部分的に平坦である。層中に灰白色火山灰ブロックを少量含む。また、層下面に下層ブロックを少量含む。層厚は約４～ 29 ㎝である。

Ⅴａ層：10YR1.7/1黒色泥炭質粘土と10YR3/1黒褐色泥炭質粘土の互層。植物遺体を層中に大量に含む。層厚は約35㎝である。

Ⅴｂ層：10YR6/2 灰黄褐色泥炭質粘土。植物遺体を層中に大量に含む。層厚は約 15 ㎝以上である。

４．発見遺構と出土遺物

今回の調査では、平安時代の条里型土地区画に伴う大畦畔の検出が想定されていた。調査の結果現代の水田を除いて水田耕作土が３面確認され、水田に伴う区画やその他の施設などは確認されなかった。遺物はⅢ層水田耕作土中から急須の把手が出土した。想定される各水田耕作土の帰属時期は以下の通りである。以下、調査対象である近世以前の水田耕作土について詳述する。

Ⅰ層（現代）―Ⅱ層（近代？）―Ⅲ層（近世？）―Ⅳ層（古代）

（１）Ⅲ層水田耕作土

１．検出・遺存状況

断面観察によって確認された。土質と下面の凹凸により水田耕作土と判断された。調査区東壁、南壁ともに確認され、遺存状況はやや良好である。北壁の一部で水田耕作土が途切れてⅢ層との境目が確認された部分があり、擬似畦畔Ｂであった可能性があるが面的には確認できなかった。

２．耕作土

耕作土は黒褐色の粘土である。層厚は約６～ 27cm で一定でない。下面には凹凸がある。

３．出土遺物

Ⅲ層水田耕作土の検出の際に陶器の急須把手部分が１点出土した。詳細な年代や産地は不明である。

（２）Ⅳ層水田耕作土

１．検出・遺存状況

畦畔などは確認されなかったが、土質と下面の凹凸により水田耕作土と判断された。層中に灰白色火山灰ブロックを含む。耕作土の遺存状況は良好である。

２．耕作土

耕作土は黒褐色の粘土である。層厚は６～ 27cm で一定でない。下面には凹凸がある。

３．水田面の標高と傾斜

全体的に南西方向に傾斜している。標高は 10.798 ～ 11.132m である。

５．まとめ

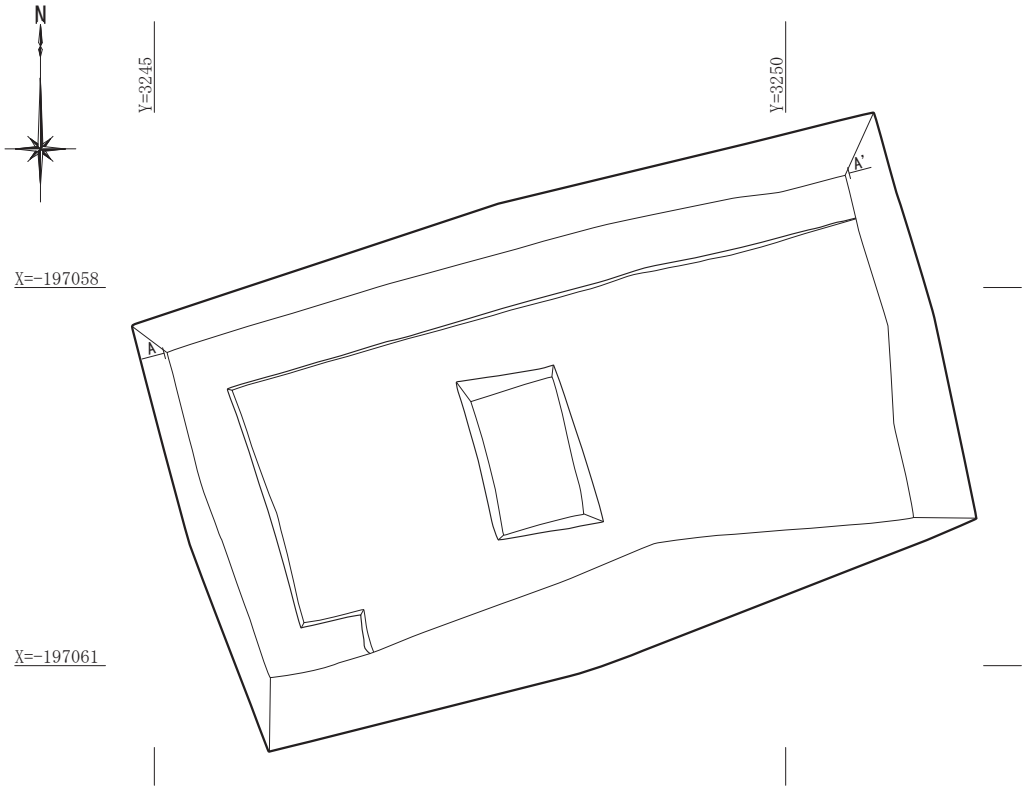
今回の調査地点は富沢遺跡の北西側に位置する。今回の調査では水田耕作土が現代の水田を除き３面確認された。条里型土地区画に関わる大畦畔の検出が想定されていたが、水田耕作土のみが確認され畦畔は確認されなかったことから、畦畔は推定されているラインよりも東西に傾いているか途切れている可能性が高い。推定される土地割は第 63 図の通りである。

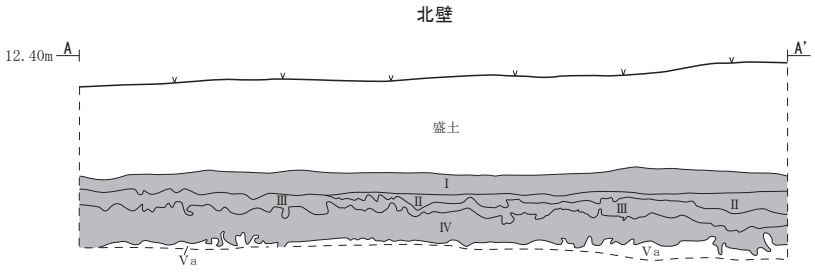
また、古代より古い時期の水田跡は確認されなかった。調査地点の北西約 10m の地点で行われた第 148 次調査では古墳時代以前の水田跡が確認されているが、今回の調査地点ではその様相と異なっているため、この地点までは水田が形成されなかったと推測される。

【引用・参考文献】

仙台市教育委員会 2022 「第３章　富沢遺跡の調査」『穴田東窯跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 498 集 pp35 － 60

平間亮輔 1991 「（ウ）条里型土地割について」『富沢遺跡―第 30 次調査報告書第Ⅰ分冊―縄文～近世編』仙台市文化財調査報告書第 149 集　第６章第３節　pp366 ～ 371

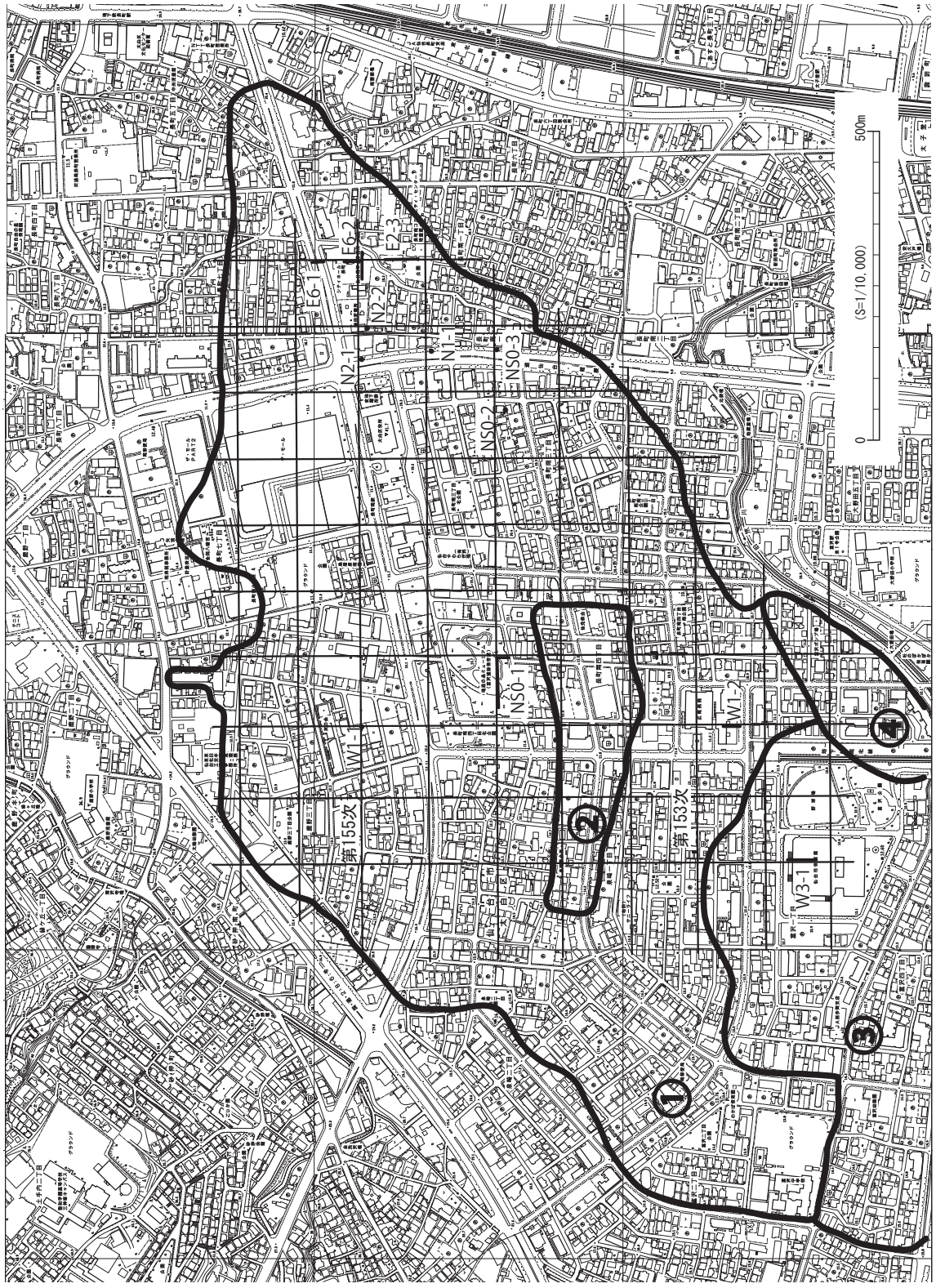




：水田耕作土

0　(S=1/60)　2m

第 62 図　第 155 次調査区平面・断面図

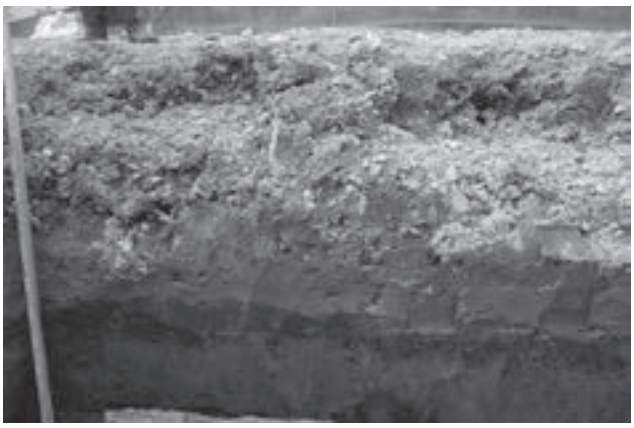


第 63 図　富沢遺跡における条里型土地区画復元図

１．Ⅳ層水田耕作土　検出状況（西から）

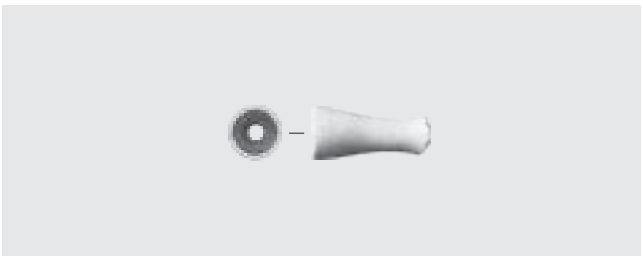
２．調査区北壁断面（１）

３．調査区北壁断面（２）



４．調査区北壁断面（３）

５．調査区西壁断面

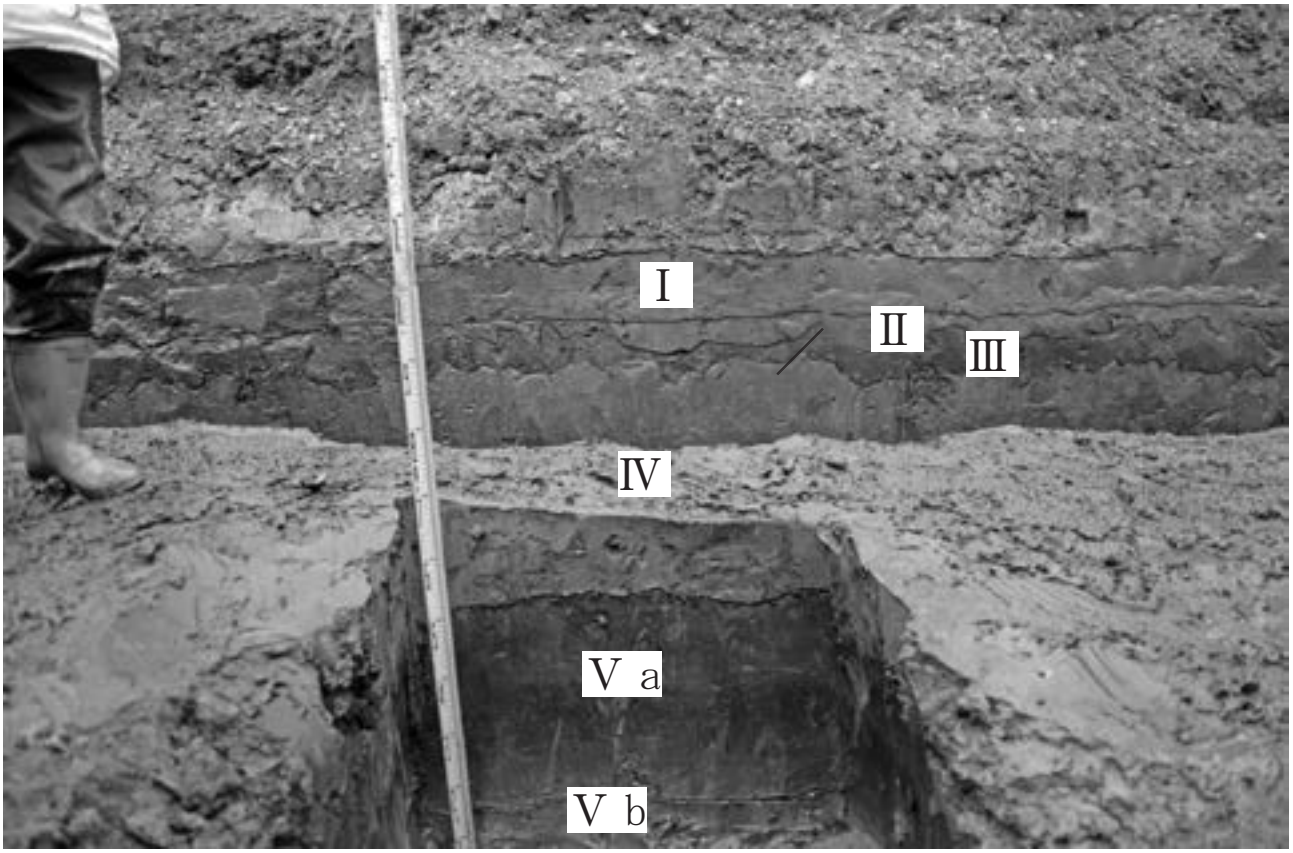


図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）		
						口径	底径	長さ
－	Ic-1		Ⅲ	陶器	急須	2.1	－	(4.7)

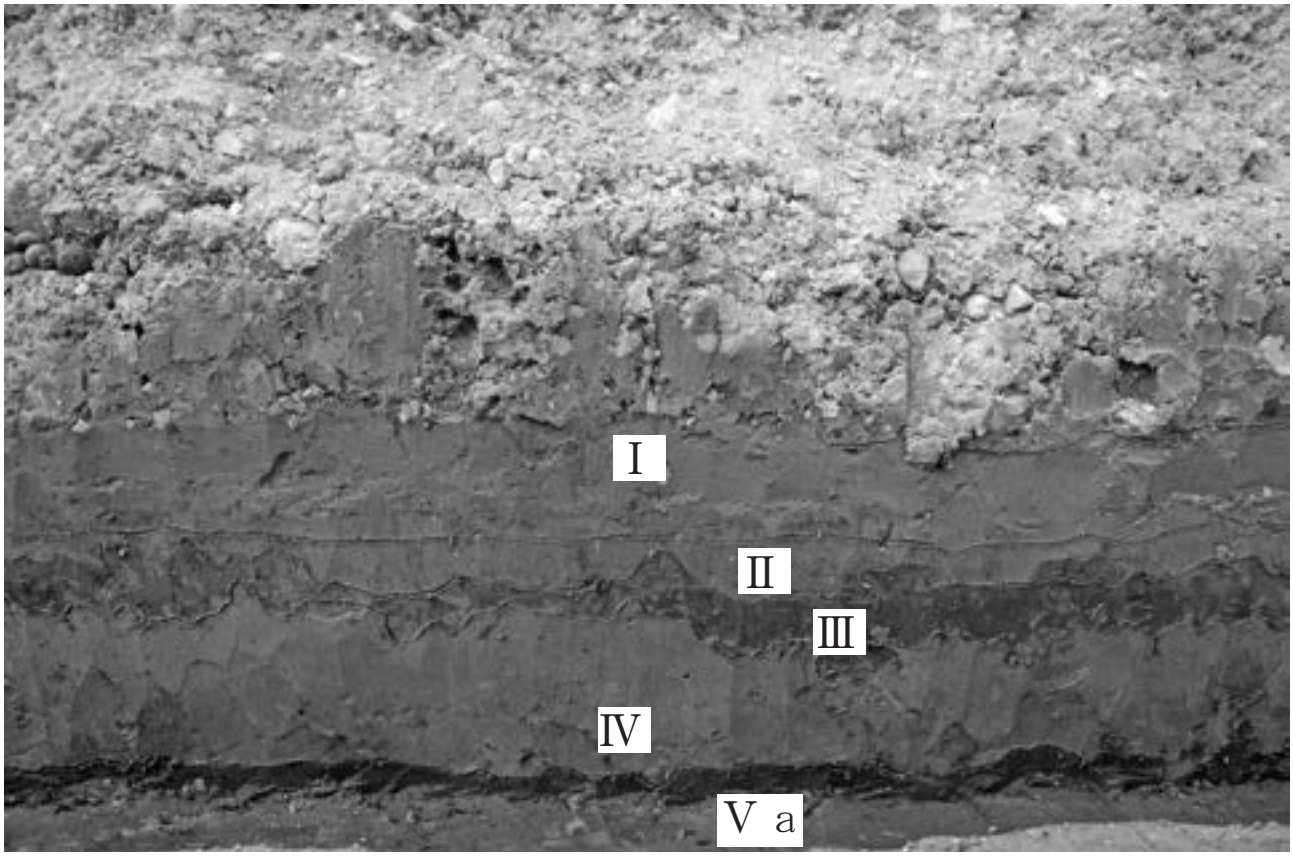
外面	内面	備考	写真図版
－	－	把手 産地・時期不明	28-6

６．富沢遺跡第 155 次調査出土遺物

写真図版 28　富沢遺跡第 155 次調査（１）・出土遺物



１．調査区北壁基本層序



２．調査区西壁基本層序

写真図版 29　富沢遺跡第 155 次調査（２）

第８章　富沢館跡の調査

第１節　遺跡の概要

富沢館跡は仙台市太白区富沢字舘、熊野前に所在する。仙台市の南部、地下鉄南北線富沢駅から西へ約 700m に位置し、名取川の支流の笊川によって形成された標高約 14 ～ 18m の自然堤防上に立地する。

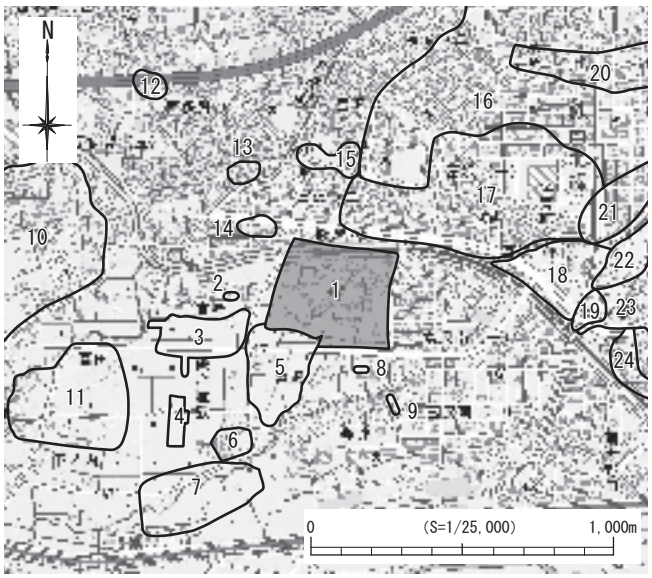
縄文時代では、後期中葉の宝ヶ峰式の時期を主体として、竪穴住居跡などの遺構が確認されており、縄文土器のほか土偶やスタンプ形土製品なども出土している。

古代では炉跡を伴う竪穴遺構が複数確認され、鉄滓が多数出土した竪穴遺構もあることから鍛冶関連の遺構であると考えられている。これらの時期は９世紀から 10 世紀と推定される。また同様の遺構は、隣接する鍛冶屋敷 A 遺跡、鍛冶屋敷前遺跡などでも確認されており、鍛冶屋敷 A 遺跡からは「謹解　申請稲事　合□□」「大田部」などと刻書された砥石が出土している（仙台市教育委員会 2018）。

中世になると、この地域は国人領主粟野氏の支配下となり、城館が造営される。この館の詳細な造営時期や造営者は不明だが、入生田家に残る『入生田家之故実』と『館記』においては、北目城主であった粟野大膳の造営によるものとされ、地域の伝承では粟野氏家臣の富沢伊賀守が居住したと伝わる。

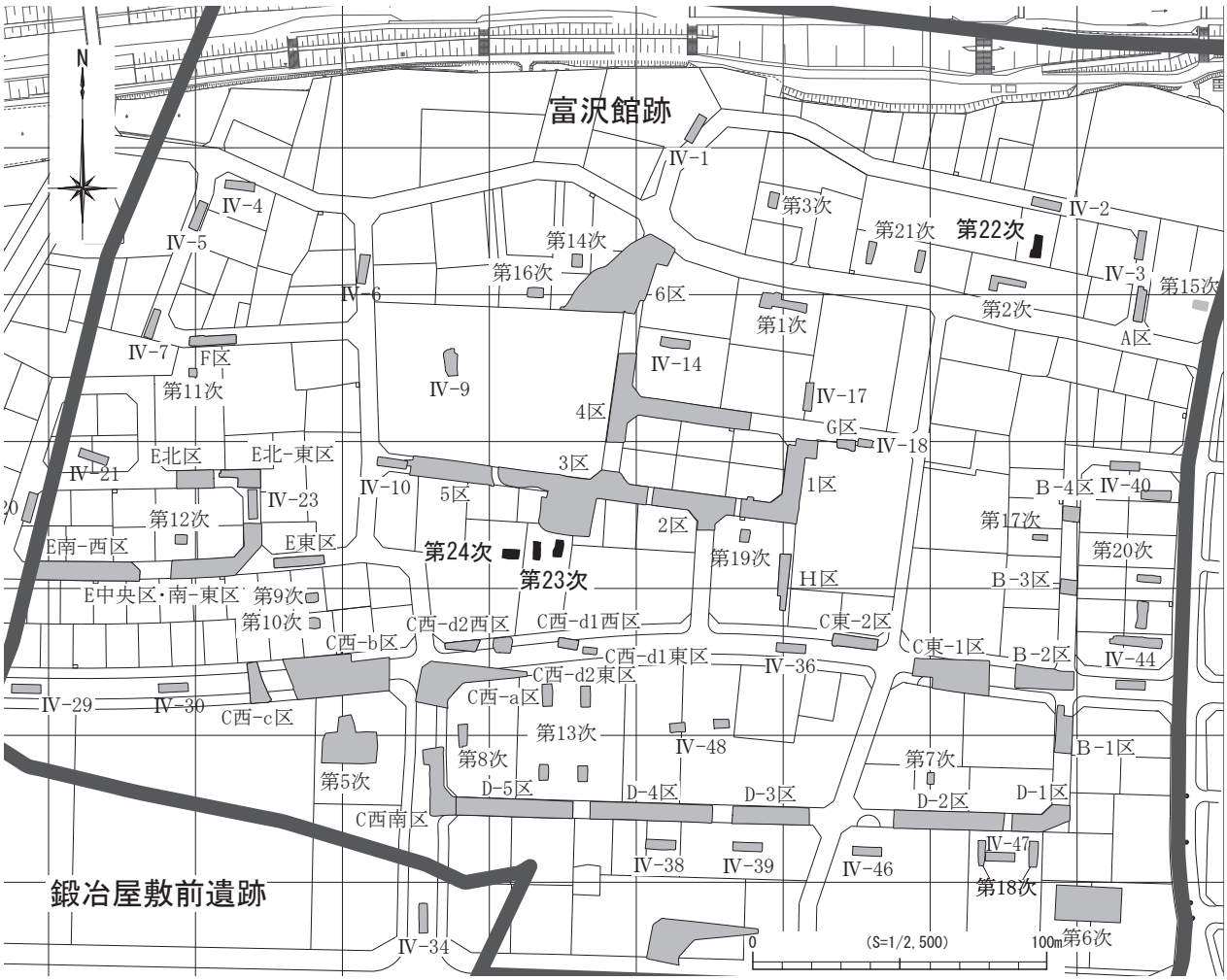
平成 25 年度から始まった土地区画整理事業に伴い、館跡の様相の大部分は変化したが、中心部分の土塁は現在も保存され、その姿を残している。発掘調査により館跡の周囲には１～４条に渡る堀跡が巡らされていたことが判明した。主郭部の東側では門跡が検出され、また南西側では土塁が筋違いに配置されていることから、虎口を形成していたものと考えられる。その他２基の火葬遺構が検出され、骨片のほか古銭などが出土した（仙台市教育委員会 2018）。

近世になると入生田家の在郷屋敷となり、『館記』には仙台藩二代藩主伊達忠宗の時、堀や土塁があっては城や要害のようで誤解を招くとのことから、土塁を崩し、堀を埋めたとの記述がある。その後は一部の土塁を残して、この地を畑や水田として利用したと考えられる。



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢館跡	城館跡、集落跡	自然堤防	縄文、平安～近世
2	宮崎遺跡	集落跡	丘陵	平安
3	鍛冶屋敷 A 遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代～中世
4	京ノ中遺跡	集落跡	自然堤防	平安
5	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、奈良～中世
6	鍛冶屋敷 B 遺跡	包含地	自然堤防、後背湿地	縄文、古代～近世
7	六本松遺跡	集落跡	自然堤防	古代～平安
8	川前浦遺跡	散布地	自然堤防	縄文晩、古代
9	川前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文晩
10	上野遺跡	集落跡	段丘	縄文中、古代～平安
11	南ノ東遺跡	散布地	自然堤防	弥生、平安
12	西台窯跡	窯跡	段丘	奈良、平安
13	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文
14	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
15	富沢清水遺跡	散布地	宅地、畑	奈良、平安
16	富沢遺跡	水田跡、包含地	後背湿地	旧石器～近世
17	山口遺跡	集落跡、水田跡、包含地	自然堤防、後背湿地	縄文～近世
18	下ノ内遺跡	集落跡、墓、畑跡	自然堤防	縄文、弥生、奈良～近世
19	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古墳、奈良、平安
20	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、背後湿地	縄文～古代、近世
21	下ノ内浦遺跡	包含地	自然堤防	縄文、弥生、奈良、平安
22	六反田遺跡	集落跡、古墳、墓、畑跡	自然堤防	縄文～古墳、平安～近世
23	大野田古墳群	古墳群地	自然堤防	古墳～平安
24	伊古田 B 遺跡	畑跡	自然堤防	古墳～平安

第 64 図　富沢館跡と周辺の遺跡

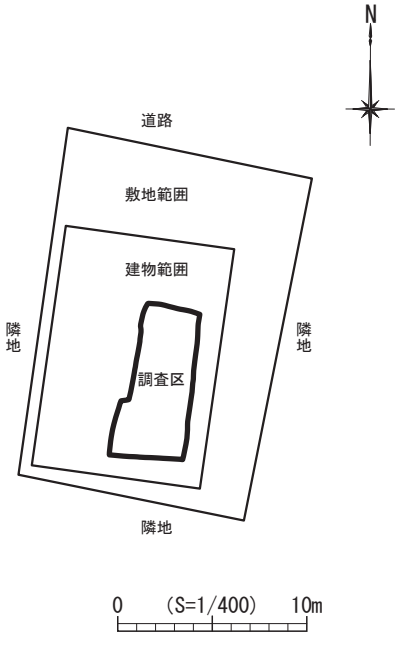


第 65 図　第 22 次・23 次・24 次調査区位置図

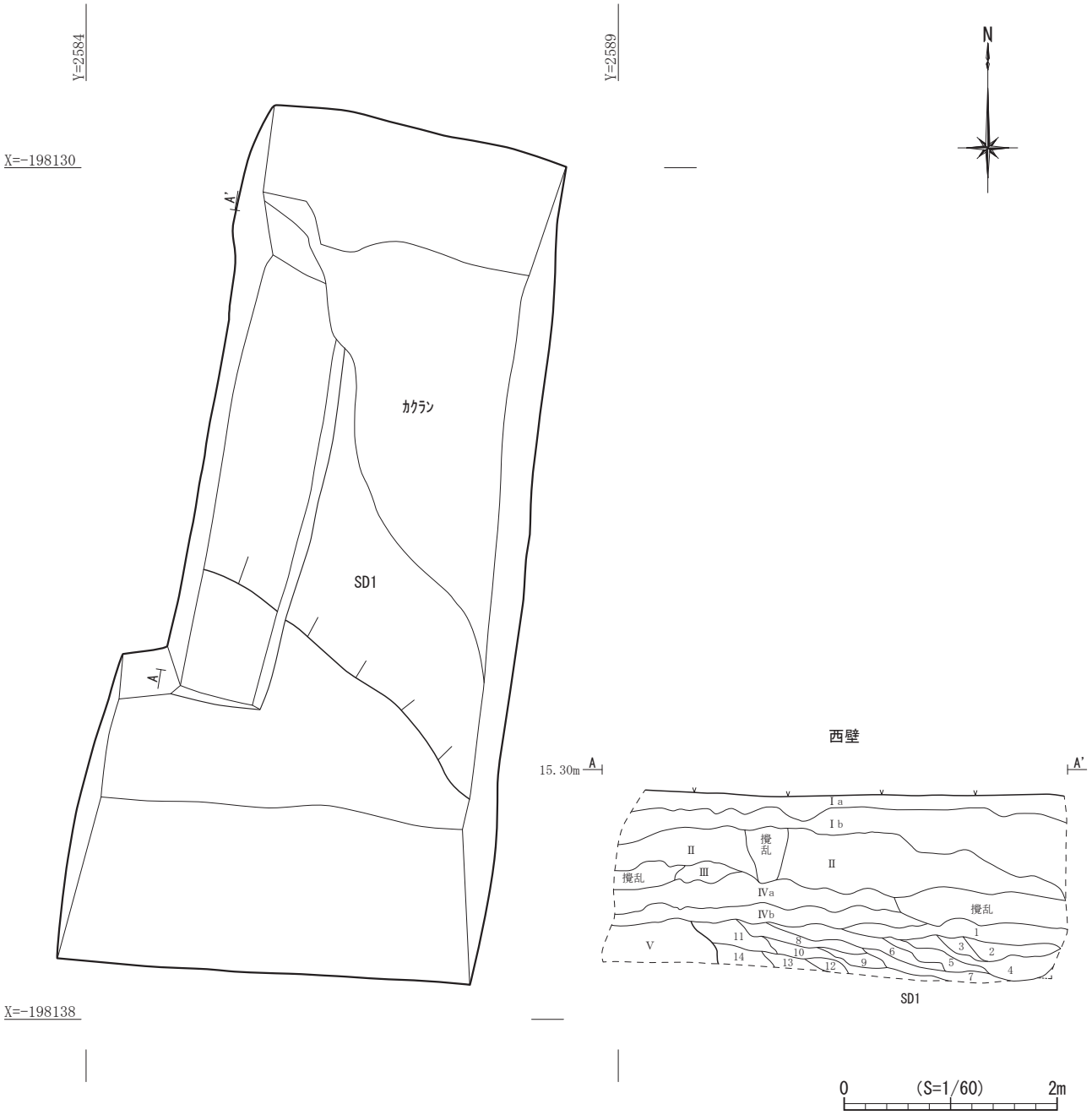
第２節　第 22 次調査

１．調査要項

遺　跡　名	富沢館跡（01246）
調 査 地 点	仙台市太白区富沢西一丁目２-19
調 査 期 間	令和４年１月 31 日～２月１日
調査対象面積	118.27 ㎡
調 査 面 積	約 32.0 ㎡（4.0m × 8.0m）
調 査 原 因	共同住宅建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部
	文化財課調査調整係
担 当 職 員	主査　菅原翔太
	主任　堀江洋介
	主事　柳澤　楓



第 66 図　第 22 次調査区配置図



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1	1	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	炭化物少量、酸化鉄を多量含む。
	2	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	炭化粒・酸化鉄少量、砂ブロックを含む。
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄少量、植物痕を含む。
	4	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	炭化物・酸化鉄少量、灰黄褐色砂をラミナ状に含む。
	5	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	礫・酸化鉄少量含む。
	6	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄多量、炭化物少量、褐色砂を帯状に含む。
	7	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄、灰黄褐色砂を帯状に含む。
	8	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	マンガン粒・酸化鉄・白色砂・炭化粒を含む。
	9	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を含む。
	10	10YR3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄、砂をラミナ状に褐色砂を帯状に含む。ややグライ化。
	11	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄多量、褐色砂を帯状に含む。
	12	10YR3/1 黒褐色	粘土	灰黄褐色砂を多量含む。グライ化。
	13	10YR3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄を含む。グライ化。
	14	10YR4/1 褐灰色～ 10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄・砂を多量含む。
	15	10YR3/1 黒褐色	粘土	ややグライ化。

第 67 図　第 22 次調査区平面・断面図

２．調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者から令和３年 12 月 16 日付で提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和３年 12 月 20 日付 R3 教生文第 109-121 号で回答）に基づき実施した。

調査では対象地内に東西 4.0m ×南北 8.0m の調査区を設定し、重機により盛土（調査区全体ではなく東側と北側の一部で確認した）および基本層Ⅰ～Ⅳ層除去後、Ⅴ層上面（GL - 1.3m 程度）で遺構検出作業を行ったところ堀跡 1 条が検出された。

調査では必要に応じて、調査区平面図（S=1/20）および調査区断面図（1/20）を作製し，デジタルカメラにより記録写真の撮影を行った。

３．基本層序

今回の調査では、基本層を大別で５層、細別で７層確認した。遺構検出面であるⅤ層上面までは、GL-1.3m 程度である。

Ⅰａ層：10YR3/3 暗褐色シルト。炭化物を少量、礫を少量含む。層厚 10 ～ 20 ㎝程度。
Ⅰｂ層：10YR4/6 褐色シルト。炭化物を少量含む。層厚 10 ～ 70 ㎝程度。
Ⅱ　層：10YR4/4 褐色粘土質シルト。10YR5/8 粘土ブロックを含む。炭化物を含む。層厚 0 ～ 60 ㎝程度。
Ⅲ　層：10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややグライ化した黒褐色粘土ブロックを含む。炭化物を少量含む。部分的に確認した。層厚 0 ～ 20 ㎝程度。
Ⅳａ層：10YR4/4 褐色砂質シルト。白色砂を含む。部分的にややグライ化している。層厚 30 ㎝程度。
Ⅳｂ層：10YR3/4 暗褐色砂質シルト。炭化物を少量、酸化鉄を少量含む。部分的にグライ化。層厚 20 ㎝程度。
Ⅴ　層：10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト。酸化鉄を多く含む。炭化物少量。層厚不明。

４．発見遺構と出土遺物

今回の調査では、基本層Ⅳｃ層上面で堀跡 1 条を確認した。

（１）堀跡

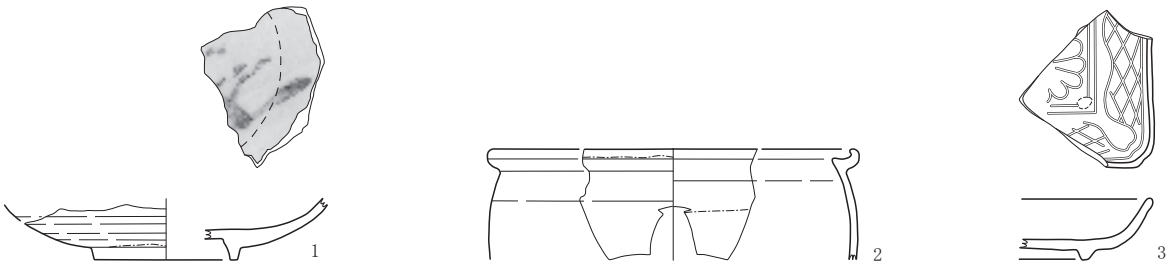
SD1 堀跡

調査区のほぼ北半分が堀跡である。北西から南東方向に延び、調査区外北側に広がる。今回の調査では、堀の南辺を確認した。検出した幅は調査区西壁で幅 3.5m、長さ 3.3m である。安全面を考慮し、底面までの調査は行わなかったため、断面形は不明である。深さは 0.6m 以上で、堆積土は 15 層確認した。遺物は堆積土上層部と下層部から陶磁器、堆積土７層から瓦が出土した。

５．まとめ

今回の調査地点は、富沢館跡の北東部に位置する。これまでの調査で確認されていた SD87 堀跡（第 466 集―A 区）と一連の堀が通ると推定されている箇所であった。

調査では、Ⅴ層上面で北西から南東にかけて延びる堀跡（SD1 堀跡）が１条確認された。この堀跡は位置や方向から SD87 堀跡と一連のものであると考えられる。今回の調査で確認できたのは堀の南岸部で、想定よりも北側を通ることが確認された。遺物は近世以降の瓦、陶磁器が出土した。瓦は部分的な破片資料であるため詳細は不明であるが、凸面に水切溝が確認できる。陶磁器は方形の小皿などが堀堆積土の上層部と下層部でそれぞれ出土した。



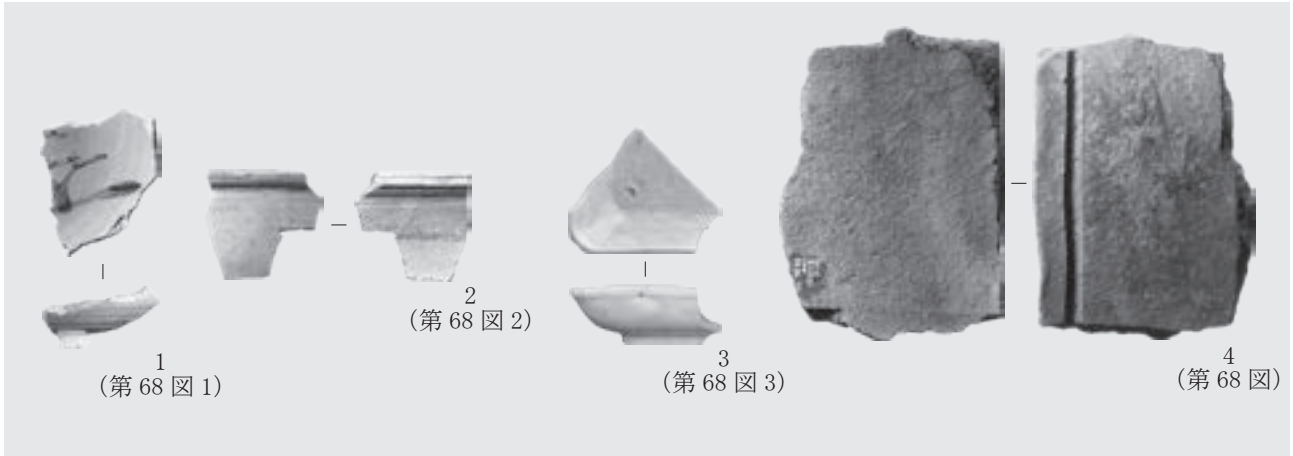
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	Ia-1	－	基本層	陶器	小型皿	－	(5.6)	(2.4)	灰釉	灰釉 鉄釉＋呉須	大堀相馬 19c 前葉～中葉	30-1
2	Ic-1	SD1	－	陶器	土鍋	14.2	－	(4.3)	灰釉	灰釉	大堀相馬 19c 前葉～中葉	30-2
3	J-1	SD1	－	磁器	手塩皿	－	－	2.4		菊文（型押し） 目跡１	切込焼 19c 前葉～中葉 角入り	30-3

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
－	G-1	SD1	－	瓦	平瓦	－	－	－	凸部水切溝　胎土灰色	30-4

第 68 図　第 22 次調査出土遺物

１．調査区全景（南から）

２．堀跡（東から）

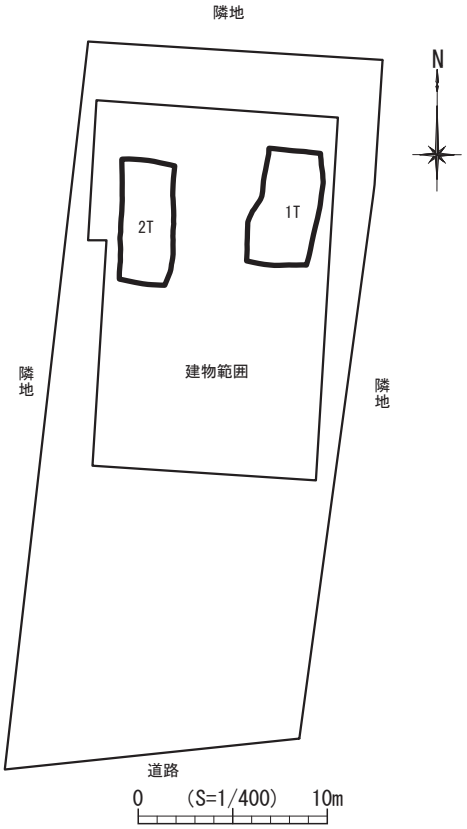


写真図版 30　富沢館跡第 22 次調査・出土遺物

第３節　第 23 次調査

１．調査要項

遺　跡　名　　富沢館跡（01246）
調 査 地 点　　仙台市太白区富沢西１丁目 10- ５、
　　10- ６、10-15、10-16
調 査 期 間　　令和４年４月 25 日～ 27 日
調査対象面積　　237.09 ㎡
調 査 面 積　　約 36.0 ㎡（3.0m × 6.0m × ２箇所）
調 査 原 因　　共同住宅建築工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部
　　文化財課調査調整係
担 当 職 員　　主任　堀江洋介
　　主事　狩野佑介　須貝慎吾　早川太陽
　　吉田　大　山口沙織



第 69 図　第 23 次調査区配置図

２．調査に至る経過と調査方法

本件は令和４年１月 14 日付で申請者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和４年１月 21 日付 R3 教生文第 109-139 号で通知）に基づき実施した。

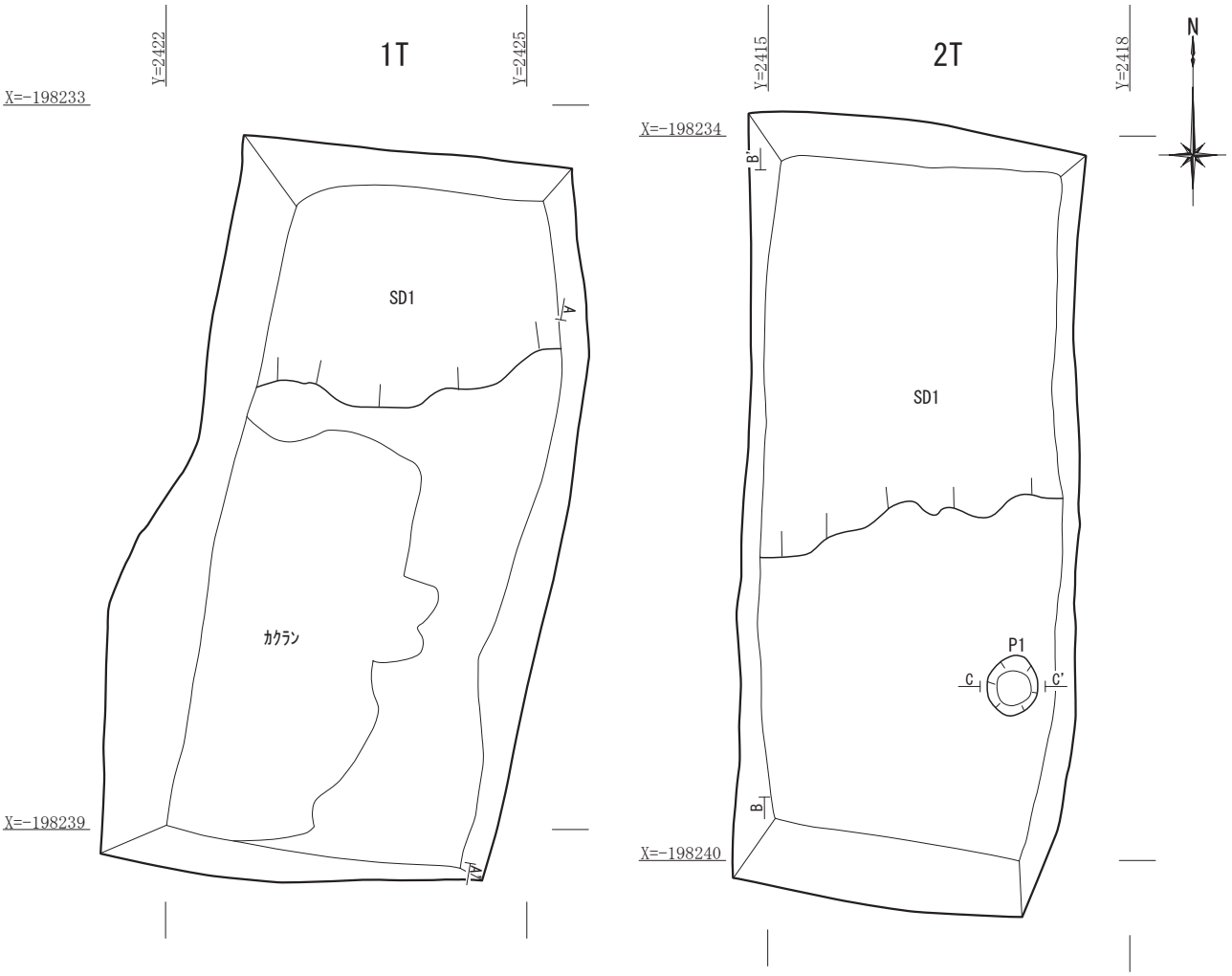
建築範囲内の東側に２箇所の調査区（１トレンチ（幅 3.0 ｍ×長さ 6.0m）、２トレンチ（幅 3.0m ×長さ 6.0m））を設定し、令和４年４月 25 日に調査を開始した。重機により盛土、基本層Ⅰ～Ⅱ層を除去後、Ⅲａ層上面で遺構検出作業を行った。その結果、１トレンチ・２トレンチのⅢａ層上面で東西方向の SD1 堀跡１条が検出された。SD1 堀跡は両トレンチで検出され、概ね東西方向に延びるが南西方向にやや傾いている様子が確認された。令和４年４月 27 日までに調査区内の計測等を行い、野外調査を終了した。

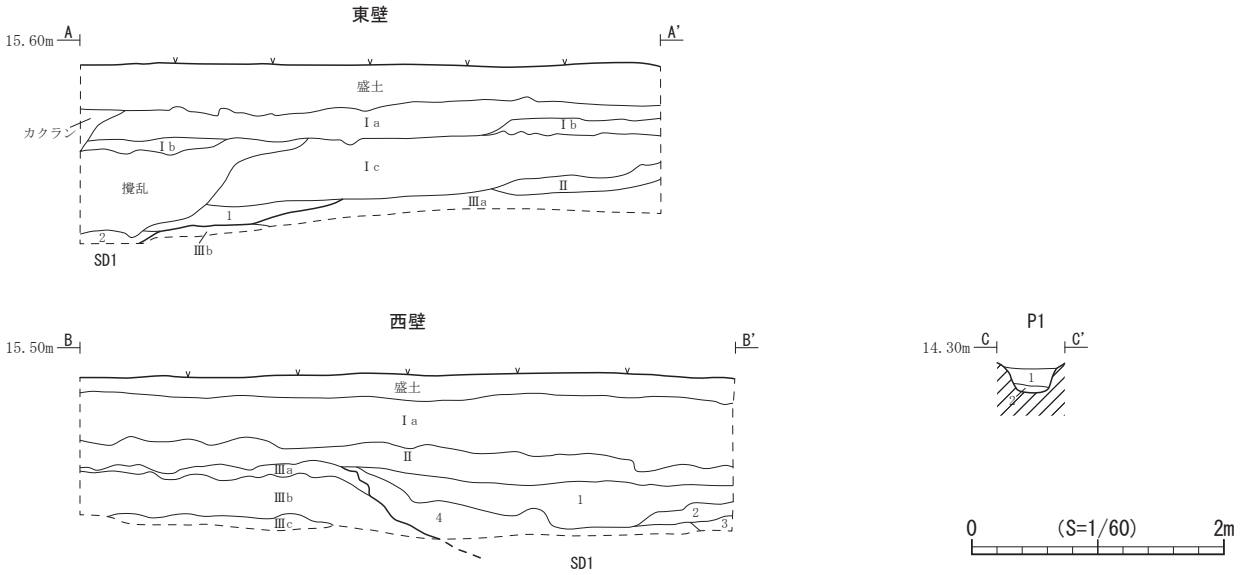
遺構の記録は、トータルステーションを用いて調査区平面図（S=1/20）、遺構断面図（S=1/20）を作製し、一眼レフデジタルカメラにより記録写真の撮影を行った。

３．基本層序

今回の調査では、厚さ約 20 ～ 50 ㎝の盛土の下に大別で３層、細別７層の基本層を確認した。遺構検出面であるⅢａ層上面までの深さは約 1.1m である。

Ⅰａ層：10YR4/1 褐灰色粘土質シルト。炭化物、マンガン粒を少量含む。酸化鉄を少量斑状に含む。盛土以前の水田耕作土である。
Ⅰｂ層：10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト。炭化物を少量含む。Ⅰｃ層由来の粘土質シルトブロックを含む。近現代の耕作土である。
Ⅰｃ層：10YR4/4 褐色粘土質シルト。炭化物、マンガン粒を少量含む。酸化鉄を含む。近現代の耕作土である。
Ⅱ　層：10YR4/4 褐色シルト。炭化物を少量含む。Ⅲａ層由来の粘土質ブロックを含む。





遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1 (1T)	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を少量含む。
	2	10YR3/1 黒褐色	粘土	有機物を多く含む粘土。炭化物粒、丸礫（φ１～２㎝）を含む。
SD1 (2T)	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を少量含む。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	酸化鉄を多量含む。
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄を多量含む。
	4	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	酸化鉄を斑状に含む。
P1	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	炭化物を多量含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を斑状に含む。

第 70 図　第 23 次調査区平面・断面図

Ⅲａ層：10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。炭化物を少量含む。白色砂を少量含む。

Ⅲｂ層：10YR3/2 黒褐色砂質シルト。炭化物を少量含む。植物由来の粘土を含む。径１～２㎝の円礫を少量含む。

Ⅲｃ層：10YR4/4 褐色粘土質シルト。炭化物を少量含む。白色砂を少量含む。

４．発見遺構と出土遺物

今回の調査では、堀跡１条とピット１基が検出された。

（１）堀跡

SD1 堀跡（第 70 図）

１、２トレンチのⅢａ層上面で検出した堀跡である。両調査区の北側で検出し、東西方向の堀跡で大半が調査区外へ延びる。規模は１トレンチでは、長さ 2.6m 以上、幅 1.8m 以上、深さ 0.3m 以上で、２トレンチでは、長さ 2.5m 以上、幅 3.2m 以上、深さ 0.4m 以上である。断面形は、安全面を考慮し、底面までの調査は行わなかったため不明である。堆積土は４層確認した。

遺物は堆積土から土師器片と須恵器片が出土している。その中から、ロクロ成形の土師器坏２点と土師器甕１点を図化した（第 70 図１～３）。

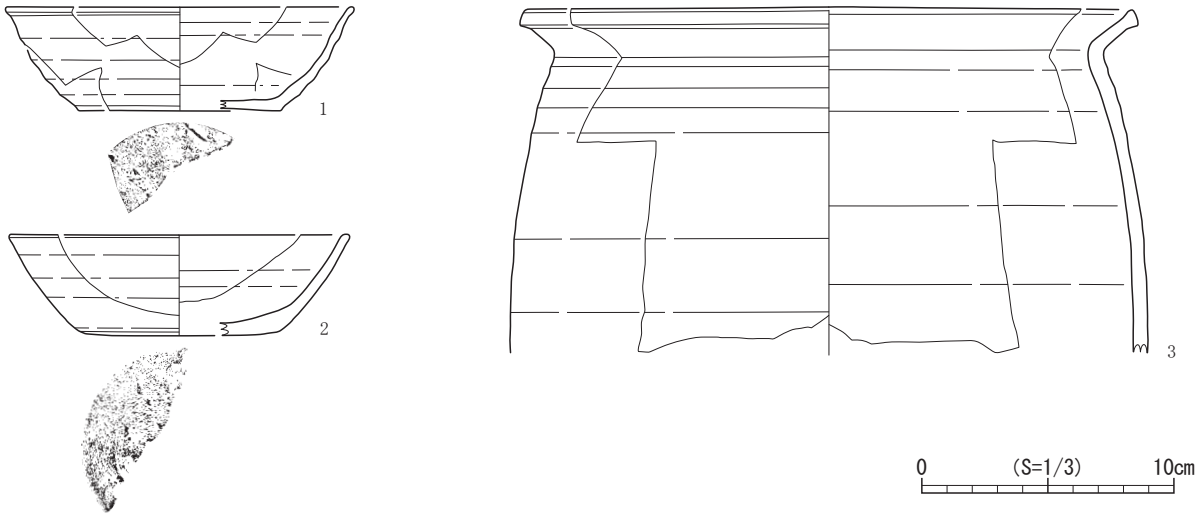
（２）ピット

ピットは２トレンチから１基検出された。平面形は円形を呈し、直径は 40 ～ 50 ㎝、深さは 20 ㎝である。遺物は土師器片と須恵器片が出土したが、細片であることから掲載しなかった。

５．まとめ

今回の調査地点は、富沢館跡の南西部に位置する。これまでの調査で確認されていた SD79 堀跡（第 466 集 -3 区）の南岸が想定される場所である。

調査では、Ⅲａ層上面で東から西にかけて延びる堀跡（SD1 堀跡）が１条検出された。この堀跡は、位置や方向から SD79 堀跡の南岸であると考えられ、今回の調査区から SD79 堀跡の堀幅は 10 ～ 11m であることが確認された。



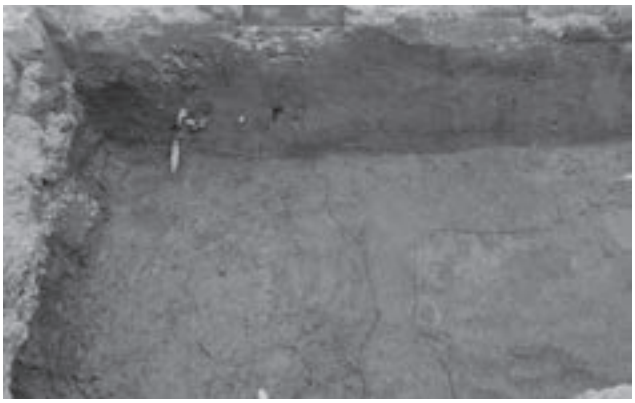
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	D-1	SD1	－	土師器	坏	(13.8)	(8.0)	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密　砂粒含む	31-1
2	D-2	SD1	－	土師器	坏	(13.6)	(8.0)	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密　砂粒含む	31-2
3	D-3	SD1	－	土師器	甕	(24.0)	－	(13.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密　砂粒含む	31-3
－	Ib-1		表採	瓦質土器	鉢	－	－	－		ハケメ 指ナデ		31-4

第 71 図　第 23 次調査出土遺物

遺物は、SD1 堀跡の堆積層から土師器坏と土師器甕が出土しており、年代は９世紀中頃～後半頃と考えられる。

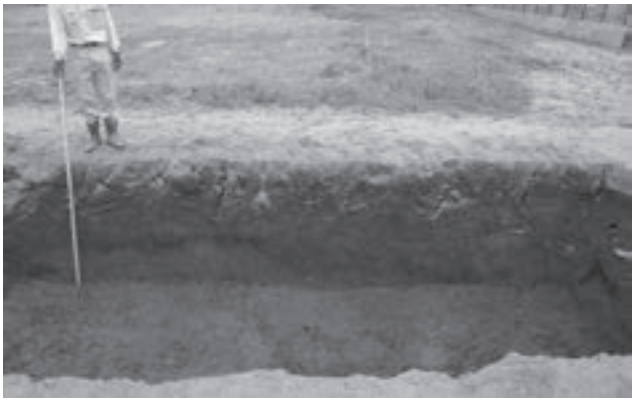
参考文献

仙台市教育委員会　2018『鍛治屋敷Ａ遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第 466 集
仙台市史編さん委員会　2006『仙台市史　特別編７　城館』



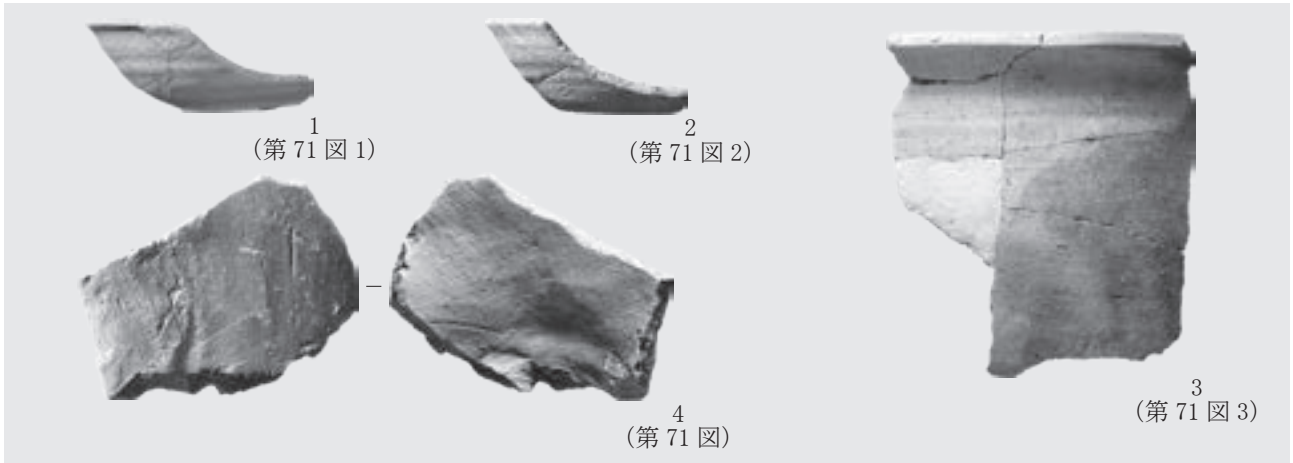
１.１区調査区東壁断面（西から）

２.１区調査区全景（南から）



３.２区調査区西壁断面（東から）

４.２区調査区全景（南から）

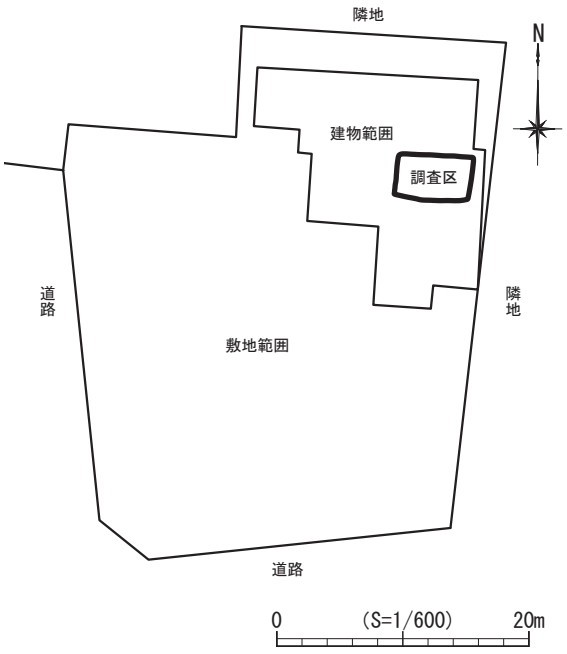


写真図版 31　富沢館跡第 23 次調査・出土遺物

第４節　第 24 次調査

１．調査要項

遺　跡　名　　富沢館跡（01246）
調 査 地 点　　仙台市太白区富沢西１丁目 10 番 15、
　　10 番 20 の各一部
調 査 期 間　　令和４年４月 27 日～４月 28 日
調査対象面積　　228.31 ㎡
調 査 面 積　　約 18.0 ㎡
調 査 原 因　　共同住宅建築工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部
　　文化財課調査調整係
担 当 職 員　　主任　堀江洋介
　　主事　狩野佑介　須貝慎吾　早川太陽
　　吉田　大　山口沙織



第 72 図　第 24 次調査区配置図

２．調査に至る経過と調査方法

本件は令和４年３月 28 日付で申請者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和４年４月４日付 R3 教生文第 109-163 号で通知）に基づき実施した。

調査では建築範囲内の東側に幅 3.0m ×長さ 6.0m の調査区を設定し設定し、令和４年４月 27 日に調査を開始した。重機により盛土、基本層Ⅰ～Ⅱ層を除去後、Ⅲａ層上面で遺構検出作業を行った。その結果、Ⅲａ層上面で、土坑１基、西から北東方向に折れる SD1 堀跡１条が検出された。西側に位置し、同時に調査を行っていた第 23 次調査で検出された SD1 堀跡の延長部分である。SD1 堀跡は検出のみにとどめ、SK1 土坑は半裁し、令和４年４月 28 日までに調査区内の計測等を行い野外調査を終了した。

遺構の記録は、トータルステーションを用いて調査区平面図（S=1/20）、遺構断面図（S=1/20）を作製し、一眼レフデジタルカメラにより記録写真の撮影を行った。

３．基本層序

今回の調査では、厚さ約 20 ～ 30 ㎝の盛土の下に大別で３層、細別で５層の基本層を確認した。遺構検出面であるⅢａ層までの深さは 0.5m である。

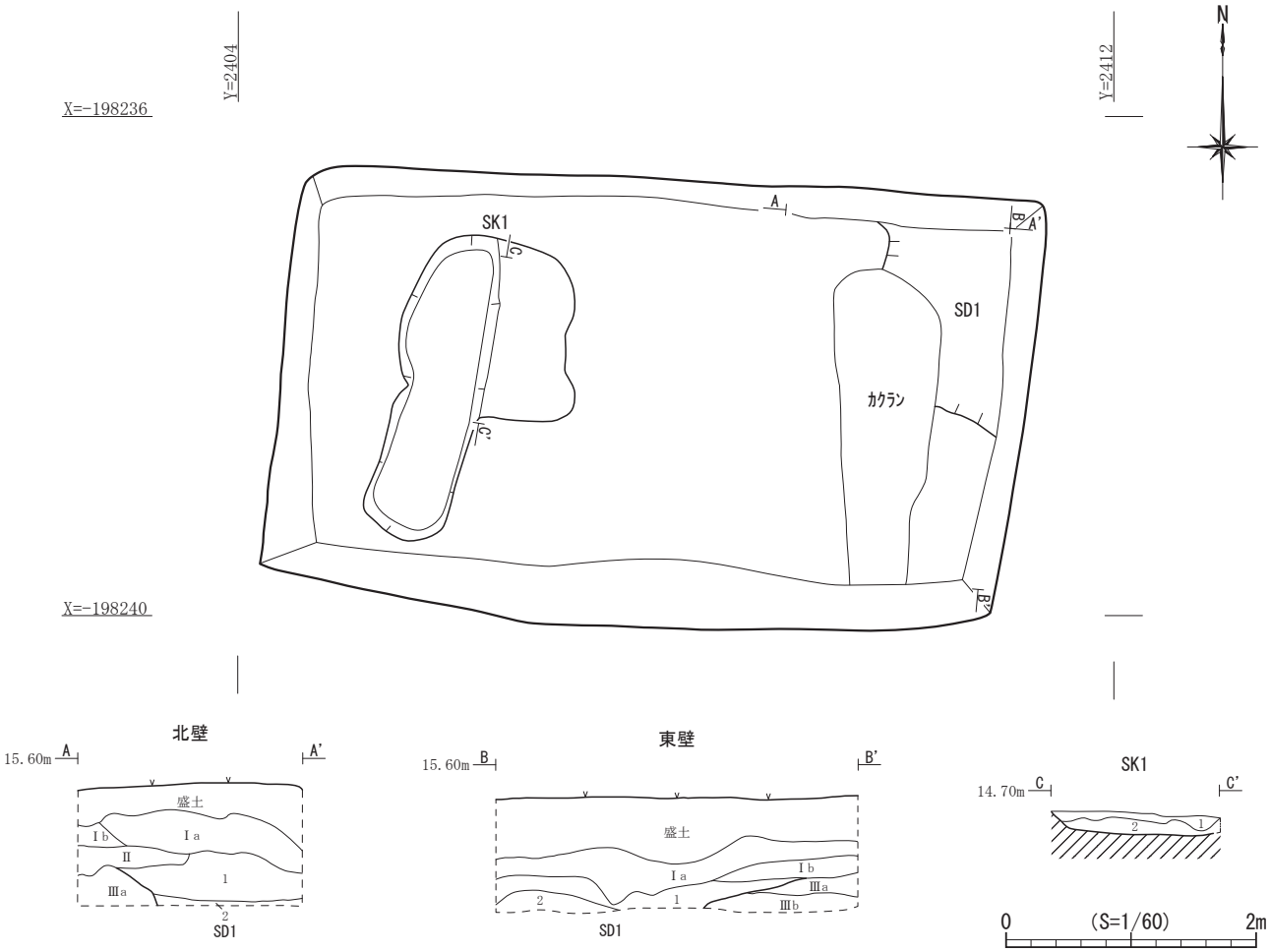
Ⅰａ層：10YR4/1 褐灰色粘土質シルト。炭化物、マンガン粒を少量含む。酸化鉄を少量斑状に含む。盛土以前の水田耕作土である。

Ⅰｂ層：10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト。炭化物を少量含む。Ⅰｃ層由来の粘土質シルトブロックを含む。近現代の耕作土である。

Ⅱ　層：10YR4/4 褐色シルト。炭化物を少量含む。Ⅲａ層由来の粘土質ブロックを含む。

Ⅲａ層：10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。炭化物を少量含む。白色砂を少量含む。

Ⅲｂ層：10YR3/2 黒褐色砂質シルト。炭化物を少量含む。植物由来の粘土を含む。径１～２㎝の円礫を少量含む。



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1	1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	炭化物を斑状に、酸化鉄を少量含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	炭化物を斑状に含む。
SK1	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	炭化物（0.5 ～ 1 ㎜）を多量含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	上層の黒褐色シルトをブロックを斑状に、炭化物（0.5 ㎜程度）を多量含む。

第 73 図　第 24 次調査平面・断面図

４．発見遺構と出土遺物

今回の調査では、堀跡１条と土坑１基を検出した。遺物はSD1 堀跡と SK1 土坑および基本層中から土師器、須恵器、陶磁器、瓦片、レンガが出土した。

（１）堀跡

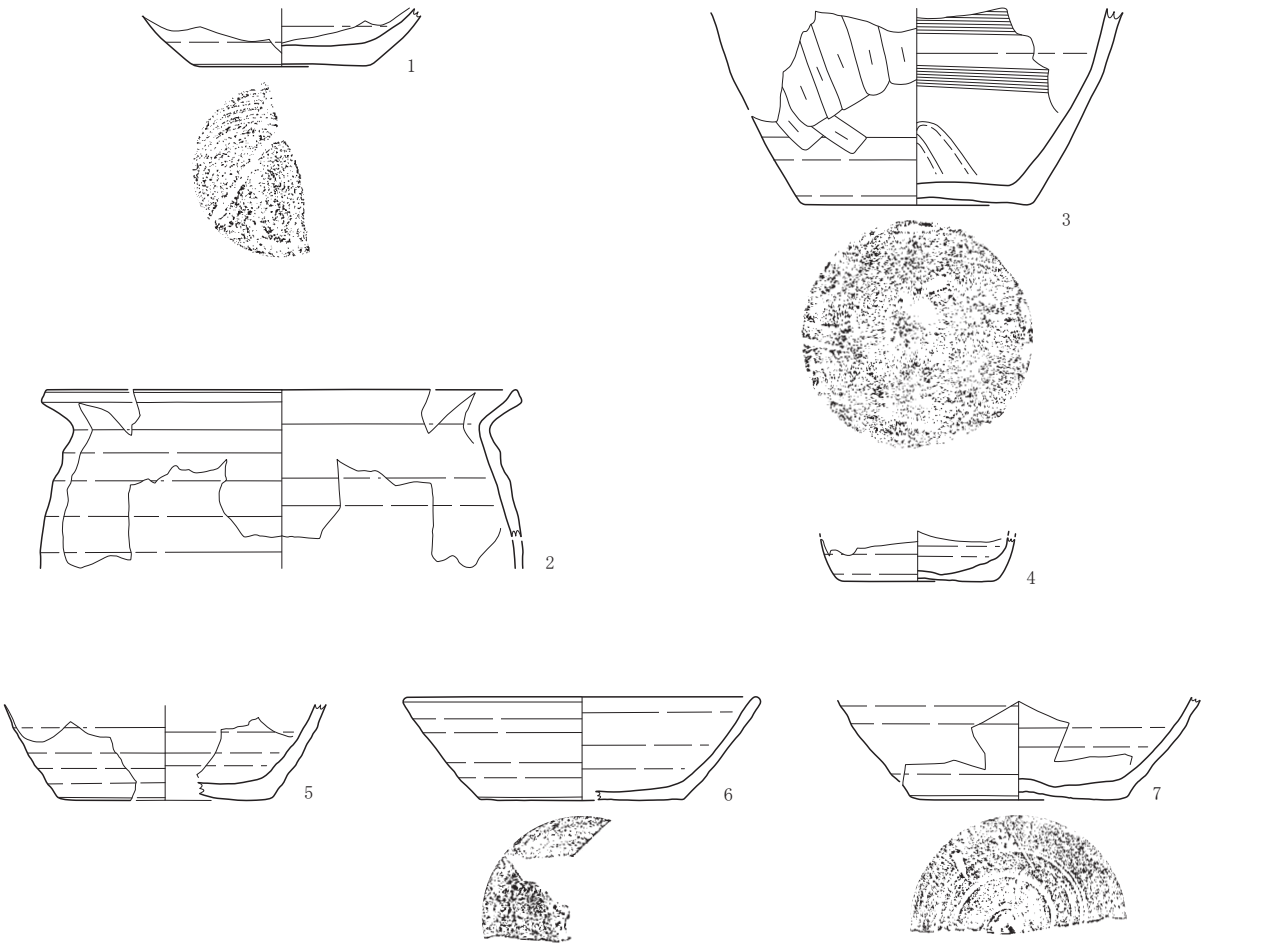
SD1 堀跡（第 73 図）

北東側で検出された堀跡である。西から北東方向に折れる堀跡で大半が調査区外へ延びる。規模は、長さ 2.0m 以上、幅 1.1m 以上、深さ 15 ㎝以上である。断面形は、安全面を考慮し、底面までの調査は行わなかったため不明である。堆積土は２層確認した。遺物は堆積土から土師器片と須恵器、磁器片、瓦片が少量出土している。その中から、須恵器皿１点を図化した（第 74 図４）。

（２）土坑

SK1 土坑（第 73 図）

西側で検出された。平面形は楕円形に南側が突出した不正形を呈し、規模は、南北 2.5m、東西 1.3m、深さは 18 ㎝である。堆積土は２層確認した。遺物は堆積土中から土師器片と須恵器片が出土している。その中から、ロクロ成形の土師器坏１点と土師器甕２点と須恵器坏３点を図化した（第 74 図１～３、５～７）。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	D-2	SK1	1	土師器	坏	－	(7.0)	(2.3)	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	胎土緻密　砂粒含む	33-1
2	D-1	SK1	1	土師器	甕	(18.6)	－	(7.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密　砂粒含む	33-2
3	D-3	SK1	2	土師器	甕	－	9.2	(7.8)	ロクロナデ 底部：ヘラケズリ	ロクロナデ 指ナデ カキ目	胎土緻密　砂粒含む	33-3
4	E-1	SD1	－	須恵器	皿	－	(6.2)	(2.0)	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	胎土緻密　砂粒含む	33-4
5	E-4	SK1	2	須恵器	坏	－	(8.4)	(3.3)	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	胎土緻密　砂粒含む	33-5
6	E-2	SK1	1	須恵器	坏	(13.8)	(8.0)	4.1	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	胎土緻密　砂粒含む	33-6
7	E-3	SK1	2	須恵器	坏	－	8.6	(3.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密　砂粒含む	33-7
－	E-5		Ⅱa	須恵器	甕	－	－	(5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密　砂粒含む	33-8
－	J -1	SD1	－	磁器	湯呑	－	－	(4.0)	染付 端反り樹木			33-9

第 74 図　第 24 次調査出土遺物（１）

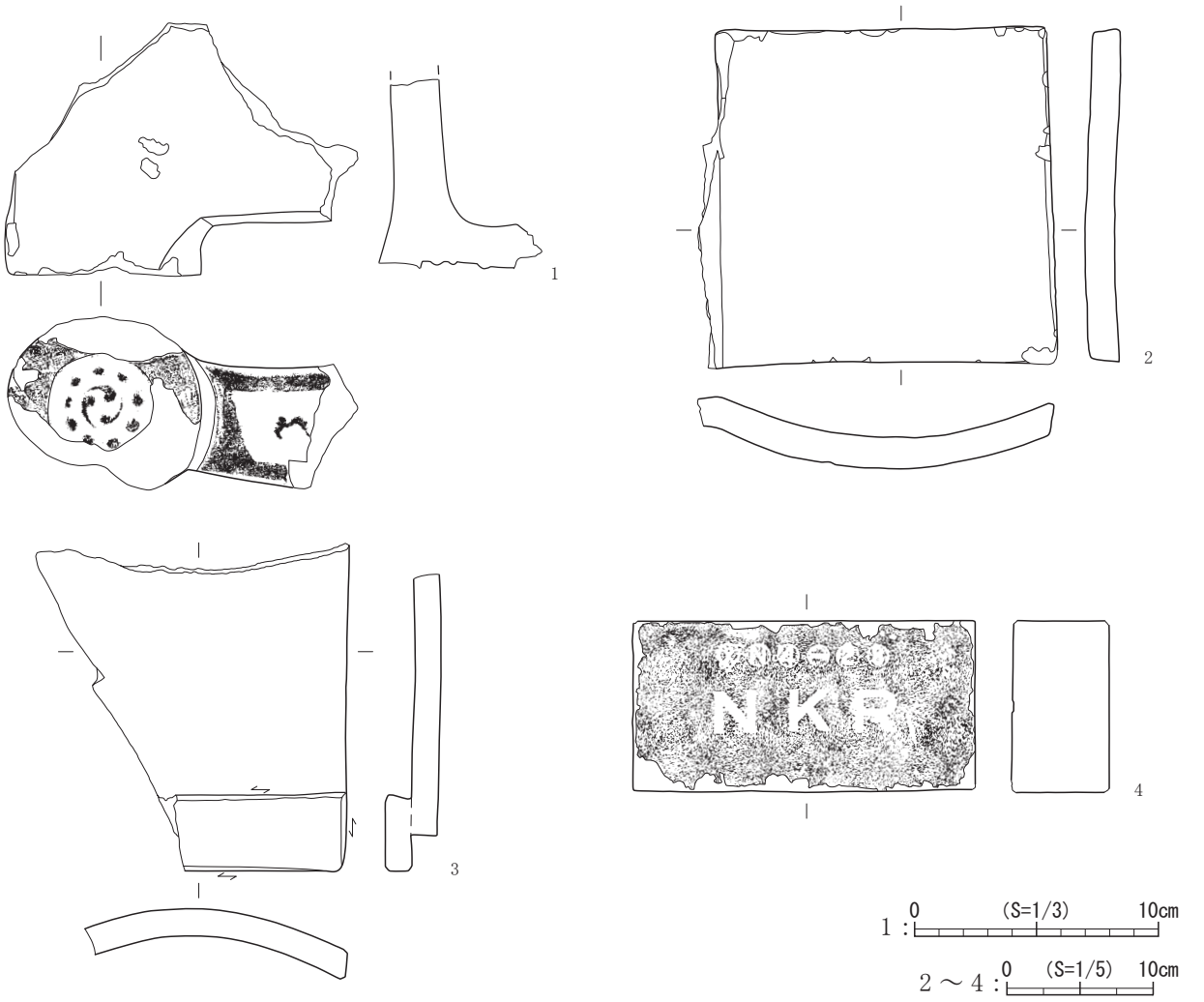
（３）出土遺物（第 74・75 図）

基本層中および各遺構から天箱１箱分の遺物が出土しており、なかでも SK1 土坑の堆積層から土師器片と須恵器片が全体で 60 点している。大部分は９世紀中頃から後半期と推定される。

第 74 図２・３はロクロ土師器の甕である。内外面ともロクロナデで、第 74 図３の甕は、内面にカキ目の痕跡と底部はユビナデ痕跡が確認できる。第74図の５～７は須恵器の坏である。体部がやや丸みをもって外傾するものと、直線的になっているものが認められる。いずれも内外面ともロクロナデでロクロ目が明瞭に確認できる。

第 75 図１～３は近世以降の燻（いぶ）し瓦である。１は軒桟瓦で、丸瓦当部の文様は、珠文を有した三巴文（左巻き）である。桟瓦当部は唐草文が施される。２は桟瓦で、左側欠損部が桟にあたる。３は丸桟伏間瓦である。

第 75 図４は耐火レンガである。上部に「YN4-28」、中央に「NKR」の刻印が印字されている。岡山県備前市の中村窯業所（現株式会社テクノ窯工、昭和８年設立）の製品と推定される。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）	備考	写真図版
1	H-1	－	－	瓦	軒桟瓦	瓦当径（8.0）内区径（4.2）周縁幅 1.8 周縁深 0.7 瓦当厚 1.6 内区高 2.8 垂れ部：内区高 2.8 瓦当厚 2.2		33-10
2	H-2	－	－	瓦	桟瓦	前幅（21.8）後幅 22.7 長さ 23.0 高さ 4.7 厚さ 2.0		33-11
3	H-3			瓦	桟瓦	幅（21.3）長さ（22.3）厚さ 1.9		33-12
－	H-4	－	－	瓦	平瓦	幅 23.0 長さ（19.2）高さ 3.6 厚さ 2.0		33-13

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
4	X -1		I	レンガ	耐火レンガ	23.4	11.7	6.7	○囲みで「YN4-28」、中央に「NKR」の刻印	33-14

第 75 図　第 24 次調査出土遺物（２）

５．まとめ

今回の調査地点は、富沢館跡の南西部に位置する。調査では、基本層Ⅲａ層上面で西から北東方向に折れる堀跡（SD1 堀跡）を１条確認した。この堀跡は、位置や方向から隣接する 23 次の SD1 堀跡の西側延長であり、SD79 堀跡（第 466 集－３区）の南岸の角部にあたる。今回の調査区により SD79 堀跡の角部が南西側に膨らみ想定よりも堀幅が広いことが確認できた。

遺物は、土師器、須恵器、瓦、耐火レンガが出土した。土師器は、ロクロ成形のものが大半で９世紀中頃から後半期と推定される。瓦は、軒桟瓦、桟瓦、伏間瓦が出土し、近世以降に近隣で瓦を用いた土地利用があったことが示唆される。耐火レンガは刻印が印字されており、昭和期以降に生産されたものと推察される。

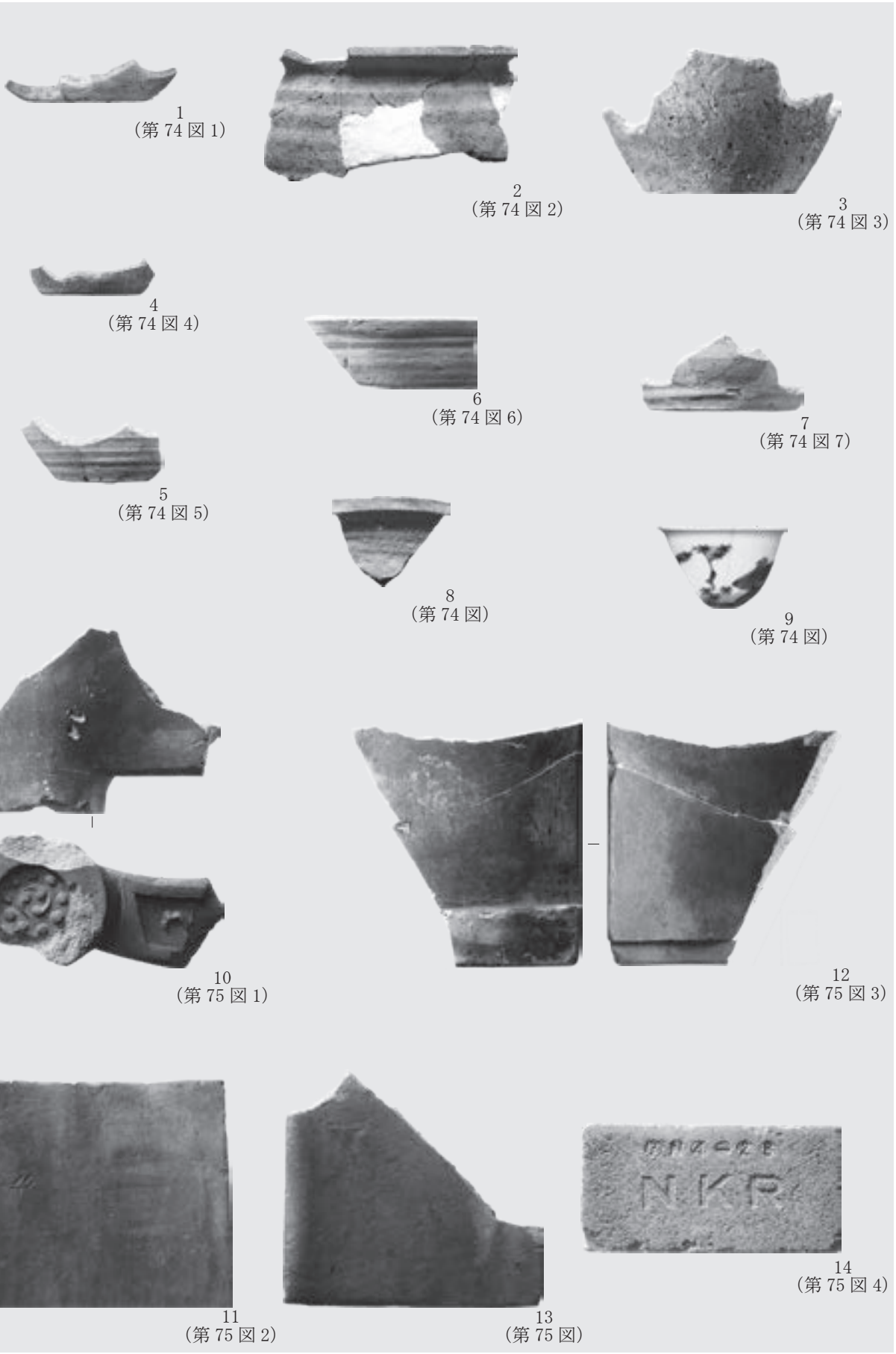
参考文献

仙台市教育委員会　2018『鍛冶屋敷Ａ遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第 466 集

１．調査区北壁断面（南から）

２．調査区全景（西から）

写真図版 32　富沢館跡第 24 次調査



1
（第 74 図 1）

2
（第 74 図 2）

3
（第 74 図 3）

4
（第 74 図 4）

5
（第 74 図 5）

6
（第 74 図 6）

7
（第 74 図 7）

8
（第 74 図）

9
（第 74 図）

10
（第 75 図 1）

12
（第 75 図 3）

11
（第 75 図 2）

13
（第 75 図）

14
（第 75 図 4）

写真図版 33　富沢館跡第 24 次調査出土遺物

第76図　富沢館跡　検出堀跡位置図

第９章　総括

１．今泉遺跡第 17 次調査

調査地点は、今泉遺跡の中央部のやや北側に位置する。調査の結果、堀跡２条と井戸跡１基、さらにそれよりも古い時期の水田耕作土層が検出された。1・2 トレンチで確認された SD1 堀跡は隣接する第 16 次調査でも確認された堀跡や、第８・11 次調査でも検出された堀跡同様、現在の道の内側に、道に並行する形で確認されている堀の一部であると推測される。また 3・4 トレンチで検出された SD2 堀跡は、SD1 堀跡のさらに内側を区画する堀跡であると推測されるが、堆積土の一部は人為的に埋め戻されているのが確認された。その後 18 世紀以降は、自然堆積で埋没していったものと推測される。

２．大野田遺跡第５次調査

調査地点は、大野田遺跡の北側に位置する。調査の結果、溝跡３条、土坑 2 基、ピット 22 基が検出されたことから周辺一帯は居住域であったと考えられる。遺物は縄文時代の遺物包含層から縄文時代後期初頭の南境式に類する土器、土製品、石器、石製品などが出土した。これらは遺構に伴うものではなく、河川の流れ込みによるものと考えられる。

３．大野田官衙遺跡 22 次調査

調査地点は、大野田官衙遺跡の南側に位置する。調査は２箇所のトレンチで行い、ピット２基、掘立柱建物跡１棟が検出された。掘立柱建物跡はすでに確認されている周辺の掘立柱建物跡と同様に真北を基準としていることから、同時期の遺構の可能性がある。

４．郡山遺跡第 320 次調査

調査地点は郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙の東部で、石組池（SX1235）より東に約 150 m、大溝東辺推定ラインより西に約 40 mの地点に位置する。遺物は土師器、須恵器、瓦、礫石器、石製品、金属製品が出土し、遺構は竪穴住居跡 3 軒、柱列跡１列、掘立柱建物跡 6 棟、溝跡 2 条、ピット 52 基が検出された。近世以降と考えられる SD1 溝跡を除き、ほかの遺構は方位や出土遺物から官衙の機能していた時期に収まる可能性が高いと考えられる。

調査で検出された 3 軒の竪穴住居跡からはいずれも、鉄滓や精錬滓といった遺物が少量であるが出土しており、SI1 竪穴住居跡のカマド付近では床面直上に炭化物の分布が確認された。このことから工房跡などといった通常の住居跡と異なる機能を持っていた可能性が考えられ、周辺を含めその機能についての検討が必要である。

５．北目城跡第 21 次調査

調査地点は遺跡南部に位置し、３か所のトレンチで調査を行った。土坑１基、ピット１基と城跡に伴う堀跡２条が検出され、そのうち東西方向に延びる SD1 堀跡は、第１次調査の SD15 堀跡の延長部分と考えられる。現在も水路として利用され、その南岸部を確認している。南北方向に延びる SD2 堀跡は１・２T で検出され、SD1 堀跡よりも古く、SD2 堀跡が埋没した後に SD1 堀跡が構築されたと考えられる。検出された SD1 堀跡の堆積土からは、近世の陶磁器、瓦が出土した。

６．富沢遺跡第 153・155 次調査

調査地点は、富沢遺跡の南側と北西側に位置し、各地点で古代の条里型土地区画に関わる大畦畔の検出が想定されていた。

第 153 次調査では、現代のものを含めて水田耕作土が４面確認された。大畦畔やその他の区画施設等は確認されておらず、遺物も出土していない。水田耕作土の下には自然堆積の泥炭質粘土と、自然流路とみられる粗砂主体の落ち込みがある。したがって、流路が完全に埋没し土地が平坦になった後に古代以降の水田が形成されている。

第 155 次調査では、現代のものを含めて水田耕作土が４面確認された。大畦畔やその他の区画施設等は確認されていない。遺物はⅢ層水田耕作土中から近世陶器が１点出土した。

７．富沢館跡第 22 次

調査地点は、富沢館跡の北東部に位置する。調査の結果、北西から南東にかけて延びる堀跡１条が検出された。位置や方向から SD87 堀跡（第 466 集 -A 区）と一連のものであると考えられる。今回の調査で確認できたのは堀の南岸部にあたり、想定よりも北側を通ることが明らかとなった。遺物は近世以降の瓦、陶磁器が出土した。

８．富沢館跡第 23 次

調査地点は、富沢館跡の北東部に位置する。２箇所のトレンチで調査を行った結果、ピット１基と東から西にかけて延びる堀跡１条が検出された。位置や方向から SD79 堀跡（第 466 集－３区）と一連のものであると考えられる。

今回の調査で確認できたのは堀の南岸部にあたり、想定よりも南側に配置されており、堀幅は 10 ～ 11m を測ることが明らかとなった。遺物は堀跡の堆積土内から、９世紀中頃～後半頃の土師器坏と土師器甕が出土した。

９．富沢館跡第 24 次

調査地点は、富沢館跡の北東部に位置する。調査の結果、土坑１基と西から北東方向に折れる堀跡１条が検出された。位置や方向から SD79 堀跡（第 466 集－３区）と一連のものであると考えられる。隣接する 23 次の SD1 堀跡の西側延長とみられ、SD79 堀跡（第 466 集－３区）の南岸の角部にあたる。今回の調査により SD79 堀跡の角部が南西側に膨らみ想定よりも堀幅が広いことが想定される。遺物は土坑の堆積土内から、９世紀中頃～後半頃の土師器坏と土師器甕が出土した。

報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせきほか							
書名	郡山遺跡ほか							
副書名	発掘調査報告書							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 505 集							
編著者名	須貝慎吾　早川太陽　及川謙作　吉田　大　妹尾一樹　柳澤　楓　荒井格							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒 980-0011　仙台市青葉区上杉一丁目 5-12　仙台市役所　上杉分庁舎 10 階　　TEL：022-214-8894							
発行年月日	令和 5 年 3 月 31 日							
所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	要約							
いまいずみいせき 今泉遺跡 （第 17 次）	みやぎけんせんだいしわかばやしく 宮城県仙台市若林区 いまいずみ2ちょうめ 今泉二丁目	04103	01235	38°　12’ 39”	140°　55’ 37”	2021. 10. 25 ～ 2021. 12. 24	約 97. 1 ㎡	記録保存調査 （宅地造成）
	集落跡、城館跡、包含地	中世～近世		堀跡、井戸跡		陶磁器		
	中～近世の城館に伴うと考えられる、堀跡が検出された。							
おおのだいせき 大野田遺跡 （第５次）	みやぎけんせんだいしたいはくく 宮城県仙台市太白区 おおのだ5ちょうめ 大野田五丁目	04104	01094	38°　13’ 04”	140°　52’ 39”	2021. 10. 25 ～ 2021. 12. 24	約 120. 0 ㎡	記録保存調査 （事務所建築）
	集落跡	縄文～		溝跡、土坑、ピット、遺物包含層		縄文土器、石器、土製品		
	溝跡３条、土坑 2 基、ピット 22 基が検出された。縄文時代の遺物包含層から縄文時代後期初頭の南境式に類する土器、土製品、石器、石製品などが出土した。							
おおのだかんがいせき 大野田官衙遺跡 （第５次）	みやぎけんせんだいしたいはくく 宮城県仙台市太白区 おおのだ5ちょうめ 大野田五丁目	04104	01566	38°　12’ 57”	140°　52’ 33”	2021. 10. 25 ～ 2021. 12. 24	約 57. 0 ㎡	記録保存調査 （共同住宅建築）
	官衙跡、包含地	中世～近世		掘立柱建物跡		土器		
	ピット２基、掘立柱建物跡１棟が検出された。掘立柱建物跡は真北を基準としており、官衙に伴う建物跡と考えられる。							
こおりやまいせき 郡山遺跡 （第 320 次）	みやぎけんせんだいしたいはくく 宮城県仙台市太白区 こおりやま3ちょうめ 郡山三丁目	04104	01003	38°　13’ 24”	140°　53’ 41”	2022. 6. 23 ～ 2022. 9. 30	約 230. 0 ㎡	記録保存調査 （共同住宅建築）
	官衙跡、寺院跡、包含地	縄文～古代		竪穴住居跡、柱列跡、掘立柱建物跡、溝跡、ピット		土師器、須恵器、石製品、瓦、鉄滓		
	竪穴住居跡 3 軒、柱列跡 1 列、掘立柱建物跡 6 棟、溝跡 2 条、ピット 52 基が検出された。							
きためじょうあと 北目城跡 （第 21 次）	みやぎけんせんだいしたいはくく 宮城県仙台市太白区 きためたくち 北目宅地	04104	01029	38°　13’ 12’’	140°　53’ 55”	2022. 3. 14 ～ 2022. 3. 24	約 33. 0 ㎡	記録保存調査 （L 型擁壁設置工事・建売住宅建築）
	城館跡、集落跡、水田跡	縄文・平安～近世		堀跡、土坑		陶磁器		
	中～近世の城館に伴うと考えられる、堀跡が検出された。							
とみざわいせき 富沢遺跡 （第 153 次）	みやぎけんせんだいしたいはくく 宮城県仙台市太白区 いずみざき1ちょうめ 泉崎一丁目	04104	01369	38°　13’ 11’’	140°　52’ 09”	2022. 3. 14 ～ 2022. 3. 24	約 32. 0 ㎡	記録保存調査 （共同住宅建築）
	水田跡、包含地	旧石器～近世		水田耕作土、自然流路		なし		
	水田耕作土を 4 面確認した。自然流路が埋没した後、水田を構築している土地利用の状況が明らかとなった。							
とみざわいせき 富沢遺跡 （第 155 次）	みやぎけんせんだいしたいはくく 宮城県仙台市太白区 かの３ちょうめ 鹿野３丁目	04104	01369	38°　13’ 29’’	140°　52’ 13”	2022. 6. 1 ～ 2022. 6. 8	約 18. 0 ㎡	記録保存調査 （共同住宅建築）
	水田跡、包含地	旧石器～近世		水田耕作土		陶器		
	水田耕作土を 4 面確認した。畦畔等は確認されなかった。							

富沢館跡（第 22 次）	宮城県仙台市太白区富沢西一丁目	04104	01246	38° 12’ 54”	140° 51’ 44”	2022. 1. 7 ～ 2022. 2. 1	約 32. 0 ㎡	記録保存調査（共同住宅建築）
	城館跡、集落跡	縄文・平安～近世		溝跡		陶磁器、瓦		
	中～近世の城館に伴うと考えられる、堀跡が検出された。							
富沢館跡（第 23 次）	宮城県仙台市太白区富沢西一丁目	04104	01246	38° 12’ 50”	140° 51’ 39”	2022. 4. 25 ～ 2022. 4. 27	約 36. 0 ㎡	記録保存調査（共同住宅建築）
	城館跡、集落跡	縄文・平安～近世		溝跡		土師器、瓦質土器、陶磁器		
	中～近世の城館に伴うと考えられる、堀跡が検出された。							
富沢館跡（第 24 次）	宮城県仙台市太白区富沢西一丁目	04104	01246	38° 12’ 51”	140° 51’ 39”	2022. 4. 25 ～ 2022. 4. 27	約 18. 0 ㎡	記録保存調査（共同住宅建築）
	城館跡、集落跡	縄文・平安～近世		溝跡、土坑		土師器、須恵器、瓦、陶磁器、耐火レンガ		
	中～近世の城館に伴うと考えられる、堀跡が検出された。							

仙台市文化財調査報告書第 505 集

郡山遺跡 ほか

発掘調査報告書

2023 年 3 月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区上杉 1 丁目 5-12
仙台市役所上杉分庁舎 10 階
文化財課 TEL 022（214）8894

印刷　株式会社 仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹三丁目 1-14
TEL 022（231）2245㈹